兵庫県文化財調査報告　第362冊

揖保郡太子町

東南遺跡

（主）太子御津線［街路龍野線］都市計画街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

平成21（2009）年3月

兵庫県教育委員会

揖保郡太子町

東南遺跡

（主）太子御津線［街路龍野線］都市計画街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

平成21（2009）年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は兵庫県揖保郡太子町鵤に所在する、東南遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は（主）太子御津線［街路龍野線］都市計画街路事業に伴うもので、兵庫県西播磨県民局竜野土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成11年度と平成12年度と平成13年度に本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は兵庫県西播磨県民局長の依頼を受けて、平成20年度と平成21年度は兵庫県立考古博物館が実施した。

4．本書に使用した方位は国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。（世界測地系に換算）

5．出土品の分析は年代測定を株式会社加速器分析研究所に、土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

6．地図は、図版１：国土地理院「姫路」1/200,000
　　図版３：国土地理院「龍野」「網干」1/25,000
　を使用した。
　　図版４・５：太子町「太子町全図（８）」1/2,500
　を加工して使用した。

7．執筆は、第３章の遺構のうち４区・５区の概要と遺構を松岡千寿（兵庫陶芸美術館）
　　第３章の出土遺物のうち石器の項目を山本　誠
　　第４章第１節を株式会社加速器分析研究所
　　第４章第２節を兵庫県立大学大学院　森永速男・寺口祐記
　　第４章第３節をパリノ・サーヴェイ株式会社
　　第４章第４節を奥田　尚
　が行った以外は篠宮　正が行った。

8．編集は篠宮が行った。

9．本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館に保管している。

10．発掘調査および報告書作成にあたり、
　太子町教育委員会および、
　泉　拓良・奥田　尚・海野浩幸・千葉　豊・寺口祐記・三村修次・森永速男
　の各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

東　南　遺　跡

（主）太子御津線［街路龍野線］都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

目　　次

例　言

目　次

第1章　遺跡をとりまく環境 …… 1

第1節　地理的環境 …… 1

第2節　歴史的環境 …… 2

第2章　調査の契機と経過 …… 5

第1節　調査に至る経緯 …… 5

第2節　調査の経過 …… 7

第3節　出土品整理 …… 9

第3章　発掘調査の成果 …… 10

第1節　調査の概要 …… 10

第2節　1区の調査 …… 10

第3節　2区の調査 …… 20

第4節　3区の調査 …… 27

第5節　4区の調査 …… 35

第6節　5区の調査 …… 37

第4章　自然科学的調査の成果 …… 39

第1節　東南遺跡の放射性炭素年代測定（AMS測定） …… 39

第2節　兵庫県太子町東南遺跡で検出された焼土の古地磁気年代 …… 44

第3節　東南遺跡出土土器の胎土分析 …… 50

第4節　東南遺跡出土石材の石種と採取地 …… 67

第5章　まとめ …… 74

別表1～3 …… 75～80

図版 …… 1～88

写真図版 …… 1～113

報告書抄録

挿図目次

第１図　較正曲線グラフと暦年較正値（1）（2）……41・42
第２図　焼土試料の採取位置の模式図……45
第３図　パイロット試料（試料１、11）の段階交流消磁結果……45
第４図　平面採取試料の交流消磁前後の残留磁化方向とその平均値　左（右）が消磁前（後）……46
第５図　東西断面採取試料の交流消磁前後の残留磁化方向とその平均値　左（右）が消磁前（後）……46
第６図　標準考古地磁気曲線（Hyodo他、1993）との比較……48
第７図　採取土壌の磁気的性質（帯磁率と残留磁化強度の関係）……48
第８図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）（2）（3）……56～58
第９図　胎土中の砂の粒径組成（1）（2）（3）……59～61
第10図　砕屑物・基質・孔隙の割合……62

表目次

第１表　東南遺跡発掘調査一覧……6
第２表　暦年較正用年代……42
第３表　残留磁化、帯磁率測定結果のまとめ……47
第４表　分析試料一覧および胎土分類……51
第５表　薄片観察結果（1）（2）（3）（4）……52～55
第６表　分析資料一覧……71
第７表　出土石材と河川礫の岩相比較……73

別表目次

別表１　東南遺跡出土土器類一覧（1）～（6）……75～80
別表２　東南遺跡出土石器一覧……80
別表３　東南遺跡出土鉄器一覧……80

図版目次

図版１　遺跡　１．兵庫県の位置　２．太子町の位置　３．東南遺跡の位置（1/200，000）
図版２　遺跡　東南遺跡周辺の主要遺跡一覧
図版３　遺跡　東南遺跡周辺の主要遺跡（1/25，000）
図版４　遺跡　東南遺跡の本発掘調査区と既往の調査区の位置（1/1,500）
図版５　遺跡　確認調査と本発掘調査の位置（1/4,000）　調査区全体図（1/1,500）
図版６　遺構　1区　北半　下層平面　西壁断面
図版７　遺構　1区　北半　上層平面　東壁断面
図版８　遺構　1区　南半　下層平面　西壁断面
図版９　遺構　1区　南半　上層平面　東壁断面
図版10　遺構　1区　最下層平面
図版11　遺構　1区　北壁・南壁断面と地区割り
図版12　遺構　1区　SD101・SD102・SD103・SD104・SD105・SD136・SD132・SD128　SB154・SB155
図版13　遺構　1区　1区6W　SK449上・下層　7W　SK528
図版14　遺構　1区　SH115
図版15　遺構　1区　1W　SH401
図版16　遺構　1区　3W　SK413・SK431
図版17　遺構　1区　1W　SK526　2E　SK407　2W　SK409・SK412
図版18　遺構　1区　2W　SK506・SK507・SK508　3W　SK500・SK513
図版19　遺構　1区　4E　SK425　5E　SK436・SK437　4W　SK503・SK504・SK514・SK422
図版20　遺構　1区　5E　SK443　5W　SK441・SK515
図版21　遺構　1区　7W　SK450・SK451・SK457・SK465　6W　SK516
図版22　遺構　1区　8E　SK483・SK524・SK473　8W　SK474　9E　SK486・SK488
図版23　遺構　1区　9E　SK490・SK492　9W　SK498・SK472
図版24　遺構　1区　9W　SK523・SK521　10W　SK491　10E　SK522
図版25　遺構　1区　9E　SK487・SK489・SK485

図版26　遺構　1区　SK150・SK130・SK131　3W　SK421　4W　SK429
図版27　遺構　1区　SK428　6W　SK531　10E　SK509　6E　SK448・SK530
図版28　遺物　1区　上層遺構　SD101・SD104・SD132・P114・P122・SB154　包含層　SK449（1～13、M1）
図版29　遺物　1区　SH115（14～32）
図版30　遺物　1区　SK137・SK506・SK410・SK424・SK425・SK429・SK433（33～42）
図版31　遺物　1区　SK413・SK441・SK502・SK439・SK464　撹乱（43～53）
図版32　遺物　1区　SK431・SK528・SK450・SK451（54～60）
図版33　遺物　1区　縄文包含層①（61～79）
図版34　遺物　1区　縄文包含層②（80～102）
図版35　遺物　1区　縄文包含層③（103～119）
図版36　遺物　1区　縄文包含層④（120～138）
図版37　遺物　1区　石器（S1～S4）
図版38　遺物　1区　石器（S5～S14）
図版39　遺物　1区　石器（S15・S16）
図版40　遺構　2区　下層平面　西壁断面
図版41　遺構　2区　上層平面　東壁断面
図版42　遺構　2区　北壁・南壁断面と地区割り
図版43　遺構　2区　SD202・SD201・SD203・SD204・SD212・SD209・SD214・SD206
図版44　遺構　2区　SB231・SB232
図版45　遺構　2区　SB600・SH207
図版46　遺構　2区　4W　SK251
図版47　遺構　2区　1E　SK275　1W　SK277・SK276・SK282
図版48　遺構　2区　4E　SK255　3W　SK269・SK606・SK266
図版49　遺構　2区　3W　SK267　4W　SK286　5W　SK252　4E　SK264
図版50　遺構　2区　4E　SK257・SK258・SK260・SK262
図版51　遺構　2区　5W　SK253
図版52　遺構　2区　1E　SK278　1W　SK279　2W 1W 1E　SK281・SK283
図版53　遺構　2区　2W　SK280・SK273　4W　SK261　1E　SB288
図版54　遺物　2区　SD205・SD202・SD229・SD203・SD201・SB600・包含層（139～168）
図版55　遺物　2区　SK251①（169～172）
図版56　遺物　2区　SK251②・SK238・SK218・SK298・SK253・SK223・SK213・SK252（173～185）
図版57　遺物　2区　縄文包含層（186～196）
図版58　遺物　2区　鉄器・石器（M2～M7、S17～S22）
図版59　遺物　2区　石器（S23～S27）
図版60　遺構　3区　中層平面　西壁断面
図版61　遺構　3区　上層平面　東壁断面
図版62　遺構　3区　下層平面　西壁断面・東壁断面
図版63　遺構　3区　北壁・南壁断面と地区割り
図版64　遺構　3区　SD308・SD310・SD313・SD307・SD303・SD304・SD312・SD306・SD314・SD309
図版65　遺構　3区　SK302・SK305・SK301
図版66　遺構　3区　弥生 SK331　SD351・SD353・SD352・SD357
図版67　遺構　3区　1W　SK371　2W　SK375　1E　SK373
図版68　遺物　3区　上層 SD307・SD303・SD304・SD306・SK331・SD353（197～213、M8）
図版69　遺物　3区　SD351・SD353（214～237）
図版70　遺物　3区　SD308①（238～267）
図版71　遺物　3区　SD308②（268～278）
図版72　遺物　3区　SD361①（279～298）
図版73　遺物　3区　SD361②（299～318）
図版74　遺物　3区　SD361③　上層　SD351①（319～343）
図版75　遺物　3区　SD351②・SK373　SD308・SD310・SD357・SD361（344～364）
図版76　遺物　3区　縄文包含層　6層①（365～382）
図版77　遺物　3区　縄文包含層　6層②（383～401）
図版78　遺物　3区　縄文包含層　7層①（402～425）
図版79　遺物　3区　縄文包含層　7層②　縄文下層包含層（426～441）
図版80　遺物　3区　石器（S28～S37）
図版81　遺物　3区　石器（S38～S46）
図版82　遺構　4・5区　平面　東壁断面
図版83　遺構　4・5区　SB813・SD801・SD803・SD804・SD805・SX804・5区SD901
図版84　遺物　4区　SD803・SD801・SB813・包含層（442～452）
図版85　遺物　4・5区　撹乱・粘土採掘坑（453～468）
図版86　遺物　4・5区　P836・SK904・縄文包含層（469～485）
図版87　遺物　5区　縄文包含層（486～505）
図版88　遺物　4・5区　SD801・縄文包含層・撹乱（M9～M11・S47～S49）

写真図版目次

写真図版1	遺跡		1．遠景（北から）
			2．遠景（南から）
写真図版2	遺跡		3．遠景（東から）
			4．遠景（西から）
写真図版3	遺跡	1～3区	5．上層　全景（西から）
			6．下層　全景（西から）
			7．最下層　全景（西から）
写真図版4	遺構	1区	8．下層　全景（南から）
			9．SK431（北西から）
写真図版5	遺構	2区	10．2・3区下層　全景（北から）
			11．SK253（北西から）
写真図版6	遺構	3区	12．下層　全景（南から）
			13．2・3区最下層　全景（北から）
写真図版7	遺物		縄文時代後期主要土器
			古墳時代初頭主要土器
写真図版8	分析		胎土薄片（1）
写真図版9	分析		胎土薄片（2）
写真図版10	分析		胎土薄片（3）
写真図版11	分析		胎土薄片（4）
写真図版12	分析		胎土薄片（5）
写真図版13	分析		胎土薄片（6）
写真図版14	分析		胎土薄片（7）
写真図版15	遺跡	1区	14．上層　北半（上が北）
写真図版16	遺跡	1区	15．上層　南半（上が北）
写真図版17	遺跡	1区	16．下層　北半（上が北）
写真図版18	遺跡	1区	17．下層　南半（上が北）
写真図版19	遺跡	1区	18．最下層　北半（上が北）
写真図版20	遺跡	1区	19．最下層　南半（上が北）
写真図版21	遺構	1区	20．上層　全景（北から）
		1区	21．上層　全景（南から）
写真図版22	遺構	1区	22．上層　北半（南から）
		1区	23．上層　南半（北から）
写真図版23	遺構	1区	24．下層　全景（北から）
		1区	25．下層　北半（北から）
写真図版24	遺構	1区	26．下層　全景（南から）
		1区	27．下層　南半（北から）
写真図版25	遺構	1区	28．下層　北半（南から）
		1区	29．下層　南半（北から）
写真図版26	遺構	1区	30．最下層　全景（南から）
		1区	31．最下層　全景（北から）
写真図版27	遺構	1区	32．SD101断面（南から）
		1区	33．SD102断面（西から）
		1区	34．SD105断面（南東から）
写真図版28	遺構	1区	35．SD103・SD104（北から）
		1区	36．SD103断面（西から）
		1区	37．SD104断面（西から）
写真図版29	遺構	1区	38．SD136断面（南西から）
		1区	39．SD132断面（西から）
		1区	40．SD128断面（西から）
写真図版30	遺構	1区	41．SK449　上層（東から）
		1区	42．SK449　下層（東から）
写真図版31	遺構	1区	43．SH115　土器出土状況（北から）
		1区	44．SH115　全景　土器出土状況（西から）
		1区	45．SH115　全景（西から）
写真図版32	遺構	1区	46．SH401　全景（北西から）
		1区	47．SH401　炉（北から）
写真図版33	遺構	1区	48．SK413（北から）
		1区	49．SK431（北西から）
写真図版34	遺構	1区	50．SK158（北から）
		1区	51．SK526（南東から）
		1区	52．SK407（北から）
写真図版35	遺構	1区	53．SK412（東から）
		1区	54．SK506　上層（南から）
		1区	55．SK506　下層（南から）
写真図版36	遺構	1区	56．SK409（南東から）
		1区	57．SK500　上層（南から）
		1区	58．SK500　下層（南から）
写真図版37	遺構	1区	59．SK508（南から）
		1区	60．SK503（南から）
		1区	61．SK514（南から）

写真図版38	遺構	1区	62. SK437（北から）
		1区	63. SK436（北から）
		1区	64. SK441（南から）
写真図版39	遺構	1区	65. SK515（南から）
		1区	66. SK516（北東から）
		1区	67. SK450（南から）
写真図版40	遺構	1区	68. SK457（南から）
		1区	69. SK465（東から）
		1区	70. SK451（北から）
写真図版41	遺構	1区	71. SK524（南から）
		1区	72. SK473（南から）
		1区	73. SK486（西から）
写真図版42	遺構	1区	74. SK488（西から）
		1区	75. SK490（西から）
		1区	76. SK492（西から）
写真図版43	遺構	1区	77. SK472（東から）
		1区	78. SK498（南から）
		1区	79. SK521（南東から）
写真図版44	遺構	1区	80. SK523（南から）
		1区	81. SK522（東から）
		1区	82. SK491（南から）
写真図版45	遺構	1区	83. SK487（南から）
		1区	84. SK489（南から）
		1区	85. SK485（西から）
写真図版46	遺構	1区	86. SK429（西から）
		1区	87. SK421（東から）
		1区	88. SK509（西から）
写真図版47	遺物	1区	SD101・SD104・SD105・SD132・SB154・上層包含層・SK449・撹乱、鉄器
写真図版48	遺物	1区	SH115
写真図版49	遺物	1区	SK137・SK506・SK410・SK424・SK425・SK429・SK433・SK413
写真図版50	遺物	1区	SK441・SK502・SK439・SK431・SK506・SK528・SK450・SK451・SK464
写真図版51	遺物	1区	縄文包含層（1）
写真図版52	遺物	1区	縄文包含層（2）
写真図版53	遺物	1区	縄文包含層（3）
写真図版54	遺物	1区	石器（1）
写真図版55	遺物	1区	石器（2）
写真図版56	遺跡	2区	89. 上層　全景（上が北）
写真図版57	遺跡	2区	90. 下層　全景（上が北）
写真図版58	遺構	2区	91. 上層　全景（北から）
		2区	92. 上層　全景（南から）
写真図版59	遺構	2区	93. 下層　全景（北から）
		2区	94. 下層　全景（南から）
写真図版60	遺構	2区	95. SD202断面（南から）
		2区	96. SD203・SD204・SD205断面（南から）
		2区	97. SD212断面（南から）
写真図版61	遺構	2区	98. SD206断面（南東から）
		2区	99. SD214断面（南から）
		2区	100. SD209断面（南東から）
写真図版62	遺構	2区	101. SB231（西から）
		2区	102. SB232（北から）
		2区	103. SH207（南から）
写真図版63	遺構	2区	104. SK275（南東から）
		2区	105. SK276（北から）
		2区	106. SK269（東から）
写真図版64	遺構	2区	107. SK266（南から）
		2区	108. SK267（北西から）
		2区	109. SK264（東から）
写真図版65	遺構	2区	110. SK257（北から）
		2区	111. SK286（西から）
		2区	112. SK252（北から）
写真図版66	遺構	2区	113. SK258（北から）
		2区	114. SK260（東から）
		2区	115. SK262（東から）
写真図版67	遺構	2区	116. SK251（東から）
		2区	117. SK253（北西から）
写真図版68	遺構	2区	118. SK280・SK281・SK283（北から）
		2区	119. SK279（東から）
		2区	120. SK279内ピット（東から）
写真図版69	遺構	2区	121. SK273（東から）
		2区	122. SB288（北から）
写真図版70	遺物	2区	SD205・SD202
写真図版71	遺物	2区	SD229・SD203・P215・SD201・上層包含層
写真図版72	遺物	2区	SD229・SD205・SK251（1）

写真図版73	遺物	2区		SK251 (2)
写真図版74	遺物	2区		SK252・SK238・SK218・SK298・SK223・SK213・SK254・縄文包含層
写真図版75	遺物	2区		鉄器、石器
写真図版76	遺跡	3区	123.	上層　全景（上が北）
写真図版77	遺跡	3区	124.	中層　全景（上が北）
写真図版78	遺跡	3区	125.	下層　全景（上が北）
写真図版79	遺構	3区	126.	上層　全景（北から）
		3区	127.	上層　全景（南から）
写真図版80	遺構	3区	128.	SD312断面（南から）
		3区	129.	SD306断面（南から）
		3区	130.	SD307断面（南から）
写真図版81	遺構	3区	131.	SD303断面（南から）
		3区	132.	SD304断面（南東から）
		3区	133.	SD313断面（南東から）
写真図版82	遺構	3区	134.	SD314断面（南東から）
		3区	135.	SD309断面（南から）
		3区	136.	SD310断面（南から）
写真図版83	遺構	3区	137.	SK302（南から）
		3区	138.	SK301（北から）
写真図版84	遺構	3区	139.	SD308（北西から）
		3区	140.	SD308断面（南東から）
写真図版85	遺構	3区	141.	中層　全景（北から）
		3区	142.	中層　全景（南から）
写真図版86	遺構	3区	143.	SK331（西から）
		3区	144.	SD353断面（西から）
写真図版87	遺構	3区	145.	SD351（北西から）
		3区	146.	SD351断面（南東から）
写真図版88	遺構	3区	147.	SD352（西から）
		3区	148.	SD352断面（東から）
		3区	149.	SD357断面（南東から）
写真図版89	遺構	3区	150.	下層　全景（北から）
		3区	151.	下層　全景（南から）
写真図版90	遺構	3区	152.	SK371（南から）
		3区	153.	SK375（南から）
		3区	154.	SK373（北から）
写真図版91	遺物	3区		SD306・SD307・SD303・SD304・SK331、鉄器
写真図版92	遺物	3区		SD353 (1)
写真図版93	遺物	3区		SD353 (2)・SD351 (1)
写真図版94	遺物	3区		SD351 (2)・SD308 (1)
写真図版95	遺物	3区		SD308 (2)
写真図版96	遺物	3区		SD308 (3)
写真図版97	遺物	3区		SD308 (4)
写真図版98	遺物	3区		SD361
写真図版99	遺物	3区		SD361
写真図版100	遺物	3区		SK373・SD308・SD310・SD357・縄文包含層　6層①
写真図版101	遺物	3区		縄文包含層　6層②・7層①
写真図版102	遺物	3区		縄文包含層　7層①・7層②
写真図版103	遺物	3区		石器
写真図版104	遺跡	4・5区	155.	下層　全景（上が北）
写真図版105	遺構	4区	156.	4区上層　全景（北から）
		4区	157.	4区上層　全景（南から）
		5区	158.	5区上層　全景（北から）
写真図版106	遺構	4区	159.	SB813　P854・P855　断面（東から）
		4区	160.	SB813　P856　断面（東から）
		4区	161.	SB813　P857　断面（東から）
		4区	162.	下層　全景（北から）
		4区	163.	下層　全景（南から）
写真図版107	遺構	5区	164.	下層　全景（南から）
		5区	165.	縄文土器出土状況（西から）
		5区	166.	下層　全景（西から）
写真図版108	遺物	4区		SD801・SB813
写真図版109	遺物	4区		粘土採掘坑、撹乱、鉄器
写真図版110	遺物	4区		SB803・包含層
写真図版111	遺物	4区		撹乱
写真図版112	遺物	4・5区		SD801・SK804・P836・縄文包含層
写真図版113	遺物	4・5区		縄文包含層、石器

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境（図版１・３）

東南遺跡は兵庫県揖保郡太子町鵤に所在する。太子町は、兵庫県南西部（西播磨地域）に位置する町で、西側をたつの市、東側を姫路市と接している。東南遺跡は太子町の中心部に位置し、前山・丹生山・壇特山・立岡山・太子山に囲まれた扇状地に立地する。

太子町を含む揖龍平野は、中国山地の東端を構成している播但山地を大きく刻んで南流する揖保川、林田川、および独立した小規模河川である大津茂川の流域に当たる。町域の北西部には西播山地があり、火成岩からなる独立丘陵も散在するが、大部分は揖保川の氾濫原である平野部が続いている。

高橋学氏の研究によると、これまでデルタ性平野あるいは氾濫原とされてきた揖保川下流域の平野部は、かなり起伏に富んでおり、扇状地的性格を有する。ただし、詳細に見ると、揖保川下流の左岸域は盛んに河川の氾濫堆積を受けて形成された扇状地状である。

揖保川下流の左岸には、馬山・壇特山・朝日山などの基盤岩の突出が認められる。これらの独立丘陵は、8,000万年前から6,500万年前にかけて、流紋岩の山塊が揖保川本流の堆積作用によって埋没したために生まれた地形である。これらによって本流の影響を受けず、埋没を免れたと考えられる大津茂川の河谷が平野の東端に位置している。

揖保川下流左岸の扇状地はたつの市日飼を扇頂として南へ低下して行くが、標高４m～５m付近を境として、下流では海岸に平行して延びる微高地群とそれらに挟まれた凹地群の卓越するデルタ的性格が強くなっている。揖保川下流域の低地は三つの地形面に分類されており、そのうち大きな地形面が二つあり、0.5 m～２mの崖によって限られている。そして低位のものが氾濫原面であり、今も地形の形成が続く沖積面に当たる。高位のものは完新世段丘面であり、洪水が及ぶことがほとんどなく、及んだとしても積極的な地形の形成が行われることがなく、条里タイプの土地割りが広がっている。

完新世段丘面を細分すると、現在の集落や耕作地が立地することが多い微高地と帯状に長く延びる凹地をなす旧河道、いずれにも属さない平坦地からなっている。これらのうち旧河道は、ほとんどのものが現在の流路と比べ東向きの網状の流れを有し、川島付近で旧揖保川もしくは旧林田川が大津茂川に合流していた。微高地はこれまでの分類では自然堤防とされてきた部分であるが、大礫から小礫で構成されている場合が多く、中州として形成されたものと考えられる。また、平坦部は小規模な旧河道や旧中州が氾濫堆積物で埋められたものと考えられる。以上のことから、完新世段丘面もかつては扇状地として形成されたものであることがわかる。

低位の地形面である氾濫原は河川の影響のみで形成された自然堤防帯と、海と河川が形成に関与した三角州帯、海によって形成された砂堆帯に細分される。自然堤防帯は完新世段丘面と氾濫原面の境界が形成された後で発達した新しい地形である。

海成層の分布は揖保川沿いでは姫路市下余部付近、大津茂川沿いでは姫路市田井付近までとなっている。また、海進にともない低湿化した場所に堆積したと思われる層は京見山南麓から姫路市宮田・坂出付近まで広がっている。したがって、縄文海進時の海岸線は現在のT.P.４m～５m付近に位置していたと考えられている。

第２節　歴史的環境（図版２・３）

東南遺跡は揖保郡太子町の中央部に所在する。今回中心となる遺構と遺物は縄文時代である。したがって、東南遺跡周辺地域の縄文時代を中心に前後の時代も含めて時代ごとに概観する。

１．旧石器時代

旧石器時代の遺跡はたつの市碇岩南山遺跡で調査が行われている他は、他の時代に混入した石器や採集品である。碇岩南山遺跡では２群に分かれた石器類ブロックが姶良Tn火山灰より上層で検出された。坊主山遺跡からは国府型ナイフ形石器と有舌尖頭器が出土している。広坂向池遺跡でナイフ形石器と尖頭器、原新池遺跡でナイフ形石器が採集されている。

２．縄文時代

縄文時代の遺跡では、草創期や早期の遺跡の調査は行われていない。前期の遺跡はたつの市片吹遺跡で前期末の土坑を検出しており、中期・後期・晩期にかけて継続している。中期になると遺跡や遺物量も増加し、平方遺跡で竪穴住居や土坑・ピットを調査し、石棒や石鏃などの石器や土器が多量に出土している。このほか城山遺跡や姫路市丁･柳ヶ瀬遺跡で土器が出土している。後期になるとさらに遺跡数は増加し、東南遺跡・たつの市片吹遺跡で竪穴住居を調査している他、平方遺跡・城山遺跡・川島川床遺跡・たつの市舎利田遺跡などで遺物が出土している。

晩期は東南遺跡・立岡遺跡・助久五反畑遺跡・平方遺跡・川島川床遺跡・城山遺跡・常全遺跡・丁･柳ヶ瀬遺跡・たつの市門前遺跡などで土坑や遺物が出土している程度で竪穴住居は検出されていない。

３．弥生時代

弥生時代の遺跡は、弥生時代前期後半から始まる遺跡としては姫路市丁･柳ヶ瀬遺跡があり、数は少ない。しかし弥生時代中期初頭から急増している。平方遺跡で竪穴住居を検出している他は、東南遺跡・鵤遺跡・斑鳩寺遺跡・たつの市門前遺跡などが存在し、門前遺跡からは縄文時代晩期の土器も出土している。中期中葉から後半はさらに遺跡数が増加し、鵤遺跡・立岡遺跡・城山遺跡・亀田遺跡・川島遺跡・山田遺跡・姫路市（仮）高田区整遺跡で竪穴住居を検出している。川島川床遺跡では絵画土器が出土している。高地性集落として、檀特山山頂遺跡があり眺望が良い。墓は川島遺跡で方形周溝墓4基と円形周溝墓１基を検出している。

弥生時代後期は中期から継続する立岡遺跡・亀田遺跡・川島遺跡をはじめ南柳遺跡で竪穴住居を検出している他は、たつの市片吹遺跡・たつの市門前遺跡・茶屋ノ前遺跡・蓮常寺北遺跡などがある。墓は常全日蓮寺遺跡で土器棺墓4基を検出している。

４．古墳時代

揖保川下流域左岸にある前期古墳の首長墓は、大津茂川流域に系譜をたどることができる。低地に位置する姫路市丁瓢塚古墳が最古であり、丘陵上の壇特山１号墳、壇特山３号墳、鷲山古墳と続いている。首長墓ではないが古墳時代初頭の黒岡山墳丘墓や姫路市山戸4号墓で調査が行われている。松田山古墳は竪穴式石室に割竹形木棺の埋葬施設を持ち、斜縁二神二獣鏡・銅鏃・筒形銅器などを副葬している。

中期の古墳は現在のところ、確定的な首長墓はほとんど見られない。太子町内においても、箱式石棺を主体部とし、仿製鼉龍鏡を副葬する黒岡山古墳が知られているにすぎない。

後期の古墳は、平地に立地するものと丘陵斜面に群をなすものがある。前者は常全遺跡と船塚古墳群があり、常全遺跡では墳丘が削平された横穴石室を調査している。船塚古墳群では埴輪を伴う円墳と方墳を

調査しており、同時期の竪穴住居を近接して検出している。後者は丘陵斜面に多く存在している。立岡山古墳群（８基）・丹生山古墳群（９基）・黒岡古墳群（13基）・上太田古墳群（３基）・東保山古墳群（５基）・山田古墳群（15基）・内山戸古墳墳（４基）・白毛古墳群（13基）・姫路市太市中古墳群（20基）・姫路市西脇古墳群（134基）・姫路市丁古墳群（５基）など横穴式石室を持つものである。黒岡古墳群中に含まれる黒岡神社古墳は、大型の横穴式石室に家形石棺が残存している。太市中古墳群の中には九州系の要素がある石室が認められる。姫路市丁山頂古墳のように単独で立地し、T字形の平面形態と穹窿状の石室を持つ。丹生山１号墳は箱式石棺を埋葬施設とし、形象埴輪・円筒埴輪を持つ例である。終末期になると内山戸古墳群のような小石室を持つものや上太田古墳群のように切石造石室を持つものが出現する。

古墳時代初頭の集落遺跡は鵤遺跡・鵤石田遺跡・城山遺跡・南柳遺跡・平方遺跡・川島遺跡・姫路市和久遺跡などがあり、竪穴住居を検出している。南柳遺跡では掘立柱建物を検出している。いずれも弥生時代から継続しており、この時期に集落規模が拡大する。常全遺跡では土坑を検出している。古墳時代中期の集落は南柳遺跡・川島遺跡で竪穴住居を検出している。古墳時代後期の集落は鵤石田遺跡・船塚遺跡・南柳遺跡・東保高田遺跡・亀田遺跡・城山遺跡で竪穴住居を検出している。

５．古代

奈良時代において、この地域は播磨国揖保郡に所在していた。『播磨国風土記』には揖保郡は18里が記されており、東南遺跡周辺は枚方里に比定されている。平安時代の『和名類聚抄』には揖保郡は18郷ないしは19郷が記載されているが、『播磨国風土記』の枚方里を継承する郷は見当たらない。

『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条には播磨国に９駅が記載されている。東南遺跡の北側約3.2kmには古代山陽道が東西方向に走っており、西側の布勢駅家である小犬丸遺跡の調査が行われており、東側には太市駅と推定される姫路市向山遺跡がある。『延喜式』神名帳に記載のあるいわゆる式内社は揖保郡に７座あり、東南遺跡の西北西側約3.7kmには中臣印達神社が鎮座している。なお、播磨国一宮は揖保川上流の宍粟市一宮町に伊和坐大名持御魂神社がある。

播磨国府・播磨国分寺・播磨国分尼寺はいずれも揖保郡の東隣りの餝磨郡に所在している。播磨国府が本町遺跡に推定されており、播磨国分寺・播磨国分尼寺は市川左岸に位置する。

揖保郡には古代寺院が多く、東南遺跡の東2.4kmには白鳳時代に遡る姫路市下太田廃寺が存在する。塔心礎・礎石群が現存しており、法起寺式伽藍配置と考えられている。第Ⅰ期は軒丸瓦には鋸歯文縁複弁八葉蓮華文・素弁十葉蓮華文、軒平瓦には忍冬唐草文が使用されている。『播磨国風土記』大田里条に呉勝を祖とする渡来人集団が摂津国島上郡から揖保郡へ移住したという記事があり、大阪府茨木市大田廃寺でも第Ⅰ期と同系の瓦が出土している点が注目される。法隆寺の別院として創建された斑鳩寺は、創建時期については明らかではなかったが、平安時代後期に遡る可能性が指摘されている。

天平19年（747）『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』に播磨国揖保郡内に水田が219町１段82歩、園地が12町２段、山林岳島が５地などの所領が記されている。東南遺跡周辺の条里地割は宅地化などの開発で失われた地区も多いが、広い範囲に北から西に約４°振る正方位の条里地割が残る。東南遺跡周辺は『法隆寺領播磨国鵤荘絵図』嘉暦4年（1329）に含まれており、「絵図」の「上糸田」・「中糸田」・「下糸田」と記載された地点の調査を行った。揖保郡条坊復原による18条10坊と18条９坊にあたる。

集落遺跡は亀田遺跡で規格性の高い掘立柱建物が多数調査されている他、川島遺跡・姫路市檀特山遺跡・立岡遺跡で掘立柱建物が調査されている。姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡では刻印土器や墨書土器、坊主山遺跡では墨書土器が出土している。

古代における須恵器生産をはじめとする窯業は揖保郡東部から餝磨郡西部にかけて群集している。青山窯跡群・桜峠窯跡群・打越窯跡群・大池窯跡群・赤坂窯跡群・峰相口窯跡群などが存在しており、打越窯跡と赤坂１号窯跡からは鴟尾が出土している。

６．中世以降

中世には東南遺跡・鵤遺跡・立岡遺跡・立岡笹山遺跡・南佐田遺跡・たつの市福田片岡遺跡・たつの市宝林寺北遺跡で掘立柱建物を検出している。中世の寺院跡としては斑鳩寺に関連する円勝寺跡、願成寺跡が知られ、円勝寺周辺には笹山経塚があり、出土した経筒が斑鳩寺に伝えられている。

筑紫大道（中世山陽道）は東南遺跡の北約1.7kmの福田片岡遺跡・平方遺跡で調査されている。

東南遺跡周辺は江戸時代初期には鵤村に含まれており、鵤藩領・龍野藩領・新宮藩領・幕府領の相給などを経て寛文12年（1672）に龍野藩領となり、幕末に至った。

斑鳩寺聖徳殿前殿の瓦銘の調査により、寛永８年（1711）に鵤村の「三木伊右衛門」「三木庄兵衛」、年代不明の「三木治七郎」「三木善四郎」等の瓦師の名が残されている。斑鳩寺講堂の瓦銘の調査では、明和２年（1765）に揖西郡龍野の「三木与兵衛」、明和６年（1769）から明和８年（1771）に鵤村の「三木庄兵衛」「三木庄兵衛行　治七郎」「三木伊八郎」等の瓦師の名が残されている。

明治４年（1871）の廃藩置県により、龍野県となり、その後、飾磨県と改称し、兵庫県となった。明治22年（1889）の市制町村制の施行により揖東郡鵤村が成立し、明治29年（1896）には揖東郡と揖西郡が統合され、揖保郡鵤村となった。昭和６年（1931）４月１日 に町制施行して斑鳩町が誕生した。昭和26年（1951）４月１日には斑鳩町と石海村・太田村が合併し、太子町が誕生した。昭和30年（1955）１月１日には 龍田村を編入し、現在の町域になった。

平成17年（2005）10月１日に揖保郡旧3町（揖保川町・新宮町・御津町）が龍野市と合併してたつの市になったが、太子町は合併せず、揖保郡太子町は単独となった。

主要地方道太子御津線のうち、平成11年度・12年度・13年度に本発掘調査を実施した今回報告の東南遺跡部分については、平成18年（2006）２月24日に供用を開始した。

主要参考文献

・太子町教育委員会『斑鳩寺講堂瓦銘Ⅰ』太子町文化財資料第１集　1989年
・太子町教育委員会『播磨国鵤荘現況調査報告Ⅲ』　1990年
・太子町教育委員会『斑鳩寺聖徳殿前殿屋根葺瓦型式一覧』太子町文化財資料第56集　1998年
・太子町教育委員会『播磨国鵤荘現況調査報告総集編』　2004年
・太子町教育委員会『平成15・16年度埋蔵文化財調査年報』太子町文化財資料第73集　2006年
・太子町教育委員会『平成17・18・19年度埋蔵文化財調査年報』太子町文化財資料第74集　2008年
・太子町史編集専門委員会『太子町史』第１巻　1996年
・太子町史編集専門委員会『太子町史』第３巻　1989年
・龍野市教育委員会『片吹遺跡』龍野市文化財調査報告書Ⅵ　1985年
・兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第30冊　1985年
・兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』第１・２分冊　2004年
・「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典23兵庫県』角川書店　1988年
・今井林太郎監修『日本歴史地名大系29Ⅱ　兵庫県の地名Ⅱ』平凡社　1999年

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査に至る経緯

１．調査の契機

兵庫県土木部竜野土木事務所では太子町において、主要地方道太子御津線〔街路龍野線〕都市計画街路事業を進めている。この事業は太子町鵤から矢田部の幅18m、延長1,086mの片側２車線、両側歩道付の仕様のバイパスである。事業は歩行者等の安全性の向上を図るよりよい生活環境の確保と太子町中心地の文化施設群と町南部を連携するシンボルロードの整備を目的として行われている。事業は平成４年度に着工し、平成15年度に完成供用開始を予定していた。

事業計画の進展に伴い、平成５年度に竜野土木事務所からの調査依頼があり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が事業計画地内の埋蔵文化財分布調査を実施した。事業計画地は法隆寺領鵤荘の範囲内に含まれており、周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。過去に太子町教育委員会が調査を実施した東南遺跡の西側に隣接している。実際の分布調査では広範囲で遺物を採集し遺跡の存在を指摘した。平成７年度に竜野土木事務所からの調査依頼があり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が事業計画地内の埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、溝などの遺構や縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などの遺物が出土し、東南遺跡の広がりが明らかになった。

このため、平成７年度と平成11年度の確認調査をもとに竜野土木事務所からの調査依頼により、平成11年度・12年度・13年度に本発掘調査を実施した。

なお、主要地方道太子御津線のうち、今回報告の東南遺跡部分については平成18年２月24日に供用を開始した。

２．東南遺跡の既往の調査（第１表　図版４）

東南遺跡は昭和52年度に太子町立体育館建設の確認調査（第１次）の際に発見された。以後、今回報告する調査分を含めて24次に亘る調査が行われている。引き続き、太子町立体育館建設部分の発掘調査（第２次）が太子町教育委員会によって行われ、主として縄文時代後期の竪穴住居跡や配石墓などを検出している。昭和52年度には太子町立体育館に通じる町道改良に伴う調査（第３次）が太子町教育委員会によって実施された。

昭和53年度には太子町立体育館外周フェンス設置に伴い、兵庫県教育委員会が調査（第４次）を実施した。縄文時代後期の竪穴住居跡などを検出し、一部の遺構を保存した。昭和53年度には２次調査の北東側に位置する太子町商工会館建設に伴う調査（第５次）を太子町教育委員会が実施した。

昭和54年度には今回報告の１区部分の宅地造成に伴う確認調査（第６次）を太子町教育委員会が実施した。遺構や遺物を確認したが盛土により、遺構面に影響しないことから本発掘調査は行わなかった。

昭和55年度には関西電力株式会社の送電線鉄塔建設に伴い、太子町教育委員会が調査（第７次）を実施した。今回、報告の５区の東側と第２次調査の南側の２箇所である。

平成２年度には第２次調査と第４次調査の南側で町道改良工事に伴う調査（第８次）を太子町教育委員会が実施した。

平成９年度には第７次調査の南側で宅地造成に伴う調査（第９次）を太子町教育委員会が実施した。

平成11年度には第２次調査の南側に防火水槽の設置に伴い、太子町教育委員会が調査（第14次）を実施した。

平成13年度と平成14年度には今回報告分の東側の歩道に設置された下水道に伴う調査（第18次・第19次）を太子町教育委員会が実施した。

平成15年度には４区・５区の西側の宅地造成に伴う調査（第20次）と２区・３区の西側の宅地造成に伴う調査（第21次）を太子町教育委員会が実施した。第20次調査では土坑を検出し、第21次調査ではピットを検出したが、遺構密度が希薄であることから、縄文時代後期における集落の西限りを確認したことになる。

平成16年度と平成18年度は２区・３区の東側で、宅地造成や集合住宅建設に伴う調査（第22次～第24次）を太子町教育委員会が実施した。土坑などを検出し、東南遺跡の縄文時代後期における集落の南東限を確認している。

第１表　東南遺跡発掘調査一覧

調査次数	開始	終了	調査原因	種別	調査面積	調査主体	文献
1	1977.8	1977.8	公共施設	確認		太子町教育委員会	
2	1977.12.10	1978.6.30	公共施設(町立体育館)	全面		太子町教育委員会	
3	1978.1.29	1978.1.31	町道改良		134㎡	太子町教育委員会	
4	1978.6.20	1978.7.19	公共施設　県教委(一部保存)			太子町教育委員会	
5	1978.7.20	1978.7.31	商工会建設		420㎡	太子町教育委員会	
6	1979.5.1	1979.5.6	宅地造成(平成12年度県教委調査地)	確認		太子町教育委員会	
7	1980.7.26	1980.9.1	鉄塔建設		49㎡	太子町教育委員会	
8	1990.10.22	1991.2.23	町道改良			太子町教育委員会	
9	1994.12.1	1994.12.6	宅地造成			太子町教育委員会	
10	1996.3.13	1996.3.15	県道改良　県教委調査一部	確認	85㎡	太子町教育委員会	
11	1996.12.11	1997.1.17	町道改良			兵庫県教育委員会	本書
12			宅地造成			太子町教育委員会	
13	1999.11.11	2000.3.2	県道改良　県教委	全面	2874㎡	兵庫県教育委員会	本書
14	1999.12.16	1999.12.21	防火水槽	全面		太子町教育委員会	
15	2000.6.19	2000.9.14	県道改良　県教委	本発掘	1920㎡	兵庫県教育委員会	本書
16	2000.7.18	2000.8.17	県道改良　県教委　確認調査	確認	62㎡	兵庫県教育委員会	本書
17	2001.11.28	2002.1.31	県道改良　県教委	本発掘		兵庫県教育委員会	本書
18	2002.2.25	2002.3.29	下水道 18次			太子町教育委員会	
19	2002.7.8	2002.8.2	下水道 19次			太子町教育委員会	
20	2004.2.18	2004.2.27	宅地造成　試掘確認	試掘確認		太子町教育委員会	
21	2004.3.15	2004.3.25	宅地造成		183.7㎡	太子町教育委員会	
22	2004.5.11	2004.5.12	集合住宅　試掘確認	試掘確認	28㎡	太子町教育委員会	太子町文化財資料第73集
23	2006.8.1	2006.8.9	宅地造成		132㎡	太子町教育委員会	太子町文化財資料第74集
24	2006.10.17	2006.10.26	宅地造成		118㎡	太子町教育委員会	太子町文化財資料第74集

第２節　調査の経過（図版５）

１．確認調査

事業計画およびそれに伴う用地買収を受け確認調査を実施した。

平成７年度（遺跡調査番号950398）東南遺跡第10次調査

太子町矢田部から太子町鵤にかけての延長約800mの区間について未買収地を除いて、18箇所（坪１～坪18）の調査を実施した。このうち、東南遺跡にかかわる調査区は坪11～坪18の８箇所である。調査期間は、平成８年３月11日～３月15日。調査面積は85㎡であった。

平成12年度（遺跡調査番号2000287）東南遺跡第16次調査

平成11年度の本発掘調査時に平成７年度の確認調査実施時には未買収地であった北側の地区の確認調査を実施した。本発掘調査１区の北側の延長約150mの区間について５箇所（トレンチ１～トレンチ５）の調査を実施した。このうち、東南遺跡にかかわる調査区はトレンチ３～トレンチ５の３箇所である。調査期間は、平成12年７月18日～８月17日。調査面積は62㎡であった。

２．本発掘調査

確認調査の結果を踏まえ、本発掘調査を平成11年度・平成12年度・平成13年度に実施した。

平成11年度（遺跡調査番号990240）東南遺跡第13次調査

平成11年度の本発掘調査は１区・２区・３区を実施した。発掘調査により、縄文時代～平安時代にかけて営まれていた集落遺跡であることが判明した。

さらに、遺構密度の濃淡はあるものの、確認調査では検出できなかった下層に縄文時代を中心とする遺構が存在していることが判明した。このため、本発掘調査中に下層の深さを側溝掘削により確認し、今年度の調査期間内では時間と予算の点で終了しないことが判明したため、来年度に改めて下層の調査を実施することとした。なお、現地調査において縄文時代の遺構や遺物を検出したため奈良大学（当時）の泉拓良先生に指導を得た。

本発掘・確認調査を含めた調査期間は、平成11年11月11日～平成12年３月２日。調査面積は2,784㎡であった。

平成12年度（遺跡調査番号200288）東南遺跡第15次調査

平成12年度の本発掘調査は昨年度本発掘調査を行った１区・２区・３区の下層の調査を実施した。東側の歩道部分は調査対象から外れたため、調査面積は減っている。

現地調査において縄文時代の遺構や遺物を検出したため奈良大学（当時）の泉拓良先生に指導を得た。また縄文時代後期の竪穴住居の地磁気の測定のために姫路工業大学（当時）の森永速男先生に試料採取をして頂いた。

調査期間は、平成12年６月19日～平成12年９月14日。調査面積は1,920㎡であった。

平成13年度（遺跡調査番号2001123）東南遺跡第17次調査

平成13年の本発掘調査は４区・５区の調査を実施した。調査期間は、平成13年11月28日～平成14年１月31日。調査面積は826㎡であった。今回で当該事業による発掘調査は終了するとともに、鵤石田遺跡の本発掘調査も合せて実施した。

発掘調査の組織

平成7年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　青木正之

主任調査専門員　大村敬通

企画調整班　調査専門員　輔老拓治　　主査　種定淳介

総務課　課長　石井　守

調査担当　調査第1班　技術職員　深江英憲

平成11年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　寺内幸治　　副所長　大村敬通

企画調整班　調査専門員　山本三郎　　主任　多賀茂治

総務課　課長　岩澤俊雄

調査第3班　調査専門員　西口和彦

復興調査班　調査専門員　小川良太

調査担当　復興調査班　主査　篠宮　正

調査第3班　技術職員　松岡千寿

調査補助員　小谷義男・岸真理子

平成12年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　寺内幸治　　副所長　大村敬通

企画調整班　主任調査専門員　井守徳男　　主査　高瀬一嘉　　付　稲田　毅

総務課　課長　森　俊雄

調査第4班　調査専門員　西口和彦

調査担当　調査第4班　主査　村上泰樹　　主査　篠宮　正

調査補助員　小谷義男・松井利可子

平成13年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　大村敬通

企画調整班　主任調査専門員　井守徳男　　主査　高瀬一嘉　　付　稲田　毅

総務課　課長　森　俊雄

調査第4班　調査専門員　西口和彦

調査担当　調査第4班　主査　渡辺　昇　　技術職員　松岡千寿

調査補助員　小谷義男・前田陽子・森崎由起子・野田希和子

第３節　出土品整理

平成11年度・平成12年度に現地において遺物洗浄及びネーミングの一部を行った。平成19年度と平成20年度は兵庫県立考古博物館において実施した。

平成19年度は、出土遺物の接合・補強を行い、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、土器の実測・拓本と石器の実測を行った。出土品の分析は、年代測定を㈱加速器分析研究所に、土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。また縄文土器について京都大学埋蔵文化財センターの千葉豊氏にご教示を得た。

平成20年度は、金属器の実測と保存処理を行った。土器の復原を行い、石器・金属器と合せて遺物の写真撮影を行い、写真を整理した。また、遺構図はトレースが行えるように補正し、昨年度に実測した遺物図と遺構図と共に、レイアウト・トレースを行った。出土石材は奥田尚氏に観察して頂き採集地を推定して頂いた。原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。

出土品整理の組織

平成19年度

調査主体　兵庫県教育委員会

整理事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

副館長（総務部長兼務）　松下信一

総務課　課長　若狭健利

埋蔵文化財調査部　部長　若生晃彦

主幹　岡崎正雄

整理保存班　調査専門員　西口和彦

担当課長補佐　岡田章一　　主査　菱田淳子　　主査　岡本一秀

整理担当　調査第２班　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員　島田留里・佐伯純子・吉田優子・小野潤子・宮野正子・三好綾子・又江立子・嶺岡美見

日々雇用職員　小谷桂加

平成20年度

調査主体　兵庫県教育委員会

整理事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

副館長（総務部長兼務）　藤原　悟

総務課　課長　若狭健利

埋蔵文化財調査部　部長　若生晃彦

主幹　岡崎正雄

整理保存班　調査専門員　森内秀造　　主査　菱田淳子　　主査　岡本一秀

整理担当　整理保存班　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員　島田留里・佐伯純子・島村順子・伊藤ミネ子・奥野政子・谷脇里奈・吉村あけみ

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の概要

確認調査結果を受け、本発掘調査を平成11年度～平成13年度にかけて実施した。本発掘調査対象区は、国道179号と山陽新幹線との間で、旧主要地方道太子御津線の東側約140mに位置する。

調査区は北から４区・５区・１区・２区・３区と並んでおり、４区の北側には道路を挟んで、鵤石田遺跡が存在する。１区・２区・３区は平成11年度に本発掘調査を実施し、面積は2,784㎡である。１区・２区・３区の下層は平成12年度に本発掘調査を実施し、面積は1,920㎡である。４区・５区は平成13年度に本発掘調査を実施し、面積は826㎡である。

第２節　１区の調査

１区は、今回調査を実施した中央部に位置する調査区で、２区の町道を挟んで北側、５区の町道を挟んで南側に位置する。西側は条里地割りの坪境溝の水路が走っている。全長100m、最大幅16m、調査面積1,425㎡を測る南北に長い変形の長方形の調査区である。

平成11年度の発掘調査は上記の範囲で調査を行った。当初調査予定の深さ以下にも遺構の存在が明らかになり、当初の予定では調査が行えなかったため、正確な深さと土量を確認して改めて、次年度に調査を行った。調査区の中は図版11に示したように、南北方向に10m単位で区切り、北から１・２・・10とした。東西方向は１区から通しのセンターラインを基準にＥ・Ｗとし、北東の端を1E、北西の端を1Wと呼称した。平成12年度の発掘調査は、東側の歩道部分の範囲を除いて調査を行うこととした。これにより、全長は平成11年度の調査と変わらないが、幅は東側が3.5m減ったため、最大幅12.5mとなり、調査面積は1,075㎡である。調査区の呼称は平成11年度の呼称を踏襲した。

１．遺構の概要と層序（図版６～10）

２区は上層・下層の二面の調査を行った。上層は耕作土直下にある遺構検出面で、標高12.1m前後を測る。時期不明の遺構も存在しているが、主として縄文時代後期・古墳時代初頭・古墳時代後期・中世・近世の遺構を検出した。下層は本来、上層で検出可能な遺構であると考えられるが、土壌化のため検出が著しく困難であったため、20cm前後検出面を下げて遺構検出を行った。縄文時代後期の遺構を検出した。

２．上層の遺構（図版７・９　写真図版15・16・21・22）

上層は耕作土直下で検出したため、耕作による削平が著しく、広範囲の時代に及ぶ遺構を検出した。上層からは、粘土取りの撹乱坑、中世の溝、中世の掘立柱建物、古墳時代後期の掘立柱建物、弥生時代後期の溝、弥生時代中期の溝、縄文時代晩期の土坑、縄文時代後期の遺構を検出した。なお、縄文時代後期の遺構は下層の遺構の中で報告する。

SD101（図版12　写真図版27）

調査区西端の1W・2W・3W・10Wに位置する南北溝である。4W～9Wは調査区外に延びており、溝SD105を切っている。幅2.1m以上、深さ46cmを測る。遺物は中世の須恵器と土師器が主に出土し、須恵器

椀と石皿と鉄釘を図化した。

SD102（図版12　写真図版27）

9W・9Eに位置する東西溝で、東側の調査区外に延びている。幅70cm以上、深さ15cmを測る。遺物は中世の須恵器と土師器が出土した。

SD103（図版12　写真図版28）

6W・7W・7Eに位置し、蛇行する東西溝で、調査区外に延びている。幅58cm、深さ13cmを測る。

SD104（図版12　写真図版28）

6W・6Eの溝SD103の北側に位置し、蛇行する東西溝で、調査区外に延びている。幅65cm、深さ13cmを測る。遺物は弥生時代中期の甕が出土した。

SD105（図版12　写真図版27）

3W・3E・4Eに位置し、北西から南東に流れる直線的な溝で、調査区外に延びている。溝SD101に切られている。幅1m、深さ30cmを測る。遺物は弥生時代後期の甕が出土した。

SD136（図版12　写真図版29）

6Wの溝SD104の北側に位置する東西溝である。幅15cm、深さ6cmを測る。

SD132（図版12　写真図版29）

6Wの溝SD104と溝SD103の間に位置する東西溝である。幅16cm、深さ5cmを測る。遺物は縄文土器の底部が出土したが、下層からの混入であると考えられる。

SD128（図版12　写真図版29）

7W・7Eに位置し、溝SD103の南側に位置する東西溝である。幅30cm、深さ5cmを測る。

SB154（図版12）

8W・9Wに位置し、溝SD102の北側に位置する掘立柱建物である。南北軸は北から西に15°振っている。南北２間（5.5m）×東西１間（1.8m）の規模を有するが、周囲に撹乱等が存在するため正確な規模は不明である。柱穴は直径30cm前後を測り、深さは30cm～10cmである。

SB155（図版12）

8W・9Wに位置し、掘立柱建物SB154の西側に位置する掘立柱建物である。南北軸は北から西に９°振っている。南北２間（5.6m）以上×東西１間（2.3m）の規模を有するが、周囲に撹乱等が存在するため正確な規模は不明である。柱穴は直径40cm～20cmを測り、深さは35cm～17cmである。

遺物は古墳時代後期の須恵器坏Ｈ蓋がP122とP114から出土した。

SK449（図版13　写真図版30）

調査区の西端6Wに位置する土坑である。東西83cm、南北75cmの楕円形を呈し、深さ32cmを測る。埋土に焼土や炭が含まれている。遺物は上層と下層から縄文時代晩期の深鉢が出土し、上層から割礫が１個出土した。

SK528（図版13）

調査区の西端7Wに位置する土坑である。調査区外に延びるため、約半分しか調査できていない。直径55cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。割礫が１個出土した。縄文時代晩期の鉢の小片が出土した。

撹乱

調査区の北東端1Eに位置する粘土取りの撹乱坑である。一度掘削が行われた後、時間がたたないうちに土の塊が埋められていることから粘土取りのための撹乱と判断した。遺物は近世陶器と磁器が出土しており、染付磁器碗を図化した。

３．下層の遺構（図版７・８・10　写真図版17～20・23～26）

下層からは縄文時代後期の竪穴住居と土坑を検出した。遺構検出は土壌の状況で非常に難しかった。土坑は石を伴うものや焼土・炭を伴うものが存在する。なお、最終確認のため、全体に約20cm下げて、遺構検出を行った。

SH115（図版14　写真図版31）

4E・5Eに位置し、東側半分は調査区外である。調査区中央の東辺において検出した。平面形状はやや不整な円形と考えられ、規模は直径推定約6.5m、床面までの深さは約20cmを測る。埋土には多量の炭粒を含んでいる。床面からは柱穴を４本検出した。壁溝・土坑は検出できなかった。柱穴の直径は25cm～15cm、深さは25cm前後を測る。遺物は縄文時代後期の土器と石器が出土した。縄文土器は深鉢と浅鉢の小破片が多数出土し、石器は石錘と石皿・サヌカイトの剥片が多数出土した。埋土から出土した炭でAMS年代測定を実施した。

SH401（図版15　写真図版32）

調査区北端の1Wに位置する竪穴住居である。東側は撹乱のため削平されており、撹乱のない西側部分のみ北側に拡張した。正確な規模は不明であるが南西部に隅が存在することから、一辺4m以上の隅丸方形を呈すると考えられる。床面は検出面から25cmの深さを測る。壁は傾斜しており、壁溝は存在しない。床面の中央部には炉があり、焼土や炭を多量に含んでいる。炉は長径1.8m、短径0.8mである。炉から礫が出土した。遺物は炉から縄文土器の小片が出土した。炉周辺の焼土で森永速男先生に地磁気の分析をして頂いた。炉から出土した炭でAMS年代測定を実施した。

SK413（図版16　写真図版33）

調査区の西端3Wに位置する土坑である。南北40cm、東西35cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。埋土には炭が含まれている。縄文時代後期の土器が出土した。

SK431（図版16　写真図版33）

調査区の西端5Wに位置する土坑である。南北50cm、東西45cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。上層から縄文時代後期の土器がまとまって出土し、サヌカイトの剥片が出土した。

SK526（図版17　写真図版34）

竪穴住居SH401の南西側、1Wに位置する土坑である。南北95cm、東西67cmの楕円形を呈し、深さ7cmを測る。下層から石皿が１個出土した。

SK407（図版17　写真図版34）

2Eに位置する土坑である。直径20cmの円形を呈し、深さ13cmを測る。礫が直立した状態で１個出土した。

SK412（図版17　写真図版35）

2Wに位置する土坑である。直径18cmの円形を呈し、深さ13cmを測る。礫が直立した状態で１個出土した。

SK409（図版17　写真図版36）

2Wに位置する土坑である。南北35cm、東西27cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。礫が直立した状態で１個出土した。

SK506（図版18　写真図版35）

2Wに位置する土坑である。直径22cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。埋土には炭や焼土を含んでい

る。礫が浮いた状態で２個出土し、礫の下および下層から縄文時代後期の浅鉢が出土した。

SK508（図版18　写真図版37）

2Wに位置する土坑である。直径17cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。石製のハンマーが浮いた状態で１個出土した。

SK507（図版18）

2Wに位置する土坑である。南北37cm、東西28cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。割礫が直立した状態で１個出土した。

SK500（図版18　写真図版36）

3Wに位置する土坑である。直径20cmの円形を呈し、深さ6cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土し、下から縄文土器が出土した。石器は石斧が出土した。

SK513（図版18）

3Wに位置する土坑である。直径23cmの円形を呈し、深さ7cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土した。

SK425（図版19）

4Eに位置する土坑である。南北45cm、東西30cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土した。縄文時代後期の土器が出土した。

SK504（図版19）

4Eに位置する土坑である。東西29cm、南北25cmの楕円形を呈し、深さ3cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土した。

SK503（図版19　写真図版37）

4Wに位置する土坑である。東西38cm、南北27cmの楕円形を呈し、深さ12cmを測る。礫が浮いた状態で１個とサヌカイトの剥片が出土した。

SK514（図版19　写真図版37）

4Wに位置する土坑である。東西24cm、南北21cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測る。割礫が浮いた状態で１個出土した。

SK422（図版19）

4Wに位置する土坑である。南北24cm、東西22cmの楕円形を呈し、深さ13cmを測る。礫が３個出土した。

SK436（図版19　写真図版38）

5Eに位置する土坑で、土坑SK437の西側にある。南北32cm、東西27cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。礫が上層で４個出土した。縄文土器の小片が出土した。

SK437（図版19　写真図版38）

5Eに位置する土坑で、土坑SK436の東側にある。直径30cmの円形を呈し、深さ8cmを測る。礫が浮いた状態で４個出土した。縄文土器の小片が出土した。

SK443（図版20）

5Eに位置する土坑である。東西37cm、南北28cmの楕円形を呈し、深さ6cmを測る。割礫が浮いた状態で１個出土した。

SK441（図版20　写真図版38）

5Wに位置する土坑である。直径31cmの円形を呈し、深さ11cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土した。縄文時代後期の深鉢が出土した。

SK515（図版20　写真図版39）

5Wに位置する土坑である。東西1.3m、南北1.2mの隅丸方形を呈し、深さ15cmを測る。南西よりが13cm深くなっており、礫が浮いた状態で２個出土し、うち１個は割礫である。縄文土器の小片が出土した。

SK516（図版21　写真図版39）

6Wに位置する土坑である。直径50cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。礫が浮いた状態で２個出土した。

SK450（図版21　写真図版39）

7Wに位置する土坑である。一辺46cmの隅丸方形を呈し、深さ21cmを測る。埋土に炭や焼土を多量に含み、礫が２個出土し、うち１個は割礫である。縄文時代後期の深鉢が出土した。

SK451（図版21　写真図版40）

7Wに位置する土坑である。東西55cm、南北50cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。埋土は炭を含み、下層から礫が２個と縄文時代後期の深鉢が出土した。

SK457（図版21　写真図版40）

7Wに位置する土坑である。直径27cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。礫が浮いた状態で２個出土した。

SK465（図版21　写真図版40）

7Wに位置する土坑である。直径28cmの円形を呈し、深さ18cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土した。縄文時代後期の土器の小片が出土した。

SK524（図版22　写真図版41）

8Eに位置する土坑である。南北47cm、東西40cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測る。礫が１個出土した。

SK473（図版22　写真図版41）

8Eに位置する土坑である。直径21cmの円形を呈し、深さ9cmを測る。平礫が浮いた状態で１個出土した。

SK483（図版22）

8Eに位置する土坑である。直径28cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土した。

SK474（図版22）

8Wに位置する土坑である。直径42cmの円形を呈し、深さ11cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土した。縄文時代後期の土器の小片が出土した。

SK486（図版22　写真図版41）

調査区東端の9Eに位置する土坑で、土坑SK485の南側にある。東側半分は側溝にかかっているため、西側半分のみである。直径40cm前後、深さ11cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土した。

SK488（図版22　写真図版42）

9Eに位置する土坑である。東西28cm、南北24cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測る。割礫が浮いた状態で１個出土した。

SK490（図版23　写真図版42）

9Eに位置する土坑である。直径18cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。石皿が底付近から１個出土した。

SK492（図版23　写真図版42）

9Eに位置する土坑である。南北40cm、東西31cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。割礫が浮いた状態で１個出土した。

SK498（図版23　写真図版43）

9Wに位置する土坑である。東西30cm、南北25cmの楕円形を呈し、深さ12cmを測る。礫が浮いた状態で１個出土した。縄文時代後期の土器の小片が出土した。

SK472（図版23　写真図版43）

9Wに位置する土坑である。南北53cm、東西42cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。割礫を１個含む礫が重なった状態で４個出土した。

SK521（図版24　写真図版43）

9Wに位置する土坑である。南北52cm、東西43cmの楕円形を呈し、深さ9cmを測る。中央部から礫が１個出土した。

SK523（図版24　写真図版44）

9Wに位置する土坑である。南北65cm、東西60cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。中央部から礫が１個出土した。

SK491（図版24　写真図版44）

10Wに位置する土坑である。東西24cm、南北18cmの楕円形を呈し、深さ13cmを測る。割礫が浮いた状態で１個出土した。縄文時代後期の土器の小片が出土した。

SK522（図版24　写真図版44）

10Eに位置する土坑である。東西25cm、南北21cmの楕円形を呈し、深さ16cmを測る。中央部から小礫が２個出土した。

SK421（図版26　写真図版46）

3Wに位置する土坑である。南北148cm、東西76cmの楕円形を呈し、深さ約15cmを測る。上層の中央部に焼土の塊があり、下層には焼土粒や炭粒が混じっている。

SK429（図版26　写真図版46）

4Wに位置する土坑である。東西69cm、南北41cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。埋土に焼土や炭が含まれている。縄文時代後期の土器の小片とサヌカイトの剥片が出土した。

炭でAMS年代測定を実施した。

SK150（図版26）

4Wに位置する焼土を含む範囲である。直径30cmの範囲に焼土塊が集中している。土坑の存在を想定して検出に努めたが、検出できなかった。

SK130（図版26）

7Eに位置する焼土を含む範囲である。直径45cmの範囲に焼土塊と炭が集中している。土坑の存在を想定して検出に努めたが、検出できなかった。

SK131（図版26）

7Wに位置する南北56cm、東西41cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測る。埋土に焼土や炭が含まれている。

SK428（図版27）

4Wに位置する土坑である。南北56cm、東西41cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測る。埋土に焼土や炭が含まれている。縄文時代後期の土器の小片が出土した。

SK448（図版27）

6Eに位置する土坑である。南北56cm、東西32cmの楕円形を呈し、深さ7cmを測る。埋土に炭が含まれ

ている。縄文時代後期の土器の小片が出土した。

SK530（図版27）

6Eに位置する土坑である。東西90cm、南北75cmの楕円形を呈し、深さ8cmを測る。埋土に焼土が含まれている。

SK531（図版27）

6Wに位置する土坑である。直径36cmの円形を呈し、深さ5cmを測る。埋土に焼土や炭が含まれている。縄文時代後期の土器の小片が出土した。

SK509（図版27　写真図版46）

10Eに位置する土坑である。東西120cm以上、南北111cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。縄文時代後期の土器が出土した。

SK410

2Wに位置する土坑である。直径17cmの円形である。遺物は縄文時代後期の深鉢38が出土した。

SK424

3Wに位置する土坑である。直径36cmの円形である。遺物は縄文時代後期の深鉢39が出土した。

SK433

4WのSK514の南西に位置する土坑である。直径28cmの円形である。礫が１個出土した。遺物は縄文時代後期の深鉢42が出土した。

SK439

6WのSK440の南に位置する土坑である。直径30cmの円形である。遺物は縄文時代後期の深鉢52が出土した。

SK502

7EのSK442の南に位置する土坑である。直径31cmの円形である。遺物は縄文時代後期の深鉢51が出土した。

SK464

7WのSK465の南の壁際に位置する土坑である。南北108cm、東西90cm以上の楕円形を呈する。遺物は縄文時代後期の深鉢53が出土した。

SK158

1WのSD101の下層に位置する土坑である。直径25cmの円形である。凹石が接して２個出土した。

SK417

3Eに位置する土坑である。直径22cmの円形である。礫が１個出土した。

SK434

３WのSK500の東に位置する土坑である。直径34cmの円形である。礫が１個出土した。

SK440

5WのSK431の南に位置する土坑である。南北175cm、東西124cmの楕円形である。礫が１個出土した。

SK445

6EのSK448の南西に位置する土坑である。南北68cm、東西60cmの楕円形である。礫が１個出土した。

４．遺物

SD101（図版28　写真図版47）（１・２）

須恵器椀１・２は口縁部の破片で、外傾する口縁部の端部は肥厚して丸く収めており、重ね焼時の自然釉が付着している。

SB154（図版28　写真図版47）（３～５）

須恵器坏H蓋３～５があり、３・４はP122から、５はP114から出土した。いずれも口縁端部内面に段を作っている。３は口縁部と天井部の境に沈線を巡らし、３・５は天井部を回転ケズリしている。３の内面には置台痕が残る。６世紀後半に位置付けられる。

SD104（図版28　写真図版47）（６）

弥生土器甕６は口縁部の破片で、横方向に大きく開き、口縁端部は上方に拡張している。弥生時代中期後半に位置付けられる。

SD105（図版28　写真図版47）（７）

弥生土器甕７は体部の破片で右上がりのタタキで仕上げている。弥生時代後期後半に位置付けられる。

SD132（図版28　写真図版47）（８）

縄文土器底部８は平底である。下層からの混入の可能性が高い。

撹乱（図版28　写真図版47）（９）

染付磁器９は端反碗で外面に山水画を描き、口縁内面には太い圏線、見込みには島と水辺を描く。19世紀前半の瀬戸の製品である。

上層包含層（図版28　写真図版47）（10～12）

須恵器椀10は底部の破片で、糸切りの平高台である。内面は段を作らない。右回転ロクロである。

弥生中期土器甕11は底部から体部にかけての破片で、体部は縦方向のミガキを行う。SD104付近の遺構を検出する際に出土したことから、本来はSD104に伴う可能性が高い。

羽口12は表面および端部は残存していない。中心部には直径1.2cmの円孔をあけている。

SK449（図版28　写真図版47）（13）

縄文土器深鉢13は波頂の低い３単位の波状口縁で、口唇部にキザミ目を施す。頸部は緩やかに外反し立ち上がる。波頂部直下に３列の爪形文を縦に施文し、頸部下端には爪形文を横に施文している。体部はケズリを行う。底部は小さな平底である。縄文時代晩期に位置付けられる。

SH115（図版29　写真図版48）（14～32）

縄文時代後期の土器が出土している。14・15は外面が肥厚して段を作る口縁部である。口縁部は波状口縁で、円文と対向弧線文を配し、枠状区画文でつなぐ。頸部は無文である。16は外面が肥厚して段を作る口縁部で、口縁部は枠状区画文を施文する。17は外面が肥厚して段を作る口縁部で、１条の横位の沈線文を施文する。18は波状口縁で、外面が肥厚して段を作る口縁部である。１条の横位の沈線文を施文する。19は外面が肥厚して段を作る口縁部で、縦位の連続する沈線文を施文する。20は外面が肥厚して段を作る口縁部で、渦巻文を施文し、縄文を充填する。21は口縁を丸く肥厚させる無文の深鉢で、外面は横方向の条痕後ナデを行う。22は口縁下部の破片で段を作り、沈線文に縄文を充填する。23～26・28～31は体部の破片で浅い弧文を施紋している。27は体部の破片で連続する沈線の「く」文を施文している。32は無文の浅鉢で、内面が肥厚して段を作る口縁部である。

SK506（図版30　写真図版50）（37）

縄文時代後期の土器37は浅鉢で、ほぼ完形である。半球形で、底部は丸底である。口縁部は外面を強くナデて、尖らせる。口縁部と底部を除く外面はRL縄文を施文する。内面はミガキを行っている。

SK410（図版30　写真図版49）（38）

縄文時代後期の土器38は外面が肥厚して段を作る口縁部で、口唇部にRL撚りの縄文を施文する。

SK424（図版30　写真図版49）（39）

縄文時代後期の土器39は外面が肥厚して段を作る口縁部で、対向弧線文の一部が残る。頸部は縦方向の細密条痕で調整する。

SK425（図版30　写真図版49）（40）

縄文時代後期の土器40は耳状突起の一部である。

SK429（図版30　写真図版49）（41）

縄文時代後期の土器41は外面が肥厚して段を作る口縁部で、口縁部は幅広の沈線で幅広の枠状区画文を施文する。

SK433（図版30　写真図版49）（42）

縄文時代後期の土器42はく字状に屈折させた波状の口縁部で、対向弧線文の一部と２条の横位の沈線文が残り、LR撚りの縄文を施文する。

SK413（図版31　写真図版49）（43～48）

縄文時代後期の土器が出土している。43～45は外面が僅かに肥厚して段を作る口縁部で、区画文を施文する。同一個体の可能性が高い。46は屈曲する頸部から体部の破片で、荒いミガキで仕上げる。47は体部の破片で２条以上の弧状の沈線を施文する。48は体部の破片で荒いミガキで仕上げる。

SK441（図版31　写真図版50）（50）

縄文時代後期の土器50は体部の破片で内外とも荒い条痕で調整する。

SK502（図版31　写真図版50）（51）

縄文時代後期の土器51は波頂部の破片で無文である。

SK439（図版31　写真図版50）（52）

縄文時代後期の土器52は体部上半の破片で、頸部との境は明瞭ではない。体部に２条の鈎状沈線を施文する。

SK464（図版31　写真図版50）（53）

縄文時代後期の土器53は外面が肥厚して段を作る口縁部で、磨滅のため詳細は不明である。

SK431（図版32　写真図版50）（54・55）

縄文時代後期の土器54は上半部が残っており、外面が肥厚して段を作る口縁部に頸部から屈曲して大きく膨らむ体部である。口縁部は４単位の波状口縁で、渦巻文と対向弧線文を配し、１条の横位の端刺突沈線文でつなぐ。頸部から体部はナデ仕上げしており無文である。55は底部の破片で平底である。

SK528（図版32　写真図版50）（56）

縄文時代後期の土器56は口縁部から頸部の破片で、口縁部外面を肥厚させて段を作り、１条の横位の沈線を施文し、沈線上部にRL撚りの縄文を施す。頸部は無文でナデを行う。

SK450（図版32　写真図版50）（57～59）

縄文時代後期の土器57は頸部から体部の破片で、１条の沈線で頸部と体部を区画する。頸部は縦方向の細密条痕文で調整し、体部は垂下する複数の沈線を施文し、方向の異なる縄文で充填する。58は頸部から

体部の破片で、横方向のナデを行う。59は口縁部の同心円文の一部である。

SK451（図版32　写真図版50）（60）

縄文時代後期の土器60は頸部の破片で、外面は縦方向、内面は横方向の細密条痕文で仕上げる。

下層包含層（図版30・33～36　写真図版49・51～53）（33～36・61～138）

包含層掘削時や遺構検出時など遺構から遊離した状態で多量の縄文土器が出土している。ここでは、口縁部や底部を中心に、体部の有文の土器をまとめて報告する。

縄文時代後期の土器33は頸部から体部の破片で、頸部は無文部分と垂下する隆帯と沈線を施文する部分が存在し、隆帯の下端は刺突文を付加する。頸体境は頸部の垂下する沈線を横走させる。34は体部の破片で、弧状の沈線を施文する。35は無文の鉢で、横方向の細密条痕で調整する。36は底部で、平底である。

縄文時代後期の土器が出土した。61はく字状に屈折させた波状の口縁部で、貫通孔を中心に同心円文と対向弧線文を施文する。62・63は外面が肥厚して段を作る口縁部で、円形窪みを中心に同心円文と対向弧線文を施文する。64・70はく字状に屈折させた波状の口縁部で、対向弧線文と区画文を施文する。65はく字状に屈折させた波状の口縁部で、対向弧線文の一部が残りRL撚りの縄文を施文する。66は波状の口縁部で、円形窪みを中心に同心円文を施文する。67はく字状に屈折させた波状の口縁部で、隆帯と太い沈線で区画文を作る。68はく字状に屈折させた波状の口縁部で、対向弧線文・弧線文と区画文を施文する。頸部は無文である。69は外面が肥厚して段を作る口縁部で、沈線を施文する。71は外面が肥厚して段を作る口縁部で、対向弧線文と区画文を施文する。72・73・75はく字状に屈折させた波状の口縁部で、対向弧線文の一部が残る。74は外面が肥厚して段を作る口縁部で、対向弧線文の一部が残る。76は外面が肥厚して段を作る口縁部で、横位の２条沈線と縦位の短沈線を施文し、RL撚りの縄文を施す。77はく字状に強く屈折させた口縁部で、横位の２条沈線を施文する。78は外面が肥厚して段を作る口縁部で、区画文を施文する。79は外面が肥厚して段を作る口縁部で、横位の２条沈線を施文する。80～84は外面が肥厚して段を作る口縁部で、横位の１条沈線を施文する。85は外面が肥厚して段を作る口縁部で、横位の１条沈線と弧線文の一部が残る。86は外面が肥厚して段を作り内傾する口縁部で、半円文と対向弧線文を施文する。87は弧線文の一部が残る。89・90は外面が肥厚し、端面にRL撚りの縄文を施す。91は外面が肥厚し段を作り、端面にLR撚りの縄文を施す。92は外面が肥厚し、横位の沈線を施文する。93は外面が肥厚し段を作り、口縁部と頸部は細密条痕で調整する。94は外面が肥厚し段を作り、頸部は条痕で調整する。95は外面が肥厚し段を作るが、磨滅のため不明である。96は内弯する口縁で、無文である。97は隆帯と沈線を施文する。98は波頂部の中心文様で、円形窪みを中心に同心円文を施文する。99は波頂部の中心文様で、円形窪みと刺突を施文する。100は波頂部の中心文様で、深い刺突を中心に対向弧線文を施文し、RL撚りの縄文を施す。101は波頂部の突起である。102・88は内面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、波頂部から内面に縦の隆帯を貼り付け、円形刺突を行っている。隆帯を中心に弧文と短沈線を施文する。103は内面が肥厚して段を作り外反する口縁部で、口縁内面に沈線による斜線文を、体部外面に垂下する沈線を施文する。104は口縁部を外方に屈曲させ、内面に区画文を施文しており、外面に幅の狭い面を作り、RL撚りの縄文を施す。105は口縁部を外方に屈曲させ、内面に短沈線を施文しており、外面に幅の狭い面を作り、RL撚りの縄文を施す。106は体部と口縁部の境が屈折する浅鉢で口縁部は直立する。口縁端部RL撚りの縄文を施し、屈折部外面にヘラ先でキザミを施す。107は曲線的な沈線とRL撚りの縄文を施す。108は曲線的な沈線とLR撚りの縄文を施す。109は縄文地に半裁竹管で施文する。船元Ⅳ式に位置付けられる。110～114・116～119は小片で、沈線を施文する。115はクシ状工具による平行沈線を施文する。120は頸部から体部にかけての破片で頸部は無文で、体部はRL撚りの縄文を施す。121は体部の破片でLR撚りの縄

文を施す。122は体部の破片でRL撚りの縄文を施す。123は頸部から体部にかけての破片で、横位の条痕の後、部分的に縦位の条痕を施す。124は外面が縦位、内面は横位の条痕を施す。125は頸部から体部にかけての破片で、頸部に縦位の条痕を施す。126は頸部から体部にかけての浅鉢で頸部は無文で体部との境にナデで段を作り、体部はRL撚りの縄文を施す。127～137は深鉢底部の破片で平底である。138は深鉢底部の破片で上げ底である。

石器（図版37～39　写真図版54・55）（Ｓ1～Ｓ16）

１区から出土した石器は、打製石器では、石鏃１点・石匙１点・石錐１点・楔形石器１点があり、磨製石器では、石棒１点・石斧１点・石錘２点、磨石１点・凹石２点・ハンマー１点・石皿（砥石を含む）４点があり、合計16点を図化した。

石鏃はすべてサヌカイト製である。形態的な特徴から、縄文時代に属すると推定できる。石匙S12は、つまみ部から下半部を欠損しているが、縦長石匙であった可能性が高い。石棒S16は、長さが55cmを超えるもので、重さは約14.7kgである。表面の風化が激しく、調整の詳細は不明である。石斧S5は、刃部のみで詳細な形態は不明である。石皿と分類したもののほとんどに、中央部にわずかな窪みを残しているので、今回の報告では砥石も含めて、すべてを「石皿」とした。

S1～S8・S15・S16は縄文時代後期の遺構から出土している。他の遺物は、詳細な時期を判別できるものは少ないが、すべてについて、縄文時代の範疇に収まると考えた。

金属製品（図版28　写真図版47）（M1）

M1は頭を叩き延ばして作った角釘である。溝SD101より出土した。

第３節　２区の調査

２区は、１区の南側に町道を挟んで位置し、南側には水路を挟んで３区が存在する。西側は条里地割りの坪境溝の水路が蛇行して走っている。全長48.5m、最大幅18m、調査面積737㎡を測る不定形の調査区である。

平成11年度の発掘調査は上記の範囲の調査を行った。当初調査予定の深さ以下に遺構の存在が明らかになり、当初の予定で調査が行えなかったため、正確な深さと土量を確認して改めて、次年度に調査を行った。調査区の中は図版42に示したように、南北方向に10m単位で区切り、北から１・２・・５とした。東西方向は１区から通しのセンターラインを基準にＥ・Ｗとし、北東の端を1E、北西の端を1Wと呼称した。

平成12年度の発掘調査は、東側の歩道部分の範囲を除いて調査を行うこととした。これにより、全長は平成11年度の調査と変わらないが、幅は東側が3.5m減ったため、最大14.5mとなり、調査面積は567㎡である。調査区の呼称は平成11年度の呼称を踏襲した。

１．遺構の概要と層序（図版40～42）

２区は上層・下層の二面の調査を行った。上層は耕作土直下にある遺構検出面で、標高12.1m前後を測る。時期不明の遺構も存在しているが、主として縄文時代後期・古墳時代初頭・古墳時代後期・中世・近世の遺構を検出した。下層は本来、上層で検出可能な遺構であると考えられるが、土壌化のため検出が困難であったため、20cm前後検出面を下げて遺構検出を行った。縄文時代後期の遺構を検出した。

２．上層の遺構（図版41　写真図版56・58）

上層は、耕作土直下で検出しているため、削平が著しい。南北に走る複数の中・近世の溝と掘立柱建物と古墳時代の掘立柱建物と溝と竪穴住居を検出したほか、一部の縄文時代後期の遺構も検出した。なお、縄文時代後期の遺構は下層の遺構の中で報告する。

SD201（図版43）

調査区西端の1W・2W・3Wに位置し、北から南に流れる溝である。調査区外に延びており、溝SD203・SD206を切っている。幅1.7m以上、深さ70cmを測る。近世唐津焼の皿と鉢が出土した。金属製品は鉄釘と不明鉄器が出土した。

SD202（図版43　写真図版60）

調査区西端の3W・4W・5Wに位置し、北から南に蛇行して流れる溝である。調査区外に延びており、溝SD203・SD204・SD212を切っている。幅4.8m以上を測り、深さ1.2m・0.7m・0.4mで平坦な段になっており、水田形成過程の可能性がある。なお西端の最終段階の土層はSD201からの続きの可能性が高い。遺物は土器類と石器と金属器が出土した。土器は明の青花皿、無釉陶器壺、瀬戸の灰釉陶器皿、白磁碗、古墳時代後期の須恵器甕・壺・高坏、土錘が出土した。石器は楔形石器と石皿が出土した。金属器は鉄釘と鉄滓が出土した。

SD203（図版43　写真図版60）

調査区西半部の1W・2W・3W・4Wに位置し、北から南に蛇行して流れる溝である。調査区外に延びており、溝SD201に切られ、溝SD205を切っている。幅1.1m、深さ15cmを測る。土師器小皿が出土した。

SD204（図版43　写真図版60）

調査区西半部の3W・4Wに位置し、北から南に流れる溝である。溝SD202に切られ、溝SD205・SD214を切っている。幅43cm、深さ5cmを測る。

SD205（図版43　写真図版60）

調査区西半部の1W・2W・3W・4Wに位置し、北から南に直線的に流れる溝である。調査区外に延びており、溝SD203・SD202・SD204に切られ、溝SD205・SD214を切っている。遺物は中世の土師器鍋と須恵器椀、平安時代の土師器皿・椀と須恵器鉢、古墳時代の須恵器坏が出土した。

SD206（図版43　写真図版61）

3W・4W・4E・5Eに位置し、北西から南東に直線的に流れる溝である。調査区外に延びており、溝SD201・SD205・掘立柱建物SB231に切られている。

SD209（図版43　写真図版61）

調査区南西端の5Wに位置し、北西から南東に直線的に流れる溝である。竪穴住居SH207の下で溝SD214と合流している。溝SD212、竪穴住居SH207に切られており、調査区外に延びて３区のSD314に続いている。

SD212（図版43　写真図版60）

調査区南西端の5Wに位置している。溝SD202に切られ、溝SD209・SD214、掘立柱建物600を切っている。規模は不明で、深さは10cmを測る。中世の須恵器と土師器が出土した。

SD214（図版43　写真図版61）

調査区西半部の4W・5Wに位置し、北西から南東に直線的に流れる溝である。竪穴住居SH207の下で溝SD209に合流している。溝SD202・SD203・SD204・SD205・SD212・SD229、竪穴住居SH207に切られ

ている。幅60cm、深さ25cmを測る。

SD229

3W・4Wの溝SD203とSD204間に位置し、切られている。このため幅は不明である。遺物は中世の土師器小皿・坏・椀・鍋・羽釜、須恵器椀が出土した。

SB231（図版44　写真図版62）

調査区中央部3W・3Eに位置する掘立柱建物で、溝SD206を切っている。南北方位をN6°Wにとる総柱建物で、南北２間（4.1m・4.2m）・東西２間（4.6m・4.8m）の規模である。建物の柱間は、南北方向の１間は2.2mと1.9m、東西方向の１間は2.1m～2.5mの規模である。柱穴は円形を基本とし掘形の直径27cm～21cm、柱痕は直径18cm～13cm、深さは25cm～16cmである。

SB232（図版44　写真図版62）

調査区北端1Wに位置する掘立柱建物で、土坑SK281を切っている。南北方位をN14°Wにとる建物で、南北１間（2.8m）・東西２間（3.0m・2.9m）の規模である。建物の柱間は、東西１間1.5mと1.4mである。柱穴は円形を基本とし掘形の直径30cm～45cm、柱痕は直径約20cm～16cm、深さは約33cm～12cmである。

SB600（図版45）

調査区南端5W・5Eに位置する掘立柱建物で、溝SD202・SD212を切っている。南北方位をN25°Wにとる建物で、南北１間（2.9m・2.7m）・東西１間（3.3m・3.2m）以上の規模である。柱穴は円形を基本とし掘形の直径33cm～40cm、柱痕は直径約20cm、深さは約35cm～43cmである。遺構の時期と柱間規模から竪穴住居が削平された後の主柱穴の可能性がある。遺物は柱穴から古墳時代の須恵器と土師器が出土し、P215から出土した須恵器甕を図化した。

SH207（図版45　写真図版62）

２区の南端5W・5Eから調査区を跨いで３区の北端1W・1Eに位置する竪穴住居である。溝SD209・SD214を切っている。中央部分は水路のため調査できなかった。平面形状は方形で、東西7.2m・南北復原7.2mを測る。南北方向の主軸方位をN12°Wにとる。屋内施設は周壁溝と柱穴を検出したのみで、中央土坑や竈など火所は現代水路のため検出できなかった。周壁溝は２区側がかろうじて残存していたが、３区側は削平が著しく検出できなかった。柱穴は４本存在しており、南北方向の柱間は4.0m、東西方向の柱間は3.3mを測る。直径30cm～40cm、深さ58cm～32cmを測る。遺物は柱穴から土師器の小片が出土した。

３．下層の遺構（図版40　写真図版57・59）

下層では縄文時代後期の土坑と掘立柱建物を検出した。このうち、土器や石器などの遺物が出土したものや礫が出土したもの、焼土や炭が多量に含まれていたものを中心に主要なもののみ図面を記載し、詳述する。

SK251（図版46　写真図版67）

4Wに位置する土坑である。南北1.0m、東西84cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。上層の全面に広がる形で縄文時代後期の土器が出土した。小礫が６個出土し、石器は石鏃が出土した。

SK275（図版47　写真図版63）

1Eに位置する土坑である。直径38cmの円形を呈し、深さ35cmを測る。上層から石皿が１個出土した。

SK276（図版47　写真図版63）

1Eに位置する土坑である。南北50cm、東西45cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。下層から割礫が１個出土した。

SK277（図版47）

1Wに位置する土坑である。南北50cm、東西27cmの楕円形を呈し、深さ24cm以上を測る。上層から浮いた状態で礫が１個出土した。

SK282（図版47）

1Wに位置する土坑で、土坑SK283を切っている。東西45cmの円形を呈し、深さ26cm以上を測る。上層から浮いた状態で礫が１個出土した。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

SK269（図版48　写真図版63）

3Wに位置する土坑である。東西45cm、南北44cmの不正円形を呈し、深さ27cmを測る。礫が１個出土した。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

SK606（図版48）

3Wに位置する土坑である。 東西45cm、南北37cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。 遺物は磨石が１個出土した。

SK266（図版48　写真図版64）

3Wに位置する土坑である。直径35cmの円形を呈し、深さ15cmを測る。上層から礫が１個出土した。

SK267（図版49　写真図版64）

3Wに位置する土坑で、土坑SK266の南西にある。南北52cm、東西47cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。上層から浮いた状態で礫が１個と石皿が出土した。

SK255（図版48）

4Eに位置する土坑である。東西38cm、南北33cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。浮いた状態で礫が１個出土した。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

SK264（図版49　写真図版64）

4Eに位置する土坑である。南北55cm、東西50cmの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。上層から礫１個、下層から礫１個の２個が出土した。

SK286（図版49　写真図版65）

4Wに位置する土坑である。直径30cmの円形を呈し、深さ13cmを測る。上層から礫が１個と遺物は石皿が出土した。

SK252（図版49　写真図版65）

5Wに位置する土坑である。南北70cm、東西60cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。埋土に炭と焼土を含み、上層から縄文時代後期の土器が出土した。

SK257（図版50　写真図版65）

4Eに位置する土坑である。直径35cmの円形を呈し、深さ18cmを測る。礫が２個出土した。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

SK258（図版50　写真図版66）

4Eに位置する土坑である。東西77cm、南北56cmの楕円形を呈し、深さ27cmを測る。浮いた状態で割礫が１個出土した。

SK260（図版50　写真図版66）

4Eに位置する土坑である。 南北40cm、 東西31cmの楕円形を呈し、 深さ23cmを測る。 上層から礫が１個出土した。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

SK262（図版50　写真図版66）

4Eに位置する土坑である。南北50cm、東西46cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。割礫が１個出土した。

SK253（図版51　写真図版67）

5Ｅに位置し、土坑と重複関係にある。直径55cmの円形を呈し、深さ38cmを測る。埋土に焼土や炭が多量に混じっており、上層から礫が５個出土した。遺物は縄文時代後期の土器と石鏃が出土した。炭でAMS年代測定を実施した。

SK278（図版52）

調査区北端1Eに位置する土坑で、掘立柱建物SB288のP287に切られている。南北2.2m、東西1.25mの隅丸長方形を呈し、深さ20cmを測る。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

SK279（図版52　写真図版68）

1Wに位置する土坑で、溝SD203の下層にある。南北2.2m、東西1.3mの隅丸長方形を呈し、深さ55cmを測る。北端が一段深くなっており、深さ1.0mを測る。この部分から炭や焼土が出土しており、小礫が２個出土した。ここから出土した炭からAMS年代測定を行った。

SK281（図版52　写真図版68）

1Wに位置する土坑で、土坑SK283を切っている。南北3.5m、東西1.11mの隅丸長方形を呈し、深さ50cmを測る。上層に僅かに炭を含んでいる。礫が１個出土した。遺物は縄文時代後期の土器と石錐が出土した。

SK283（図版52　写真図版68）

1Wに位置する土坑で、土坑SK281・SK282に切られている。直径1.8m前後の楕円形を呈し、深さ40cmを測る。

SK280（図版53　写真図版68）

2Wに位置する土坑である。東西2.6m、南北は南側で1.2m・北側で0.9mの隅丸長方形を呈し、深さ30cmを測る。礫が出土した。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

SK273（図版53　写真図版69）

2Wに位置する土坑で、溝SD201に切られている。南北1.95m、東西1.0m以上の隅丸長方形を呈し、深さ35cmを測る。

SK261（図版53）

4W・4Eに位置する土坑である。東西1.8m、南北1.1mの隅丸長方形を呈し、深さ12cmを測る。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

SB288（図版53　写真図版69）

1Eに位置する掘立柱建物で、土坑SK278に切られている。南北方位をN13°Wにとる建物で、南北２間（1.8m）以上、東西１間（2.6m）以上を測る。南北方向の柱間は0.9mと0.9mである。柱穴は円形を基本とし掘形の直径20cm～23cm、柱痕は直径約12cm、深さは約28cm～45cmである。南西に位置するP287から出土した炭でAMS年代測定を行った。

SK238

2Eに位置する土坑である。直径30cmの円形である。縄文時代後期の土器が出土した。

SK218

4Eに位置する土坑である。南北65cm、東西43cmの楕円形を呈する。縄文時代後期の深鉢とサヌカイト

の剥片が出土した。

SK298

5Eに位置し、SH207の下層に位置する土坑である。直径21cmの円形である。縄文時代後期の深鉢が出土した。

SK223

3Eに位置する土坑である。直径30cm程度の不整円形である。縄文時代後期の土器が出土した。

SK213

5EのSH207の北側に位置する土坑で、直径30cmの円形である。縄文時代後期の土器が出土した。

SK270

3Wに位置する土坑である。南北1.5m、東西1.12mの楕円形を呈する。遺物は石鏃が出土した。

４．遺物

SD205（図版54　写真図版70・72）（139～145）

古墳時代の須恵器坏H139は小振りで器高が低く、立ち上りも短い。底部はヘラ切り未調整である。

土師器皿140は体部から口縁部が外反する。土師器椀141は底部の破片で、糸切りの平高台である。内面は段を作る。右回転ロクロである。須恵器鉢142は底部の破片で、糸切りの平高台である。右回転ロクロである。内面は良く使い込んでいる。須恵器椀143は平底の糸切りで、体部は丸く立ち上がり、沈線を巡らす。土師器鍋144・145は羽釜形で、口縁直下に鍔を貼り付ける。

SD202（図版54　写真図版70）（146～155）

須恵器高坏146は脚部の破片で、四方透かしである。須恵器高坏147は無蓋高坏の脚部で二段の二方透かしである。須恵器壺148は大きく外反する口縁部の破片である。須恵器底部149は小片ではあるが、底面にヘラ描の絵画？が存在している。須恵器甕150は口頸部の破片で、口縁部に段を作っている。白磁碗151は森田分類Ⅱ類で、12世紀前半に位置付けられる。皿152は高台を削り出し、灰釉を掛けている。17世紀の瀬戸の灰釉陶器である。無釉陶器壺153は底部で、外面は赤土部を塗り、内面は露胎である。体部に「○」の窯印が存在する。皿154は露胎の碁笥底で、外面に鋸歯文、内面に草花文を描く。16世紀後半の明の青花である。土錘155は管状土錘で細身である。

SD229（図版54　写真図版71・72）（156～161）

土師器皿156はヘラ切りの平底である。底部の周囲は黒色化している。土師器157は足高の平高台を持つ皿で、底部はヘラ切りである。須恵器椀158は糸切りの低い平高台である。見込みは窪んでいる。内面に黒色物が付着している。土師器椀159は底部を欠いており、体部から口縁部にかけて段を作り大きく開いている。土師器甕160は口縁部の破片で、口縁端部は三角形に仕上げる。土師器鍋161は羽釜形で、口縁直下に上方に向いた鍔を貼り付ける。

SD203（図版54　写真図版71）（162）

土師器皿162は体部を丸く作っており、底部はヘラ切りである。

SB600（図版54　写真図版71）（163）

P215から出土した須恵器甕163は口頸部の破片で、口縁部に段を作る。

SD201（図版54　写真図版71）（164・165）

皿164は底部で高台を作り出している。灰釉を塗り、内面に鉄釉で草花文を描いている。17世紀初頭の絵唐津である。鉢165は内面に白泥で波状の刷毛目を施文している。17世紀後半から18世紀前半の肥前の

刷毛目唐津である。

上層包含層（図版54　写真図版71）（166～168）

土錘166は管状土錘で、中央部が膨らむ。土師器167は足高の平高台を持つ皿で、底部はヘラ切りである。甕168は口頸部の破片で口縁部はＮ字状に作る。中野編年Ｖ期かⅥ期の常滑焼で13世紀前半に位置付けられる。

SK251（図版55・56　写真図版72～74）（169～177）

縄文時代後期の土器が出土している。169は外面が肥厚して段を作る波状口縁の深鉢で、波頂部に渦巻き文を中心に対向弧線文を施文し、１条の端刺突沈線でつなぐ。RL撚りの縄文を施文する。頸部から体部は滑らかに弯曲し、無文である。体部はRL撚りの縄文を施文する。170は外面が肥厚して段を作る平口縁の深鉢で、口縁端部に短沈線を施文する。頸部から体部は滑らかに弯曲し、無文である。171は頸部下端以下が残る深鉢で、底部は平底で体部は肩が膨らむ。頸部は無文で体部は細かいRL撚りの縄文を施文する。172は浅鉢で頸部がくびれ、体部が膨らむ。体部はRL撚りの縄文を施文する。173～176は波状口縁の口頸部の破片で口縁部は内外に拡張し、端部に間隔の狭い区画文を施文する。頸部は無文である。胎土などから同一個体の可能性が高い。177は頸部から体部の破片で、頸部は無文である。体部は曲線的な多重沈線を施文する。

SK252（図版56　写真図版74）（178）

縄文土器深鉢178は口縁部が屈折する波状口縁である。波頂部に渦巻文を施文し両側に対向弧線文を施文し、２条沈線でつなぐ。RL撚りの縄文を施文する。頸部は無文である。

SK238（図版56　写真図版74）（179）

縄文時代後期の土器179は外面が肥厚して段を作る口縁部で、対向弧線文の一部が残る。

SK298（図版56　写真図版74）（180）

縄文時代後期の土器180はく字状に屈折する口縁で口縁端部に短沈線を施文する。

SK218（図版56　写真図版74）（181・182）

縄文時代後期の土器181は外面が肥厚して段を作る口縁部で、横方向の沈線を施文する。182は外傾する口縁部で、外面は植物質の痕跡が残る調整を行い、内面はナデを行う。

SK223（図版56　写真図版74）（183）

縄文時代後期の土器183は深鉢底部の破片で平底である。

SK213（図版56　写真図版74）（184）

縄文時代後期の土器184は深鉢底部の破片で平底である。

SK253（図版56　写真図版74）（185）

縄文時代後期の土器185は深鉢底部の破片で平底である。

下層包含層（図版57　写真図版74）（186～196）

包含層掘削時や遺構検出時など遺構から遊離した状態で多量の縄文土器が出土している。ここでは、口縁部や底部を中心に、体部の有文の土器をまとめて報告する。

縄文時代後期の土器が出土した。186は波頂口縁に発達した突起を有する。頂部および側面を耳状に作っている。外面は斜行沈線を施文している。187・188は外面が肥厚して段を作る口縁部で、弧線文を施文する。189・190は外面が肥厚して段を作る口縁部で、２条沈線を施文する。191は外面が肥厚して段を作る口縁部で、横方向の沈線を施文し、下端にRL撚りの縄文を施文する。192は口縁部が内外に肥厚し、端部に区画文を施文する。193は体部の破片で、沈線の渦巻文を施文している。194は体部の破片で、RL撚り

の縄文を施文する。195は頸部から体部の破片で、頸部は無文である。体部は曲線的な沈線を施文する。196は深鉢底部の破片で平底である。

石器（図版58・59　写真図版75）（Ｓ17～Ｓ27）

２区から出土した石器は、打製石器では、石鏃４点・石錐１点・楔形石器１点があり、磨製石器では、磨石１点、石皿４点がある。合計11点を図化した。石鏃はすべてサヌカイト製である。形態的な特徴から、すべて縄文時代に属すると推定できる。石皿と分類したもののほとんどは、中央部にわずかな窪みを残しているので、今回の報告では砥石も含めてすべてを「石皿」とした。

S17～S20・S23～S25・S27は縄文時代後期の遺構から出土している。ほかの遺物は、詳細な時期を判別できるものは少ないが、すべてについて、縄文時代の範疇に収まると考えた。

金属製品（図版58　写真図版75）（M2～M7）

M2～M4はいずれも角釘の一部であり、M2・M4は溝SD201から、M3は溝SD202から出土した。M5・M7は鉄滓であり、M5は溝SD202から、M7は溝SD201から出土した。M6は棒状の鉄製品で詳細は不明である。

第４節　３区の調査

３区は、今回調査を実施したうち最も南側に位置する調査区で、２区の町道を挟んで南側に位置する。南側には町道が走っており、西側は条里地割りの坪境溝の水路が走っている。全長47m、幅13.5m、調査面積622㎡を測る長方形の調査区である。

平成11年度の発掘調査は上記の範囲の調査を行った。当初調査予定の深さ以下に遺構の存在が明らかになり、当初の予定で調査が行えなかったため、正確な深さと土量を確認して改めて、次年度に調査を行った。調査区の中は図版63に示したように、南北方向に10m単位で区切り、北から１・２・・５とした。東西方向は１区から通しのセンターラインを基準にＥ・Ｗとし、北東の端を1E、北西の端を1Wと呼称した。平成12年度の発掘調査は、東側の歩道部分の範囲を除いて調査を行うこととした。これにより、全長は平成11年度の調査と変わらないが、幅は東側が3.5m減ったため、10mとなり、調査面積は457㎡である。調査区の呼称は平成11年度の呼称を踏襲した。

１．遺構の概要と層序（図版60～63）

３区は上層・中層・下層の三面の調査を行った。上層は耕作土直下にある遺構検出面で、標高11.9m前後を測る。時期不明の遺構も存在しているが、主として古墳時代初頭・中世・近世の遺構を検出した。中層は約20cmの極細砂を挟んだ、標高11.7m前後で検出したが、北端は堆積がないため上層とほぼ同じ面が検出面である。弥生時代前期末・弥生時代中期の遺構を検出した。下層は約30cmの極細砂を挟んだ、標高11.4m前後で検出したが、北端は堆積がないため上層とほぼ同じ面が検出面である。縄文時代後期の遺構を検出した。

２．上層の遺構（図版61　写真図版76・79）

上層は耕作土直下にある遺構検出面で、近世・中世・古墳時代初頭の遺構を検出した。

SK302（図版65　写真図版83）

調査区北端1Wに位置し、一部調査区外に延びている土坑である。直径1.6m程度の円形に復原できる。

ほぼ垂直に掘り込んでおり、深さは安全面の都合で1.65mまでしか掘削できなかった。遺物は近世の磁器・陶器・土師器・瓦が中心で、中世須恵器椀が少量出土した。江戸時代の井戸の可能性がある。第２層から出土した炭片でAMS年代測定を実施した。

SK305（図版65）

3Wに位置し、溝SD308を切る土坑である。南北68cm、東西30cmで、南西部に張り出しが付く。深さは7cmを測る。遺物は平安時代の黒色土器椀が少量出土した。

SK301（図版65　写真図版83）

3E・4Eに位置し、溝SD310を切る土坑である。東西方向に軸をもち、全長1.9m・幅75cmの隅丸長方形を呈する。最大深さは15cmである。主軸方位をN81°Eにとる。西側よりのやや浮いた面で自然石が出土した。遺物は中世の土師器が出土した。形状と規模から土坑墓の可能性が高い。

SD303（図版64　写真図版81）

1W・2W・4W・5Wに位置し、南北に走る溝である。溝SD308・SD310を切っている。3Wでは溝の重複が著しく、検出できなかった。北側では幅1.4m前後、深さ10cm、南側では幅最大2.7mを測る。
遺物は古墳時代後期の須恵器坏・甕、古代の須恵器坏、土師器甕が中心で、弥生土器甕と縄文土器が少量出土した。石器は楔形石器が出土した。

SD304（図版64　写真図版81）

3W・4Wに位置し、東西方向に斜行する溝である。溝SD308を切り、溝SD307に切られている。幅45cm、深さ8cmを測る。遺物は中世須恵器椀が出土した。

SD306（図版64　写真図版80）

3Wに位置し、南北に走る溝である。溝SD308を切っている。最大幅60cm、深さ5cmを測る。
遺物は黒色土器椀が出土した。

SD307（図版64　写真図版80）

4W・5Wに位置し、南北に走る溝である。西側は調査区外に延びているため、規模は不明である。幅1.9m以上、深さは85cmを測る。遺物は中世の須恵器椀・甕、土師器鍋が中心で、古墳時代後期の須恵器坏が少量出土した。石器は削器が出土した。

SD308（図版64　写真図版84）

1W・2W・3W・4W・4E・5Eを緩やかに蛇行しながら南流する流路である。溝SD310を切り、溝SD312・SD303・SD304・SD306に切られている。下層の溝SD351がほぼ同じ場所を流れている。中央部分では幅1.9m前後、深さ30cmを測る。南東端では幅4m以上を測り、深さ30cmを測る。遺物は壺・甕・高坏・鉢・器台・小型丸底壺・小型器台・山陰型甑などの古墳時代初頭の土師器が中心で、縄文土器が僅かに出土した。石器は石鏃とサヌカイトの剥片が出土した。金属器は鉈が出土した。

SD309（図版64　写真図版82）

1E・2E・3E・4Eに位置し、南北に緩やかに蛇行する溝である。一部検出できなかった部分も存在する。上流は溝SD314から分岐し、下流で溝SD310と合流しており、溝SD313に切られている。幅45cm、深さ8cmを測る。

SD310（図版64　写真図版82）

1W・2W・3W・4W・4E・5Eに位置し、北西から南東に斜行する溝である。溝SD312・SD303・SD313・SD308、土坑SK301に切られている。4Eで溝SD309と合流している。幅80cm、深さ13cmを測る。

SD312（図版64　写真図版80）

1W・2Wに位置し、北から南に流れる溝である。溝SD310・SD308を切っている。幅20cm、深さ7cmを測る。遺物は古墳時代後期の須恵器甕と縄文土器が少量出土した。

SD313（図版64　写真図版81）

3W・3E・4Eに位置し、北西から南東に斜行する溝で調査区外に延びている。溝SD310・SD309を切っている。幅1.4m以上、深さ10cmを測る。

SD314（図版64　写真図版82）

1Eに位置し、北西から南東に斜行する溝で、SD309と分流する。２区の溝SD209から続いており、同一の溝である。幅55cm、深さ20cmを測る。

３．中層の遺構（図版60　写真図版77・85）

中層は北部に東西に走る溝SD353と南北に走る溝SD357が存在し、南部には北西から南東に走る溝SD351が存在し、中央部にはSD352が存在している。周囲には土坑が僅かに存在している。

SK331（図版66　写真図版86）

5Wの溝SD308の下層に位置し、溝SD351を切る土坑である。したがって溝SD351が完全に埋まった後に作られた遺構である。南北1.05m、東西86cmの楕円形で、検出面からの深さは16cmを測る。埋土には焼土粒と炭片が多量に含まれている。北端で長さ37cmの礫を検出した。遺物は弥生時代中期の土器壺と甕が出土した。

SD351（図版66　写真図版87）

3W・3E・4W・4E・5Eに位置し、北西から南東に斜行する流路で、調査区外に延びている。上層の同じ場所には溝SD308・SD303などがあり、溝SD307と土坑SK331に切られている。幅4m～7m、深さ1m前後を測る。埋土は灰白色の砂系で、下層には礫が堆積している。

遺物は弥生時代中期の壺・甕、中期初頭の壺・甕、縄文土器が出土した。石器は石鏃・削器・楔形石器・石皿・加工痕剥片が出土した。

SD352（図版66　写真図版88）

3W・3Eに位置し、北西から南東に斜行する直線的な溝で、調査区外に延びている。土坑SK354に切られている。北から西に約66°振る。幅80cm、深さ30cmで、断面形は逆台形である。埋土には炭と焼土を含んでいる。遺物は弥生時代中期の壺・甕、中期初頭の壺・甕、縄文土器が出土した。

SD353（図版66　写真図版86）

2W・2E・3Wに位置し、下層の溝SD361とほぼ重複して切っている東西方向の溝である。断面形は台形で、幅5.5m、深さ1.1mである。中層の埋土は炭粒が含まれるにぶい黄褐色極細砂～粗砂で、下層には礫が含まれている。遺物は弥生時代前期壺と弥生時代中期初頭の壺・甕、中期中葉の壺・甕が出土した。石器は楔形石器が出土した。

SD357（図版66　写真図版88）

1W・2Wに位置し、北西から南東に斜行する溝である。幅1.1cm、深さ13cmである。遺物は縄文土器が出土したが、下層からの混入であろう。

４．下層の遺構（図版62　写真図版78・89）

下層の遺構面は北から南に向かって傾斜しており、北端は中層以上の整地で削平されている。北部には

東西に走る流路SD361が存在し、周囲に土坑が存在している。SD361や南半分の多くの部分は、中層の溝などにより影響を受けている場所が多い。

SD361（図版62）

1W・1E・2E・2Wに位置し、中層の溝SD353とほぼ重複して切られている東西方向の流路である。３区北端から自然に傾斜しているため、幅は明瞭ではないが、約17mを測る。深さは、最深部が中層の溝SD353によって抉られているため、不明であるが60cm程度と浅い。埋土は炭粒や焼土粒が混じった暗褐色極細砂である。遺物は縄文時代後期の土器の破片が多量に出土した。石器は石鏃・石錘・加工痕剥片・剥片が出土した。

SK371（図版67　写真図版90）

調査区の北西端1Wに位置する土坑である。直径30cmの円形で、検出面からの深さは8cmを測る。中央部に礫が１個入っている。遺物は出土していない。

SK375（図版67　写真図版90）

調査区の西端2Wに位置する土坑である。長径90cm、短径70cmの南北に長い楕円形で、検出面からの深さは10cmを測る。北端に礫が入っている。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

SK373（図版67）

調査区の北東端1Eに位置する土坑である。長径1.4m、短径1.1mの東西に長い楕円形で、検出面からの深さは45cmを測る。東端に段が存在する。遺物は縄文時代後期の土器が出土した。

５．遺物

SD307（図版68　写真図版91）（197～201）

須恵器椀197・198、緑釉陶器椀199、土師器鍋200・201がある。須恵器椀197・198は197が口縁部の破片、198が底部の破片である。197は体部が丸く、口縁部は外反する。198は糸切りの平高台である。緑釉陶器椀199は底部の破片で橙色の胎土で三角形の高台を貼り付ける。外面に僅かに緑色の釉が残る。土師器鍋200・201は退化した羽釜形を呈する。200は口縁部を横ナデし、体部は平行タタキで仕上げる。口縁部内面にコゲが存在する。201は口縁部を横ナデし、体部は格子タタキで仕上げる。

SD303（図版68　写真図版91）（202・203）

須恵器坏A202は体部が丸く、底部はヘラ切り未調整である。右回転ロクロである。須恵器坏A203は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、底部はヘラ切り後ナデを行う。右回転ロクロである。

SD304（図版68　写真図版91）（204）

須恵器椀204は口縁部の破片である。端部は肥厚し丸みを帯びる。

SD306（図版68　写真図版91）（205）

黒色土器椀205は全面を黒色化し、口縁内直下に沈線を巡らす。内外とも横方向のミガキを行う。

SK331（図版68　写真図版91）（206～208）

弥生土器壺206は体下半部で、外面は最大径部に列点文を巡らし、下半は縦位のミガキを行う。内面はハケ調整の後、下部はケズリを行う。弥生土器甕207・208はく字状口縁甕で、207は口縁端部を上方に拡張させ、沈線を巡らす。208は外面をハケ調整し、下半を縦位のミガキを行う。内面はハケ調整の後、下部のみ縦位のケズリを行う。

SD353（図版68・69　写真図版92・93）（209～227）

弥生土器壺212は頸体境の破片で、ヘラ描沈線を５条巡らす。内面は火回り不良の黒斑が存在する。弥

生時代前期に位置付けられる。

弥生土器広口壺は209～211・214～216があり、209～211は口縁部の破片である。209・211は口縁端部にヘラ描沈線を巡らし、キザミを加える。211の内面には７条以上のヘラ描沈線を巡らす。210は口縁部内面に３条のヘラ描沈線を巡らし、ヘラ先の三角列点文を充填する。紐穴が存在する。214は頸部から大きく外反する口縁部の端部にキザミを付ける。頸部には２条のキザミ目突帯を貼り付け、以下は縦方向のハケ調整を行う。215は大きく外傾する口縁部の端部にキザミを付ける。216は外反する口頸部の頸部に突帯を貼り付ける。

弥生土器甕は213・217～222があり、213は体部上半の破片で７条以上のヘラ描沈線を巡らし、最下端に刺突を行う。外反口縁甕217は口縁端部にキザミを加え、口縁直下に間隔が開いたヘラ描沈線を２条巡らす。逆Ｌ口縁甕218～220は218が体部上半にクシ描直線文を２帯以上施文している。219・220は無文である。221は底部で厚い上げ底である。体部はハケ調整を行う。底部側面に接地黒斑が存在する。222は平底から直線的に外傾する体部で縦方向のハケ調整を行う。底部は未調整である。底部側面に接地黒斑が存在する。209～211・213～222は弥生時代中期初頭に位置付けられる。

弥生土器壺224・225は224が広口壺の体部上半から口頸部であり、225が底部である。224は体部から外反する口頸部を作り、ハケ調整の後、体部上半にクシ描直線を施文する。225は平底から大きく外傾する体部で縦方向のミガキを行う。弥生土器甕223・226・227は226・227が口縁部であり、223が底部である。226は外方に屈折する口縁である。227はく字状口縁甕で、体部は内外ともに縦方向のハケ調整である。外面にススが付着している。223は上げ底で焼成後に穿孔している。体部は縦方向のミガキである。底部側面に接地黒斑が存在する。223～227は弥生時代中期中葉に位置付けられる。

SD351（図版69　写真図版93・94）（228～237）

弥生土器広口壺228は口縁部が大きく開き、口縁端部を上下に大きく拡張させ、端部に波状押圧を加えている。弥生土器甕229は逆Ｌ口縁甕の口縁部で、口縁端部にはキザミを加え、口縁直下には５条以上のヘラ描沈線を巡らす。228・229は弥生時代中期初頭に位置付けられる。

弥生土器壺は230～232がある。230は広口壺の口縁部から体部上半の破片で、短く外反する口頸部を持つ。口縁端部は拡張しキザミを加える。体部上半はクシ描の直線文と波状文を施文する。231は体部の破片で、体部上半はクシ描の直線文と波状文を施文し、下端に列点文を施文する。下半は横位と縦位のミガキで調整する。232は平底で、体部は縦位のミガキを行う。弥生土器水差233は下膨れの体部に短く直立する口縁部が付く。体部上半に嵌め込み式の半環状把手が付く。断面は円形である。弥生土器無頸壺蓋234は体部から口縁部にかけて直線的に開く。外面はハケのちミガキ、内面はケズリを行う。

弥生土器鉢235はく字状に屈折する口縁で、口縁端部は上方に拡張する。体部は内外ともハケ調整である。弥生土器甕は236が口縁部、237が底部である。底部に接地黒斑が存在する。236はく字状口縁甕で体部は縦位のハケ調整を行う。237は平底で体部は縦位のミガキを行う。230～237は弥生時代中期中葉に位置付けられる。

SD308（図版70・71　写真図版94～97）（238～278）

土師器広口壺は238～240・242・243・272がある。238は体部から外反する口頸部である。無文で口縁内面に黒斑が存在する。239は体部から直立気味に外反する口頸部で、口縁端部は面を作る。外面はハケ調整を行う。240は体部から短く屈曲する口頸部で、口縁端部は下方に拡張して面を作る。体部上半は球形で、内面には粘土紐の接合痕跡が残る。体部上半に覆接触黒斑がある。242は頸部が直立し、口縁部が直線的に外傾する。肩部は大きく張る。243は大きく開く口縁部で、口縁端部は上下に拡張して面を作り、

軸が振るクシ描波状文を施文する。272は口縁部の破片で拡張した口縁端部に２条の凹線が巡る。土師器直口壺は244・245・251があり、244は直線的に開く口頸部を持つ。体部はタタキで仕上げており、245の平底気味の底部と同一個体と考えられる。底部側面に接地黒斑がある。251は頸部をタタキで仕上げる。土師器壺体部241はヘラによる記号が存在する。土師器二重口縁壺は246～248があり、頸部から口縁部が屈折して外反する二重口縁である。246の口縁部には擬凹線を施す。土師器中型直口壺は249・250があり、249は直立する口縁である。250は球形の体部に小さい上げ底の底部を作る。口縁部は内弯しながら外方に立ち上がる。丁寧にミガキを行う。肩部に覆接触黒斑があり、対応する内面下半に熾溜黒斑があるが、接地黒斑は存在しない。

土師器甕255～257は庄内形甕で、く字状に屈折する口縁部の端部を上方に摘み上げる。体部は外面を細かいタタキで仕上げ、内面は薄く削る。257は球形の体部に僅かに底部を意識している。外面は細かいタタキ後、下半部はハケ調整で仕上げる。土師器甕258～261は複合口縁甕であり、258は丸底で球形の体部に短い複合口縁が付く。外面はハケ調整、内面はケズリを行い仕上げている。胎土に角閃石を多量に含む。259～261は頸部から口縁部が屈折して直立する複合口縁である。土師器甕262は体部から口縁部が屈折して口縁端部に上方に拡張する幅広の面を作る。土師器甕263は口縁部がく字状に屈曲するタタキ甕と考えられ、口縁端部に面を作る。土師器甕264・265は口縁部がく字状に短く屈曲し、体部内面は指オサエの痕跡が残る。讃岐の胎土である。

土師器甕266は布留形甕で、口縁部がく字状に屈折して内弯し、端部が内側に肥厚し面を作る。

土師器鉢267は小型で低い脚台を手づくねで作る。土師器有稜高坏268・269は、口縁部が268は大きく外反し、269は直立気味に立ち上がる。土師器脚270・271は、270が大型で荒い胎土であり、271が小型で精良な胎土である。270は内面をケズリ、271は透孔がある。土師器器台273は受け部が大きく開き、口縁部が屈折して上方に立ち上がる。土師器小型器台274は受け部が大きく開く。土師器小型丸底壺275～277は小さな体部に大きく外傾する口縁部が付く。土師器山陰型甑278は胎土や調整などから同一と考えられる破片から復原した。底部は直立気味で体部から口縁部にかけて直線的に開く。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。上部と下部に一対の縦位の把手を嵌め込む。

SD361（図版72～75　写真図版98・99）（279～350・352）

縄文時代後期の土器が出土している。279は波頂部周辺の円形窪み文である。280はく字状に屈折する口縁で、２条の沈線を施文する。281はく字状に屈折する波状の口縁部で、弧線文と２条の沈線を施文する。282は波頂部中心の円形窪み文である。283は外面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、低い波頂部に対向弧線文を施文する。284は波頂部に縦位の隆帯を貼り付け、竹管を刺突しており、脇に沈線で区画文を施文する。285は波頂部の耳状突起の一部である。286・287は外面が肥厚して段を作る口縁部で、端沈線を施文する。288・289は外面が肥厚して段を作る口縁部で、端沈線と区画文を施文し、RL撚りの縄文を施す。290は外面が肥厚して段を作る口縁部で、区画文を施文する。291は外面が肥厚して面を作る口縁部で、２条の沈線を施文し、RL撚りの縄文を施す。292・293は外面が肥厚して面を作る口縁部で、１条以上の沈線を施文する。294～296は外面が肥厚して面を作る口縁部で、２条の沈線を施文する。297は外面が肥厚して面を作る口縁部で、RL撚りの縄文を施す。298は外面が肥厚して面を作る口縁部で、無文である。299は外傾し、僅かに端部が肥厚する波状口縁で、波頂部の刺突文を中心に１条の沈線を施文する。300は内面を肥厚させ、２条の沈線を施文する。301は外面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、弧線文を施文する。302は外方に屈折し内面に面を持つ浅鉢でクシ状工具による条線を施文する。303は内弯する浅鉢で無文である。304は外面が肥厚して段を作る口縁部で、１条以上の沈線を施文する。305は波頂部中心の円

形窪み文の一部である。306は縦方向の２条の沈線にLR撚りの縄文を充填する。307・308は縦方向の条痕を施する。309は縦のち横方向の条痕を施する。310は縦方向の細密条痕を施している。311は体部の破片でRL撚りの縄文を施する。312は把手の一部と考えられ、幅の細い区画文を施文する。313～318は底部の破片で平底である。

319・320はく字状に強く屈折する口縁部で、区画文を施文する。321・337は外面が肥厚して面を作る口縁部で、横位の２条沈線を施文する。322・340は外面が肥厚して面を作る口縁部で、１条沈線を施文する。323・335・338はく字状に強く屈折する口縁部で、横位の２条沈線を施文する。324はく字状に屈折する口縁部で、２条の沈線を施文し、RL撚りの縄文を施す。325は口縁部で、区画文を施文し、RL撚りの縄文を施す。326はく字状に屈折する波状の口縁部で、渦巻文と弧線文と区画文を施文する。327は外面が肥厚して段を作る口縁部で、楕円形窪みを中心に対向弧線文を施文する。328は波頂部の中心文様で、同心円文の一部である。329は外面が肥厚して段を作る口縁部で、円形刺突を中心に同心円文と対向弧線文を施文し、RL撚りの縄文を施す。330は波頂部の中心文様で、貫通孔を中心に渦巻文を施文する。331は外面が肥厚して段を作る口縁部で、円形窪みを中心に同心円文と弧線文を施文する。332は弧線文の一部である。333はく字状に外方に屈折する口縁部で、貫通孔が存在する。334はく字状に強く屈折する口縁部で、横位の幅広の区画文を施文する。336は波状の口縁部で、横位の２条沈線を施文する。339はく字状に屈折する口縁部で、短沈線と区画文を施文し、RL撚りの縄文を施す。341は口縁部で、２条の沈線を施文する。

342・343は口縁部で、短沈線と区画文を施文す。344は体部の破片で沈線を施文する。345は外面が肥厚して面を作る口縁部で、LR撚りの縄文を施す。346は外面が肥厚して面を作る口縁部で、無文である。347は直立する口縁部で、無文である。348・350は外傾する浅鉢の口縁部で無文である。349は外傾する浅鉢の口縁部で、外面が肥厚して面を作り無文である。352は体部の破片で４条のクシ状工具により、入組み条線を施文している。

SK373（図版75　写真図版100）（351）

縄文時代後期の土器351は体部の破片で縦方向の条痕を施す。

上層SD308・SD310（図版75　写真図版100）（353～363）

上層のSD308とSD310の遺構中から出土した縄文時代後期の土器を説明する。353はく字状に屈折する波状の口縁部で、貫通孔を中心に同心円文と対向弧線文を施文する。354はく字状に屈折する波状の口縁部で、渦巻文を施文する。355は外面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、区画文を施文する。356・357は外面が肥厚して段を作る口縁部で、幅広の沈線で区画文を施文する。358は外面が肥厚して段を作る口縁部で、１条沈線を施文する。359は外面が肥厚して面を作る口縁部で、磨滅が著しい。360は外面が肥厚して面を作る口縁部で、無文である。361は波頂部の中心文様で、貫通孔を中心に同心円文を施文する。362は内面が肥厚して面を作る口縁部で、短沈線を施文する。363は内面が肥厚して面を作る口縁部で、斜行沈線を施文する。

SD357（図版75　写真図版100）（364）

縄文時代後期の土器364は内弯する口縁部で、２条沈線を施文する。

下層包含層６層（図版76・77　写真図版100・101）（365～401）

縄文時代後期の土器が出土した。365は波状の口縁部で、円形窪みを中心に同心円文と弧線文を施文し、LR撚りの縄文を施す。366はく字状に屈折する波状の口縁部で、蕨手文と弧線文を施文する。367は口縁部で、渦巻文を施文する。368は口縁部で、円形窪みを中心に同心円文を施文する。369は外面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、同心円文と弧線文を施文する。370はく字状に屈折する波状の口縁部で、弧線

文と区画文を施文する。371は外面が肥厚して段を作る口縁部で、鈎状文を施文する。372は口縁部で、区画文を施文し、RL撚りの縄文を施す。373はく字状に屈折する口縁部で、２条沈線を施文する。374は外面が肥厚して段を作る口縁部で、区画文を施文する。頸部は細密条痕を施す。375は外面が肥厚して段を作る口縁部で、弧線文を施文する。376は口縁部で、端刺突沈線を施文する。377は外面が肥厚して面を作る口縁部で、区画文を施文する。378はく字状に屈折する口縁部で、２条沈線を施文する。379・380は外面が肥厚して段を作る口縁部で、１条以上の沈線を施文する。381は外面が肥厚して段を作る口縁部で、区画文を施文する。382は外面が肥厚して段を作る口縁部で、１条以上の沈線を施文し、RL撚りの縄文を施す。383は外面が肥厚して段を作る口縁部で、RL撚りの縄文を施す。384～386は外面が肥厚して段を作る口縁部で、無文である。387は外面が肥厚して面を作る口縁部で、短沈線と区画文を施文し、RL撚りの縄文を施す。388は外面が肥厚して面を作る口縁部で、２条の沈線を施文する。389は外面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、区画文を施文する。390は内面が肥厚して段を作る口縁部で、内面に２条の沈線を施文する。391は頸部から体部の破片で境に沈線を巡らし、体部は多条沈線を施文する。392・393・396～398は体部の破片で沈線を施文する。394・395は体部の破片で平行沈線を施文する。399は内弯する口縁部で無文である。400は平底の底部である。401は上げ底の底部である。体部は条痕文で調整する。

下層包含層７層（図版78・79　写真図版101・102）（402～437）

縄文時代後期の土器が出土した。402は外面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、３条の沈線を施文する。403・405は外面が肥厚して段を作る口縁部で、２条の沈線を施文する。404・409はく字状に屈折する口縁で、２条の沈線を施文する。406は外面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、２条の沈線を施文する。407・408・417は外面が肥厚して面を作る口縁部で、区画文を施文する。410は外面が肥厚して面を作る浅鉢で、短沈線と横位の沈線を施文する。411は外面が肥厚して面を作る口縁部で、横位の沈線を施文し、RL撚りの縄文を施す。412・413・418は外面が肥厚して面を作る口縁部で、横位の沈線を１本以上施文する。414はく字状に屈折する口縁で、弧線文を施文する。415・416は外面が肥厚して面を作る口縁部で、短沈線を施文する。419は内弯する口縁部に蕨手状沈線を施文し、RL撚りの縄文を施す。420は外面が肥厚して段を作る口縁部で、RL撚りの縄文を施す。

421～423は外面が肥厚して内弯する口縁部で、無文である。424・425は外面が肥厚して段を作る口縁部で、無文である。426は波状口縁の波頂部の破片である。427は外面が肥厚して面を作る口縁部で、LR撚りの縄文を施す。428は体部の破片でLR撚りの縄文を施す。429～431は内弯する口縁部で無文である。432は断面が扁平な注口である。433・434は底部で平底である。435～437は底部でやや上げ底である。

下層包含層（図版79　写真図版102）（438～441）

縄文時代後期の土器が出土した。438は外面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、渦巻文を施文する。439は内弯する口縁部で、横位の２条沈線を施文する。440は外面が肥厚して段を作る口縁部で、横位の２条沈線を施文する。441は外面が肥厚して段を作る口縁部で、無文である。

石器（図版80・81　写真図版103）（Ｓ28～Ｓ46・Ｓ51）

３区から出土した石器は、打製石器では、石鏃７点（Ｓ51は写真のみ）・削器２点・楔形石器５点、加工痕（のある）剥片４点があり、磨製石器では、石錘１点・石皿（砥石を含む）１点があり、合計19点（S28～S46）を図化した。

石鏃はすべてサヌカイト製である。形態的な特徴から、すべて縄文時代に属すると推定できる。削器２点のうち、１点（S46）は打製石包丁で、表裏面とも使用による摩滅痕跡を残している。楔形石器のうち、S41も表裏に使用による摩滅痕跡を残す。加工痕剥片のうち、１点（S45）は島根県隠岐産と推定で

きる黒曜石を素材としている。石錘S38は切目石錘で、形態から縄文時代後期に属するものであろう。石皿は中央部にわずかな窪みを残しているので、今回の報告では砥石も含めてすべてを「石皿」とした。

S38・S39・S51は縄文時代後期の遺構、S46は弥生時代中期の遺構から出土している。ほかの遺物は、詳細な時期を判別できるものは少ないが、すべて縄文時代の範疇に収まると考えた。

金属製品（図版68　写真図版91）（M8）

M8は鉄製の鉈で、錆化が著しく先端が残っていないが、左右対称のため鉈と判断した。溝SD308から出土した。

第５節　４区の調査

４区は、今回調査を実施したうち最も北側に位置する調査区で、５区の北側に位置する。４区と５区は、高圧線の埋設により分割されている。北側には旧西国街道が走っており、道路の北側は鵤石田遺跡である。西側は条里地割りの坪境溝の水路が走っている。全長64m、最大幅12m、調査面積704㎡を測る長方形の調査区である。

１．遺構の概要と層序（図版82）

４区は上層・下層の二面の調査を行った。上層は耕作土直下にある遺構検出面で、標高12.7m前後を測る。時期不明の遺構も存在しているが、主として古墳時代初頭・中世・近世の遺構を検出した。

上層で検出した遺構は、掘立柱建物SB813、中世の溝SD801、柱穴などである。調査区東側には、近年まで操業されたと考えられる瓦窯があり、そのため調査区内には、粘土採掘抗と考えられる撹乱が数多く見つかった。この後世の改変で遺跡も大きく削平を受けており、遺構の残存状況は大変悪く、包含層もほとんど残存していなかった。

下層は約20cmの極細砂を挟んだ、標高12.5m前後で検出したが、本来は上層とほぼ同じ面が検出面である。下層で検出した遺構は少なく、南側で縄文時代の包含層が辛うじて残り、縄文土器が出土した。この縄文後期の包含層はこの４区の北端には延びておらず、この調査区が東南遺跡の北端と考えられる。

２．上層の遺構（図版82　写真図版105）

SB813（図版83　写真図版106）

調査区北側で検出した。一部は確認調査範囲と重なる。北東桁行２間（5m）、西南梁行２間（4.5m）以上の規模を持つ総柱の掘立柱建物である。柱間の規模は2.2m～3.0m、柱穴の径は約24cm～52cmである。周辺には柱穴が数多く検出できたが、建物は復元できなかった。遺物はP803から鍋442が出土した。

SD801（図版83　写真図版105）

調査区西側をほぼ南北に流れる溝である。中世から続く条里地割の坪境溝と考えられ、現在まで掘削が繰り返し行われていたと考えられる。このため、このSD801に並行するように現在も西側に側溝が流れている。長さ56m以上、幅1.5m以上、深さ70cmの溝である。この溝から中世の土師器・須恵器・備前焼や近世の羽釜や擂鉢が出土した。

SD803（図版83　写真図版105）

調査区北側で検出した。長さ6.6m、幅1.2m、深さ40cmの溝である。西側はSX801によって削平されている。

３．下層の遺構（図版82　写真図版104・106・107）

P836

調査区南側で検出した。直径30cm、深さ38cmの柱穴である。縄文土器が出土した。

４．遺物

SB813（図版84　写真図版108）（442）

土師器鍋442は羽釜形の鍋で内傾する口縁直下を強くナデて鍔を作る。15世紀後半から16世紀前半に位置付けられる。

SD801（図版84　写真図版108）（443～448）

土師器皿443は平底で、糸切りを行う。体部は短く内弯しながら立ち上がる。須恵器鉢444は平底で、糸切りを行う。内面は使用により磨耗している。

甕445は扁平で幅広な玉縁に２条の凹線を巡らす口縁部である。備前Ｖ期で16世紀代の製品である。擂鉢446は直立する口縁部外面に２条と内傾する口縁端部に１条の凹線を巡らす。１単位13本で擂目を付けた後、口縁部はヨコナデをする。18世紀後半の明石・堺産である。擂鉢447は口縁部を強くナデて面を作る。１単位７本の擂目を付ける。備前Ⅲ期で14世紀前半の製品である。

瓦質火鉢448は型作りであり、高台を付ける。底部中央のみ型の痕跡が残るが、外面はミガキを行い、内面はロクロナデを行う。

SD803（図版84　写真図版110）（449）

瓦質火鉢449は448と同型であり、体部中央まで残存している。体部は山を主文様にした風景と幾何学文を交互に型押しする。体部中央には、おそらく１対の突起を貼り付ける。

包含層（図版84　写真図版110）（450～452）

無釉陶器火入れ450は平底で口体部は直立する。底部は離れ砂の痕跡がある。近世の備前の製品である。甕451は口縁部から体部にかけて鉄釉を柄杓掛けする。底部周縁は使用のため磨滅している。丹波の製品である。無釉陶器鉢452は平底で体部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部は肥厚する。底部は離れ砂後、ハケ調整で仕上げる。焼成後穿孔しており、植木鉢である。

撹乱（図版85　写真図版109・111）（453～467）

弥生土器壺453は体部上半の破片で３条以上の突帯を沈線の下書きの上に貼り付ける。弥生土器壺454は体部上半の破片で６条以上の突帯と垂下する突帯を貼り付ける。弥生土器甕455は底部の破片で平底から直線的に開く体部である。

弥生土器長頸壺456は肩の張った体部に太く長い頸が付く。

土師器壺457は二重口縁壺である。土師器鉢458は小さな平底から体部が内弯気味に立ち上がる。土師器甕459・460はく字状口縁のタタキ甕で、口縁端部は上方に摘み上げる。土師器高坏461は大きく外反する口縁である。土師器甕462は複合口縁甕である。土師器甕463は布留形甕で、球形の体部にく字状口縁を呈し、口縁端部は内面が肥厚して段を作る。体部内面は横位のケズリを行う。

玩具464は花を型押ししている。18世紀後半から19世紀前半に位置付けられる。軟質施釉陶器465は秉燭で、型作りである。19世紀前半に位置付けられる。

瓦質火鉢466は平底で体部は直立する。体部は縦方向の隆帯を貼り付けていたと考えられるが、剥離しており、接合しやすくするための櫛歯調整痕が残っている。底部はヘラ描で「三木治郎」と刻んでいる。

戦前まで当地に存在していた「三木瓦屋」との関係が指摘できる。三木氏は斑鳩寺の瓦にも名が残っている。

土師器焙烙467は浅い体部に大きく屈曲して垂下する口縁部を持つ。内面はハケ調整後ナデを行い仕上げており、外面はケズリ後ナデを行い仕上げている。外面にはススが付着している。18世紀代に位置付けられる。

P836（図版86　写真図版112）（469）

469は外面が肥厚して内弯する口縁部で、RL撚りの縄文を施す。

金属製品（図版88　写真図版109）（M9～M11）

M9は鉄製の鋤先で、内側は叩き延ばしてV字の袋を作っている。溝SD801から出土した。M10は鉄製の釘で、叩き延ばして頭を作っている。長さ10cmを測る。M11は環状の青銅製品で、直径0.3cmの銅線を曲げて環状に作っている。

第６節　５区の調査

５区は、４区の南側に約23m離れて位置し、１区の町道を挟んで北側に位置する。西側は条里地割りの坪境溝の水路が走っている。全長10m、幅12m、調査面積120㎡を測る長方形の調査区である。

１．遺構の概要と層序（図版82）

５区は上層・下層の二面の調査を行った。上層は耕作土直下にある遺構検出面で、標高12.3m前後を測る。時期不明の遺構も存在しているが、主として中世・近世の遺構を検出した。ただし、４区と同様、後世の粘土採掘抗により、遺構の残存状態は良くない。上層で検出した遺構は、４区から続く溝SD901と柱穴である。下層は約20cmの極細砂を挟んだ、標高12.1m前後で検出したが、本来は上層とほぼ同じ面が検出面である。下層では縄文後期と考えられる土坑、柱穴を検出した。土坑からは縄文土器が出土している。また、包含層からは、縄文土器が出土し、同時期の石鏃も出土した。

２．上層の遺構

SD901（図版83）

調査区西側で検出した４区から続く条里の坪堺溝である。一部西側の肩を検出した。長さ10m、幅2.5m、深さ70cmの溝である。南側は、道路を挟んだ東南遺跡の方へ続いている。

３．下層の遺構（図版82　写真図版104・106・107）

SK904

調査区北側で検出した。長軸1.5m、短軸1.0m、深さ10cmの土坑である。縄文土器が出土した。

４．遺物

粘土採掘坑（図版85　写真図版109）（468）

陶器おろし皿468は高台を付け、内面にヘラでおろし目をキザむ。15世紀の瀬戸の灰釉陶器である。

SK904（図版86　写真図版112）（470・471）

470は外面が肥厚して面を作る口縁部で、横位の２条沈線を施文し、RL撚りの縄文を施す。471は内外

面が肥厚して段を作る口縁部で、横位の2条沈線を施文する。

下層包含層（図版86・87　写真図版112・113）（472～505）

縄文時代後期の土器が出土した。472外面が肥厚して段を作る波状の口縁部で、渦巻文と弧線文と横位の沈線を施文する。473・475～477は外面が肥厚して段を作る口縁部で、1条沈線を施文する。474は外面が肥厚して段を作る口縁部で、2条沈線を施文する。478は内外面が肥厚して段を作る口縁部で、区画文を施文する。480・484は外面が僅かに肥厚する口縁部で、無文である。481・482は外面が僅かに肥厚する口縁部で、RL撚りの縄文を施す。483は外傾する口縁部で、RL撚りの縄文を施す。485は体部と口頸部の境に稜を作る浅鉢である。486は頸部から体部の破片で頸体境の沈線を巡らし、頸部は無文、体部は区画文や多条沈線を施文する。487は頸部から体部の破片で頸体境の沈線を巡らし、頸部は無文、体部は擬縄文を施す。488は体部の破片で蛇行沈線が垂下し、RL撚りの縄文を施文する。489～491は体部の破片で沈線を施文する。492・493は沈線状の条痕を施す。494～496は体部の破片でRL撚りの縄文を施文する。497は体部の破片で条痕を施す。498～505は底部で498～504が平底、505が上げ底である。

石器（図版88　写真図版113）（S47～S50）

5区から出土した石器は、打製石器では、石鏃3点(S47～S49)を図化した。また、剥片1点(S50)は写真のみである。

石鏃はすべてサヌカイト製である。形態的な特徴から、すべて縄文時代に属すると推定できる。なお、S47は縄文時代早期の形態的特徴を示す。図化はしていないが、S50も黒曜石で大分県姫島産と推定した。いずれも、詳細な時期を判別できるものは少ないが、すべて縄文時代の範疇に収まると考えた。

第４章 自然科学的調査の成果

第１節　東南遺跡の放射性炭素年代測定（AMS測定）

㈱加速器分析研究所

１．測定対象試料

東南遺跡は、兵庫県揖保郡太子町鵤（北緯34°49′52～53″、東経134°34′49～50″）に所在する。測定対象試料は、３区１WのSK302埋土２層から出土した木炭（No.01：IAAA－72735）、１区１WのSH401から出土した木炭（No.02：IAAA－72736）、１区４WのSK429から出土した木炭（No.03：IAAA－72737）、２区１ＥのP287から出土した木炭（No.04：IAAA－72738）、２区１WのSK279から出土した木炭（No.05：IAAA－72739）、２区のSK253から出土した木炭（No.06：IAAA－72740）、１区４ＥのSH115から出土した木炭（No.07：IAAA－72741）、合計７点である。

２．化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid　Alkali　Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO_2)を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

３．測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HO_xⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により^{13}C／^{12}Cの測定も同時に行う。

４．算出方法

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は、過去において大気中の^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る^{14}C年代である。

3）付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ^{13}Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$\delta^{14}C = [(^{14}AS - ^{14}AR)/AR] \times 1000$　　（１）

$\delta^{13}C = [(^{13}AS - ^{13}APDB)/APDB] \times 1000$　　（２）

ここで、　^{14}AS：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/C)_S$

^{14}AR：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}C　は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}AS = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に^{13}C／^{12}Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

5）Δ^{14}Cは、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（^{14}AN）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}C濃度を、δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}AN = {}^{14}AS \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))^2$　（^{14}ASとして^{14}C／^{12}Cを使用するとき）

または

$= {}^{14}AS \times (0.975/(1 + \delta^{13}C/1000))$　（^{14}ASとして^{14}C／^{13}Cを使用するとき）

$\Delta^{14}C = [(^{14}AN - ^{14}AR)/^{14}AR] \times 1000$（‰）

6）pMC（percent Modern Carbon）は、現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合を示す表記であり、Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$（‰）

$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$（%）

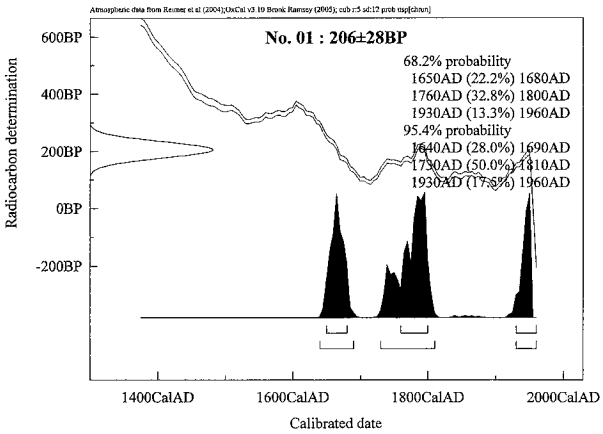
国際的な取り決めにより、このΔ^{14}CあるいはpMCにより、^{14}C年代が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$

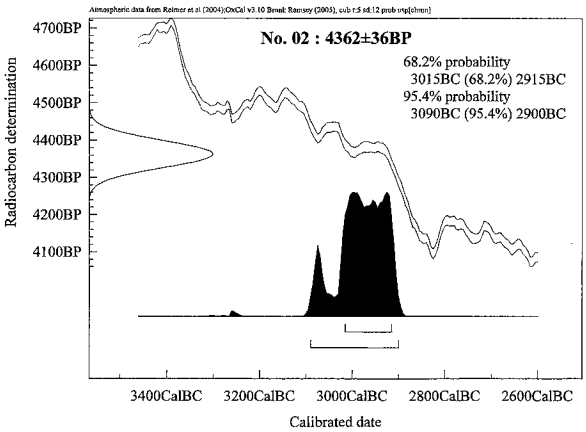
$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

7）^{14}C年代値と誤差は、１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

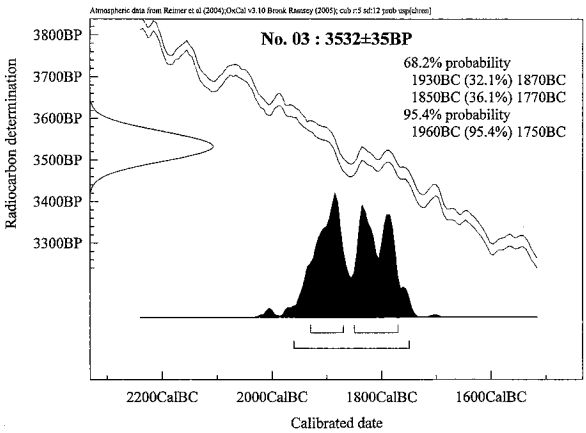
8）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代の計算では、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ramsey1995　Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。



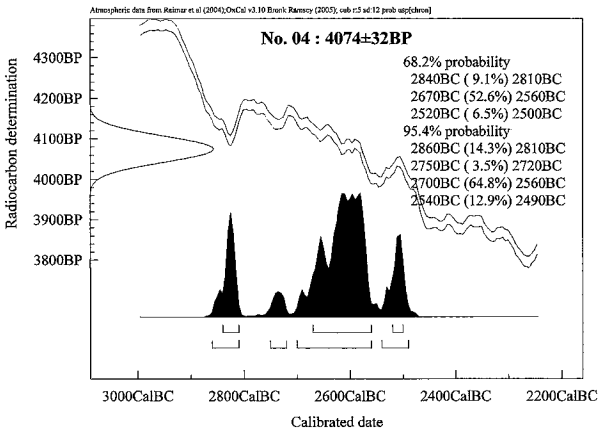
IAA Code No.	IAAA-72735　#2156-1	BP年代および炭素の同位体比
試料採取場所	兵庫県揖保郡太子町鵤東南遺跡	Libby Age (yrBP) : 210 ± 30
試料形態	木炭	δ13C (‰)、(加速器) = −30.24 ± 0.8
試料名(番号)	No.01	Δ14C (‰) = −25.4 ± 3.5
		pMC (%) = 97.46 ± 0.35
(参考)	δ13C の補正無し	δ14C (‰) = −35.8 ± 3
		pMC (%) = 96.42 ± 0.3
		Age (yrBP) : 290 ± 30



IAA Code No.	IAAA-72736　#2156-2	BP年代および炭素の同位体比
試料採取場所	兵庫県揖保郡太子町鵤東南遺跡	Libby Age (yrBP) : 4,360 ± 40
試料形態	木炭	δ13C (‰)、(加速器) = −25.75 ± 0.68
試料名(番号)	No.02	Δ14C (‰) = −419.1 ± 2.7
		pMC (%) = 58.09 ± 0.27
(参考)	δ13C の補正無し	δ14C (‰) = −420 ± 2.5
		pMC (%) = 58 ± 0.25
		Age (yrBP) : 4,380 ± 40

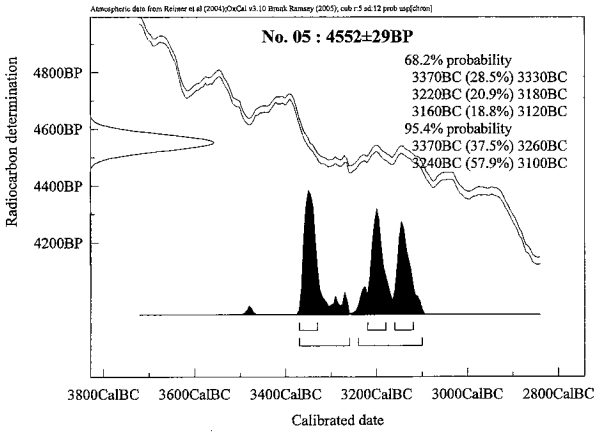


IAA Code No.	IAAA-72737　#2156-3	BP年代および炭素の同位体比
試料採取場所	兵庫県揖保郡太子町鵤東南遺跡	Libby Age (yrBP) : 3,530 ± 40
試料形態	木炭	δ13C (‰)、(加速器) = −29.06 ± 0.65
試料名(番号)	No.03	Δ14C (‰) = −355.8 ± 2.8
		pMC (%) = 64.42 ± 0.28
(参考)	δ13C の補正無し	δ14C (‰) = −361.1 ± 2.7
		pMC (%) = 63.89 ± 0.27
		Age (yrBP) : 3,600 ± 30

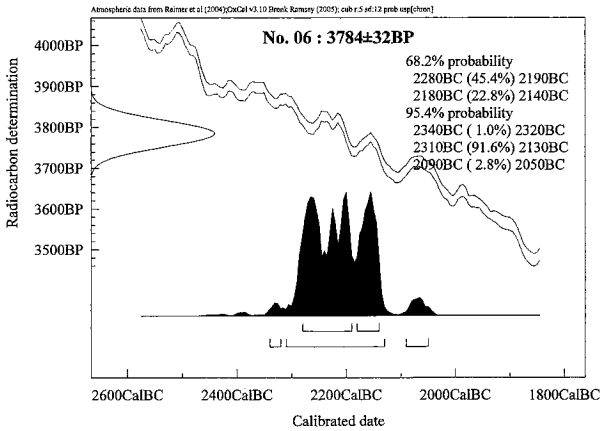


IAA Code No.	IAAA-72738　#2156-4	BP年代および炭素の同位体比
試料採取場所	兵庫県揖保郡太子町鵤東南遺跡	Libby Age (yrBP) : 4,070 ± 30
試料形態	木炭	δ13C (‰)、(加速器) = −25.14 ± 0.65
試料名(番号)	No.04	Δ14C (‰) = −397.8 ± 2.4
		pMC (%) = 60.22 ± 0.24
(参考)	δ13C の補正無し	δ14C (‰) = −398 ± 2.3
		pMC (%) = 60.2 ± 0.23
		Age (yrBP) : 4,080 ± 30

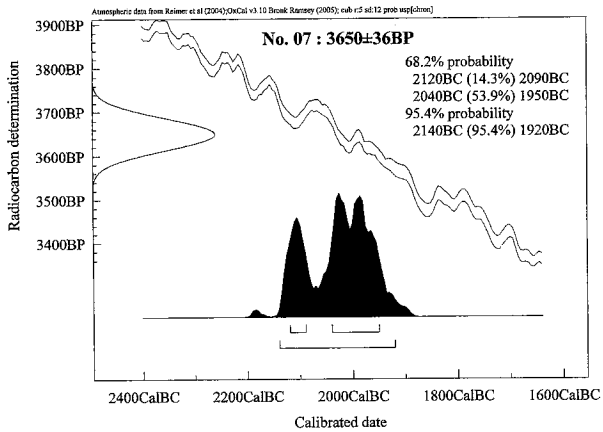
第１図　較正曲線グラフと暦年較正値(1)



IAA Code No.	IAAA-72739　#2156-5	BP年代および炭素の同位体比
試料採取場所：兵庫県揖保郡太子町鵤東南遺跡		Libby Age (yrBP)　：　4,550 ± 30
		δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −32.02 ± 0.51
試 料 形 態：木炭		Δ^{14}C (‰)　＝ −432.6 ± 2.1
試料名(番号)：No.05		pMC (%)　＝　56.74 ± 0.21
		δ^{14}C (‰)　＝ −440.8 ± 2
(参　　考)　δ^{13}C の補正無し		pMC (%)　＝　55.92 ± 0.2
		Age (yrBP)　：　4,670 ± 30



IAA Code No.	IAAA-72740　#2156-6	BP年代および炭素の同位体比
試料採取場所：兵庫県揖保郡太子町鵤東南遺跡		Libby Age (yrBP)　：　3,780 ± 30
		δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −27.2 ± 0.78
試 料 形 態：木炭		Δ^{14}C (‰)　＝ −375.7 ± 2.5
試料名(番号)：No.06		pMC (%)　＝　62.43 ± 0.25
		δ^{14}C (‰)　＝ −378.5 ± 2.3
(参　　考)　δ^{13}C の補正無し		pMC (%)　＝　62.15 ± 0.23
		Age (yrBP)　：　3,820 ± 30



IAA Code No.	IAAA-72741 #2156-7代替	BP年代および炭素の同位体比
試料採取場所：兵庫県揖保郡太子町鵤		Libby Age (yrBP)　：　3,650 ± 40
試 料 形 態：東南遺跡		δ^{13}C (‰)、(加速器) ＝ −26.55 ± 0.77
試料名(番号)：木炭		Δ^{14}C (‰)　＝ −365.2 ± 2.9
試料名(番号)：No.07		pMC (%)　＝　63.48 ± 0.29
		δ^{14}C (‰)　＝ −367.2 ± 2.7
(参　　考)　δ^{13}C の補正無し		pMC (%)　＝　63.28 ± 0.27
		Age (yrBP)　：　3,680 ± 40

参考　IAAA-72741に関しましては，代替試料を処理し測定した結果になります。

第１図　較正曲線グラフと暦年較正値(2)

第２表　暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-72735	No. 01	206 ± 28
IAAA-72736	No. 02	4362 ± 36
IAAA-72737	No. 03	3532 ± 35
IAAA-72738	No. 04	4074 ± 32
IAAA-72739	No. 05	4552 ± 29
IAAA-72740	No. 06	3784 ± 32
IAAA-72741	No. 07	3650 ± 36

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

５．測定結果（第１図・第２表）

^{14}C年代は、

SK302から出土した木炭No.01が210±30yrBP、

SH401から出土した木炭No.02が4360±40yrBP、

SK429から出土した木炭No.03が3530±40yrBP、

P287から出土した木炭No.04が4070±30yrBP、

SK279から出土した木炭No.05が4550±30yrBP、

SK253から出土した木炭No.06が3780±30yrBP、

SX115から出土した木炭No.07が3650±40yrBPである。

暦年較正年代（１σ）は、

No. 1 が1650～1680AD（22.2%）・1760～1800AD（32.8%）・1930～1960AD（13.3%）、

No. 2 が3015～2915BC（68.2%）、

No. 3 が1930～1870BC（32.1%）・1850～1770BC（36.1%）、

No. 4 が2840～2810BC（9.1%）・2670～2560BC（52.6%）・2520～2500BC（6.5%）、

No. 5 が3370～3330BC（28.5%）・3220～3180BC（20.9%）・3160～3120BC（18.8%）、

No. 6 が2280～2190BC（45.4%）・2180～2140BC（22.8%）、

No. 7 が2120～2090BC（14.3%）・2040～1950BC（53.9%）である。

試料の炭素含有率は十分であり、化学処理および測定内容にも問題が無いことから、妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion：Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy：the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al.2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

第２節　兵庫県太子町東南遺跡で検出された焼土の古地磁気年代

兵庫県立大学大学院　生命理学研究科　森永速男、寺口祐記

はじめに

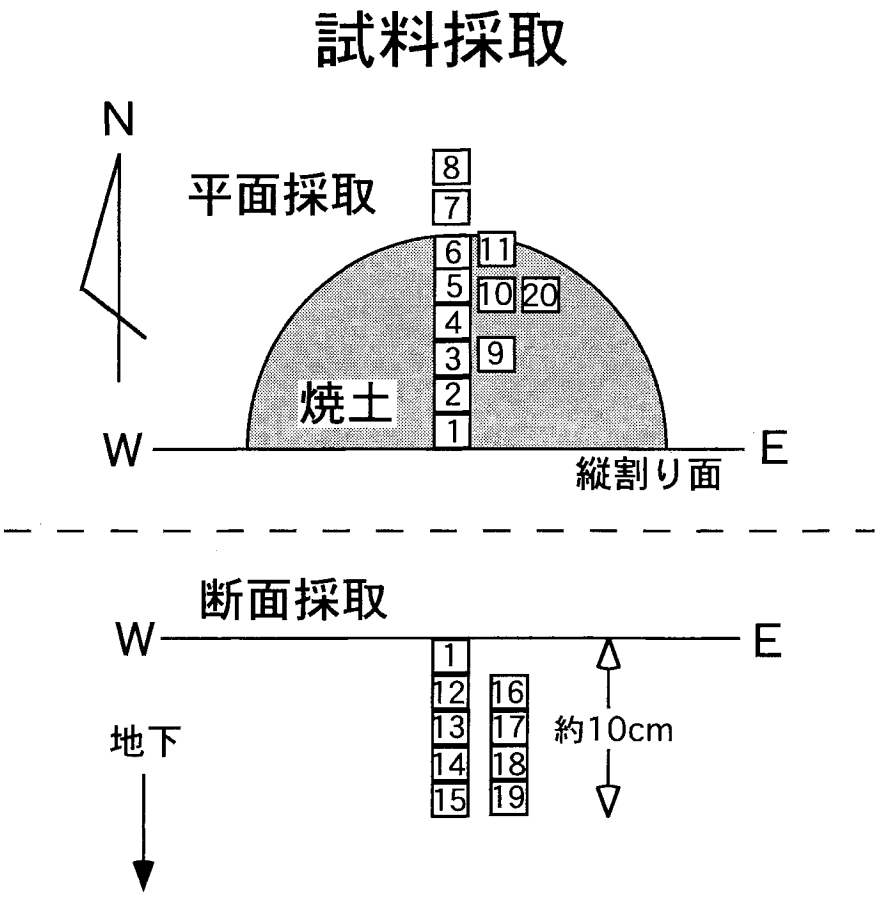
土壌中に含まれる磁性鉱物（酸化鉄や水酸化鉄）は堆積時の地球磁場情報（強度と方向）を記録する。この磁化（磁場の化石）を堆積残留磁化と呼ぶ。さらに、堆積後に、土壌が何らかの過程（例えば、古代人の焚き火など）で熱を受けると、土壌中の磁性鉱物は化学的に変化したり（主に水酸化物から酸化物に）、加えて熱的な残留磁化を獲得する。そういった過程を経て、土壌は堆積時よりもかなり大きな強度の残留磁化（熱残留磁化）を示すようになる。同時に、その残留磁化方向は、堆積時よりもさらに正確に、受熱時の地球磁場方向と平行になることが知られている。

土壌が被熱を経て地球磁場の正確な記録を持つことを利用して、過去の地球磁場方向や強度の変化を復元する研究（考古地磁気学）が行われてきた。その成果として、過去2,000年間の地球磁場方向変化のほぼ連続した標準曲線が作成されている（Hirooka、1971、1983；Maenaka、1990）。この曲線と年代のわからない焼土の残留磁化方向を比較することによって、焼土の年代を決定できる。この方法を考古地磁気年代決定法と呼ぶ。この方法を利用するときの注意点は、標準曲線の年代軸が考古学側から与えられたもの（土器編年など）であるということである。よって、土器編年などの修正が行われることがあれば、考古地磁気年代も修正されなければならない。

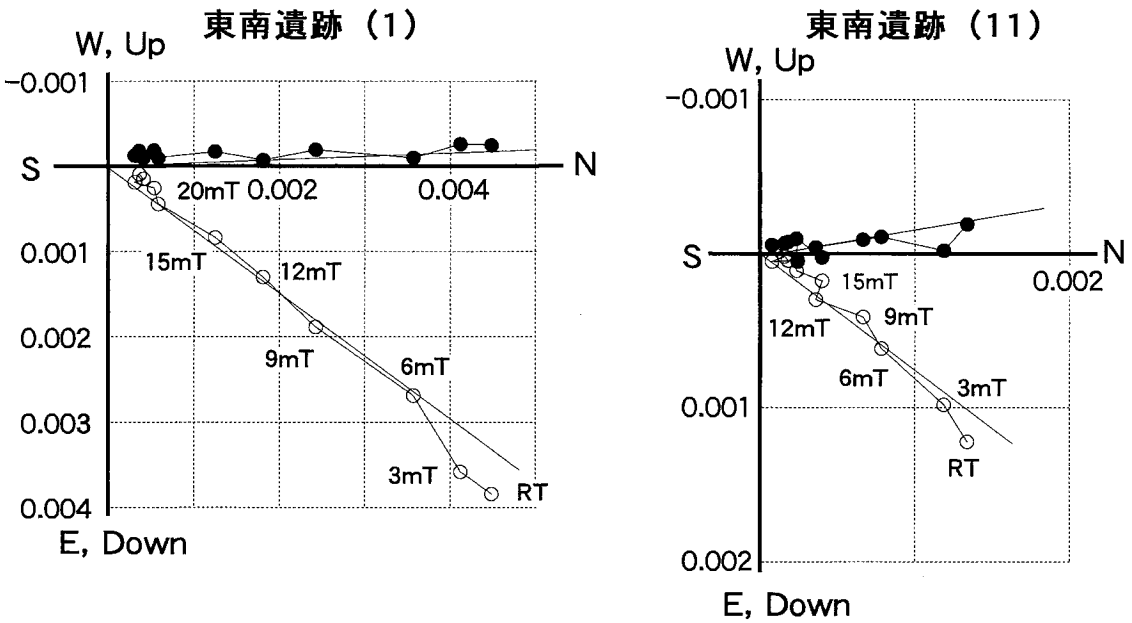
また、堆積物の残留磁化測定を通して過去12,000年間の、さらに洞窟内の二次生成物である石筍の残留磁化測定を通して過去16,000年間（堆積物の方向変化曲線との比較から決定された）の古地磁気方向の永年変化が復元されている（前者はHyodo他、1993、後者はMorinaga他、1989）。これらを標準曲線として利用すれば、旧石器時代までさかのぼって磁気的な年代決定が可能になる。この方法は古地磁気年代決定法と呼ばれるが、手法は考古地磁気年代決定法と同じである。ただし、この永年変化曲線は考古地磁気の標準曲線と比べて、復元角度と年代ともに精度が低い。考古地磁気年代には数十年～最大100年程度の誤差があると考えられるが、古地磁気年代では最低でも100年の年代誤差を見込んでおく必要があろう。

１．試料採取と磁化測定

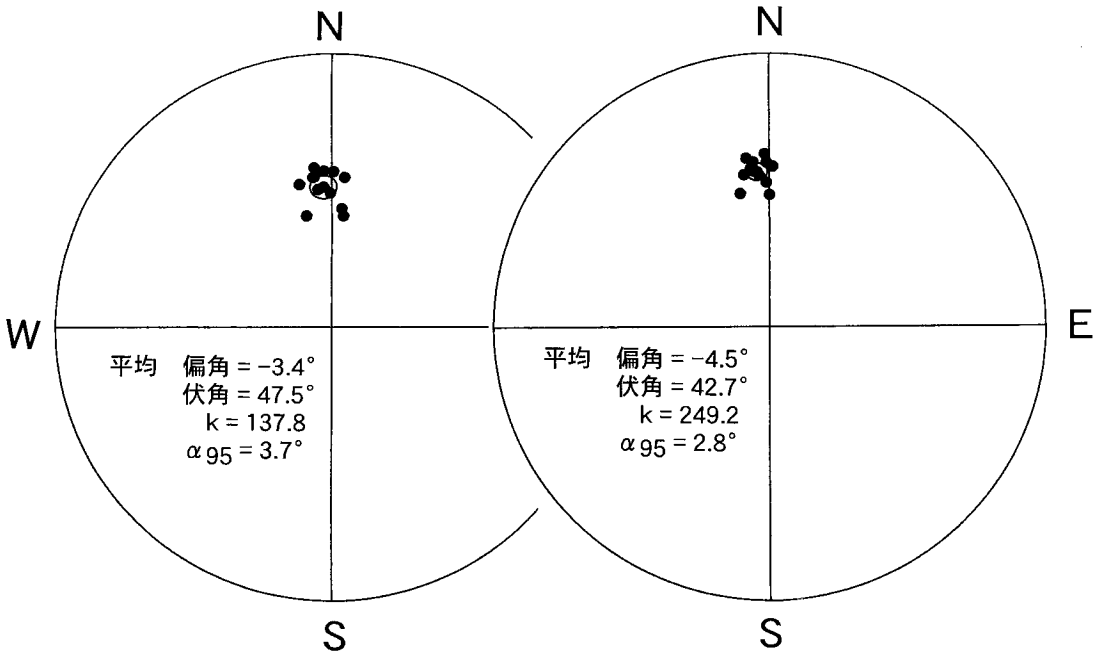
東南遺跡で確認されたSH401の焼土範囲から計20個の土壌試料を定方位で採取した。そのうち、12個は焼土表面から、８個は東西縦割り断面から採取した（第２図）。試料は約８㎤のポリカーボネイト製の立方体容器を用いて採取された。残留磁化測定にはスピナー磁力計を、二次的な磁化の除去には交流消磁法を用いた。パイロット試料を用いて段階交流磁場消磁を実施し、確実に二次磁化の除去できる交流磁場レベルを決定した。その磁場レベルで残りの試料を消磁し、その処理前後の残留磁化を求めた。また、MS2帯磁率計を用いて採取試料の帯磁率も測定した。



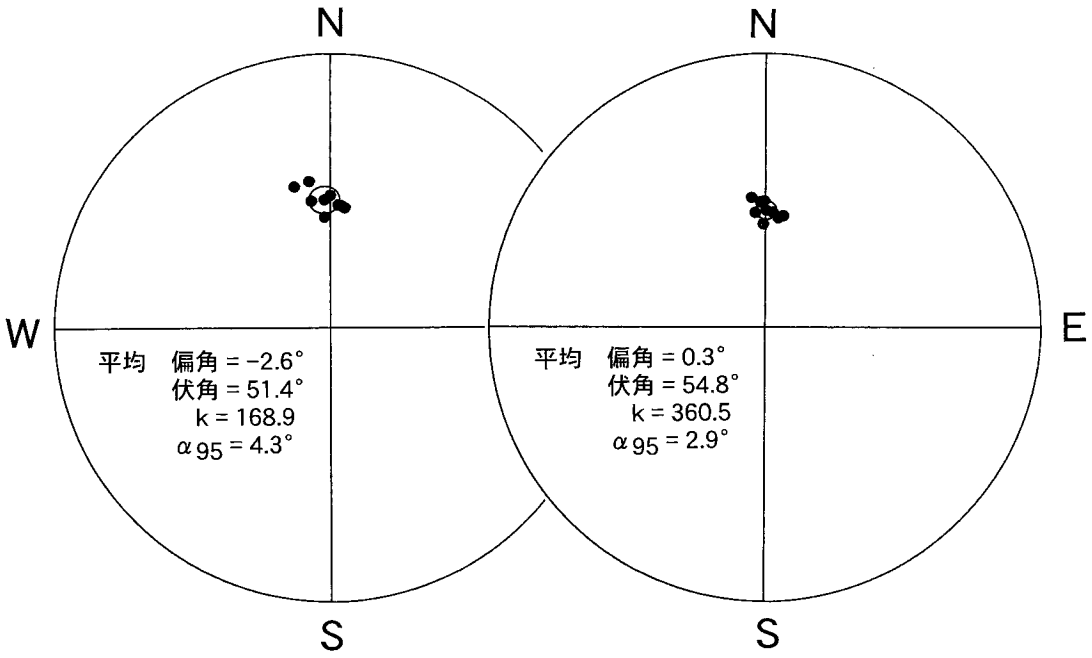
第２図　焼土試料の採取位置の模式図



第３図　パイロット試料（試料１、11）の段階交流消磁結果



第 4 図　平面採取試料の交流消磁前後の残留磁化方向とその平均値　左(右)が消磁前(後)



第 5 図　東西断面採取試料の交流消磁前後の残留磁化方向とその平均値　左(右)が消磁前(後)

第３表　残留磁化、帯磁率測定結果のまとめ

試料名	重量(g)	帯磁率 (10E-5 SI)	消磁前残留磁化 偏角(°)	伏角(°)	強度 (10E-3Amm/kg)	交流消磁後残留磁化 偏角(°)	伏角(°)	強度 (10E-3Amm/kg)	備考
T1	8.12	34.61	−2.9	42.4	0.000679	−1.6	36.9	0.000550	東南遺跡
T2	7.86	37.15	−6.6	44.0	0.000846	−6.7	41.5	0.000641	縄文後期前半？
T3	6.68	40.27	−6.3	41.1	0.000928	−5.7	39.4	0.000698	表面採取
T4	9.30	24.73	−7.2	44.2	0.000390	−6.0	42.4	0.000289	(粘土炉床)
T5	9.25	17.19	−0.6	49.5	0.000222	−3.8	43.9	0.000158	
T6	10.42	14.88	−12.8	55.8	0.000128	−12.3	48.9	0.000083	
T7	8.13	15.38	5.9	56.5	0.000090	0.1	50.2	0.000054	
T8	11.07	15.90	4.8	54.3	0.000108	−1.2	46.3	0.000058	
T9	7.67	32.86	−12.8	45.7	0.000669	−9.5	43.2	0.000519	
T10	8.12	30.91	4.9	44.4	0.000600	1.3	41.1	0.000447	
T11	9.59	20.13	−5.7	48.2	0.000180	−7.8	37.9	0.000104	
T20	6.83	36.90	0.6	42.6	0.000827	−1.0	39.7	0.000616	
平均		26.74	−3.4	47.5	0.000472	−4.5	42.7	0.000352	
			k=137.8	α95=3.7		k=249.2	α95=2.8		
T12	10.81	16.93	−14.2	45.9	0.000108	−2.3	52.2	0.000063	東南遺跡
T13	10.23	9.19	5.4	53.2	0.000085	9.1	56.1	0.000070	縄文後期前半？
T14	9.77	7.88	−3.0	56.8	0.000064	−1.3	59.1	0.000053	地下断面表採
T15	9.76	7.89	0.1	50.0	0.000067	−0.5	51.9	0.000060	(粘土炉床)
T16	10.12	16.50	−8.2	45.1	0.000126	−6.1	50.9	0.000075	
T17	11.10	8.83	3.7	53.0	0.000083	3.7	55.4	0.000072	
T18	8.86	8.35	6.9	53.7	0.000060	6.6	57.0	0.000052	
T19	10.03	8.08	−8.4	51.4	0.000059	−5.1	55.4	0.000051	
平均		10.46	−2.6	51.4	0.000082	0.3	54.8	0.000062	
			k=168.4	α95=4.3		k=360.5	α95=2.9		

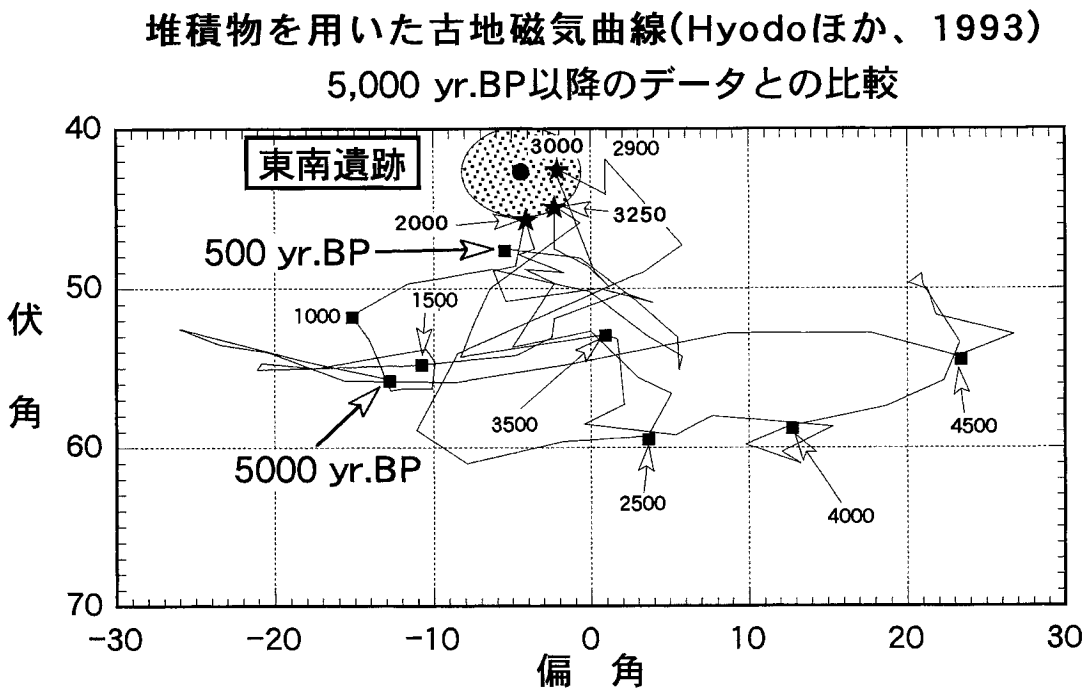
2．磁化測定結果および考察

パイロット試料を用いた段階交流消磁の結果を第３図に示す。左は焼土範囲の中心から採取した試料１、右は焼土範囲の外周付近で採取した試料11の結果である。それぞれの消磁前の残留磁化強度は、0.000679、0.000180（ともに単位は10^{-3} A㎡／kg）で数倍異なり、周辺部より中心部の試料の方が大きな強度を示している。これは被熱程度が周辺部より中央部で高いということを意味する。また、交流磁場レベルの上昇に伴って、なめらかで安定な減衰を示すのは中心からの試料１で、このことも被熱程度の高さを示している。図から明らかなように、各消磁後の方向が原点に向かう直線の上にのり始めるのは6mTの消磁後である。このことから、二次的な磁化は6mTで十分に除去できると考え、残りの試料を6mTの交流磁場レベルで消磁した。

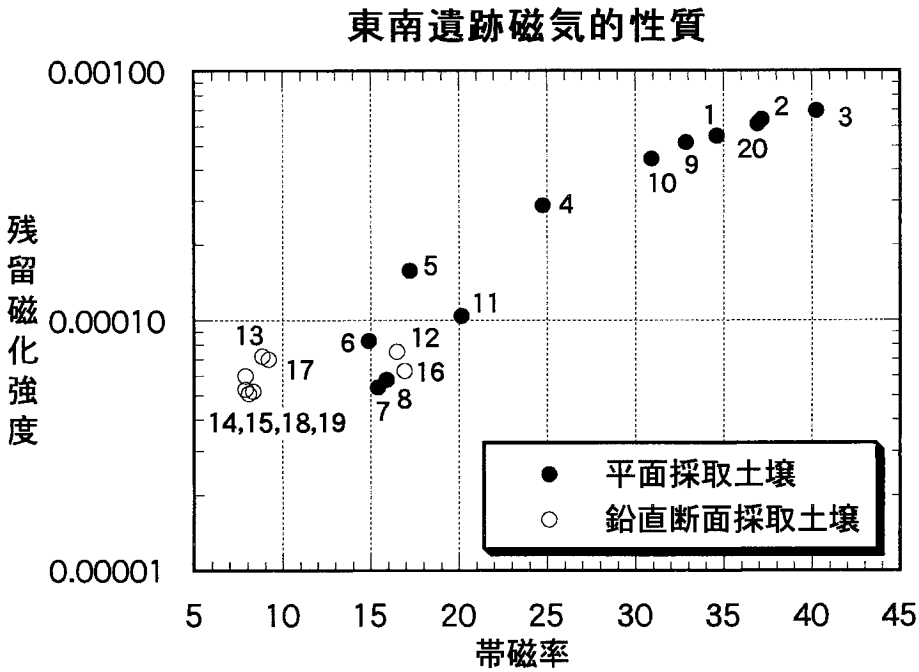
交流消磁前後の各試料の残留磁化および帯磁率とそれらの平均値を第３表にまとめた。消磁前後の平均残留磁化方向は、平面採取と地下断面採取の試料間でやや異なる（第４図、第５図に平面採取と断面採取ごとに消磁前後の各試料の磁化方向とその平均値を示す）。一般に平面採取の方が採取体勢が安定し、方向付けが正確にできると考えられるので、平面採取試料の平均値を用いて年代決定することにした。

3．古地磁気年代決定

平面採取試料の交流消磁前後の平均残留磁化方向はそれぞれ、偏角＝−3.4°、伏角＝47.5°（精密度パラメータ；k＝137.8、95%の信頼度限界；α_{95}＝3.7°）そして偏角＝−4.5°、伏角＝42.7°（k＝249.2、α_{95}＝2.8°）であった。消磁後の方向平均のkおよびα_{95}の値は集中度の高い方に変化しており、交流消磁が効果的であったことがわかる（kは大きいほど、α_{95}は小さいほど方向の集中度がよいことを示す）。このことから、かなり精密な過去の地球磁場方向が復元できていることと判断できる。



第６図　標準考古地磁気曲線（Hyodo他、1993）との比較



第７図　採取土壌の磁気的性質（帯磁率と残留磁化強度の関係）

消磁後の平均方向と標準的な古地磁気曲線（Hyodo他、1993）を比較した（第６図）。図中の実線が標準曲線で、黒丸と楕円で消磁後の平均方向と95％の信頼限界を示している。標準曲線は過去12,000年前まで存在するが、考古学側の情報に基づいて、5,000年BP以降と考えられているので、この図では、5,000年BP以降の対比のみを示した。標準曲線と東南遺跡SH401の焼土試料の偏角、伏角両者が対応する年代は3,250年BP頃、3,000年BP頃、そして2,000年BP頃となる。

４．焼土の被熱痕跡

これまでの研究（たき火実験）によれば、被熱程度（温度×時間）と磁気的性質（以下、磁性；帯磁率や残留磁化強度など）は正の相関を示す。つまり、被熱程度が高いほど土壌の磁性がより大きな強度を示すようになり、新鮮な火山灰など一部を除いて、この正相関は明確に成立することが知られている（Morinagaほか、1999）。

帯磁率を横軸に、残留磁化強度を縦軸にとって、東南遺跡で採取した全20個の土壌試料の磁性を第７図に示す。これまでの研究で認められた正相関（右肩上がりの傾向）が東南遺跡の土壌にも認められる。また、被熱範囲の中心よりもそのやや外側でもっとも大きな磁性を示し、周辺に向かうに従って磁性変化が減っていく傾向が認められる。つまり、中心から採取の試料１よりその外側の試料２、３、20でもっとも大きな磁性が認められている。そして、中心から離れるに従って（試料９、４、５、11）、磁性は小さくなっていく。さらに、地下試料に関しても、2cm以下の試料では、被熱範囲の外周付近やその外側の試料と同等もしくはそれ以下の強度の磁性を示しており、これまでの研究でも認められた熱がさほど地下に拡がらないという結論を支持している。

引用文献

Hirooka, K., 1971. Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in south-West Japan, *Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral.,* 38, 167-207.

Hirooka, K., 1983. Results from Japan, *in Geomahnetism of Baked Clays and Recent Sediments, eds. Creer, K. M. et al.,* 150-157, Elsevier, Amsterdam.

Hyodo, M., Itota, C., and Yaskawa, K., 1993. Geomagnetic secular variation reconstructed from magnetizations of wide-diameter cores of Holocene sediments in Japan, *J. Geomag. & Geoelectr.,* 45 (8), 669-696.

Maenaka, K., 1990. Archeomagnetic secular variation in Southwest Japan, *Rock Mag. Paleogeophys.,* 17, 21-25.

Morinaga, H., Inokuchi, H., Yamashita, H., Ono, A., and Inada, T., 1999. Magnetic detection of heated soils at Paleolithic sites in Japan, *Geoarchaeology,* 14 (5), 377-399.

Morinaga, H., Inokuchi, H., and Yaskawa, K., 1989. Palaeomagnetism of stalagmites (speleothems) in SW Japan, *Geophy. J. International,* 96 (3), 519-528.

第３節　東南遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
矢作健二・石岡智武

はじめに

太子町に所在する東南遺跡は、播磨平野西部をほぼ北から南へ流下する林田川と大津茂川に挟まれた沖積低地上に位置する。これまでの発掘調査により、縄文時代、弥生時代、古墳時代および中世の各時期におよぶ集落跡が確認されており、各時期を示す土器などの遺物も多く出土している。

本報告では、東南遺跡から出土した、縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器、および中世の土師器について、その材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、各土器間での胎土の類似性あるいは特異性を見出し、東南遺跡の各時期における土器の製作事情に関わる資料を作成する。

１．試料

試料は、東南遺跡から出土した土器片28点である。内訳は、縄文土器片16点、弥生土器片３点、古墳時代の土師器片７点、中世の土師器片２点である。

縄文土器の試料は、資料No.１～16とされ、これらのうち資料No.１～15は縄文時代後期、資料No.16は縄文時代晩期とされている。器種は、鉢が２点、浅鉢が３点、深鉢が11点含まれている。弥生土器試料は、資料No.17～19とされ、資料No.17は弥生時代前期の甕、資料No.18と19はそれぞれ弥生時代中期の甕および壺とされている。古墳時代の土師器試料は、資料No.20～26とされ、いずれも古墳時代初頭のものであり、壺が２点、甕が４点、山陰型甑が１点からなる。中世の土師器は、資料No.27と28であり、それぞれ羽釜と小皿とされている。

各試料の資料No.、器種、時期、出土地区、出土遺構などは一覧表にして第４表に示す。

２．分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数し

第４表　分析試料一覧および胎土分類

資料No.	報告No.	実測No.	種別	器種	時期	出土地区	遺構	調査番号	胎土分類												
									鉱物・岩石組成						粒径組成					砂量	
									A4	A5	C	F1	F2	G	c	m	f	vf	cs	I	II
1	27	464	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	1区	SH115	990240			■				■			●			■
2	31	447	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	1区	SH115	990240				■			■					■	
3	37	157	縄文土器	浅鉢	縄文時代後期	1区	SK506	2000288	■						■				●	■	
4	39	165	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	1区	SK424	2000288				■			■				●	■	
5	47	163	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	1区	SK413	2000288	■									■			■
6	54	385	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	1区	SK431	2000288	■						■				●	■	
7	57	371	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	1区	SK450	2000288		■					■						■
8	105	470	縄文土器	浅鉢	縄文時代後期	1区	包含層	990240	■						■			●		■	
9	106	185	縄文土器	浅鉢	縄文時代後期	1区	包含層	2000288	■							■		●		■	
10	123	442	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	1区	SD102	990240	■						■					■	
11	170	382	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	2区	SK251	2000288	■						■				●		■
12	171	383	縄文土器	鉢	縄文時代後期	2区	SK251	2000288					■		■				●	■	
13	180	173	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	2区	SK298	2000288	■						■			●			■
14	186	170	縄文土器	深鉢	縄文時代後期	2区	包含層	2000288	■						■						■
15	401	293	縄文土器	鉢	縄文時代後期	3区	包含層	2000288			■					■				■	
16	13	386	縄文土器	深鉢	縄文時代晩期	1区	SK449	2000288	■												
17	222	5	弥生土器	甕	弥生時代前期	3区	SD353	2000288	■												
18	227	20	弥生土器	甕	弥生時代中期	3区	SD353	2000288			■						■			■	
19	232	27	弥生土器	壺	弥生時代中期	3区	SD351	2000288			■				●		■			■	
20	244	118	土師器	壺	古墳時代初頭	3区	SD308	990240	■						■		●			■	
21	250	127	土師器	壺	古墳時代初頭	3区	SD308	990240					■				■			■	
22	255	103	土師器	甕	古墳時代初頭	3区	SD308	990240	■							■		●		■	
23	256	119	土師器	甕	古墳時代初頭	3区	SD308	990240	■						■					■	
24	257	126	土師器	甕	古墳時代初頭	3区	SD308	990240	■							■				■	
25	258	117	土師器	甕	古墳時代初頭	3区	SD308	990240						■	■						■
26	278	124	土師器	山陰型甑	古墳時代初頭	3区	SD308	990240					■		■					■	
27	145	58	土師器	羽釜	中世	2区	SD205	990240			■				■						■
28	156	64	土師器	小皿	中世	2区	SD229	990240	■												

A4:岩石片の種類構成が主に頁岩や砂岩などの堆積岩類と凝灰岩や流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類などの深成岩類、さらに緑色岩、珪化岩、変質岩類および火山ガスを含む。

A5:岩石片の種類構成は堆積岩類、凝灰岩および花崗岩類が含まれることからA類としたが、鉱物片に黒雲母が多く含まれることでA5類とした。

C:岩石片は花崗岩類を主体とし、試料によっては微量の凝灰岩、流紋岩・デイサイトおよび火山ガラスを伴う。
F1:岩石片は凝灰岩を主体とし、微量の珪化岩などを伴う。
F2:A4類の岩石片の種類構成から花崗岩類が抜けた組成であり、その中で凝灰岩がやや多い組成を示す。
G:鉱物片では斜長石が圧倒的に多く、石英は含まれない。岩石片は流紋岩・デイサイトおよび安山岩により構成される。
砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径:c;粗粒砂　m;中粒砂　f;細粒砂　vf;極細粒砂　cs;粗粒シルト　●;第二のピーク
Ⅰ:砕屑物の割合が20%前後
Ⅱ:砕屑物の割合が30%前後

た。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

３．結果

観察結果を第５表、第８図～第10図に示す。鉱物片および岩石片の組成をみると、試料間で類似する組成があり、それが複数あることも看取された。具体的には、28点の試料から、大きくは４分類、細分すると６分類の鉱物・岩石組成が認められた。これまでに兵庫県下各地における弥生土器～土師器の胎土分析で認められている鉱物・岩石組成分類と比較し、ここでは、それらを踏襲した分類を示す。

A4類・A5類：A類の特徴は、岩石片の種類構成が主にチャートや頁岩、砂岩などの堆積岩類と凝灰岩・流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類などの深成岩類の３者からなることであった。今回の分析では、この３者に加えて、緑色岩、珪化岩、変質岩類および火山ガラスも比較的多く含む組成が認められたことから、A4類とした。なお、A1類や上記３者に火山ガラスを多く含む組成であるA2類は、伊丹市小阪田遺跡の弥生土器や加古川市溝之口遺跡の土師器に認められており、珪化岩および変質岩を含むA3類は、丹波市青垣町の土井遺跡出土の古代の土師器に認められている。A4類は今回の分析で新に設定した分類である。今回の試料では、最も多くの試料に認められた胎土であり、28点中16点の試料がA4類に分類された。

第５表　薄片観察結果（1）

資料No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																																		合計
			鉱物片							岩石片																					その他						
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	粗面安山岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	斑れい岩	花崗斑岩	文象斑岩	石英斑岩	珪長岩	ドレライト	ホルンフェルス	千枚岩	粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	珪藻	植物珪酸体	
1	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂		1														2	4																		7
		粗粒砂	4	2	1													3	3																		13
		中粒砂	3	1	1													1			1												1				8
		細粒砂		1	2	1													1																		5
		極細粒砂	3		2				1									1																			7
		粗粒シルト	1		1																																2
		中粒シルト																																			0
	基質																																				106
	孔隙																																				6
2	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂	3										1	4									1											1			10
		粗粒砂	8											7																							15
		中粒砂	3		1				1					7	1																						13
		細粒砂	2		5	1													1												1						10
		極細粒砂			1																																1
		粗粒シルト	1																																		1
		中粒シルト																																			0
	基質																																				162
	孔隙																																				20
3	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂	1												2				1					1						1							6
		粗粒砂	1						1			1	2	1					1					2		1			2			2					14
		中粒砂				1			1					1										1								1					5
		細粒砂			1													1																			2
		極細粒砂	2																																		2
		粗粒シルト	3		1					1																										1	6
		中粒シルト	1																																		1
	基質																																				147
	孔隙																																				2
4	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂	7											11										1													19
		粗粒砂	10											16									1									5					32
		中粒砂	4	1	1									6				1														1					14
		細粒砂	1		3																												1				5
		極細粒砂			1																																1
		粗粒シルト	2																																	4	6
		中粒シルト																																			0
	基質																																				277
	孔隙																																				34
5	砂	細礫																											1								1
		極粗粒砂	1	1								1						1	1	1									1								7
		粗粒砂	2	1	2									1	1	1			3						1				1		1						14
		中粒砂	9	2	4							1		1				1																			18
		細粒砂	9	2	6	1												1	1																		20
		極細粒砂	18		4				1																												23
		粗粒シルト	12		2																																14
		中粒シルト	2																																		2
	基質																																				245
	孔隙																																				9
6	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂																	1		1								1	1		6					10
		粗粒砂	1								1	2	2	4															2		1	3					16
		中粒砂			1						1		1	2				1															1				7
		細粒砂			1									1																							2
		極細粒砂																																			0
		粗粒シルト	1		1																															2	4
		中粒シルト																																	1		1
	基質																																				135
	孔隙																																				7
7	砂	細礫																																			0
		極粗粒砂							4				1	1					1											1		4					12
		粗粒砂	2						12			4	4	3				2	1											6		4		1			39
		中粒砂	3		3				6				3	3			1	6	1											4		1		1			32
		細粒砂	3	1	1				2									5																			12
		極細粒砂	7		1																																8
		粗粒シルト	3		1																																4
		中粒シルト	2																																		2
	基質																																				279
	孔隙																																				16

第５表　薄片観察結果（2）

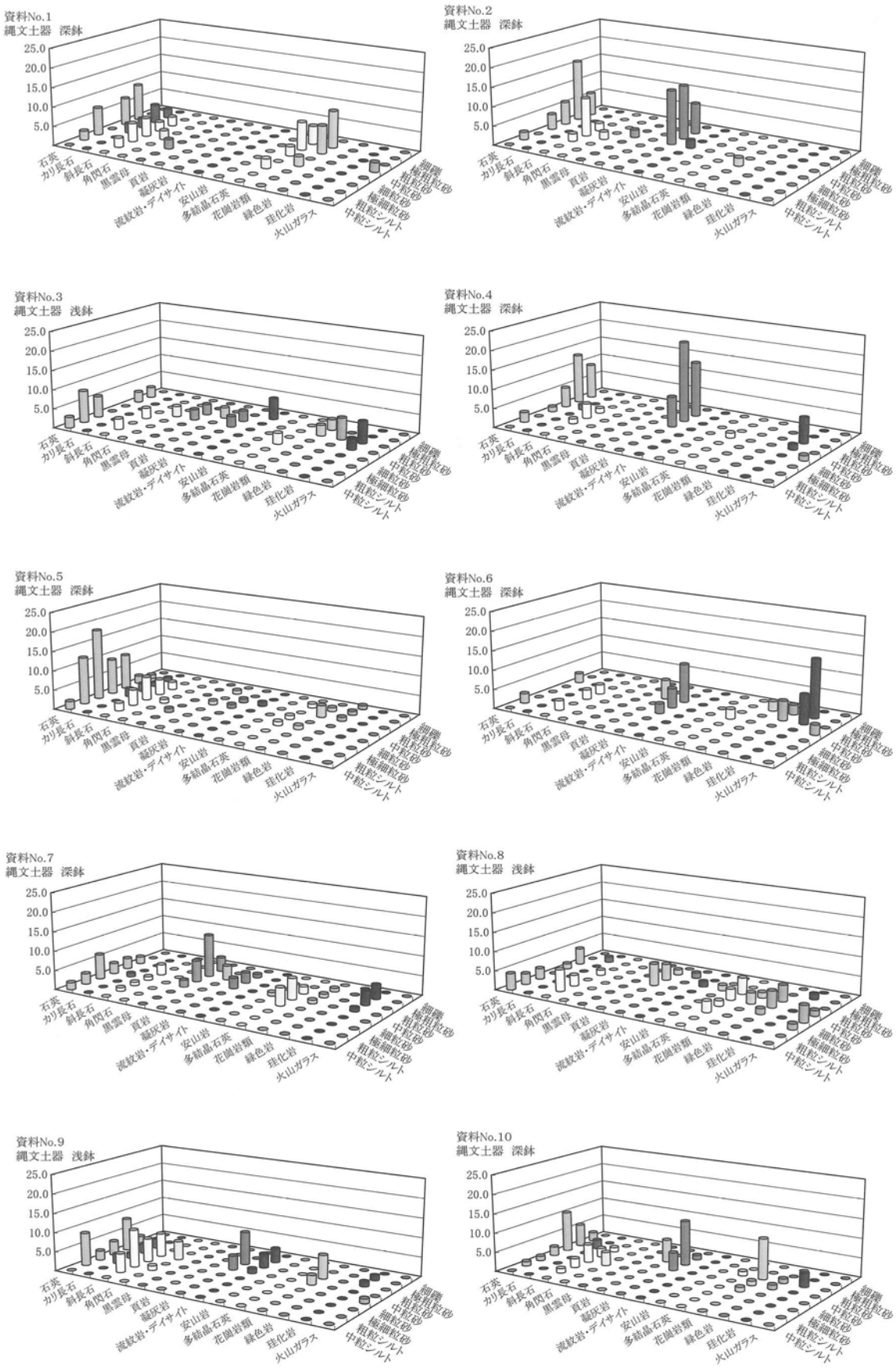
資料No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																																				合計
			鉱物片								岩石片																						その他					
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	粗面安山岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	斑れい岩	花崗斑岩	文象斑岩	石英斑岩	珪長岩	ドレライト	ホルンフェルス	千枚岩	粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	珪藻	植物珪酸体	
8	砂	細礫																																					0
		極粗粒砂		1								1	1	1								1					1			1		1							8
		粗粒砂	3									3			1		1	3	1		2					1	1	1	3	3	1							24
		中粒砂	1		1							4						2	2		2	1							3				1					17
		細粒砂																1											1				3					5
		極細粒砂	2		2													2															1					7
		粗粒シルト	2		4																																	6
		中粒シルト	3																																			3
	基質																																					328
	孔隙																																					34
9	砂	細礫																																				0
		極粗粒砂													3																	1					4
		粗粒砂	2	2										7	3				5													1					20
		中粒砂	7	2	5	4								3	1				2																			24
		細粒砂	3	1	5																												1					10
		極細粒砂	2	2	8	1																																13
		粗粒シルト	7		4																																	11
		中粒シルト																																				0
	基質																																					273
	孔隙																																					5
10	砂	細礫																																				0
		極粗粒砂	2											1																								3
		粗粒砂	5	2	1							5	1	10				1	9		2					2	1		1		2	3						45
		中粒砂	9		2						1			4					1					1					1									19
		細粒砂	2		4	3					1								1																			11
		極細粒砂	1		2																																	3
		粗粒シルト	1		1																																2	4
		中粒シルト																																			1	1
	基質																																					272
	孔隙																																					17
11	砂	細礫																																				0
		極粗粒砂												1				1																				2
		粗粒砂	3	1							3	2	1	4		1	1	3						2					1			2						24
		中粒砂	2	2					1	1	2	3	2	1	2			3											1			1						21
		細粒砂	5									1						1	2																			9
		極細粒砂	3																																			3
		粗粒シルト	4		2																																	6
		中粒シルト	2																																			2
	基質																																					105
	孔隙																																					13
12	砂	細礫																																				0
		極粗粒砂									1	1		1	2						1									1								7
		粗粒砂	2	1	1							3	4	3	1			2													1							18
		中粒砂			1							1		1				1												2								6
		細粒砂	2		3	1																																6
		極細粒砂			2																																	2
		粗粒シルト	3																																			3
		中粒シルト	1		1																																	2
	基質																																					225
	孔隙																																					19
13	砂	細礫																																				0
		極粗粒砂												1					1		1			1					1									5
		粗粒砂	2	1	2				1		1	1	3	2				6	2					1					1			1						24
		中粒砂	4		2				2	1				2	1				1										2									15
		細粒砂	2	1	2														1																			6
		極細粒砂	5		3																																	8
		粗粒シルト	1		1																																	2
		中粒シルト																																				0
	基質																																					145
	孔隙																																					6
14	砂	細礫																																				0
		極粗粒砂		1								2	1	1	1						1			1					1			1						10
		粗粒砂	10		4						2	4	2	10	3	2		3	14		4			3		3			2	1		3						70
		中粒砂	11	6	2				1			2	1	1					7		1					1			2			1						36
		細粒砂	13	5	6	1												1	7																			33
		極細粒砂	9	4	11			1										1																				26
		粗粒シルト	11	1	7																																	19
		中粒シルト	3		1																																	4
	基質																																					441
	孔隙																																					19

第５表　薄片観察結果（3）

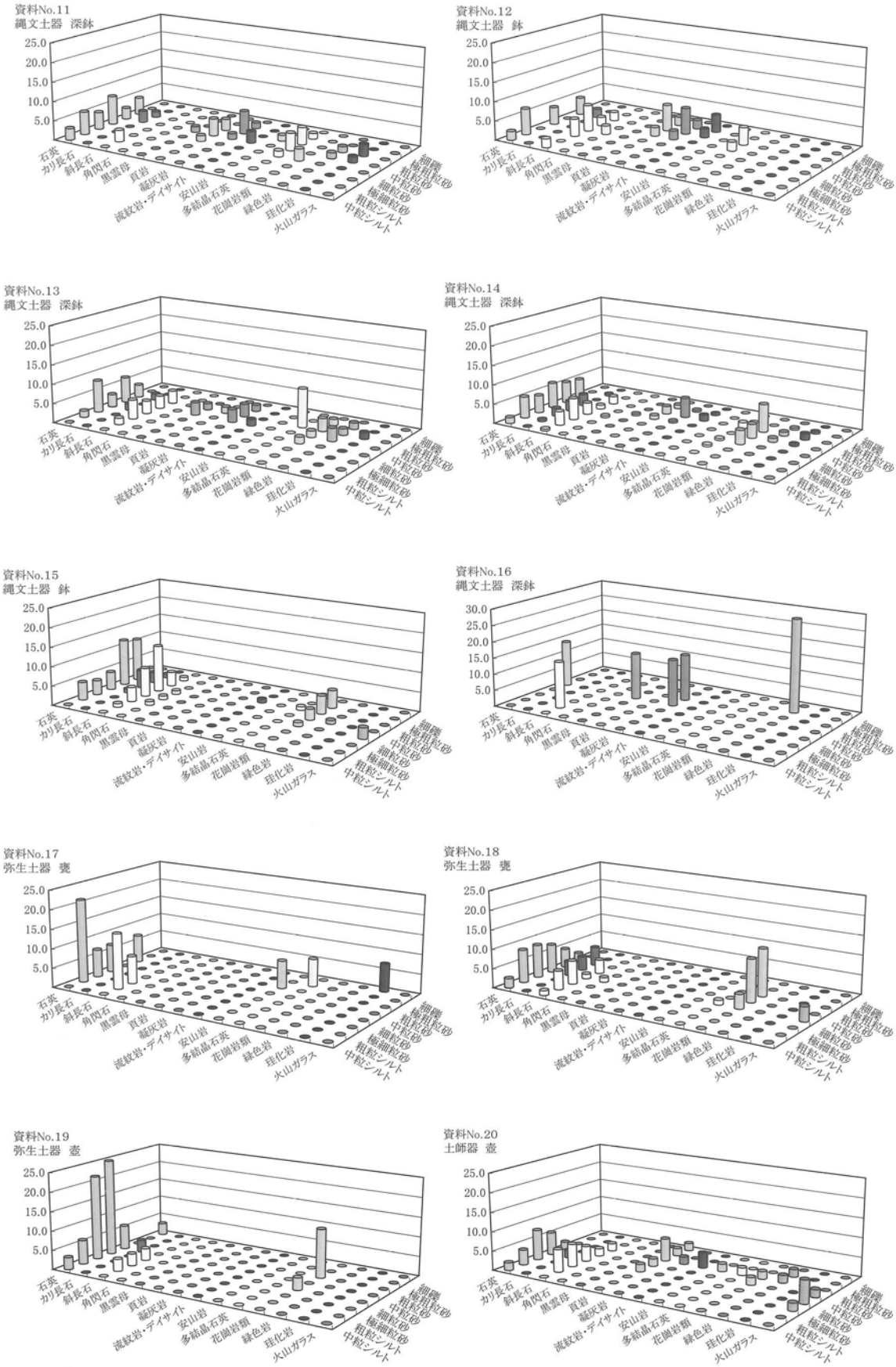
資料No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																																			合計
			鉱物片								岩石片																							その他				
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	粗面安山岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	斑れい岩	花崗斑岩	文象斑岩	石英斑岩	珪長岩	ドレライト	ホルンフェルス	千枚岩	粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	珪藻	植物珪酸体	
15	砂	細礫																1																				1
		極粗粒砂	2	1	1														5																			9
		粗粒砂	12	3	4										1			1	5																			26
		中粒砂	13	5	13	1													3										1									36
		細粒砂	5	1	8	1													1														3					19
		極細粒砂	4		4	1		1																														10
		粗粒シルト	5		1																																1	7
		中粒シルト																																				0
	基質																																					356
	孔隙																																					31
16	砂	細礫																																				0
		極粗粒砂																											2									2
		粗粒砂												1																								1
		中粒砂	1						1					1																								3
		細粒砂																																				0
		極細粒砂																																				0
		粗粒シルト			1																																	1
		中粒シルト																																				0
	基質																																					57
	孔隙																																					1
17	砂	細礫																														1						1
		極粗粒砂																1		1																		2
		粗粒砂	1														1																					2
		中粒砂									1																											1
		細粒砂	1																																			1
		極細粒砂	1		1																																	2
		粗粒シルト	3		2																																	5
		中粒シルト																																				0
	基質																																					171
	孔隙																																					4
18	砂	細礫																																				0
		極粗粒砂																																				0
		粗粒砂	2	4															10											1								17
		中粒砂	4	3	3														9																			19
		細粒砂	6	3	1	1		1										1	3														3					19
		極細粒砂	7		5																																	12
		粗粒シルト	7		4																																1	12
		中粒シルト	2		1																																	3
	基質																																					270
	孔隙																																					12
19	砂	細礫	1																																			1
		極粗粒砂																																				0
		粗粒砂																	4																			4
		中粒砂	2	1																																		3
		細粒砂	8		1														1																			10
		極細粒砂	7		1			1																														9
		粗粒シルト	2		1			1																														4
		中粒シルト	1																																			1
	基質																																					89
	孔隙																																					8
20	砂	細礫										1																										1
		極粗粒砂										1																	1									2
		粗粒砂			1						1	3	1	1	2		1	1	1										1	2								15
		中粒砂	1		1							1	1						1												2		1					8
		細粒砂	3	1	2						1	1																					3					11
		極細粒砂	4		3																												1					8
		粗粒シルト	2		3																																	5
		中粒シルト	1																																			1
	基質																																					280
	孔隙																																					5
21	砂	細礫																																				0
		極粗粒砂																																				0
		粗粒砂	2		2							2		1																								7
		中粒砂	2	2	1	1						1		1	1																		1					10
		細粒砂	3		6							3		1																			3					16
		極細粒砂			5	1																																6
		粗粒シルト	3		2																																1	6
		中粒シルト																																				0
	基質																																					184
	孔隙																																					9

第５表　薄片観察結果（4）

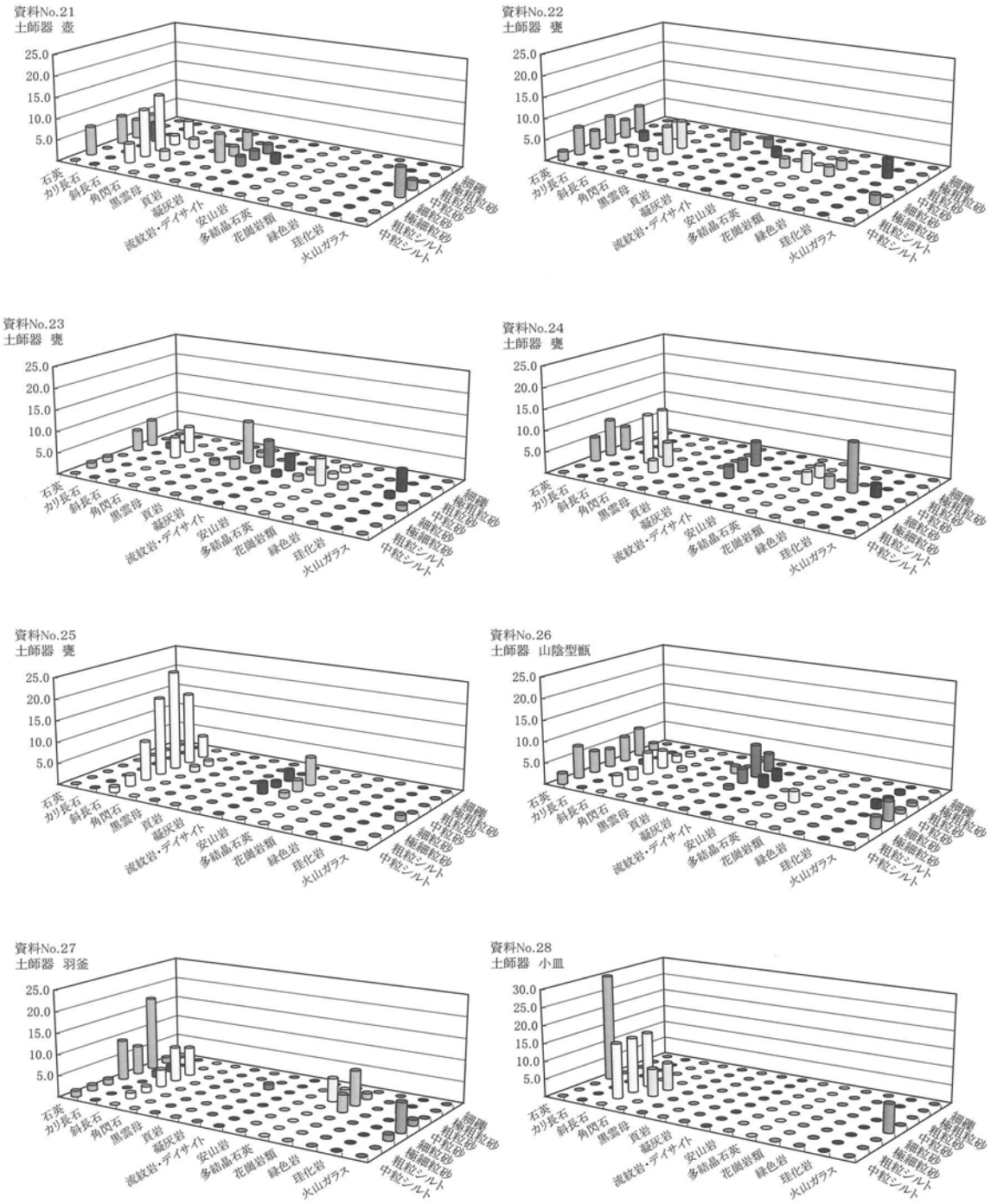
資料No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																																				合計
			鉱物片								岩石片																							その他				
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	粗面安山岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	斑れい岩	花崗斑岩	文象斑岩	石英斑岩	珪長岩	ドレライト	ホルンフェルス	千枚岩	粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	粘土塊	珪藻	植物珪酸体	
22	砂	細礫																																					0
		極粗粒砂												1																									1
		粗粒砂	3		2							2	1		1				1													2						12
		中粒砂	2	1		3											1	2	1							1					3							14
		細粒砂	3			3																																	6
		極細粒砂	2		1	1				1																							1				1	7
		粗粒シルト	3																																		1	4
		中粒シルト	1																																1			2
	基質																																						186
	孔隙																																						4
23	砂	細礫																																					0
		極粗粒砂										1						1								1												3
		粗粒砂	5	1	5							8		5	3		1	1			4					5					2	4						44
		中粒砂	4		4				1		1	2		1	1		1	5	1		1					2					2	1						27
		細粒砂																															1					1
		極細粒砂	1					1																														2
		粗粒シルト	1																																		1	2
		中粒シルト																																	2			2
	基質																																						278
	孔隙																																						6
24	砂	細礫																																					0
		極粗粒砂																																					0
		粗粒砂											2	2				1																				5
		中粒砂	2		4								1	1				1	1										4			1						15
		細粒砂	3		4	2							1	1																								11
		極細粒砂	2			1																																3
		粗粒シルト																																			1	1
		中粒シルト																																				0
	基質																																						115
	孔隙																																						3
25	砂	細礫																																					0
		極粗粒砂			4																																		4
		粗粒砂			13	1	2								2		5																						23
		中粒砂			18	1									1		2																						22
		細粒砂			14										2		1																1						18
		極細粒砂			7																																		7
		粗粒シルト			2																																		2
		中粒シルト			1																																		1
	基質																																						209
	孔隙																																						12
26	砂	細礫																																					0
		極粗粒砂	2		1								1	5																	1	1		1				12
		粗粒砂	8		2							2	2	9	3						1										1	1	1					30
		中粒砂	7	1	5	1								4	3						1											2	1					25
		細粒砂	5		6								1	1				3															5					21
		極細粒砂	6		3													1															3				1	14
		粗粒シルト	9		3																																2	14
		中粒シルト	3																																			3
	基質																																						417
	孔隙																																						15
27	砂	細礫																																					0
		極粗粒砂	1															1	1																			3
		粗粒砂	13	1	5						1			1				4	6													2						33
		中粒砂	5	1	6														3														1					16
		細粒砂	7		3																												5					15
		極細粒砂	1		1																												1					3
		粗粒シルト	1		1																																1	3
		中粒シルト	1																																			1
	基質																																						136
	孔隙																																						3
28	砂	細礫																																					0
		極粗粒砂																																					0
		粗粒砂																																					0
		中粒砂																																					0
		細粒砂	4		2	1																											1					8
		極細粒砂			2	1																																3
		粗粒シルト			2																																	2
		中粒シルト																																				0
	基質																																						37
	孔隙																																						4



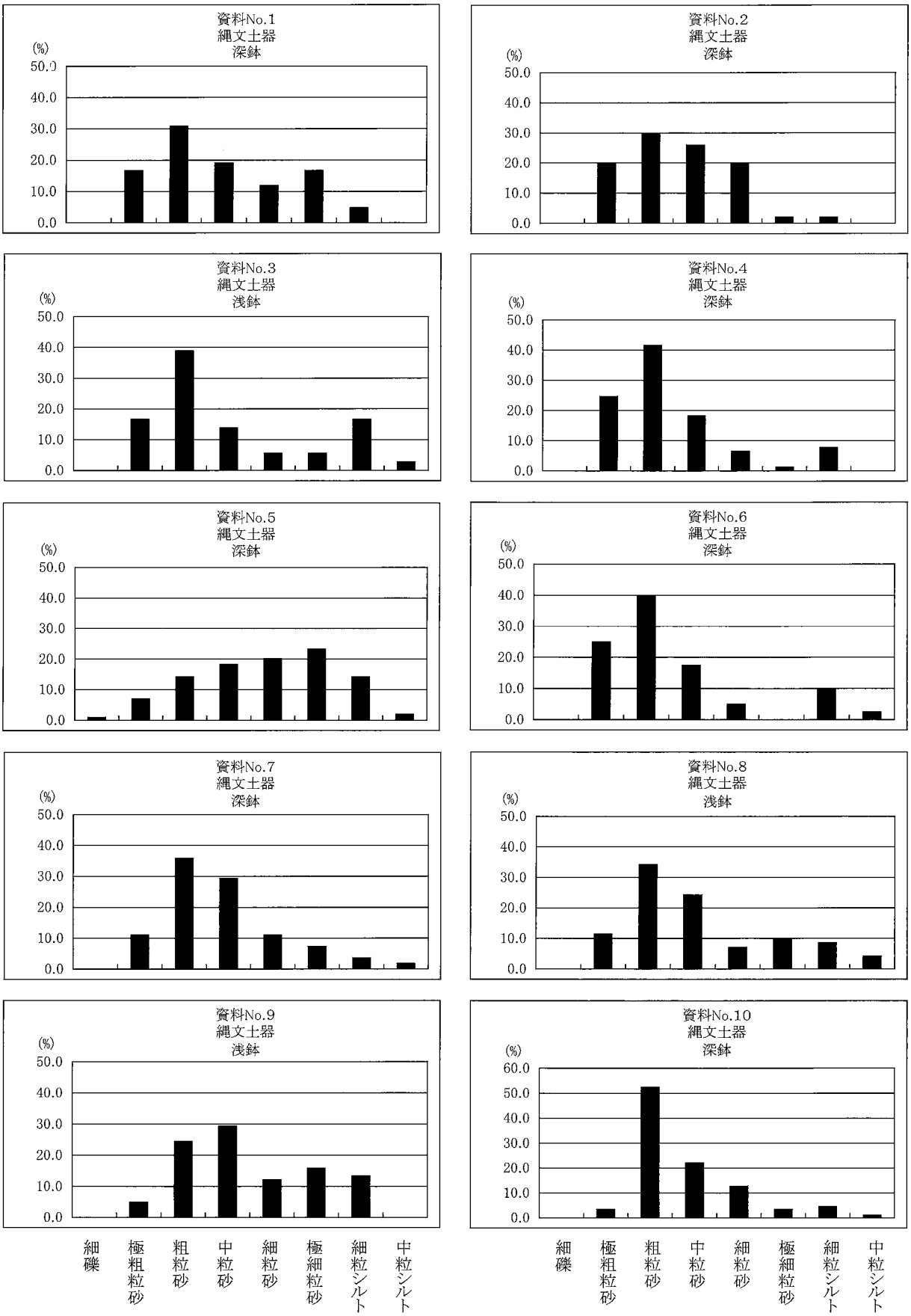
第８図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）（1）



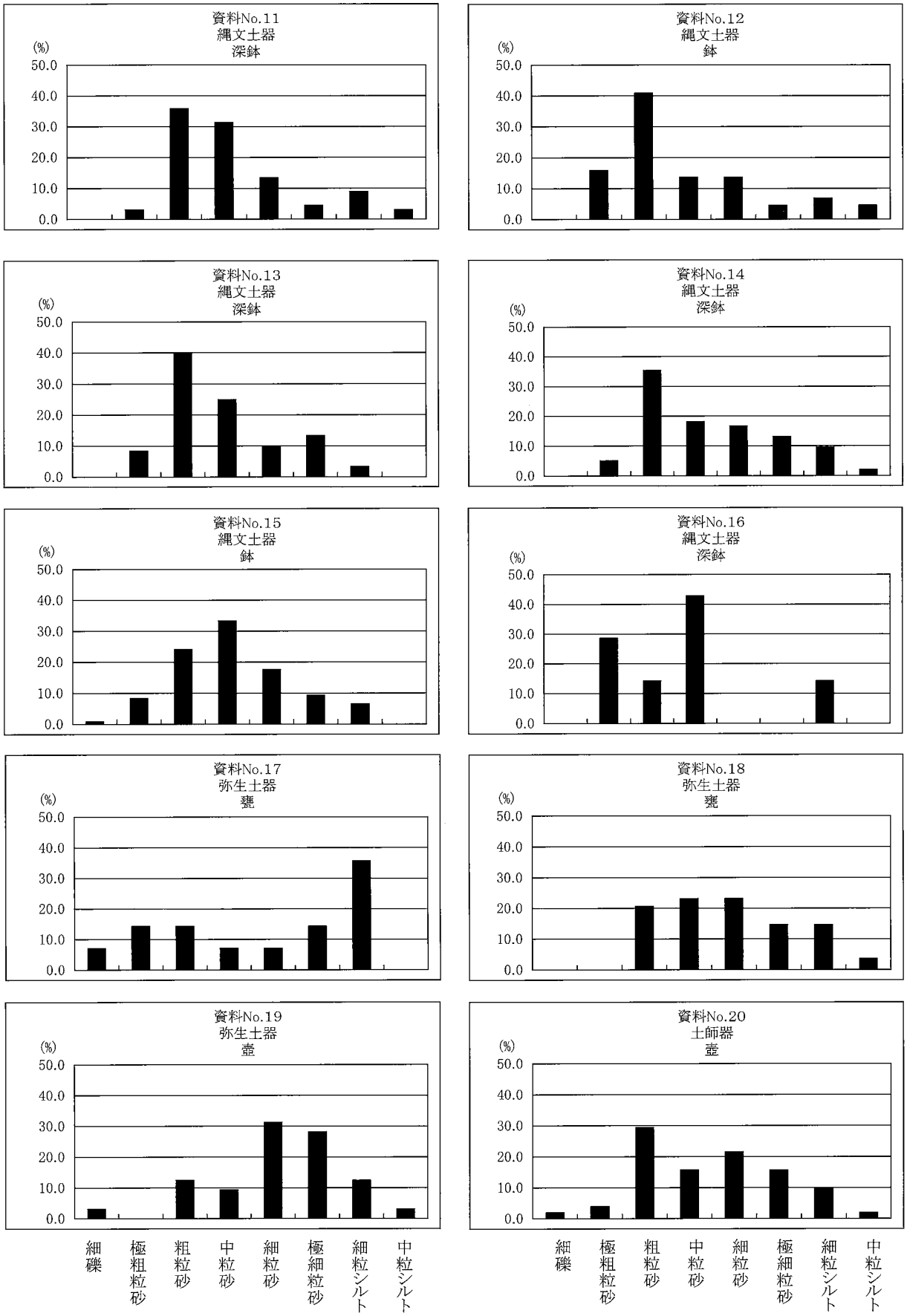
第８図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）(2)



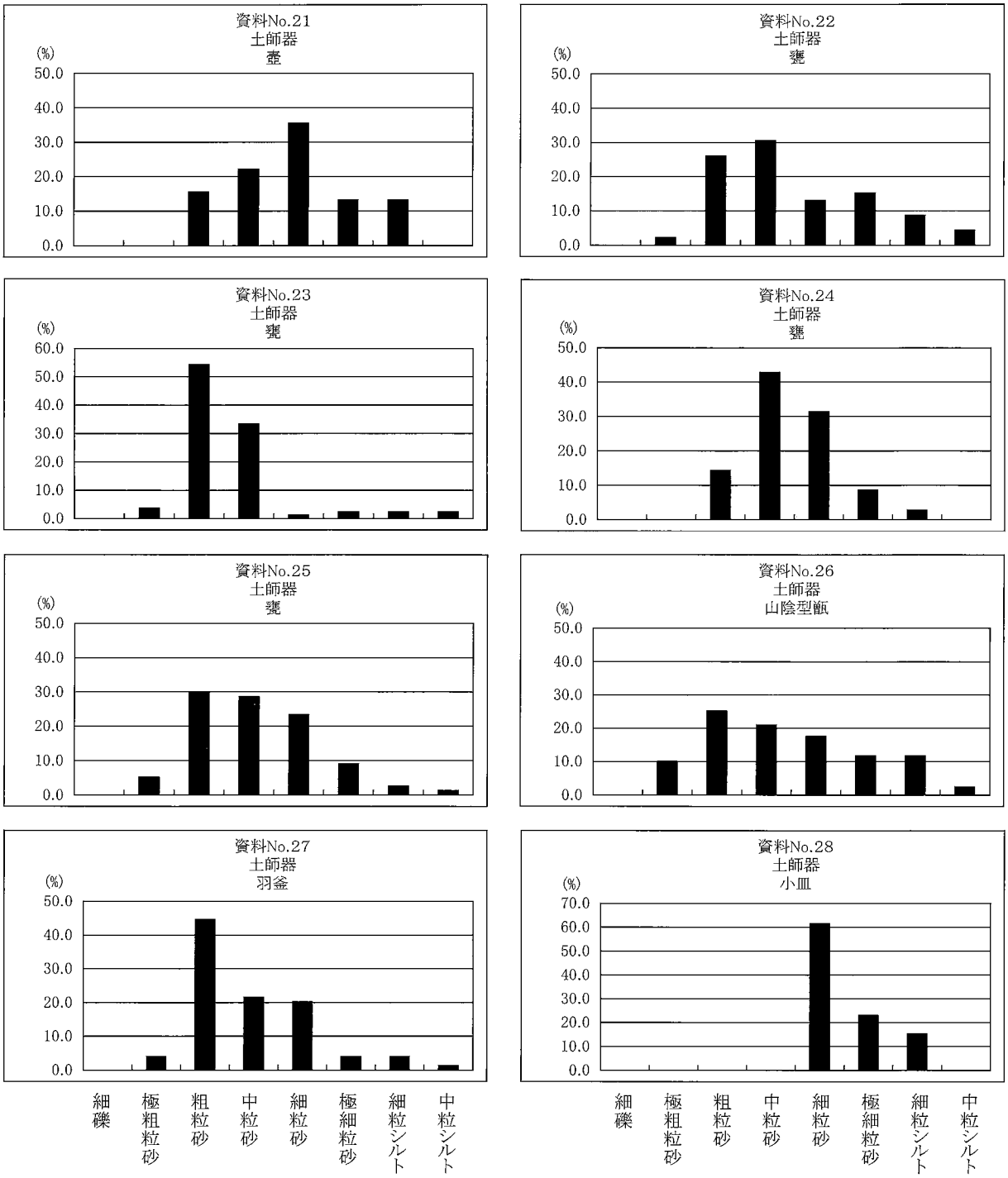
第８図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）(3)



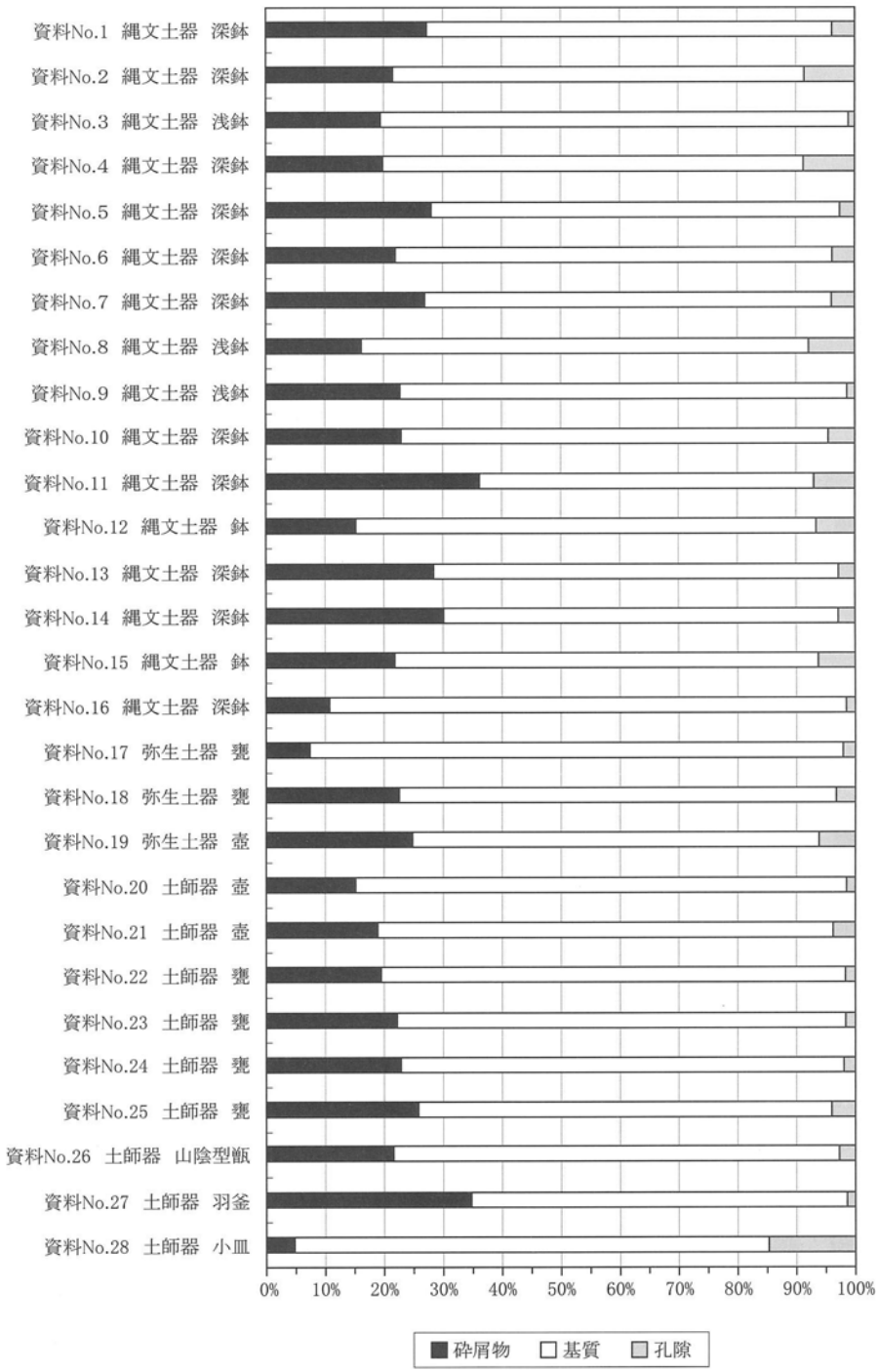
第９図　胎土中の砂の粒径組成（1）



第９図　胎土中の砂の粒径組成（2）



第９図　胎土中の砂の粒径組成（3）



第10図　砕屑物・基質・孔隙の割合

なお、資料No.16、17、28の３点は、計数された砂粒自体が少ないため、正確な胎土組成は求めることはできない。ただし、微量認められた鉱物片および岩石片は、いずれもA4類に含まれるものであることと、A4類の試料が多い傾向とから、A4類に分類される可能性があるとした。上述16点の中には、これら３点も含まれている。

今回の試料では、さらに、A類の岩石組成（堆積岩類、凝灰岩、花崗岩類）に黒雲母の鉱物片が多く含まれる組成が認められ、これをA5類とした。ただし、A5類に分類される試料は、資料No.７の１点のみであった。なお、A4類の岩石組成と比べると、流紋岩・デイサイトや緑色岩、変質岩および火山ガラス

が含まれないことや脈石英の量比が比較的高いなどの違いを指摘することができる。

Ｃ類：花崗岩類を主体とする岩石片組成はＣ類としている。これまでにＣ類については、C1～C3類に細分しているが、その分類基準となる角閃石や黒雲母の鉱物片が、今回の試料では含まれないか極めて微量であるため、細分は行わなかった。今回の試料では、資料No.１、15、18、19、27の５点がＣ類に分類された。

F1類・F2類：凝灰岩を主体とする岩石片組成はＦ類としている。今回の試料では、凝灰岩の量比が突出して多い組成をF1類とし、上述したA4類の組成から花崗岩が欠落し、凝灰岩が比較的多く含まれる組成をF2類とした。F1類は資料No.２と４の２点、F2類は資料No.12、21、26の３点である。

Ｇ類：鉱物片では斜長石が圧倒的に多く、石英は含まれない。岩石片は流紋岩・デイサイトおよび安山岩により構成される。この組成は、今回の分析で初めて認められた組成である。資料No.25の組成がそれに相当する。

粒径組成（第９図）をみると、粗粒砂をモードとする試料が多く、28点中17点の試料がそれに相当する。さらに、それらの中には、極細粒砂または粗粒シルトに第二のピークが認められる組成の試料も多く認められる。他に中粒砂をモードとする試料は４点、細粒砂をモードとする試料は３点、極細粒砂をモードとする試料は１点である。なお、前述の計数された砂粒の少ない試料３点については、粒径組成不明とした。各試料の砕屑物・基質・孔隙の割合（第10図）をみると、砕屑物の割合が20％前後の試料が多く、28点中18点になる。それ以外の試料は、30％前後を示す。ここでは、前者をⅠ類とし、後者をⅡ類とする。なお、前述の計数された砂粒の少ない試料３点については、砕屑物の割合が５～10％となったが、ここではno dataとする。以上述べた試料の胎土分類をまとめて第４表に併記する。各時期の土器胎土の状況は以下のようになる。

１）縄文土器

鉱物・岩石組成は、A4類が非常に多く、16点中10点を占める。次いでＣ類とF1類がそれぞれ２点ずつ、A5類とF2類が１点ずつという構成である。器種別にみると深鉢11点のうち、７点までがA4類であるが、資料No.１はＣ類、資料No.２と４はF1類、資料No.７はA5類に分類された。浅鉢３点は、いずれもA4類であるが、鉢２点は、資料No.12がF2類、資料No.15がＣ類に分かれた。

粒径組成では、粗粒砂にモードのある試料が非常に多く、資料No.16を除いた15点中12点を占める。さらにそのうち、５点は粗粒シルトに第二のピークを示し、３点が極細粒砂に第二のピークを示す。粗粒砂にモードのない試料のうち、資料No.５は極細粒砂にモードがあり、資料No.９、15はともに中粒砂にモードがある。ただし、資料No.９は極細粒砂に第二のピークを示す。

砕屑物の割合は、Ⅰ類が多く、資料No.16を除いた15点中９点を占め、Ⅱ類は６点である。なお、器種や鉱物・岩石組成および粒径組成の各分類と砕屑物の割合との相関性は認められない。

２）弥生土器

鉱物・岩石組成は、資料No.18と19がＣ類、資料No.17がA4類にそれぞれ分類された。なおＣ類の試料２点はいずれも弥生時代中期とされ、A4類の試料は弥生時代前期とされている。

粒径組成では、資料No.18と19はともに細粒砂をモードとする。ただし、資料No.19には粗粒砂に第二のピークが認められる。砕屑物の割合は、資料No.18と19はともにⅠ類である。

３）古墳時代土師器

鉱物・岩石組成は、A4類が多く、７点中４点を占める。他の３点は、F2類が２点、Ｇ類が１点という構成である。山陰型甑とされた資料No.26はF2類に分類された。Ｃ類は１点も認められなかった。

粒径組成では、粗粒砂にモードのある試料が多く、７点中４点を占める。ただし、これら４点と上述のA4類の４点とは一致しない。資料No.20と23の２点はA4類かつ粗粒砂にモードがあるが、残る２点のA4類である資料No.22と24はともに中粒砂にモードがある。一方、F2類の試料２点のうち、資料No.21は細粒砂にモードのある組成であるが、資料No.26は粗粒砂にモードのある組成である。さらにＧ類の資料No.25も粗粒砂にモードのある組成を示す。

砕屑物の割合は、Ｇ類の資料No.25のみⅡ類に分類され、他の試料はいずれもⅠ類に分類される。

４）中世土師器

前述したように小Ⅲの資料No.28は、計数された砂粒の数が少ないため、組成を十分に把握するに至らないが、傾向からは、A4類に分類される可能性がある。一方、羽釜の資料No.27はＣ類に分類された。また、資料No.27の粒径組成は、多くの縄文土器と同様に粗粒砂にモードのある組成（ただし第二のピークはない）であるが、その砕屑物の割合はⅡ類である。

４．考察

（１）胎土の由来する地域について

胎土中に含まれる鉱物片と岩石片の組成は、土器の材料となった粘土や砂が採取された場所の地質学的背景を示唆している。東南遺跡が立地する沖積低地を構成している砕屑物は、林田川や大津茂川によっても供給されているであろうが、河川の規模から見て、その主な供給河川は、揖保川であると考えられる。すなわち、東南遺跡周辺の堆積物は、揖保川流域に分布する地質が反映されていると考えることができる。揖保川流域に分布する地質については、山元ほか（2000）に詳しい。揖保川流域の地質のうち、東南遺跡より上流側で最も近い地質は、龍野市の的場山およびその周囲の山地を構成する地質である。的場山自体は、中生代白亜紀の黒雲母流紋岩質の火砕流堆積物からなる的場山層により構成されているが、その南側から南西部にかけての山地には、中生代ペルム紀の堆積岩からなる山崎層が分布している。この地域の山崎層を構成する主な岩石としては、砂岩、頁岩および緑色岩が記載されている。また、山崎層は、その名前が示すように、より上流の山崎町から安富町にかけての山地に広く分布しており、この地域では砂岩および頁岩により構成され、チャートの分布も認められている。的場山付近に戻ると、その北側の亀の池や新池などがある山地は、中生代白亜紀に貫入した角閃石黒雲母花崗閃緑岩により構成されており、その周縁部には揖保層とよばれる安山岩質の凝灰岩が分布している。揖保層にはまた、花崗斑岩や流紋岩・デイサイトなどの白亜紀に貫入した岩体も分布している。その上流側で、先述した山崎層の分布域よりも下流側の地域には、夢前層と呼ばれる白亜紀に堆積したデイサイト質の溶結凝灰岩類が広く分布している。

ここまでの記載により、今回の試料の胎土に多く認められたA4類の組成は、上述した揖保川流域の地質と非常によく一致することがわかる。なお、A4類に認められた変質岩や珪化岩は、鏡下の観察により、原岩が凝灰岩や流紋岩であることが識別されたものも含まれていたことから、上述した白亜紀の溶結凝灰岩などが、その後の火成活動によって地下から上昇した熱水により変質して生じた岩石に由来すると考えられる。なお、A4類の構成要素の一つとした火山ガラスについては、比較的新鮮であり、その形態が薄板状のバブル型を呈することから、第四紀更新世に噴出した広域テフラに由来する可能性がある。このようなテフラ層は、更新世に形成された段丘構成層中に狭在することが多いが、揖保川下流域や林田川および大津茂川下流域には、更新世段丘の分布は認められていない。ただし、流域の山地の小谷には更新世後期に形成されたとされている山麓緩斜面堆積物の分布が多数認められており、これらの緩斜面堆積物中あ

るいはその上位に狭在している可能性がある。

以上のことから、胎土のA4類は、東南遺跡の立地する太子町も含む揖保川下流域という地域性を示唆する可能性が高い。すなわち、A4類の胎土を示す土器は、揖保川下流域で作製された可能性が高いと考えられる。

次に、A5類の地域性については、特徴となる黒雲母の由来を考えることが手がかりとなる。前述したように的場山層は黒雲母流紋岩質の火砕流堆積物からなるが、山元ほか（2000）による岩石記載によれば、包含される黒雲母は完全に緑泥石により置換されている。また、姫路市林田町付近およびたつの市新宮町篠首付近にもそれぞれ林田層、篠首層と呼ばれる黒雲母流紋岩質の溶結凝灰岩が分布するが、これらも的場山層とほぼ同時期の地質であり、やはり岩石記載により黒雲母の緑泥石化が認められている。さらに、山元ほか（2000）が示す５万分の１地形図の「龍野」地域内（およそ揖保川から市川までの播磨平野西部の北側に分布する山地）においても、黒雲母を多産するような岩石の分布は認められない。したがって、現時点では、A5類が示す地域性を具体的に示すことはできない。今後の類例の検出を待って検討したい。

Ｃ類の特徴は花崗岩類を主体とすることである。前述したように花崗岩類の分布は、揖保川流域にもあり、また、東南遺跡に近接する桜山貯水池のある丘陵地も白亜紀の角閃石黒雲母花崗閃緑岩により構成されている。Ｃ類の地域性としては、例えば、これら花崗閃緑岩の分布する山地や丘陵地の谷内や縁辺などを想定することができる。ただし、より広い地域に広げた場合には、花崗岩類の分布は広範な地域に及ぶため、特定することはできない。

Ｆ類の地域性についても、Ｃ類と同様に考えて、その特徴である凝灰岩の分布する山地や丘陵地の谷内であるとすることができる。前述したように、凝灰岩は揖保川流域だけではなく、林田川、大津茂川、菅生川、夢前川の各河川流域に広く分布している。すなわち、Ｆ類の地域性としては、播磨平野西部の北側に分布する山地内である可能性がある。さらに、上述した河川のうち、大津茂川以外の河川は、凝灰岩の分布域の上流側に前述した山崎層の堆積岩類が分布している。このことから、F1類は大津茂川流域、F2類はそれ以外の河川流域という地域性も想定することができる。

Ｇ類の胎土は、上述した各胎土とは鉱物組成および岩石組成が大きく異なっている。石英およびカリ長石がほとんど含まれずに斜長石が卓越することと流紋岩・デイサイトおよび安山岩の岩石片が新鮮である（包有される斑晶鉱物の変質が認められない）ことから、その地質学的背景は、新第三紀～第四紀に噴出した火山岩の分布地域が推定される。このような地質は、播磨平野周辺域だけではなく兵庫県南部においても分布しないことから、Ｇ類の胎土が示す地域性は、兵庫県南部以外の地域ということになる。兵庫県全県域の地質でみると、兵庫県北部温泉町から香美町および豊岡市にかけての地域に新第三紀の流紋岩や安山岩の溶岩の分布が認められ、鳥取県との県境をなす扇ノ山は第四紀更新世の安山岩より構成されている（上村ほか，1974）。また、近畿地方という範囲では、大阪府と奈良県の境をなす生駒山地南部の信貴山から金剛山地北部の二上山にかけて新第三紀の流紋岩および安山岩が分布するのみである。さらに中国地方や四国地方あるいは中部地方にまで広げれば、新第三紀～第四紀に噴出した火山岩の分布域は多数ある。現時点ではＧ類の地域性を特定することができないが、Ｇ類の地域性の推定には、Ｇに分類された土器の他の属性（型式や形態、技法など）からの地域性の検討も必要であると考えられる。

（２）時期による胎土の違いについて

今回の分析試料における縄文土器の胎土の特徴はA4類の多いことであった。上述したA4類の地域性を考慮すれば、東南遺跡出土縄文土器のほとんどは、揖保川下流域という意味で遺跡周辺で作製されたもの

である可能性が高い。さらに、縄文土器に認められたA4類以外の胎土はＣ類およびＦ類であり、これらの粒径組成は、A4類の胎土と類似するものが多かった。このことから、少数混在するA4類以外の縄文土器も、せいぜい数km程度離れた地域からの移動であった可能性があると考えられる。なお、今回の結果からは、深鉢と浅鉢との間で製作事情が異なっていたような状況は窺えないが、鉢については、２点ともにA4類ではなかったことから、他の器種とは何らかの事情の違いがあった可能性がある。

弥生土器は、今回の試料数は３点のみであることから、縄文土器のような胎土の傾向を捉えることはできない。今回の分析結果ではA4類とＣ類が認められたが、東南遺跡出土の弥生土器全体では、いずれの胎土が多いかによって、縄文土器とは異なるあるいは同様の製作事情のいずれかが推定される。また、今回の試料では、弥生時代前期の土器はA4類、中期の土器はＣ類であったが、このような弥生時代の中での時期による胎土の違いについても確認する必要がある。なお、弥生土器試料胎土の粒径組成は、２点のみであるが、いずれも細粒砂にモードがあり、粗粒砂にモードのある縄文土器胎土とは明瞭に異なっている。これは、弥生土器と縄文土器の材質の違いを表している可能性があり、今後の分析例における課題とも言える。

古墳時代の土師器では、A4類の胎土がＣ類およびＦ類をやや上回る状況が認められ、縄文土器の事情に近いことが推定される。ただし、明らかに播磨平野域外から搬入されたことを示すＧ類の胎土の土器も確認され、当該期における生業活動の範囲を示唆する可能性があり、今後の類例検出が期待される。胎土の粒径組成については、縄文土器と類似する粗粒砂にモードのある組成を示す試料が多く、上述した弥生土器では縄文土器との間に違いが認められることと対照的である。甕と壺という器種間の胎土の差異は、それほど明瞭ではなく、これについても傾向を把握するためには、分析例の蓄積を要すると言える。ただし、山陰型甑とされた試料がA4類ではなかったことは、他のA4類の土師器とは製作事情が異なっていたことを示唆する可能性がある。

中世の土師器については、２点のみの分析であり、胎土の傾向を捉えることはできない。中世土師器におけるこれまでの胎土分析例では、器種と胎土との関連性が示唆されることが多いが、今回の場合も小皿と羽釜で異なる組成が指摘された。小皿が遺跡周辺を示すA4類であり、羽釜が遺跡周辺とはいえないＣ類であることも、それぞれの事情の違いを示唆している可能性がある。

以上、今回の胎土分析から得られた各時期における土器の事情は、東南遺跡で検出された各時期における集落に関わる重要な資料の一つになり得ると考える。

引用文献

上村不二雄・坂本　亨・山田直利・猪木幸男，1974，20万分の１地質図幅「鳥取」．地質調査所．

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高，1999，瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－．日本文化財科学会第16回大会発表要旨集，120-121.

山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和，2000，龍野地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１図幅），地質調査所，66p.

第４節　東南遺跡出土石材の石種と採取地

奥田　　尚

揖保郡太子町鵤に位置する東南遺跡の27地点から出土した拳大から人頭大の石材44点の石種を肉眼で観察した。同じ地点から複数の石材が出土している場合はそれぞれの石を区別するためにａ～ｄの番号をつけた。石材の観察結果と石材の採取推定地について述べる。

１．石材の石種

観察した石種は斑糲岩，ひん岩Ａ～Ｅ、流紋岩Ａ～Ｂ、安山岩、石英安山岩Ａ～Ｅ、輝石安山岩Ａ～Ｄ、流紋岩質溶結凝灰岩Ａ～Ｃ、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ａ～Ｄ、石英安山岩質溶結凝灰岩Ａ～Ｆ、石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ａ～Ｃ、安山岩質溶結凝灰岩Ａ～Ｂ、安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、安山岩質凝灰岩である。これら石種の特徴について述べる。観察した資料に同種の石材がある場合は岩相を記載した資料を太字とした。

斑糲岩：資料番号 1030 色は暗褐色で、粒形が亜円、割り石である。長石・輝石・橄欖石が噛み合っている。長石は灰白色、短柱状、粒径が0.5～8㎜、量が多い。輝石は淡茶色、黒色で、粒径が0.5～8㎜、量が多い。橄欖石は淡黄土色、粒径が0.5～1㎜、量が僅かである。

ひん岩Ａ：資料番号 1021-ｄ 色は淡灰緑色で、粒形が亜円である。斑晶鉱物は長石、輝石である。長石は灰白色、粒径が0.2～8㎜、量が非常に多い。輝石は暗緑色、粒径が0.3～6㎜、量が中である。石基はガラス質である。

ひん岩Ｂ：資料番号 1016 色は灰緑色で、粒形が円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている部分が多く、微かに石基がみられる部分がある。長石は灰白色、粒径が0.5～10㎜、量が多い。角閃石は黒色、柱状で、粒径が1～10㎜、量がごく僅かである。輝石は暗緑色、粒状で、粒径が0.2～10㎜、量が多い。石基はガラス質である。

ひん岩Ｃ：資料番号 1019-ａ 色は灰緑色で、粒形が円である。斑晶鉱物は長石、黒雲母、輝石である。長石は灰白色、粒径が0.2～8㎜、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.2～1㎜、量がごくごく僅かである。輝石は暗緑色、粒径が0.5～8㎜、量が中である。石基はガラス質である。

ひん岩Ｄ：資料番号 1019-ｂ 色は淡灰緑色で、粒形が亜角である。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は灰白色、粒径が0.5～8㎜、量が非常に多い。輝石は黒色と青銅色透明のものがある。黒色の輝石は、短柱状で、粒径が0.5～8㎜、量が中である。青銅色透明の輝石は、柱状で、粒径が0.5～1㎜、量がごくごく僅かである。石基はガラス質、やや粒状である。

ひん岩Ｅ：資料番号 1031-ａ 色は灰緑色で、粒形が円である。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は灰白色で、粗粒と中粒のものがある。粗粒の長石は、短柱状で、粒径が1～12㎜、量が中である。中粒の長石は、柱状で、粒径が0.2～0.7㎜、量が非常に多い。輝石は黒色と灰緑色のものがある。黒色の輝石は、粒状で、粒径が0.2～0.3㎜、量がごく僅かである。灰緑色の輝石は、短柱状で、粒径が0.2～0.3㎜、量が非常に多い。石基はガラス質である。

流紋岩Ａ：資料番号 1007 色は淡茶色で、粒形が円である。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母？である。石英は無色透明、粒径が0.1～1㎜、量がごく僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものが

多い。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.3～1㎜、量が僅かである。黒雲母？は、黒色、板状で、粒径が0.1㎜、量が僅かである。石基はガラス質である。

流紋岩Ｂ：資料番号 1029 色は淡茶灰色、粒形が円、割り石である。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.2～0.3㎜、量が非常に多い。長石は灰白色、粒径が0.2～0.3㎜、量が中である。黒雲母は、黒色、板状で、粒径が0.5～5㎜、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

安山岩：資料番号 1024-ａ 色は淡灰緑色で、粒形が亜角である。斑晶鉱物は長石、黒雲母である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.2～3㎜、量が非常に多い。長石の核に青銅色や黒色の輝石があるものがある。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が0.5～1㎜、量がごくごく僅かである。石基はガラス質である。

石英安山岩Ａ：資料番号 1026 色は赤茶色で、粒形が亜円である。一見、砂岩のようにみえる。斑晶鉱物は石英、長石、輝石である。石英は無色透明、赤褐色透明で、粒状、粒径が0.2～0.7㎜、量が中である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.2～1㎜、量が非常に多い。輝石は黒色、粒状で、粒径が0.1㎜、量がごくごく僅かである。石基はガラス質である。

石英安山岩Ｂ：資料番号 1005-ａ 色は赤茶色で、粒形が亜円である。斑晶鉱物は石英、長石、輝石である。石英は無色透明、粒径が0.2～0.3㎜、量がごく僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒径が0.2～1㎜、量が多い。輝石は黒色、粒状で、粒径が0.1～0.2㎜、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

石英安山岩Ｃ：資料番号 1021-ｂ 色は灰白色で、粒形が亜円である。斑晶鉱物は石英、長石、輝石である。石英は無色透明、粒径が0.2～5㎜、量が僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.2～7㎜、量が非常に多い。輝石は暗緑色、粒状で、粒径が0.5～6㎜、量が中である。石基はガラス質、やや粒状である。

石英安山岩Ｄ：資料番号 1002、**1003**、1004、1009、1011 色は灰色、淡灰緑色、灰緑色で、粒形が亜角、亜円、円である。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母、輝石である。石英は無色透明、粒径が0.5～1.5㎜、量がごく僅かである。長石は灰白色、粒径が0.2～７㎜、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が１～6㎜、量が中である。黒雲母の中に角閃石が核としてみられるものがある。輝石は暗緑色、粒状で、粒径が0.5～2㎜、量が僅かである。石基はガラス質である。

石英安山岩Ｅ：資料番号 1035-ｂ 色は灰色で、粒形が円である。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母、輝石である。石英は無色透明、粒径が0.2～0.5㎜、量が中である。長石は灰白色、粒径が１～6㎜、量が非常に多い。黒雲母は暗灰色、粒状で、粒径が0.5～2㎜、量が僅かである。輝石は暗緑色、粒径が１～6㎜、量が多い。石基はガラス質である。

輝石安山岩Ａ：資料番号 1014-ａ 色は淡茶褐色で、粒形が亜円である。割れた破片である。斑晶鉱物は長石、黒雲母？、輝石である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が1～6㎜、量が非常に多い。黒雲母？は茶色、板状で、粒径が0.1㎜、量が非常に多い。輝石は茶褐色、黒色、粒状で、粒径が0.2～0.5㎜、量が僅かである。石基はガラス質である。

輝石安山岩Ｂ：資料番号 **1022-ｃ**、1022-ｄ 色は暗灰色で、粒形が亜角である。縞模様がある。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.1～0.2㎜、量が非常に多い。輝石は黒色、短柱状、粒径が0.1㎜、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

輝石安山岩Ｃ：資料番号 1012 色は灰色で、粒形が亜角である。輝石安山岩質凝灰岩の円形をなす捕獲岩を含む。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は灰白色、粒状で、粒径が0.2～2㎜、量が中である。輝石は暗灰緑色で、短柱状、粒径が0.2～1㎜、量が多い。石基はガラス質である。

輝石安山岩Ｄ：資料番号 1021-ａ 色は茶褐色で、粒形が亜円である。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.3～1.5㎜、量が多い。輝石は青銅色透明と黒色のものがある。青銅色透明の輝石は、短柱状、粒径が0.5～1㎜、量が僅かである。黒色の輝石は、短柱状、粒径が0.2～4㎜、量が多い。石基はガラス質である。

流紋岩質溶結凝灰岩Ａ：資料番号 1022-ａ 色は褐色で、粒形が亜円である。顕著な溶結を示す。構成粒は火山ガラス、長石である。火山ガラスは無色透明、貝殻状で、粒径が0.3～0.5㎜、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.2～0.3㎜、量が多い。砕けているものが多い。基質はガラス質である。

流紋岩質溶結凝灰岩Ｂ：資料番号 1022-ｂ 色は灰色で、粒形が角である。顕著な溶結を示す。構成粒は球顆、長石である。白色の球顆が多くみられる。球顆の粒径は1～5㎜、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5～10㎜、量が多い。融蝕されて、周囲が不鮮明になっているものもある。基質はガラス質である。

流紋岩質溶結凝灰岩Ｃ：資料番号 1001、**1014-ｃ** 色は灰緑色で、粒形が亜円、円である。顕著な溶結を示す。構成粒は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.3～6㎜、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒径が0.3～2㎜、量が非常に多い。融蝕されて、微かに円くなっているものもある。黒雲母は灰緑色、板状で、粒径が0.2～1㎜、量がごくごく僅かである。基質はガラス質である。

流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ａ：資料番号 1023 色は淡灰緑色で、粒形が亜角である。顕著な溶結を示す。構成粒は流紋岩、長石である。流紋岩は灰白色、灰色、暗灰色、淡茶色で、粒形が亜角、亜円、粒径が2～15㎜、量が中、石基がガラス質である。長石は灰白色、粒径が0.2～8㎜、量が多い。短柱状の自形を示すものが多い。基質はガラス質である。

流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｂ：資料番号 1019-ｄ 色は淡灰緑色で、粒形が亜角である。顕著な溶結を示す。構成粒は流紋岩、長石、黒雲母である。流紋岩は暗灰色、灰色、灰白色で、粒形が角、亜角、粒径が２～10㎜、量が多く、石基がガラス質である。長石は灰白色、粒径が0.2～3㎜、量が多い。短柱状の自形を示すものが多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.2～1㎜、量が僅かである。基質はガラス質である。

流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｃ：資料番号 1024-ｂ 色は淡灰緑色で、割り石である。顕著な溶結を示す。構成粒は流紋岩、石英、長石、黒雲母である。流紋岩は灰色、灰白色で、粒形が亜円、円、粒径が5～15㎜、量が僅かで、石基がガラス質である。石英は無色透明、粒径が0.3～8㎜、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒径が0.2～5㎜、量が多い。短柱状の自形を示すものが多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が0.5～1.5㎜、量が僅かである。基質はガラス質である。

流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｄ：資料番号 1035-ａ 色は淡灰緑色で、粒形が亜角である。顕著な溶結を示す。構成粒は流紋岩、石英、長石である。流紋岩は灰白色、黒色で、円状やレンズ状をなし、ちぎれたようなものが多く、石基がガラス質である。灰白色の流紋岩は、粒径が0.5～10㎜、量が多い。黒色の流紋岩はちぎれたようなレンズ状をなすものが多く、粒径が0.5～10㎜、量が中である。石英は無色透明、粒径が0.2～1㎜、量が僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒径が0.2～0.5㎜、量が僅かである。基質はガラス質である。

石英安山岩質溶結凝灰岩Ａ：資料番号 1010 色は淡灰緑色で、粒形が亜角である。顕著な溶結を示す。構成粒は石英、長石、輝石である。石英は無色透明、粒径が0.2～6㎜、量が中である。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、粒径が0.1～2㎜、量が多い。輝石は黒色透明、灰緑色

透明、粒状で、粒径が0.1～0.2㎜、量がごくごく僅かである。基質はガラス質である。

石英安山岩質溶結凝灰岩Ｂ：資料番号 1018 色は淡灰緑色で、板状節理が顕著な割り石である。顕著な溶結を示す。構成粒は石英、長石、輝石である。石英は無色透明、粒径が0.2～8㎜、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、柱状で、粒径が0.2～6㎜、量が多い。輝石は黒色、粒状で、粒径が0.2～1㎜、量が僅かである。基質はガラス質である。

石英安山岩質溶結凝灰岩Ｃ：資料番号 1031-ｂ 色は灰白色、割り石である。顕著な溶結を示す。構成粒は輝緑岩、石英、長石、輝石である。輝緑岩は暗緑色で、粒形が円、粒径が30㎜である。石英は無色透明、粒径が0.5～2㎜、量が僅かである。砕けているものが多い。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.2～10㎜、量が非常に多い。輝石は暗緑色、柱状で、粒径が0.1～8㎜、量が中である。基質はガラス質である。

石英安山岩質溶結凝灰岩Ｄ：資料番号 1019-ｃ 色は淡灰緑色で、粒形が円である。顕著な溶結を示す。構成粒は石英、長石、黒雲母、輝石である。石英は無色透明、粒径が0.2～12㎜、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.2～5㎜、量が多い。黒雲母は茶褐色、金色で、粒径が0.3～1㎜、量が僅かである。輝石は茶褐色、黒色で、粒径が0.2～0.5㎜、量がごく僅かである。基質はガラス質である。

石英安山岩質溶結凝灰岩Ｅ：資料番号 1033 色は淡茶灰色、粒形が円、割り石である。顕著な溶結を示す。構成粒は流紋岩、長石、輝石、橄欖石である。流紋岩は灰白色、粒形が亜角、粒径が0.5～2㎜、量が僅か、石基がガラス質である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.2～1.5㎜、量が僅かである。輝石は黒色、粒径が0.2～1.5㎜、量が僅かである。橄欖石は淡黄土色で、粒径が0.1～0.2㎜、量がごくごく僅かである。基質はガラス質である。

石英安山岩質溶結凝灰岩Ｆ：資料番号 1032-ｂ 色は褐色で、粒形が亜角である。顕著な溶結を示す。白色や茶褐色で、長径が３～30㎜の楕円形の粒が一定の方向に並ぶ。白色粒には石英や長石、茶褐色粒には輝石が多く含まれる。構成粒は石英、長石、輝石である。石英は無色透明、粒径が0.1～0.2㎜、量が中である。長石は灰白色、粒状で、粒径が0.1～0.2㎜、量が多い。輝石は黒色、粒径が0.1～0.2㎜、量が中である。基質はガラス質である。

石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ａ：資料番号 1014-ｂ 色は淡青灰色で、割り石である。顕著な溶結を示す。構成粒は流紋岩、石英、長石、輝石である。流紋岩は灰緑色、灰白色で、粒形が亜円、円、粒径が２～10㎜、量が僅か、石基がガラス質である。石英は無色透明、粒径が0.2～0.5㎜、量がごくごく僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。長石は灰白色、粒径が0.2～2㎜、量が多い。短柱状の自形を示すものが多い。輝石は暗緑色、黒色で、短柱状、粒径が0.2～1㎜、量が多い。基質はガラス質である。

石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｂ：資料番号 1021-ｃ 色は灰白色で、粒形が亜角である。顕著な溶結を示す。構成粒は流紋岩、石英、長石、輝石である。流紋岩は灰白色で、粒形が亜円、粒径が6～20㎜、量がごくごく僅か、石基がガラス質である。石英は無色透明、粒径が0.2～3㎜、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。長石は灰白色、粒径が0.2～1㎜、量が多い。短柱状の自形を示すものが多い。輝石は黒色、短柱状で、粒径が0.5～1㎜、量が僅かである。基質はガラス質である。

石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｃ：資料番号 1028 色は淡灰緑色で、粒形が亜角である。顕著な溶結を示す。構成粒は流紋岩、石英、長石、輝石である。流紋岩は灰白色で、粒形が角、粒径が2～10㎜、量が中である。石英は無色透明、粒径が0.2～0.7㎜、量が僅かである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。長石は灰白色、粒径が0.5～2㎜、量が非常に多い。短柱状の自形を示すものが多

い。輝石は黒色、短柱状で、粒径が0.5～2㎜、量が僅かである。基質はガラス質である。

安山岩質溶結凝灰岩Ａ：資料番号 1032-ａ 色は淡茶褐色で、粒形が円である。溶結を示す。構成粒は長石、輝石である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.2～3㎜、量が多い。輝石は黒色、短柱状で、粒径が0.2～3㎜、量が中である。基質はガラス質で、やや粒状である。

安山岩質溶結凝灰岩Ｂ：資料番号 1013 色は淡赤褐色で、粒形が亜円である。顕著な溶結を示す。構成粒は長石、白雲母、輝石である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が0.1～0.2㎜、量が中である。白雲母は無色透明、板状で、粒径が0.2㎜、量が僅かである。輝石は黒色、粒状で、粒径が0.1～0.2㎜、量がごく僅かである。基質はガラス質である。

安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩：資料番号 1005-ｂ 色は灰緑色で、粒形が円である。顕著な溶結を示す。構成粒は凝灰岩、角閃石、輝石である。凝灰岩は灰緑色、灰白色で、粒形が亜円、粒径が２～6㎜、量が僅かである。角閃石は黒色、粒径が0.3～2㎜、量が多い。短柱状の自形を示すものが多い。輝石は青灰緑色と黒色透明のものがある。青灰緑色の輝石は、柱状、粒径が1㎜、量がごくごく僅かである。黒色透明の輝石は、粒状、粒径が0.2～1㎜、量が僅かである。基質はガラス質である。

第６表　分析資料一覧

遺構名	資料番号
1区1W SH401	流紋岩質溶結凝灰岩C：(資料番号　1001)
1区2E SK407	石英安山岩D：(資料番号　1002)
1区2W SK409	石英安山岩D：(資料番号　1003)
1区2W SK412	石英安山岩D：(資料番号　1004)
1区2W SK506	石英安山岩B：(資料番号　1005-a)・安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩：(資料番号　1005-b)
1区3E SK417	流紋岩A：(資料番号　1007)
1区3W SK434	石英安山岩D：(資料番号　1009)
1区3W SK513	石英安山岩質溶結凝灰岩A：(資料番号　1010)
1区3W SK500	石英安山岩D：(資料番号　1011)
1区4E SK425	輝石安山岩C：(資料番号　1012)
1区4E SK504	安山岩質溶結凝灰岩B：(資料番号　1013)
1区4W SK422	輝石安山岩A：(資料番号　1014-a)・流紋岩質溶結凝灰岩C：(資料番号　1014-c)・石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩A：(資料番号　1014-b)
1区4W SK503	ひん岩B：(資料番号　1016)
1区4W SK514	石英安山岩質溶結凝灰岩B：(資料番号　1018)
1区5E SK437	ひん岩C：(資料番号　1019-a)・ひん岩D：(資料番号　1019-b)・流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩B：(資料番号　1019-d)・石英安山岩質溶結凝灰岩D：(資料番号　1019-c)
1区5E SK433	安山岩質凝灰岩：(資料番号　1020)
1区5E SK436	ひん岩A：(資料番号　1021-d)・石英安山岩C：(資料番号　1021-b)・輝石安山岩D：(資料番号　1021-a)・石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩B：(資料番号　1021-c)
1区5W SK440	輝石安山岩B：(資料番号　1022-c, 1022-d)・流紋岩質溶結凝灰岩A：(資料番号　1022-a)・流紋岩質溶結凝灰岩B：(資料番号　1022-b)
1区5W SK441	流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩A：(資料番号　1023)
1区5W SK515	安山岩：(資料番号　1024-a)・流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩C：(資料番号　1024-b)
1区6E SK445	石英安山岩A：(資料番号　1026)
1区6W SK516	石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩C：(資料番号　1028)
1区6W SK449	流紋岩B：(資料番号　1029)
1区7W SK465	斑糲岩：(資料番号　1030)
1区7W SK450	ひん岩E：(資料番号　1031-a)・石英安山岩質溶結凝灰岩C：(資料番号　1031-b)
1区7W SK451	石英安山岩質溶結凝灰岩F：(資料番号　1032-b)・安山岩質溶結凝灰岩A：(資料番号　1032-a)
1区7W SK528	石英安山岩質溶結凝灰岩E：(資料番号　1033)
1区7W SK457	石英安山岩E：(資料番号　1035-b)・流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩D：(資料番号　1035-a)

安山岩質凝灰岩：資料番号 1020 色は淡赤茶色で、粒形が亜円である。構成粒は火山ガラス、長石、輝石である。火山ガラスは無色透明、貝殻状で、粒径が0.3～0.5㎜、量が非常に多い。長石は灰白色、粒径が0.5～1.5㎜、量が中である。短柱状の自形を示すものが多い。輝石は褐色、粒状、粒径が0.1～0.2㎜、量がごく僅かである。基質はガラス質である。

２．石材の採取地

観察した石材の石種は、斑糲岩、ひん岩、石英安山岩、石英安山岩質溶結凝灰岩、安山岩質溶結凝灰岩、安山岩質凝灰岩で、深成岩の斑糲岩を除けば、他は火山起源の岩石である。岩相的には、火山起源の岩石に石英、長石、輝石を含む石英安山岩や火砕流堆積物が多い。このような岩相を示す岩石は、山陽地方に広く分布する中生代白亜紀後期に噴出した火山岩や火砕流堆積物に似ている。たつの市から三田市にかけての付近には、白亜紀後期に噴出した火砕流堆積物が広く分布する。岩石の分布と岩相をもとに東南遺跡近くの河川の川原石を中心に出土石材の岩相と比較して、出土石材の採石地を推定する。石材の岩相が同じで、出土地に近い場所を採石地とする。

出土した石材は自然面が認められ、粒形が亜角～亜円を示すものが多く、河原石を多く採石されたと推定される。東南遺跡の西方には揖保川、林田川、東方には夢前川、市川がある。これらの川原でみられる礫の岩相と出土石材の岩相を比較し、これらの河川で採取できない石材については、遺跡に近い場所で採石できる地を推定する。河川にみられる石種を出土石材と比較するために、ひとつ一つの石種の岩相を記述すれば文書量が膨大なものなるためにここでは省略し、石種のみの記述とする。また、河川の石を統計的に処理できる量（300～500個）を観察していない。河川礫を観察した場所と石種について述べる。

揖保川：たつの市誉田　新龍野橋上流揖保川右岸の河原　河原石は亜角～亜円で、海岸にみられるような左右対称で扁平な円礫はみられない。拳大から人頭大の大きさの石種とその岩相について河原で観察した。石種は、斑糲岩、ひん岩、流紋岩、石英安山岩、輝石安山岩、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、安山岩質溶結凝灰岩、安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、石英質片岩、輝石片岩などである。

林田川：姫路市口佐見　林田川右岸の河原　河原石は亜角～亜円で、海岸にみられるような左右対称で扁平な円礫はみられない。礫の表面に付着物が多く、束子でこすると付着物がとれた。観察した石種は、ひん岩、流紋岩、石英安山岩、輝石安山岩、流紋岩質溶結凝灰岩、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、石英安山岩質溶結凝灰岩、石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、細粒砂岩、砂質片岩などである。

夢前川：姫路市玉田　夢前川右岸の河原　河原石は亜角～亜円で、海岸にみられるような左右対称で扁平な円礫はみられない。礫の表面に付着物が多く、束子でこすっても付着物がややとれにくい状態であった。観察した石種は、ひん岩、流紋岩、球夥流紋岩、石英安山岩、流紋岩質溶結凝灰岩、流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、石英安山岩質溶結凝灰岩、流紋岩質火山礫凝灰岩、石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、細粒砂岩、頁岩、砂質片岩、玄武岩質凝灰岩質片岩などである。

市川：姫路市香寺町犬飼　犬飼河川公園東側の市川右岸河原　河原石は亜角～亜円で、海岸にみられるような左右対称で扁平な円礫はみられない。礫の表面に付着物が多く、束子でこすっても付着物がとれにくい状態であった。観察した石種は、流紋岩、石英安山岩、輝石安山岩、石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩、石英安山岩質火山礫凝灰岩、石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩などである。

河川にみられる河原石と東南遺跡から出土した石材を石種とその岩相をもとに比較したのが第７表である。石種とその岩相が一致するものに●印をつけて表した。

調査した河川で採取できる石種の傾向をみれば、遺跡に近い揖保川、林田川、夢前川の礫の中に市川の礫が含まれることになり、近くで採取されていたとすれば、石材の採石地として揖保川、林田川、夢前川が推定される。また、夢前川と林田川・揖保川を比べれば、重なる石種が多い。しかし、石英安山岩質溶結凝灰岩は林田川や揖保川にみられないことから、夢前川で採取されたと推定される。安山岩質溶結凝灰岩Ｂは、従来、チャートと同定されている場合が多い石材で、岩相的に豊岡市南部から日高町にかけて分布する溶結凝灰岩の岩相の一部に似ている。この石材は氷上郡の七日市遺跡や三田市の溝口遺跡、奈良市の桐山和田遺跡、橿原市の橿原遺跡の石器や石器の原石にみられる。

東南遺跡から出土した石材は、観察した限りにおいて、主として林田川や揖保川から、僅かに夢前川から運ばれたと推定される。また、稀に遠方の豊岡市付近から運ばれた石もあるといえる。

第７表　出土石材と河川礫の岩相比較

石　　種	同質の岩石が分布する河川				その他
	揖保川	林田川	夢前川	市　川	
斑糲岩	●				
ひん岩Ａ		●			
ひん岩Ｂ					
ひん岩Ｃ					
ひん岩Ｄ	●				
ひん岩Ｅ					
流紋岩Ａ		●		●	
流紋岩Ｂ					
安山岩					
石英安山岩Ａ					
石英安山岩Ｂ			●		
石英安山岩Ｃ	●			●	
石英安山岩Ｄ		●			
石英安山岩Ｅ	●				
輝石安山岩Ａ			●		
輝石安山岩Ｂ					
輝石安山岩Ｃ	●			●	
輝石安山岩Ｄ		●		●	
流紋岩質溶結凝灰岩Ａ		●			
流紋岩質溶結凝灰岩Ｂ					
流紋岩質溶結凝灰岩Ｃ		●	●		
流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ａ					
流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｂ					
流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｃ	●	●		●	
流紋岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｄ		●	●		
石英安山岩質溶結凝灰岩Ａ					
石英安山岩質溶結凝灰岩Ｂ					
石英安山岩質溶結凝灰岩Ｃ			●	●	
石英安山岩質溶結凝灰岩Ｄ			●	●	
石英安山岩質溶結凝灰岩Ｅ					
石英安山岩質溶結凝灰岩Ｆ					
石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ａ					
石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｂ		●	●		
石英安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩Ｃ	●			●	
安山岩質溶結凝灰岩Ａ					
安山岩質溶結凝灰岩Ｂ					豊岡市付近
安山岩質火山礫凝灰岩質溶結凝灰岩		●			
安山岩質凝灰岩					

●は東南遺跡出土石材の岩相と同質のものがみられるもの

第5章　まとめ

今回、調査を行った東南遺跡では縄文時代後期・縄文時代晩期・弥生時代中期・古墳時代初頭・古墳時代後期・平安時代・中世・近世の遺構を検出した。

縄文時代後期の遺構は1区で竪穴住居2棟・2区で掘立柱建物1棟・1区～3区・5区で土坑を検出した。縄文時代晩期は1区で土坑を2基検出した。弥生時代中期は3区で前半の流路を検出した。中期後半は3区で土坑を1基、1区で溝を検出した。古墳時代初頭は3区で流路を検出し、2・3区の竪穴住居はこの時期の可能性がある。古墳時代後期は1区で掘立柱建物を1棟検出し、2区で削平を受けた竪穴住居の柱穴のみの建物を1棟検出した。平安時代は3区で木棺墓1基を検出し、全区に亘って条里地割の坪境溝が南北に走っているが、継続して使用しているため現代までの遺物が出土している。近世は2区と3区で井戸を検出した。

遺物は縄文時代中期の土器が少量、縄文時代晩期の土器、弥生時代前期の土器、弥生時代中期前半の土器、弥生時代中期中葉の土器、古墳時代初頭、古墳時代後期、平安時代の土器、中・近世の土器が出土している。土器以外では縄文時代の石器と古墳時代初頭の鉄器、中世の鉄器が出土している。

以上の遺物は僅かであり、縄文時代後期の土器がほとんどである。縄文時代後期の土器には深鉢と浅鉢があり、深鉢が主体を占める。縄文時代後期の土器は縁帯文の時期に限られる。深鉢の波頂部文様が孔を伴うものや同心円文・渦巻文など各種存在している。また口縁部から頸部にかけての屈曲も著しいものから緩やかなものまで存在する。時期の中心は北白川上層Ⅰ期である。33の様に隆帯を伴った関東系の土器や細密条痕を伴う土器も僅かに認められるが、瀬戸内・近畿系の特徴を現しているものがほとんどである。これは縄文土器の胎土分析からも裏付けられた。石器および土坑から出土した石材は黒曜石やサヌカイトのほかに奥田尚氏による観察で周辺河川流域のものばかりではなく、日本海側に由来するものも存在し、広域の流通が想定できる。

今回の東南遺跡の調査も含めて23次に亘る調査により、東南遺跡の縄文時代後期の縁帯文期の集落の範囲がおおよそ明らかになった。東南遺跡の縄文時代後期の縁帯文期の集落の中心は第2次調査区と今回報告の第13次調査1区の調査区の間の体育館調査区よりであると考えられる。

北限は今回報告の第13次調査4区の南端であり、南限は今回報告の第13次調査3区にある流路である。東限は第2次調査区であり、西限は第21次調査区である。南東限は第9次調査区である。集落縁辺に行くに従い、遺構や遺物の密度は薄くなっている。したがって、東南遺跡の縄文時代後期の縁帯文期の集落の範囲は南北約250m、東西約150mの範囲であり、面積は3,500㎡に及ぶことが判明した。

当時の景観は調査の状況からかなり起伏があったことが想定できる。最南端に位置する今回報告の第13次調査3区は流路が存在し、その後の堆積により当時の面を検出できたが、3区北端より北側は後世の削平により面が存在していない。

集落構成要素である竪穴住居は今回の2棟を含めて6棟（第2次1棟・第4次2棟・第8次1棟）、掘立柱建物は今回の1棟を含めて2棟検出している。他に埋甕と多数の土坑が存在している。土坑は大礫を伴うものが多く、過去の調査でも多く出土している。大・小、さまざまな規模のものがあり遺構の性格は不明であるが、墓の可能性を指摘しておきたい。

今後、一部しか報告されていない過去の調査データの提示を待って、検討を行なうことにより東南遺跡の縄文時代後期の実態が明らかになるであろう。

別表１　東南遺跡出土土器類一覧（1）

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法量（cm）			胎土分析	実測No.
											口径	器高	底径		
1	28	47	須恵器	椀		口縁部	990240	1区10W	SD101		(15.5)	1.7+	−		037
2	28	47	須恵器	椀		口縁部	990240	1区1W	SD101		(15.5)	2.1+	−		040
3	28	47	須恵器	坏蓋		口縁部〜天井部	990240	1区8W	SB154	P122	13.7	3.9+	−		041
4	28	47	須恵器	坏蓋		口縁部	990240	1区8W	SB154	P122	(13.9)	3.5+	−		043
5	28	47	須恵器	坏蓋		口縁部	990240	1区8W	SB154	P114	14.0	3.3+	−		042
6	28	47	弥生中期	甕		口縁部	990240	1区6E	SD104		(21.8)	1.2+	−		038
7	28	47	弥生後期	甕		体部	990240	1区3W	SD105		−	6.0+	−		039
8	28	47	縄文後期	鉢		底部	990240	1区6W	SD132		−	3.2+	8.2		443
9	28	47	染付磁器	椀	瀬戸	口縁部〜底部	990240	1区1E	撹乱		12.3	6.3	5.1		036
10	28	47	須恵器	椀		底部	990240	1区9E	包含層		−	1.9+	6.5		035
11	28	47	弥生中期	甕		底部	990240	1区6E	包含層		−	8.0+	10.2		034
12	28	47	土製品	羽口			990240	1区3E	包含層		長4.8	幅6.0	厚6.4		074
13	28	47	縄文晩期	深鉢		口縁部〜底部	2000288	1区6W	SK449		35.4	(45.0)	4.6	16	386
14	29	48	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		39.4	11.7+	−		457
15	29	48	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		−	3.0+	−		460
16	29	48	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		−	6.1+	−		461
17	29	48	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		−	4.9+	−		446
18	29	48	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		−	5.5+	−		455
19	29	48	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		−	4.6+	−		448
20	29	48	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		−	3.9+	−		450
21	29	48	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		−	3.2+	−		445
22	29	48	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		−	1.1+	−		459
23	29	48	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	SH115		−	3.5+	−		451
24	29	48	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	SH115		−	4.1+	−		465
25	29	48	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	SH115		−	3.9+	−		463
26	29	48	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	SH115		−	3.4+	−		468
27	29	48	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	SH115		−	11.6+	−	1	464
28	29	48	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	SH115		−	4.0+	−		466
29	29	48	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	SH115		−	3.6+	−		467
30	29	48	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	SH115		−	3.0+	−		456
31	29		縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	SH115		−	3.4+	−	2	447
32	29	48	縄文後期	浅鉢		口縁部	990240	1区4E	SH115		(34.0)	2.7+	−		462
33	30	49	縄文後期	深鉢		頸部	990240	1区2E	包含層		−	7.9+	−		454
34	30	49	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区2E	包含層		−	3.7+	−		444
35	30	49	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区2E	包含層		−	4.8+	−		453
36	30	49	縄文後期	鉢		底部	990240	1区2E	包含層		−	1.8+	8.8		452
37	30	50	縄文後期	浅鉢		口縁部〜底部	2000288	1区2W	SK506		14.1	5.7	−	3	157
38	30	49	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区2W	SK410		−	4.4+	−		161
39	30	49	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区3W	SK424		−	8.4+	−	4	165
40	30	49	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	1区4E	SK425		−	2.7+	−		166
41	30	49	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区4W	SK429		−	4.1+	−		368
42	30	49	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区4W	SK433		−	5.2+	−		156
43	31	49	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区3W	SK413		−	3.2+	−		164
44	31	49	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区3W	SK413		−	6.6+	−		162
45	31	49	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区3W	SK413		−	5.2+	−		160
46	31	49	縄文後期	深鉢		頸部〜体部	2000288	1区3W	SK413		−	16.1+	−		158
47	31	49	縄文後期	深鉢		体部	2000288	1区3W	SK413		−	5.0+	−	5	163
48	31	49	縄文後期	深鉢		体部	2000288	1区3W	SK413		−	7.1+	−		167
49	31	49	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区1W	撹乱		−	3.9+	−		458
50	31	50	縄文後期	深鉢		体部	2000288	1区5W	SK441		−	4.3+	−		168
51	31	50	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区7E	SK502		−	3.1+	−		169
52	31	50	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区6W	SK439		−	4.2+	−		159
53	31	50	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区7W	SK464		−	4.7+	−		366
54	32	50	縄文後期	深鉢		口縁部〜体部	2000288	1区5W	SK431		34.4	22.5+	−	6	385
55	32	50	縄文後期	鉢		底部	2000288	1区5W	SK431		−	1.7+	8.1		384
56	32	50	縄文後期	深鉢		口縁部〜頸部	2000288	1区7W	SK528		(33.6)	10.9+	−		372
57	32	50	縄文後期	深鉢		頸部〜体部	2000288	1区7W	SK450		−	10.1+	−	7	371
58	32	50	縄文後期	深鉢		頸部〜体部	2000288	1区7W	SK450		−	3.7+	−		369
59	32	50	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区7W	SK450		−	3.0+	−		370
60	32	50	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区7W	SK451		−	4.3+	−		367
61	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9E	包含層		−	4.0+	−		211
62	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区1W	包含層		−	5.6+	−		482
63	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	包含層		−	3.0+	−		495
64	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区7W	包含層		−	6.5+	−		476
65	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区1W	包含層		−	4.2+	−		178
66	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		−	3.0+	−		202
67	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区8W	包含層		−	4.8+	−		199
68	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区6E	包含層		−	7.5+	−		182
69	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区6E	包含層		−	4.4+	−		177
70	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区1E・W	包含層		−	2.9+	−		484
71	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		−	2.6+	−		206
72	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	包含層		−	3.2+	−		494
73	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4W	包含層		−	4.4+	−		473
74	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	包含層		−	3.1+	−		493
75	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区2E	包含層		−	1.9+	−		498
76	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区9W	包含層		−	3.7+	−		471
77	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4W	包含層		−	4.8+	−		488
78	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4W	包含層		−	2.2+	−		486
79	33	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9E	包含層		−	2.5+	−		214
80	34	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9E	包含層		−	1.9+	−		210
81	34	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		−	3.2+	−		204
82	34	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		−	2.3+	−		201
83	34	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	包含層		−	5.0+	−		483
84	34	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区3E	包含層		−	1.5+	−		475
85	34	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区2W	包含層		−	3.3+	−		194
86	34	51	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区9W	包含層		−	2.1+	−		472
87	34	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		−	2.7+	−		200
88	34	51	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		−	2.0+	−		205
89	34	53	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	1区2E	包含層		−	1.9+	−		188
90	34	53	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		−	3.0+	−		207
91	34	53	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区10W	包含層		−	2.6+	−		191
92	34	53	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区9W	包含層		−	2.9+	−		441
93	34	53	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区7E	包含層		−	4.4+	−		485
94	34	53	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区10W	包含層		−	4.3+	−		478
95	34	53	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区8W	包含層		−	2.6+	−		198
96	34	52	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区4E	包含層		−	2.7+	−		497
97	34	52	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9E	包含層		−	5.4+	−		212

別表１　東南遺跡出土土器類一覧（2）

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構２	法量（cm）			胎土分析	実測No.
												口径			
98	34	52	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区4W	包含層		－	2.3＋	－		196
99	34	52	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区10W	包含層		－	2.7＋	－		216
100	34	52	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	1区3E	包含層		－	3.1＋	－		474
101	34	52	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9E	包含層		－	1.6＋	－		213
102	34	52	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		27.5	6.3＋	－		209
103	35	52	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		－	2.9＋	－		208
104	35	52	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	1区9W	包含層		－	5.3＋	－		179
105	35	52	縄文後期	深鉢		口縁部～体部	990240	1区10E	包含層		－	14.0＋	－	8	470
106	35	52	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	1区8W	包含層		－	2.1＋	－	9	185
107	35	52	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4W	包含層		－	2.9＋	－		500
108	35	52	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4W	包含層		－	3.3＋	－		487
109	35	52	縄文中期	深鉢		体部	2000288	1区3E	包含層		－	2.7＋	－		193
110	35	52	縄文後期	深鉢		体部	2000288	1区8W	包含層		－	2.6＋	－		197
111	35	52	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区7W	包含層		－	2.1＋	－		477
112	35	52	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区7W	包含層		－	3.9＋	－		480
113	35	52	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区2E・W	包含層		－	2.4＋	－		490
114	35	52	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4W	包含層		－	1.9＋	－		501
115	35	52	縄文後期	深鉢		体部	2000288	1区9E	包含層		－	1.8＋	－		215
116	35	52	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	包含層		－	2.3＋	－		492
117	35	52	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区9W	包含層		－	1.5＋	－		449
118	35	52	縄文後期	深鉢		体部	2000288	1区2W	包含層		－	2.6＋	－		195
119	35	52	縄文後期	深鉢		体部	2000288	1区3E	包含層		－	2.9＋	－		192
120	36	53	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区4E	包含層		－	5.6＋	－		496
121	36	53	縄文後期	深鉢		体部	2000288	1区8W	包含層		－	2.7＋	－		189
122	36	53	縄文後期	深鉢		体部	2000288	1区10W	包含層		－	1.9＋	－		190
123	36	53	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区9W	包含層		－	3.2＋	－	10	442
124	36	53	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区7E	包含層		－	2.4＋	－		499
125	36	53	縄文後期	深鉢		体部	990240	1区7W	包含層		－	5.9＋	－		481
126	36	53	縄文後期	浅鉢		体部	990240	1区4E	包含層		－	3.5＋	－		491
127	36	53	縄文後期	深鉢		底部	2000288	1区8W	包含層		－	1.9＋	5.9		181
128	36	53	縄文後期	深鉢		底部	990240	1区4W	包含層		－	2.6＋	6.1		489
129	36	53	縄文後期	深鉢		底部	2000288	1区9W	包含層		－	1.5＋	8.0		203
130	36	53	縄文後期	深鉢		底部	2000288	1区8W	包含層		－	1.7＋	8.1		184
131	36	53	縄文後期	深鉢		底部	2000288	1区10E	包含層		－	1.4＋	7.2		364
132	36	53	縄文後期	深鉢		底部	2000288	1区5E	包含層		－	1.7＋	8.3		187
133	36	53	縄文後期	深鉢		底部	2000288	1区8E	包含層		－	2.8＋	7.0		180
134	36	53	縄文後期	深鉢		底部	990240	1区7W	包含層		－	2.2＋	9.1		479
135	36	53	縄文後期	深鉢		底部	2000288	1区2W	包含層		－	1.9＋	7.0		186
136	36	53	縄文後期	深鉢		底部	2000288	1区9E	包含層		－	2.6＋	9.0		183
137	36	53	縄文後期	深鉢		底部	2000288	1区10E	包含層		－	2.5＋	9.3		365
138	36	53	縄文後期	深鉢		底部	990240	1区8E	包含層		－	1.9＋	11.2		469
139	54	70	須恵器	坏H		口縁部～体部	990240	2区2W	SD205		(10.8)	2.2＋	－		068
140	54	70	土師器	皿		口縁部～体部	990240	2区2W	SD205		(13.8)	1.6	－		062
141	54	70	土師器	椀		底部	990240	2区4W	SD205		－	2.5＋	6.2		065
142	54	70	須恵器	鉢		底部	990240	2区4W	SD205		－	2.3＋	10.2		066
143	54	72	須恵器	椀		口縁部～底部	990240	2区4W	SD205		15.1	5.7	6.0		067
144	54	70	土師器	羽釜		口縁部～体部	990240	2区4W	SD205		18.6	5.4＋	－		057
145	54	70	土師器	羽釜		口縁部～体部	990240	2区3W	SD205		(20.3)	9.0＋	－	27	058
146	54	70	須恵器	高坏		脚部	990240	2区4・5W	SD202		－	3.3＋	8.0		050
147	54	70	須恵器	高坏		脚部	990240	2区5W	SD202		－	6.9＋	－		055
148	54	70	須恵器	壺		口縁部	990240	2区4W	SD202		5.4	2.6＋	－		069
149	54	70	須恵器			底部	990240	2区5W	SD202		－	－	－		051
150	54	70	須恵器	甕		口縁部	990240	2区5W	SD202		23.2	2.3＋	－		054
151	54	70	白磁	碗	中国	口縁部	990240	2区4W	SD202		(14.2)	2.4＋	－		049
152	54	70	施釉陶器	皿	瀬戸	底部	990240	2区1W	SD202		－	2.4＋	4.5		048
153	54	70	無釉陶器	壺		底部	990240	2区5W	SD202		－	2.9＋	13.0		052
154	54	70	染付磁器	皿	中国明	口縁部～底部	990240	2区1W	SD202		10.2	2.7＋	3.9		047
155	54		土製品	土錘			990240	2区5W	SD202		長3.3	幅0.8	厚0.8		053
156	54	72	土師器	小皿		口縁部～底部	990240	2区4W	SD229		9.6	2.0＋	6.0	28	064
157	54	71	土師器	坏		底部	990240	2区3W	SD229		－	3.2＋	6.1		056
158	54	72	須恵器	椀		口縁部～底部	990240	2区4W	SD229		14.2	4.9	5.0		070
159	54	71	土師器	椀		口縁部～体部	990240	2区4W	SD229		16.8	4.2＋	－		063
160	54	71	土師器	鍋		口縁部	990240	2区4W	SD229		27.4	4.9＋	－		059
161	54	71	土師器	羽釜		口縁部～体部	990240	2区4W	SD229		25.0	7.2＋	－		060
162	54	71	土師器	小皿		口縁部～底部	990240	2区1W	SD203		(10.0)	2.1	5.8		061
163	54	71	須恵器	甕		口頸部	990240	2区5W	SB600	P215	(21.1)	4.0＋	－		071
164	54	71	施釉陶器	皿	唐津	底部	990240	2区2W	SD201		－	2.4＋	5.4		046
165	54	71	施釉陶器	鉢	肥前	口縁部	990240	2区3W	SD201		19.9	3.3＋	－		045
166	54	71	土製品	土錘			990240	2区4W	包含層		長3.7	幅2.6	厚1.0		073
167	54	71	土師器	皿		底部	990240	2区4	包含層		－	3.3＋	5.8		072
168	54	71	無釉陶器	甕		口縁部	990240	2区4W	包含層		48.0	5.1＋	－		044
169	55	73	縄文後期	深鉢		口縁部～体部	2000288	2区4W	SK251		27.4	15.5＋	－		381
170	55	73	縄文後期	深鉢		口縁部～体部	2000288	2区4W	SK251		32.4	27.2＋	－	11	382
171	55	73	縄文後期	深鉢		体部～底部	2000288	2区4W	SK251		－	14.9＋	8.3	12	383
172	55	73	縄文後期	浅鉢		口縁部～体部	2000288	2区4W	SK251		16.2	6.1＋	－		375
173	56	72	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	2区4W	SK251		－	3.9＋	－		377
174	56	72	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	2区4W	SK251		－	2.6＋	－		378
175	56	74	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	2区4W	SK251		－	3.8＋	－		376
176	56	72	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	2区4W	SK251		－	8.3＋	－		379
177	56	72	縄文後期	深鉢		体部	2000288	2区4W	SK251		－	9.5＋	－		380
178	56	74	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	2区5W	SK252		34.6	8.8＋	－		171
179	56	74	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	2区2E	SK238		－	2.0＋	－		524
180	56	74	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	2区5E	SK298		－	1.9＋	－	13	173
181	56	74	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	2区4E	SK218		－	5.5＋	－		525
182	56	74	縄文後期	鉢		口縁部	990240	2区4E	SK218		－	2.5＋	－		526
183	56	74	縄文後期	深鉢		底部	990240	2区3E	SK223		－	1.7＋	5.5		527
184	56	74	縄文後期	深鉢		底部	990240	2区5E	SK213		－	1.6＋	6.1		528
185	56	74	縄文後期	深鉢		底部	2000288	2区5E	SK253		－	1.6＋	6.6		175
186	57	74	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	2区1E	包含層		－	9.2＋	－	14	170
187	57	74	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	2区5	包含層		－	3.6＋	－		504
188	57	74	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	2区5W	包含層		－	3.5＋	－		514
189	57	74	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	2区1W	包含層		－	3.0＋	－		503
190	57	74	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	2区5E	包含層		－	2.7＋	－		505
191	57	74	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	2区5W	包含層		－	2.9＋	－		510
192	57	74	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	2区5W	包含層		－	2.0＋	－		174
193	57	74	縄文後期	深鉢		体部	2000288	2区1E	包含層		－	3.6＋	－		172
194	57	74	縄文後期	深鉢		体部	990240	2区4E	包含層		－	3.9＋	－		506

別表１　東南遺跡出土土器類一覧（3）

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法量（cm）			胎土分析	実測No.
												口径			
195	57	74	縄文後期	深鉢		体部	990240	2区4W	包含層		－	4.1＋	－		511
196	57	74	縄文後期	深鉢		底部	2000288	2区4E	包含層		－	3.2＋	8.0		176
197	68	91	須恵器	椀		口縁部	990240	3区5W	SD307		(12.8)	2.7＋	－		110
198	68	91	須恵器	椀		底部	990240	3区4W	SD307		－	1.9＋	4.6		111
199	68	91	緑釉陶器	椀		底部	990240	3区4W	SD307		－	1.4＋	8.1		109
200	68	91	土師器	鍋		口縁部	990240	3区4W	SD307		(25.3)	5.6＋	－		108
201	68	91	土師器	鍋		口縁部	990240	3区5W	SD307		(23.8)	4.7＋	－		107
202	68	91	須恵器	坏A		口縁部～底部	990240	3区5W	SD303		(11.5)	3.9	7.2		114
203	68	91	須恵器	坏A		口縁部～底部	990240	3区5W	SD303		(11.2)	3.7	7.5		113
204	68	91	須恵器	椀		口縁部	990240	3区3W	SD304		(15.0)	2.8＋	－		112
205	68	91	黒色土器A	椀		口縁部～体部	990240	3区3W	SD306		12.9	4.4＋	－		116
206	68	91	弥生中期	壺		体部～底部	2000288	3区5W	SK331		－	13.5＋	7.8		031
207	68	91	弥生中期	甕		口縁部	2000288	3区5W	SK331		16.0	3.2＋	－		032
208	68	91	弥生中期	甕		口縁部～体部	2000288	3区5W	SK331		14.1	17.5＋	－		033
209	68	92	弥生中期	壺		口縁部	2000288	3区2W	SD353		－	2.4＋	－		007
210	68	92	弥生中期	壺		口縁部	2000288	3区2W	SD353		－	1.6＋	－		012
211	68	92	弥生中期	壺		口縁部	2000288	3区2E	SD353		－	1.6＋	－		015
212	68	92	弥生前期	壺		体部	2000288	3区2W	SD353		－	5.1＋	－		010
213	68	92	弥生中期	甕		体部	2000288	3区2W	SD353		－	4.6＋	－		011
214	69	92	弥生中期	壺		口頸部	2000288	3区2W	SD353		(19.4)	7.9＋	－		014
215	69	92	弥生中期	壺		口縁部	2000288	3区2W	SD353		(20.0)	2.4＋	－		003
216	69	92	弥生前期	壺		口縁部	2000288	3区2W	SD353		16.0	5.8＋	－		008
217	69	92	弥生前期	甕		口縁部	2000288	3区2W	SD353		21.0	4.8＋	－		009
218	69	92	弥生中期	甕		口縁部	2000288	3区2E	SD353		(18.2)	5.1＋	－		001
219	69	92	弥生中期	甕		口縁部	2000288	3区2W	SD353		16.2	2.5＋	－		018
220	69	92	弥生中期	甕		口縁部	2000288	3区2W	SD353		(25.4)	6.2＋	－		013
221	69	92	弥生中期	甕		底部	2000288	3区2E	SD353		－	8.7＋	6.2		016
222	69	92	弥生中期	甕		底部	2000288	3区2W	SD353		－	8.6＋	10.3	17	005
223	69	93	弥生中期	甕		底部	2000288	3区2W	SD354		－	4.7＋	6.6		019
224	69	93	弥生中期	壺		口頸部	2000288	3区2W	SD355		10.8	5.3＋	－		006
225	69	93	弥生中期	壺		底部	2000288	3区2W	SD353		－	4.7＋	8.4		004
226	69	93	弥生中期	甕		口縁部	2000288	3区2W	SD353		15.6	2.3＋	－		017
227	69	93	弥生中期	甕		口縁部～体部	2000288	3区2W	SD353		14.6	11.3＋	－	18	020
228	69	93	弥生中期	壺		口縁部	2000288	3区3W	SD351		(29.4)	2.0＋	－		024
229	69	93	弥生中期	甕		口縁部	2000288	3区4W	SD351		(20.3)	2.6＋	－		023
230	69	93	弥生中期	壺		口縁部～体部	990240	3区4E	SD351		17.3	8.2＋	－		115
231	69	93	弥生中期	壺		体部	2000288	3区5W	SD351		－	14.4＋	－		021
232	69	93	弥生中期	壺		底部	2000288	3区5W	SD351		－	6.5＋	9.6	19	027
233	69	94	弥生中期	水差		口縁部～体部	2000288	3区5W	SD351		9.1	12.1＋	－		026
234	69	94	弥生中期	無頸壺蓋		体部	2000288	3区4E	SD351		(17.8)	2.0＋	－		025
235	69	94	弥生中期	鉢		口縁部～体部	2000288	3区4E	SD351		19.6	8.6＋	－		029
236	69	94	弥生中期	甕		口縁部～体部	2000288	3区5W	SD351		14.8	5.0＋	－		028
237	69	94	弥生中期	甕		底部	2000288	3区3W	SD351		－	4.2＋	5.3		030
238	70	96	土師器	壺		口頸部	990240	3区5E	SD308		16.6	12.3＋	－		123
239	70	96	土師器	壺		口頸部	990240	3区2W	SD308		16.1	7.0＋	－		098
240	70	96	土師器	壺		口縁部～体部	990240	3区2W	SD308		9.8	7.3＋	－		094
241	70	96	土師器	壺		体部	990240	3区5E	SD308		－	3.4＋	－		088
242	70	96	土師器	壺		口縁部～体部	990240	3区5E	SD308		17.0	11.0＋	－		125
243	70	96	土師器	壺		口縁部	990240	3区2W	SD308		(21.0)	3.2＋	－		093
244	70	95	土師器	壺		口縁部～体部	990240	3区5E	SD308		14.9	13.1＋	－	20	118
245	70	96	土師器	壺		底部	990240	3区2W	SD308		－	3.1＋	5.7		096
246	70	96	土師器	壺		口縁部	990240	3区2W	SD308		(21.8)	3.5＋	－		102
247	70	96	土師器	壺		口縁部	990240	3区2W	SD308		16.5	5.0＋	－		105
248	70	96	土師器	壺		口縁部	990240	3区2W	SD308		(16.8)	4.4＋	－		075
249	70	96	土師器	壺		口縁部	990240	3区3W	SD308		10.8	4.2＋	－		120
250	70	95	土師器	壺		口縁部～底部	990240	3区5E	SD308		8.4	15.6	3.3	21	127
251	70	96	土師器	壺		口縁部	990240	3区2W	SD308		(11.6)	3.9＋	－		101
252	70	97	土師器	甕		口縁部	990240	3区5E	SD308		15.5	3.4＋	－		082
253	70	97	土師器	甕		底部	990240	3区2W	SD308		－	3.9＋	3.6		095
254	70	97	土師器	甕		底部	990240	3区5E	SD308		－	2.8＋	3.4		087
255	70	97	土師器	甕		口縁部～体部	990240	3区2W	SD308		15.1	6.5＋	－	22	103
256	70	97	土師器	甕		口縁部～体部	990240	3区2W	SD308		(17.2)	10.0＋	－	23	119
257	70	95	土師器	甕		口縁部～底部	990240	3区5E	SD308		13.1	16.4	－	24	126
258	70	95	土師器	甕		口縁部～底部	990240	3区5E	SD308		11.6	19.5	－	25	117
259	70	97	土師器	甕		口縁部	990240	3区3W	SD308		(13.0)	4.3＋	－		121
260	70	97	土師器	甕		口縁部	990240	3区5E	SD308		(18.0)	5.1＋	－		084
261	70	97	土師器	甕		口縁部	990240	3区5E	SD308		(18.7)	5.0＋	－		085
262	70	97	土師器	甕		口縁部	990240	3区4E	SD308		(15.7)	4.9＋	－		079
263	70	97	土師器	甕		口縁部	990240	3区2W	SD308		(15.9)	1.6＋	－		099
264	70	97	土師器	甕	讃岐	頸部～体部	990240	3区2W	SD308		(13.4)	2.0＋	－		106
265	70	97	土師器	甕	讃岐	口縁部	990240	3区3W	SD308		－	2.8＋	－		077
266	70	97	土師器	甕		口縁部	990240	3区5E	SD308		17.8	5.9＋	－		081
267	70	97	土師器	ミニチュア鉢		底部	990240	3区4W	SD308		－	2.6＋	3.7		080
268	71	95	土師器	高坏		口縁部	990240	3区2W	SD308		(19.7)	2.9＋	－		076
269	71	95	土師器	高坏		口縁部	990240	3区2W	SD308		(15.7)	3.5＋	－		104
270	71	95	土師器	高坏		脚部	990240	3区2W	SD308		－	3.2＋	21.0		091
271	71	95	土師器	高坏		脚部	990240	3区2W	SD308		－	2.6＋	15.9		092
272	71	95	土師器	壺		口縁部	990240	3区2W	SD308		(16.2)	1.8＋	－		100
273	71	95	土師器	器台		口縁部	990240	3区2W	SD308		(16.0)	3.2＋	－		090
274	71	95	土師器	小型器台		口縁部	990240	3区2W	SD308		－	3.2＋	10.7		097
275	71	95	土師器	小型丸底壺		口縁部	990240	3区2W	SD308		(11.5)	3.3＋	－		078
276	71	95	土師器	小型丸底壺		口縁部	990240	3区5E	SD308		(13.8)	4.1＋	－		083
277	71	95	土師器	小型丸底壺		口縁部	990240	3区5E	SD308		(11.8)	4.5＋	－		086
278	71	94	土師器	山陰型甑		口縁部～底部	990240	3区4W	SD308		36.6	(42.2)	11.9	26	124
279	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.3＋	－		263
280	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.8＋	－		259
281	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	4.4＋	－		258
282	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.1＋	－		387
283	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.0＋	－		257
284	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2E	SD361		－	2.5＋	－		237
285	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.1＋	－		264
286	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2E	SD361		－	2.7＋	－		253
287	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.4＋	－		260
288	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.9＋	－		241
289	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.1＋	－		235
290	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.8＋	－		243
291	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.3＋	－		262

別表１　東南遺跡出土土器類一覧（4）

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構２	法量（cm）			胎土分析	実測No.
												口径			
292	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	1.9＋	－		249
293	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.3＋	－		242
294	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.4＋	－		250
295	72	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	1.9＋	－		240
296	72	98	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	1.4＋	－		248
297	72	98	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	1.9＋	－		247
298	72	98	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.4＋	－		239
299	73	98	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.6＋	－		265
300	73	98	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区2E	SD361		－	2.1＋	－		252
301	73	98	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区2E	SD361		－	2.5＋	－		234
302	73	98	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	1.7＋	－		256
303	73	98	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	1.8＋	－		261
304	73	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2E	SD361		－	3.3＋	－		254
305	73	98	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.5＋	－		233
306	73	98	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区2E	SD361		－	3.6＋	－		271
307	73	98	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区2E	SD361		－	2.3＋	－		269
308	73	98	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区2W	SD361		－	3.8＋	－		273
309	73	98	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区2E	SD361		－	3.4＋	－		270
310	73	98	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区2W	SD361		－	3.4＋	－		272
311	73	98	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区2E	SD361		－	2.5＋	－		268
312	73	98	縄文後期	鉢		把手	2000288	3区2E	SD361			幅3.4＋	長0.8		238
313	73	98	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区2E	SD361		－	2.6＋	5.2		255
314	73	98	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区2W	SD361		－	1.4＋	7.5		251
315	73	98	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区2W	SD361		－	1.4＋	8.0		266
316	73	98	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区2W	SD361		－	2.1＋	7.2		244
317	73	98	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区2W	SD361		－	2.4＋	9.3		246
318	73	98	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区2W	SD361		－	2.4＋	11.0		245
319	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD353		－	2.4＋	－		346
320	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2E	SD353		－	3.4＋	－		351
321	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD353		－	3.8＋	－		354
322	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD353		－	4.6＋	－		353
323	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2E	SD353		－	3.6＋	－		352
324	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2E・W	SD353		－	2.9＋	－		347
325	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD353		－	2.6＋	－		350
326	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区4W	SD351		－	4.4＋	－		359
327	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区4W	SD351		－	2.9＋	－		362
328	74	99	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区4W	SD351		長2.3	幅3.3	厚1.0		357
329	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.8＋	－		267
330	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.2＋	－		218
331	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.1＋	－		224
332	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区5E	SD351		－	2.3＋	－		360
333	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.9＋	－		219
334	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.4＋	－		223
335	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.5＋	－		227
336	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.2＋	－		222
337	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区3W	SD351		－	3.6＋	－		355
338	74	99	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.4＋	－		232
339	74	99	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.7＋	－		226
340	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.4＋	－		231
341	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区4W	SD351		－	2.1＋	－		356
342	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.1＋	－		225
343	74	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.8＋	－		217
344	75	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区5W	SD351		－	4.2＋	－		361
345	75	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	5.0＋	－		229
346	75	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.6＋	－		230
347	75	99	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.8＋	－		228
348	75	99	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区4W	SD351		－	3.6＋	－		358
349	75	99	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	2.2＋	－		221
350	75	99	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区2W	SD361		－	3.0＋	－		220
351	75	100	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区1E	SK373		－	2.6＋	－		373
352	75	100	縄文後期	鉢		体部	2000288	3区1W	SD361		－	3.4＋	－		307
353	75	100	縄文後期	鉢		口縁部	990240	3区2W	SD308		－	2.5＋	－		523
354	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区2W	SD308		－	4.5＋	－		517
355	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区5E	SD308		－	3.7＋	－		522
356	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区4E	SD308		－	3.9＋	－		515
357	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区2W	SD308		－	2.4＋	－		518
358	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区2W	SD308		－	2.4＋	－		516
359	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区4W	SD308		－	3.2＋	－		519
360	75	100	縄文後期	鉢		口縁部	990240	3区2W	SD308		－	3.8＋	－		513
361	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区5E	SD308		－	1.3＋	－		521
362	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区4W	SD308		－	4.3＋	－		520
363	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区1W	SD310		－	2.9＋	－		512
364	75	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	SD357		－	2.7＋	－		236
365	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	4.4＋	－		342
366	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区2W	包含層		－	3.5＋	－		349
367	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.5＋	－		281
368	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	1.7＋	－		297
369	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	2.8＋	－		341
370	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.7＋	－		286
371	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.0＋	－		284
372	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.3＋	－		290
373	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	5.1＋	－		291
374	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	3.2＋	－		287
375	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	1.8＋	－		296
376	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	2.5＋	－		337
377	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.1＋	－		280
378	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	1.9＋	－		289
379	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	2.7＋	－		334
380	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	2.9＋	－		335
381	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	1.8＋	－		336
382	76	100	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	3.0＋	－		294
383	77	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	3.8＋	－		295
384	77	101	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	2.8＋	－		339
385	77	101	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.1＋	－		283
386	77	101	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	2.6＋	－		340
387	77	101	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区2W	包含層		－	2.6＋	－		348
388	77	101	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	1.5＋	－		285

別表１　東南遺跡出土土器類一覧（5）

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構２	法量（cm）			胎土分析	実測No.
												口径			
389	77	101	縄文後期	浅鉢		口縁部	990240	3区1W	包含層		－	1.5＋	－		507
390	77	101	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	2.8＋	－		338
391	77	101	縄文後期	鉢		体部	2000288	3区1W	包含層		－	3.1＋	－		279
392	77	101	縄文後期	鉢		体部	2000288	3区1W	包含層		－	2.2＋	－		306
393	77	101	縄文後期	鉢		体部	2000288	3区2W	包含層		－	2.6＋	－		363
394	77	101	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区1W	包含層		－	2.4＋	－		278
395	77	101	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区1W	包含層		－	2.4＋	－		277
396	77	101	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区1W	包含層		長1.6	幅2.8	厚0.6		282
397	77	101	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区1W	包含層		－	2.7＋	－		276
398	77	101	縄文後期	深鉢		体部	2000288	3区1E	包含層		－	2.5＋	－		344
399	77	101	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		14.0	1.9＋			288
400	77	101	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区1W	包含層		－	1.8＋	8.1		292
401	77	101	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区1W	包含層		－	2.5＋	5.4	15	293
402	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	3.5＋	－		311
403	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	2.5＋	－		326
404	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.1＋	－		321
405	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E・1W	包含層		－	2.6＋	－		300
406	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E・1W	包含層		－	3.2＋	－		302
407	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	4.8＋	－		317
408	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.0＋	－		320
409	78	101	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	1.8＋	－		331
410	78	101	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	1.8＋	－		327
411	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	4.2＋	－		329
412	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	4.7＋	－		314
413	78	101	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	4.3＋	－		313
414	78	101	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1E・1W	包含層		－	2.6＋	－		299
415	78	101	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.0＋	－		309
416	78	101	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	2.0＋	－		330
417	78	101	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	1.2＋	－		322
418	78	101	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	1.3＋	－		332
419	78	101	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	3.4＋	－		315
420	78	102	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.7＋	－		310
421	78	102	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1E・1W	包含層		－	3.2＋	－		303
422	78	102	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	2.9＋	－		308
423	78	102	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	4.1＋	－		318
424	78	102	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	4.1＋	－		319
425	78	102	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	4.3＋	－		312
426	79	102	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	1.5＋	－		343
427	79	102	縄文後期	鉢		口縁部	2000288	3区1W	包含層		－	1.7＋	－		274
428	79	102	縄文後期	鉢		体部	2000288	3区1E・1W	包含層		－	2.0＋	－		298
429	79	102	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1E・1W	包含層		(23.6)	2.7＋	－		301
430	79	102	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	3.4＋	－		328
431	79	102	縄文後期	浅鉢		口縁部	2000288	3区1E	包含層		－	3.6＋	－		325
432	79	102	縄文後期	注口土器		注口部	2000288	3区1W	包含層		長4.5	幅3.4	幅2.2		316
433	79	102	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区1E	包含層		－	2.0＋	8.0		333
434	79	102	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区1W	包含層		－	2.7＋	8.7		324
435	79	102	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区1E・1W	包含層		－	2.1＋	7.2		305
436	79	102	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区1E・1W	包含層		－	2.3＋	6.3		304
437	79	102	縄文後期	鉢		底部	2000288	3区1W	包含層		－	3.6＋	5.0		323
438	79	102	縄文後期	鉢		口縁部	990240	3区2W	包含層		－	3.7＋	－		508
439	79	102	縄文後期	深鉢		口縁部	2000288	3区3W・3E	包含層		－	3.0＋	－		275
440	79	102	縄文後期	鉢		口縁部	990240	3区2W	包含層		－	1.6＋	－		509
441	79	102	縄文後期	深鉢		口縁部	990240	3区E	包含層		－	6.0＋	－		502
442	84	108	土師器	鍋		口縁部	2000287	4区	SB813	P803	(18.0)	2.9＋	－		155
443	84	108	土師器	皿		口縁部～底部	2001123	4区	SD801		(10.4)	2.4	6.4		142
444	84	108	須恵器	鉢		底部	2001123	4区	SD801		－	5.2＋	10.8		144
445	84	108	無釉陶器	甕	備前	口縁部	2001123	4区	SD801		－	6.5＋	－		146
446	84	108	無釉陶器	擂鉢	明石・堺	口縁部～体部	2001123	4区	SD801		(33.0)	11.2＋	－		147
447	84	108	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2001123	4区	SD801		(29.1)	5.3＋	－		145
448	84	108	瓦質土器	火鉢		底部	2001123	4区	SD801		－	8.3＋	23.4		148
449	84	110	瓦質土器	火鉢		体部～底部	2001123	4区	SD803		－	14.5＋	22.6		149
450	84	110	無釉陶器	火入れ	備前	口縁部～底部	2001123	4区	包含層		13.5	5.5	13.8		150
451	84	110	施釉陶器	甕	丹波	口縁部～底部	2001123	4区	包含層		24.0	30.9	15.0		153
452	84	110	無釉陶器	植木鉢		口縁部～底部	2001123	4区	包含層		33.8	32.3	28.2		151
453	85	111	弥生中期	壺		体部	2001123	4区	撹乱		－	4.4＋	－		139
454	85	111	弥生中期	壺		体部	2001123	4区	撹乱		－	6.4＋	－		140
455	85	111	弥生中期	甕		底部	2001123	4区	撹乱		－	5.1＋	7.1		137
456	85	111	弥生後期	長頸壺		頸部～体部	2001123	4区	撹乱		－	14.6＋	－		128
457	85	111	土師器	壺		口縁部	2001123	4区	撹乱		(17.2)	3.5＋	－		132
458	85	111	土師器	鉢		底部	2001123	4区	撹乱		－	3.4＋	2.5		138
459	85	111	土師器	甕		口縁部	2001123	4区	撹乱		(15.2)	2.2＋	－		131
460	85	111	土師器	甕		口縁部	2001123	4区	撹乱		(16.4)	3.7＋	－		135
461	85	111	土師器	高坏		口縁部	2001123	4区	撹乱		(22.9)	4.0＋	－		136
462	85	111	土師器	甕		口縁部	2001123	4区	撹乱		13.9	4.3＋	－		130
463	85	111	土師器	甕		口縁部～体部	2001123	4区	撹乱		(14.5)	10.8＋	－		129
464	85	109	土製玩具	花型		口縁部～底部	2001123	4区	撹乱		2.2	0.6	1.5		134
465	85	109	軟質施釉陶器	秉燭		口縁部～底部	2001123	4区	撹乱		4.1	1.8	2.8		133
466	85	109	瓦質土器	火鉢		口縁部～底部	2001123	4区	撹乱		24.4	18.6	26.0		141
467	85	109	土師器	焙烙		口縁部～体部	2001123	4区	撹乱		59.4	5.7＋	－		152
468	85	109	施釉陶器	おろし皿	瀬戸	底部	2001123	5区	粘土採掘坑		－	2.1＋	8.0		143
469	86	112	縄文後期	鉢		口縁部	2001123	4区	P836		－	1.8＋	－		426
470	86	112	縄文後期	鉢		口縁部	2001123	5区	SK904		－	1.8＋	－		413
471	86	112	縄文後期	深鉢		口縁部	2001123	5区	SK904		－	4.9＋	－		421
472	86	112	縄文後期	深鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	6.3＋	－		408
473	86	112	縄文後期	深鉢		口縁部～体部	2001123	5区	包含層		－	8.3＋	－		412
474	86	112	縄文後期	深鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	3.5＋	－		424
475	86	112	縄文後期	深鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	2.7＋	－		403
476	86	112	縄文後期	鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	3.4＋	－		420
477	86	112	縄文後期	深鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	2.7＋	－		411
478	86	112	縄文後期	鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	2.0＋	－		422
479	86	112	縄文後期	深鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	3.4＋	－		423
480	86	112	縄文後期	深鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	2.9＋	－		404
481	86	112	縄文後期	鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	3.0＋	－		402
482	86	112	縄文後期	鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	5.0＋	－		414
483	86	112	縄文後期	鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	4.7＋	－		427
484	86	112	縄文後期	鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	4.2＋	－		407
485	86	112	縄文後期	浅鉢		口縁部	2001123	5区	包含層		－	4.6＋	－		425

別表 1　東南遺跡出土土器類一覧（6）

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	産地等	部位	調査番号	調査区	遺構	遺構2	法量（cm）			胎土分析	実測No.
											口径	器高	底径		
486	87	112	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	2.6＋	－		432
487	87	112	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	6.4＋	－		409
488	87	112	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	3.3＋	－		405
489	87	113	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	2.1＋	－		438
490	87	113	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	2.1＋	－		434
491	87	113	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	1.7＋	－		435
492	87	113	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	2.4＋	－		433
493	87	113	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	2.3＋	－		436
494	87	113	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	2.1＋	－		430
495	87	113	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	4.6＋	－		429
496	87	113	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	4.1＋	－		428
497	87	113	縄文後期	深鉢		体部	2001123	5区	包含層		－	2.4＋	－		431
498	87	113	縄文後期	鉢		底部	2001123	5区	包含層		－	1.8＋	8.8		400
499	87	113	縄文後期	鉢		底部	2001123	5区	包含層		－	2.0＋	7.4		418
500	87	113	縄文後期	鉢		底部	2001123	5区	包含層		－	1.9＋	9.2		417
501	87	113	縄文後期	鉢		底部	2001123	5区	包含層		－	2.0＋	10.0		415
502	87	113	縄文後期	鉢		底部	2001123	5区	包含層		－	1.5＋	4.8		410
503	87	113	縄文後期	鉢		底部	2001123	5区	包含層		－	2.3＋	－		406
504	87	113	縄文後期	鉢		底部	2001123	5区	包含層		－	2.0＋	11.3		401
505	87	113	縄文後期	鉢		底部	2001123	5区	包含層		－	1.8＋	7.5		416

別表 2　東南遺跡出土石器一覧

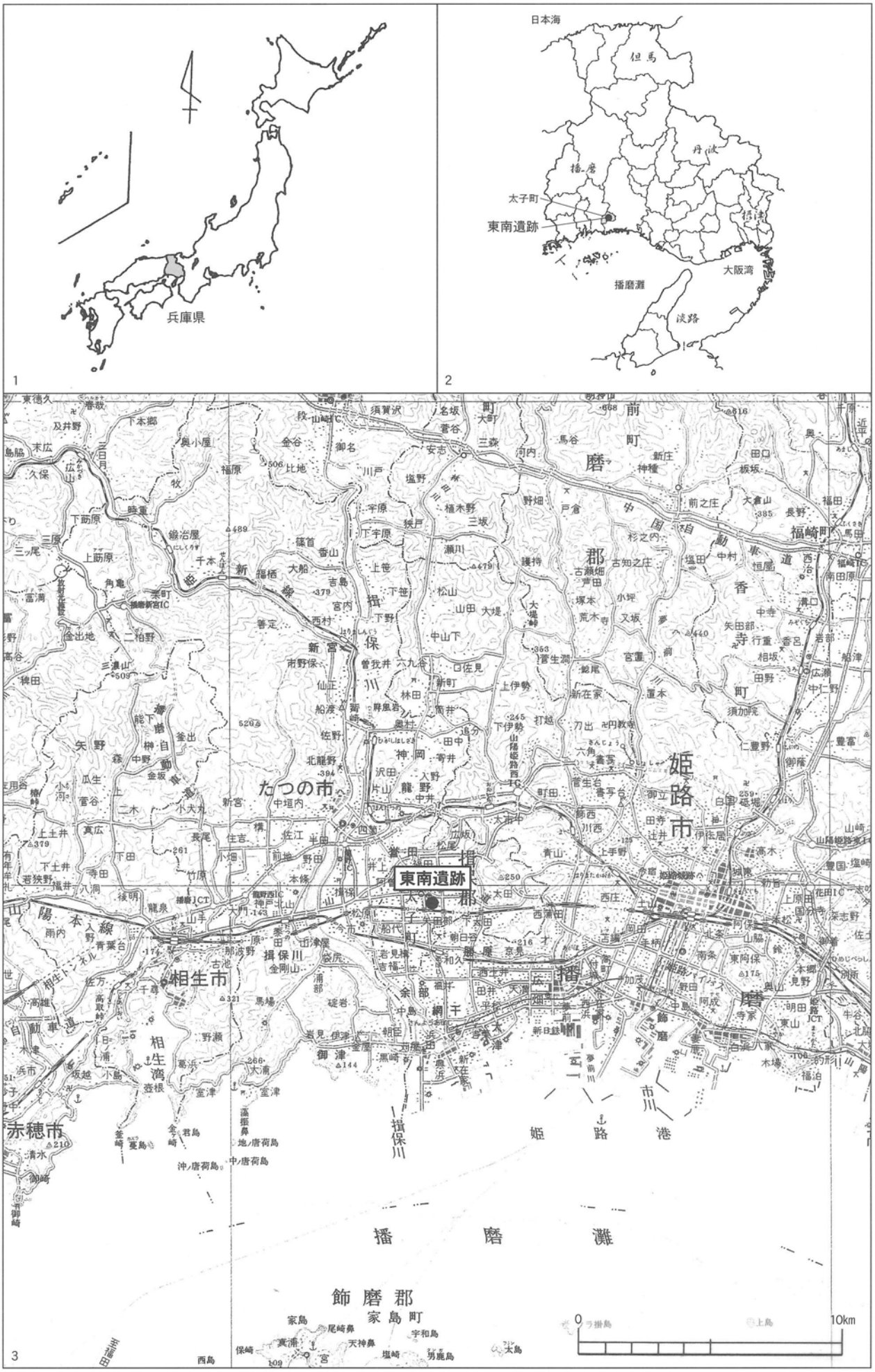
報告No.	図版	写真図版	種別	器種	石材	調査番号	調査区	遺構	法量（mm）				備考	実測No.
									長	幅	厚	重量(g)		
S 1	37	54	石器	凹石	花崗岩	990240	1区1W	SK158	111.0	81.0	53.5	745.0		S32
S 2	37	54	石器	凹石	安山岩	990240	1区1W	SK158	144.0	129.0	68.0	1,805.0		S31
S 3	37	55	石器	石皿	花崗岩	2000288	1区1W	SK526	205.0	188.0	55.0	2,910.0		S30
S 4	37	54	石器	ハンマー	花崗岩	2000288	1区2W	SK508	126.0	57.8	41.5	435.0		S33
S 5	38	55	石器	石斧	凝灰岩	2000288	1区3W	SK500	90.5	57.5	18.0	95.0		S36
S 6	38	55	石器	石皿	安山岩	2000288	1区9E	SK490	58.5	88.0	26.0	195.0		S40
S 7	38	55	石器	石皿	砂岩	990240	1区4E	SH115	85.2	61.0	23.5	206.0		S37
S 8	38	55	石器	石錘	凝灰岩	990240	1区4E	SH115	48.0	32.0	12.0	24.2		S45
S 9	38	55	石器	石皿	砂岩	990240	1区2W	SD101	133.0	89.0	47.0	830.0		S38
S10	38	55	石器	石錘	安山岩	2000288	1区9W	包含層	63.0	43.0	14.5	62.5		S42
S11	38	55	石器	石鏃	サヌカイト	990240	1区2E	包含層	22.5	12.5	3.0	0.5		S1
S12	38	55	石器	石匙	サヌカイト	990240	1区4E	包含層	32.0	32.5	8.0	5.9	つまみ部分	S14
S13	38	55	石器	石錐	サヌカイト	2000288	1区10E	包含層	23.0	14.5	4.5	1.6		S48
S14	38	55	石器	楔形石器	サヌカイト	2000288	1区10E	包含層	20.5	19.0	5.5	2.7		S49
S15	39	54	石器	磨石	花崗岩	2000288	1区9E	SK489	284.3	105.0	84.0	3,480.0		S28
S16	39	54	石器	石棒	安山岩	2000288	1区9E	SK485	551.0	181.7	110.5	14,660.0		S43
S17	58	75	石器	石鏃	サヌカイト	2000288	2区5W	SK253	20.0	14.5	2.5	0.5		S18
S18	58	75	石器	石鏃	サヌカイト	2000288	2区3W	SK270	15.5	11.0	3.0	0.4		S5
S19	58	75	石器	石鏃	サヌカイト	2000288	2区4W	SK251	13.0	10.5	3.0	0.4		S19
S20	58	75	石器	石錐	サヌカイト	2000288	2区1W	SK281	45.0	14.0	7.0	4.2		S16
S21	58	75	石器	石鏃	サヌカイト	2000288	2区	包含層	25.5	15.5	4.0	1.1		S6
S22	58	75	石器	楔形石器	サヌカイト	990240	2区4W	SD202	27.5	36.0	9.5	10.6		S25
S23	59	75	石器	石皿	安山岩	2000288	2区1E	SK275	108.2	100.0	47.5	655.0		S39
S24	59	75	石器	石皿	安山岩	2000288	2区4W	SK286	98.0	82.0	55.0	555.0		S35
S25	59	75	石器	磨石	花崗岩	2000288	2区3W	SK606	94.0	60.0	42.0	318.0		S34
S26	59	75	石器	石皿	砂岩	990240	2区4・5W	SD202	85.0	75.5	25.0	185.0		S41
S27	59	75	石器	石皿	砂岩	2000288	2区4W	SK267	237.0	141.0	67.0	3,560.0		S29
S28	80	103	石器	石鏃	サヌカイト	2000288	3区4W	SD351	19.0	14.5	3.5	0.6		S7
S29	80	103	石器	石鏃	サヌカイト	2000288	3区4W	SD351	17.5	15.0	2.5	0.5		S46
S30	80	103	石器	石鏃	サヌカイト	2000288	3区5W	SD351	31.0	14.5	4.0	1.6		S8
S31	80	103	石器	削器	サヌカイト	2000288	3区3W	SD351	74.0	38.0	14.5	27.4		S12
S32	80	103	石器	加工痕剥片	サヌカイト	2000288	3区5W	SD351	36.5	24.5	6.5	5.3	表裏面のほぼ全面に摩滅あり	S20
S33	80	103	石器	楔形石器	サヌカイト	2000288	3区4W	SD351	29.0	43.5	7.0	7.8		S26
S34	80	103	石器	石皿	砂岩	2000288	3区3W	SD351	182.0	136.0	75.0	3,460.0		S27
S35	80	103	石器	楔形石器	サヌカイト	2000288	3区2E	SD353	16.5	28.5	8.0	3.0		S47
S36	80	103	石器	石鏃	サヌカイト	990240	3区3W	SD308	24.5	16.5	3.5	1.0		S4
S37	80	103	石器	石鏃	サヌカイト	990240	3区2W	SD308	30.5	18.5	5.5	2.8		S3
S38	81	103	石器	石錘	砂岩	2000288	3区2W	SD361	50.5	43.0	27.0	71.0	切目石錘	S44
S39	81	103	石器	加工痕剥片	サヌカイト	2000288	3区2E	SD361	34.0	15.0	5.5	3.0		S17
S40	81	103	石器	石鏃	サヌカイト	2000288	3区1E	包含層	16.0	15.0	2.5	0.6		S9
S41	81	103	石器	楔形石器	サヌカイト	990240	3区1W	包含層	21.5	30.5	7.0	5.7	表裏面に摩滅あり	S22
S42	81	103	石器	楔形石器	サヌカイト	2000288	3区1W	包含層	26.0	20.0	7.0	2.8		S24
S43	81	103	石器	楔形石器	サヌカイト	990240	3区5W	SD303	37.0	16.0	10.0	6.1		S23
S44	81	103	石器	加工痕剥片	サヌカイト	2000288	3区1W	包含層	21.0	18.5	3.5	2.0		S15
S45	81	103	石器	加工痕剥片	黒曜石	2000288	3区1W	包含層	31.5	17.5	7.0	2.9	壱岐産黒曜石の可能性大	S21
S46	81	103	石器	削器	サヌカイト	990240	3区4W	SD307	77.0	44.0	10.0	42.8	打製石包丁　表裏面に摩滅あり	S13
S47	88	113	石器	石鏃	サヌカイト	2001123	5区	包含層	14.5	17.5	3.5	0.7		S2
S48	88	113	石器	石鏃	サヌカイト	2001123	5区	包含層	30.0	18.0	3.5	1.3		S10
S49	88	113	石器	石鏃	サヌカイト	2001123	5区	包含層	16.5	12.0	2.5	1.3		S11
S50		113	石器	剥片	黒曜石	2001123	5区	包含層	15.5	10.5	3.0	0.4	姫島産黒曜石の可能性大	
S51		103	石器	石鏃	サヌカイト	2000288	3区2W	SD361	16.0	13.0	4.0	0.6		

別表 3　東南遺跡出土鉄器一覧

報告No.	図版	写真図版	種別	器種	調査番号	調査区	遺構	法量（cm）				実測No.
								長	幅	厚	重量(g)	
M 1	28	47	鉄器	釘	990240	1区10W	SD101	3.5	0.7	0.3～0.4	1.0	T2
M 2	58	75	鉄器	釘	990240	2区1W	SD201	2.9	0.4	0.3	0.5	T5
M 3	58	75	鉄器	釘	990240	2区5W	SD202	2.1	0.6	0.5	0.9	T9
M 4	58	75	鉄器	釘	990240	2区1W	SD201	2.1	0.6	0.4	0.5	T4
M 5	58	75	鉄器	鉄滓	990240	2区4W	SD202	4.3	4.2	2.7	68.0	T7
M 6	58	75	鉄器	不明	990240	2区1W	SD201	9.0	3.7	1.1	29.0	T3
M 7	58	75	鉄器	鉄滓	990240	2区5W	SD201	2.8	3.4	2.4	23.8	T8
M 8	68	91	鉄器	鉋	990240	3区5E	SD308	5.2	1.0	0.2～0.4	1.0	T6
M 9	88	109	鉄器	U字型鋤先	2001123	4区	SD801	8.7	3.3	1.4	34.4	T12
M10	88	109	鉄器	釘	2001123	4区	撹乱　41	10.0	2.0	1.2	6.6	T11
M11	88	109	銅製品	銅環	2001123	4区	撹乱　39	2.0	2.0	径0.3	1.3	T10

図版

図版1　遺跡

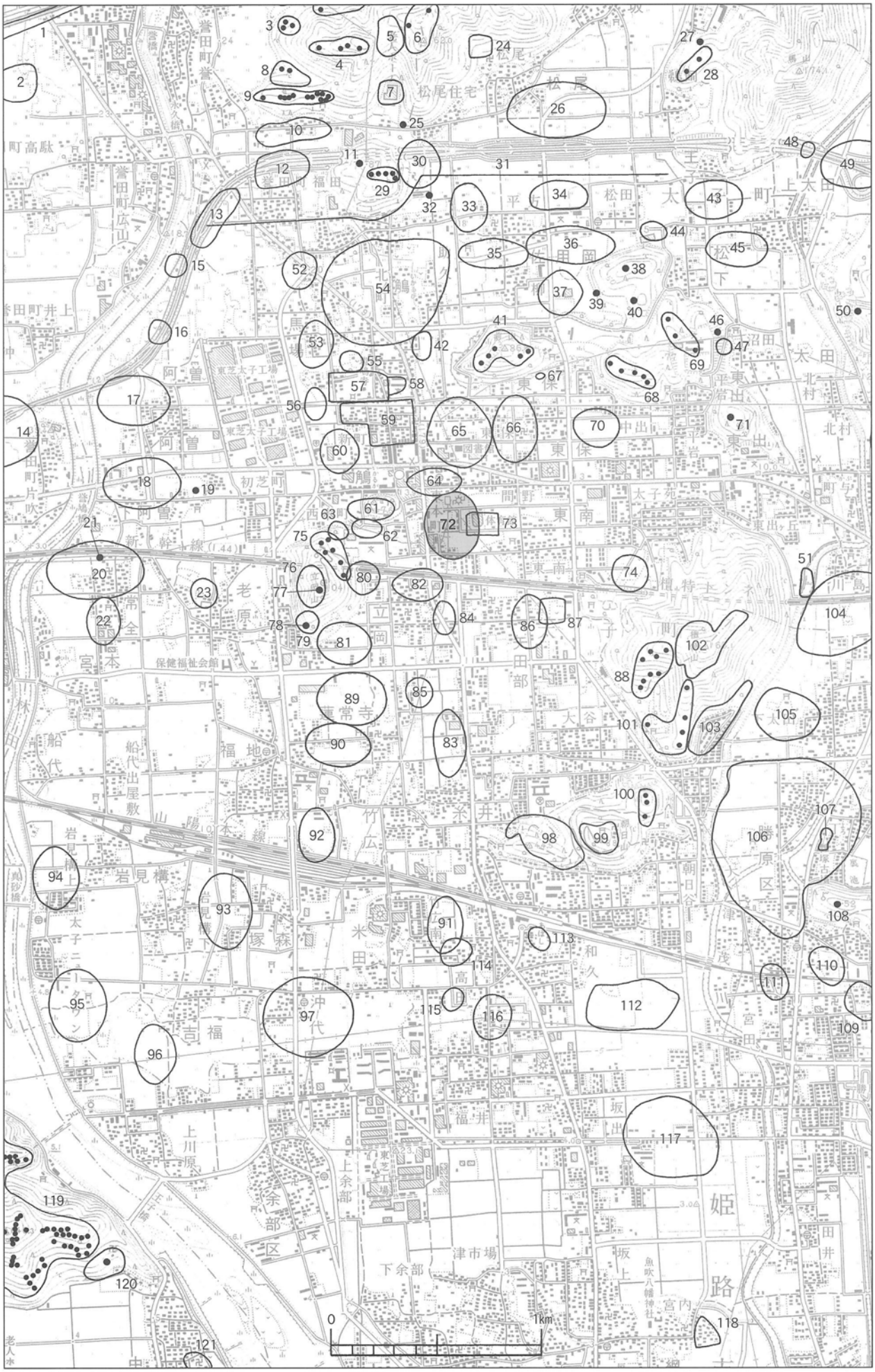


1. 兵庫県の位置　2. 太子町の位置　3. 東南遺跡の位置(1/200,000)

図版2　遺跡

No.	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	遺跡の時代	遺跡の種類
1	120108	宮脇遺跡	たつの市龍野町宮脇五反田、一部誉田町ほか	平安・中世	集落
2	120189	小宅散布地	たつの市誉田町広山井ノ下ほか	奈良～中世	散布地
3	120158～120160	内山古墳群	たつの市誉田町内山下笹山	古墳	古墳
4	120163～120166	内山笹山古墳群	たつの市誉田町内山笹山	弥生・古墳	古墳
5	120170	笹山経塚・円勝寺跡	たつの市誉田町内山笹山	中世	寺院・経塚
6	120167・120168	内山笹山古墳群	たつの市誉田町内山笹山	古墳	古墳
7	120172	笹山遺跡	たつの市誉田町福田谷口	中世	集落
8	120161・120162	内山古墳群	たつの市誉田町内山鳶ケ谷	古墳	古墳
9	120173～120184	明神山古墳群	たつの市誉田町福田明神山	弥生・古墳	古墳・墳墓
10	120185	福田八軒屋遺跡	たつの市誉田町福田上福田ほか	弥生～近世	散布地
11	120188	福田山古墳	たつの市誉田町福田福田山	古墳	古墳
12	120186	福田天神遺跡	たつの市誉田町福田天神ほか	弥生～近世	集落
13	120187	福田片岡遺跡	たつの市誉田町福田片岡ほか	弥生～近世	集落
14	120190	片吹遺跡	たつの市誉田町片吹丁田ほか、井上、下沖地内	縄文～平安	集落
15	450001	春日社跡	揖保郡太子町馬場	中世	寺院
16	450002	阿曽丁田遺跡	揖保郡太子町阿曽	弥生・古墳	散布地
17	450003	阿曽北遺跡	揖保郡太子町阿曽	弥生・平安～近世	集落
18	450004	阿曽南遺跡	揖保郡太子町阿曽	平安・中世	集落
19	450240	阿曽古墳	揖保郡太子町阿曽	古墳	古墳
20	450208	常全遺跡	揖保郡太子町常全	縄文・古墳・平安	集落
21	450209	常全古墳	揖保郡太子町常全	古墳	古墳
22	450210	常全日蓮寺遺跡	揖保郡太子町常全	弥生	墳墓
23	450207	老原遺跡	揖保郡太子町老原	弥生	散布地
24	450223	松尾寺跡	揖保郡太子町松尾	中世	寺院
25	450020	松尾古墳	揖保郡太子町松尾	古墳	古墳
26	450021	松尾遺跡	揖保郡太子町松尾	中世	散布地
27	450039	北山古墳	揖保郡太子町広坂	古墳	古墳
28	450040・450041	鵜飼古墳群	揖保郡太子町広坂	古墳	古墳
29	450231～450236	太郎兵衛林古墳群・墳丘墓	揖保郡太子町佐用岡	弥生・古墳	古墳・墳墓
30	450019	坊主山遺跡	揖保郡太子町佐用岡	旧石器・縄文・平安	集落
31	450222	筑紫大道跡	揖保郡太子町佐用岡	中世	道路
32	450238	桜ヶ坪?示石	揖保郡太子町佐用岡	中世	その他
33	450023	平方壱丁田遺跡	揖保郡太子町佐用岡	古墳	散布地
34	450022	平方高田遺跡	揖保郡太子町佐用岡	古墳	散布地
35	450024	平方宮ノ本遺跡	揖保郡太子町佐用岡	弥生・古墳・中世	集落
36	450025	平方遺跡	揖保郡太子町佐用岡	縄文～古墳・平安・中世	集落
37	450026	南柳遺跡	揖保郡太子町佐用岡	弥生・古墳・中世・近世	集落
38	450063	松田山古墳	揖保郡太子町佐用岡	古墳	古墳
39	450064	柳山古墳	揖保郡太子町佐用岡	古墳	古墳
40	450065	坊主山古墳	揖保郡太子町佐用岡	古墳	古墳
41	450027～450031	東保山古墳群	揖保郡太子町佐用岡	古墳	古墳
42	450018	助久五反畑遺跡	揖保郡太子町佐用岡	縄文～古墳	集落
43	450061	王子遺跡	揖保郡太子町王子	弥生	散布地
44	450239	松ヶ下北遺跡	揖保郡太子町松ヶ下	縄文～古墳	集落
45	450062	松ヶ下遺跡	揖保郡太子町松ヶ下	弥生	散布地
46	450066	沼田古墳	揖保郡太子町沼田	古墳	古墳
47	450067	沼田遺跡	揖保郡太子町沼田	弥生	散布地
48	450049	茶屋ノ前遺跡	揖保郡太子町上太田	古墳・中世	散布地・集落
49	450051	亀田遺跡	揖保郡太子町上太田	弥生・古墳・中世	集落
50	450110	城山1号墳	揖保郡太子町太田	古墳	古墳
51	450091	大津茂川床遺跡	揖保郡太子町太田	縄文・弥生	散布地
52	450006	樋ノ上遺跡	揖保郡太子町馬場	中世	集落
53	450007	馬場遺跡	揖保郡太子町馬場	弥生・古墳・平安	集落
54	450005	城山遺跡	揖保郡太子町鵤	縄文～古墳・中世	集落・城館
55	450008	斑鳩寺北遺跡	揖保郡太子町鵤	弥生・近世	散布地
56	450009	斑鳩寺西遺跡	揖保郡太子町鵤	弥生・古墳	散布地
57	450010	斑鳩寺遺跡	揖保郡太子町鵤	弥生・中世・近世	寺院
58	450011	斑鳩小学校遺跡	揖保郡太子町鵤	近世	寺院
59	450012	鵤構居跡	揖保郡太子町鵤	中世	集落
60	450013	斑鳩寺南遺跡	揖保郡太子町鵤	古墳	集落
61	450014	太子山遺跡	揖保郡太子町鵤	古墳	古墳
62	450015	太子山南麓遺跡	揖保郡太子町鵤	平安	散布地
63	450225	船塚遺跡	揖保郡太子町鵤	古墳	集落・古墳
64	450016	鵤石田遺跡	揖保郡太子町鵤	弥生・古墳	集落
65	450017	鵤遺跡	揖保郡太子町鵤	縄文・弥生・中世	集落
66	450079	東保高田遺跡	揖保郡太子町東保	弥生・古墳	散布地
67	450080	キツネ岩遺跡	揖保郡太子町東保	中世	散布地
68	450071～450075	丹生山古墳群	揖保郡太子町東保	古墳	古墳
69	450068～450070	丹生山古墳群	揖保郡太子町東保	古墳	古墳
70	450078	東保遺跡	揖保郡太子町東保	古墳	散布地
71	450077	中出遺跡	揖保郡太子町東保	縄文・古墳・中世	散布地
72	450081	東南遺跡	揖保郡太子町東南	縄文・弥生・中世	集落
73	450230	佐田構居跡	揖保郡太子町東南	中世	集落
74	450084	栗原遺跡	揖保郡太子町東南	古墳・中世	散布地
75	450196～450201	立岡山古墳群	揖保郡太子町立岡	古墳	古墳
76	450194	石蜘蛛城跡	揖保郡太子町立岡	中世	城館
77	450195	立岡山1号墳	揖保郡太子町立岡	古墳	古墳
78	450202	立岡山8号墳	揖保郡太子町立岡	古墳	古墳
79	450203	立岡山遺跡	揖保郡太子町立岡	弥生	散布地
80	450204	立岡遺跡	揖保郡太子町立岡	縄文～平安	集落
81	450205	立岡南遺跡	揖保郡太子町立岡	古墳	散布地
82	450206	立岡東遺跡	揖保郡太子町立岡	中世	集落
83	450224	立岡笹山遺跡	揖保郡太子町立岡	中世	散布地
84	450237	矢田部西遺跡	揖保郡太子町矢田部	中世	散布地
85	450211	蓮常寺東遺跡	揖保郡太子町蓮常寺	古墳	散布地
86	450083	矢田部遺跡	揖保郡太子町矢田部	弥生・中世	散布地
87	450082	矢田部城跡	揖保郡太子町矢田部	中世	城館
88	450085～450089・450227～	檀特山西古墳群	揖保郡太子町矢田部	古墳	古墳
89	450212	蓮常寺北遺跡	揖保郡太子町蓮常寺	弥生・中世	集落
90	450213	蓮常寺西遺跡	揖保郡太子町蓮常寺	古墳	散布地
91	450215	(仮)高田区整遺跡	揖保郡太子町糸井	弥生	散布地
92	450216	福地宮ノ前遺跡	揖保郡太子町福地	中世	集落
93	450217	福地相坂遺跡	揖保郡太子町福地	弥生	集落
94	450219	上構遺跡	揖保郡太子町岩見構	弥生・古墳・平安	集落
95	450221	吉福西遺跡	揖保郡太子町吉福	古墳	散布地
96	450220	吉福遺跡	揖保郡太子町吉福	古墳	散布地
97	450218	沖代遺跡	揖保郡太子町沖代	弥生・古墳	散布地
98	020329・450214	朝日山遺跡	姫路市勝原区朝日谷・揖保郡太子町糸井	古墳	散布地
99	020330	朝日山城跡	姫路市勝原区朝日谷	中世	城館
100	020331～020333	朝日山古墳群	姫路市勝原区朝日谷	古墳	古墳
101	020315～020321	壇特山古墳群	姫路市勝原区下太田、大谷	古墳	古墳
102	020323・450090	壇特山山頂遺跡	姫路市勝原区下太田・揖保郡太子町矢田部	弥生	集落
103	020322	壇特山遺跡	姫路市勝原区下太田	弥生・古墳	集落・古墳
104	020910・450092	川島遺跡	姫路市勝原区下太田、揖保郡太子町太田	弥生～中世	集落
105	020324	下太田遺跡	姫路市勝原区下太田	古墳	集落
106	020327	丁・柳ヶ瀬遺跡	姫路市勝原区丁	縄文～平安	集落
107	020328	瓢塚古墳	姫路市勝原区丁	古墳	古墳
108	020346	山戸4号墳	姫路市勝原区山戸	古墳	古墳
109	020342	南山戸遺跡	姫路市勝原区山戸	弥生・古墳	集落
110	020341	山戸遺跡	姫路市勝原区山戸	弥生	集落
111	020340	茶屋遺跡	姫路市勝原区宮田	弥生	集落
112	020338	和久遺跡	姫路市網干区和久	弥生・古墳	集落
113	020334	関ノ口遺跡	姫路市網干区和久	その他	散布地
114	020335	(仮)高田区整遺跡第1地点	姫路市網干区高田	弥生	集落
115	020336	(仮)高田区整遺跡第2地点	姫路市網干区高田	弥生～中世	集落
116	020337	(仮)高田区整遺跡第3地点	姫路市網干区高田	奈良～中世	その他
117	020339	坂出遺跡	姫路市網干区坂出	縄文・弥生	散布地
118	020343	魚吹津構跡	姫路市網干区宮内	中世	城館
119	120209～120227	権現山・梶山古墳群	たつの市揖保町真砂権現山・梶山、たつの市揖保川	古墳	古墳
120	470193	中寺遺跡	たつの市御津町中島字北山	奈良～中世	散布地・集落・寺院
121	470166	中島上吉氣遺跡	たつの市御津町中島字上吉氣	弥生	集落

東南遺跡周辺の主要遺跡一覧



東南遺跡周辺の主要遺跡(1/25,000)

図版4　遺跡

東南遺跡の本発掘調査区と既往の調査区の位置(1/1,500)

確認調査と本発掘調査の位置(1/4,000)　調査区全体図(1/1,500)

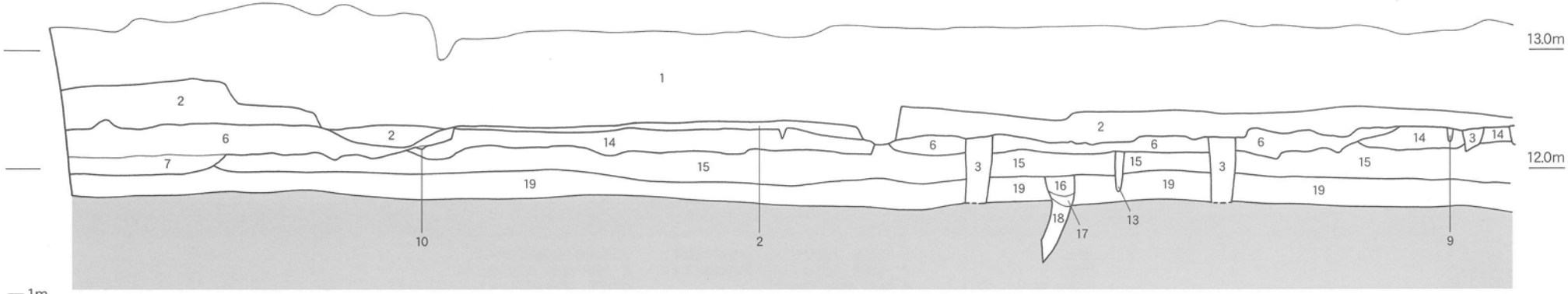
図版6　遺構　1区

北半　下層平面　西壁断面

図版7　遺構　1区

北半　上層平面　東壁断面

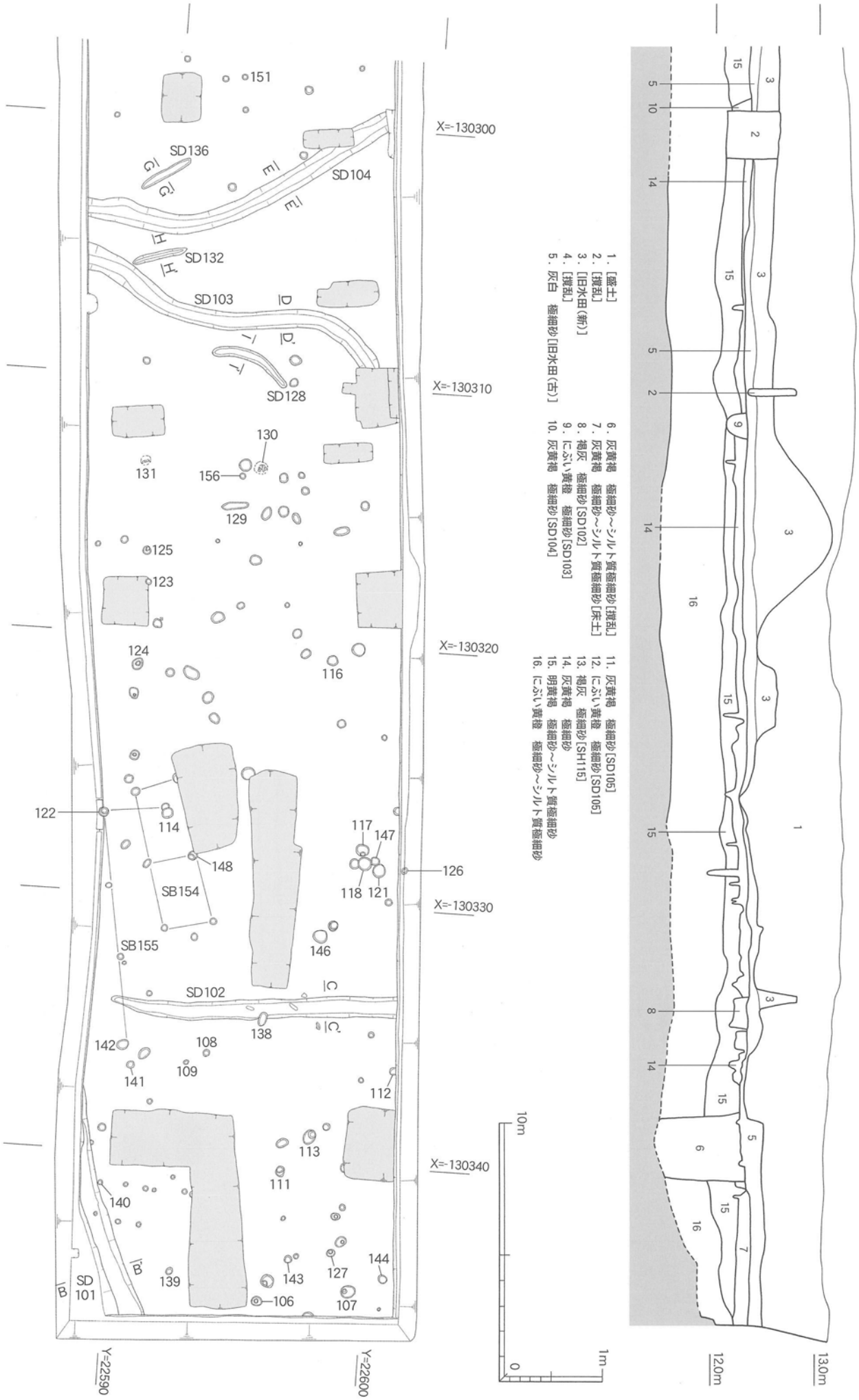
図版8　遺構　1図



1．[盛土]
2．[旧水田(新)]
3．[撹乱]
4．[旧水田(古)]
5．明黄褐　極細砂(茶褐ブロック含)[旧耕土床土]
6．灰黄褐　極細砂[SD101]
7．灰黄褐　極細砂[SD101]
8．褐灰　細砂～極細砂(ラミナ)[SD101]
9．褐灰　極細砂[遺構]
10．にぶい黄褐　極細砂～シルト質極細砂
11．暗褐　極細砂　シルト質極細砂
12．灰黄橙　極細砂　シルト質極細砂(炭・焼土含)
13．暗褐　中砂(炭・焼土含)[SK528]
14．明黄褐　極細砂～シルト質極細砂
15．にぶい黄橙　極細砂～シルト質極細砂
16．にぶい黄橙+褐灰　シルト質極細砂[風倒木]
17．にぶい黄橙　中砂混じりシルト質極細砂(土器片・炭少量含)[風倒木]
18．灰黄橙　シルト質極細砂(炭含)[風倒木]
19．暗褐　極細砂～シルト質極細砂

南半　下層平面　西壁断面

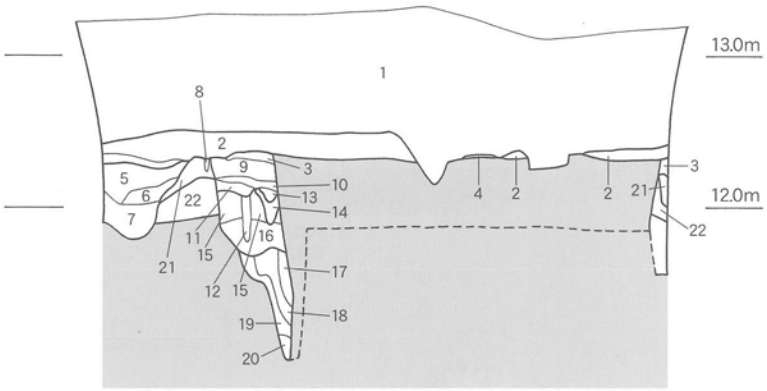
図版9　遺構　1区

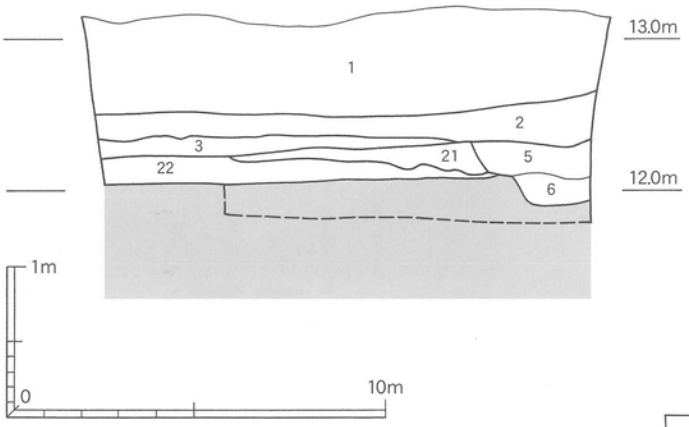


南半　上層平面　東壁断面

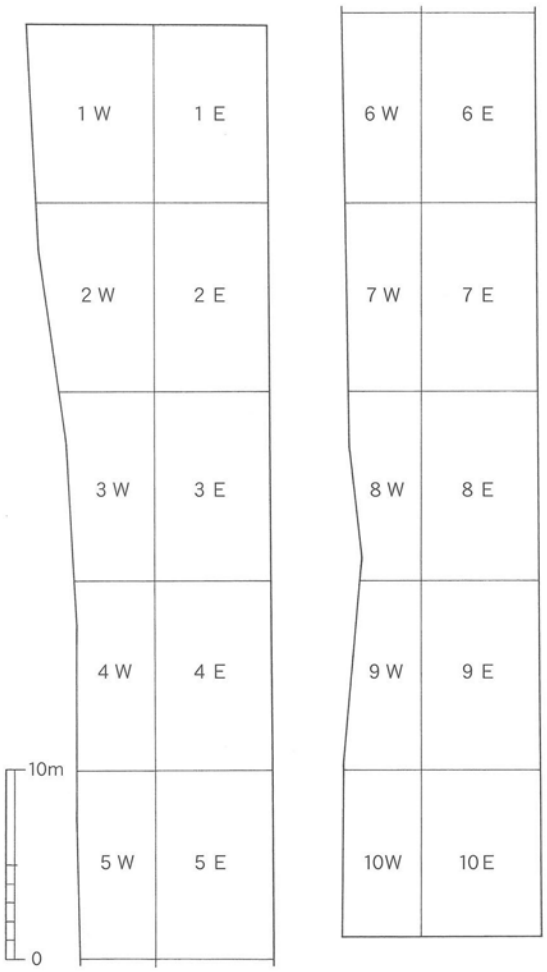
図版10　遺構　1区

最下層平面



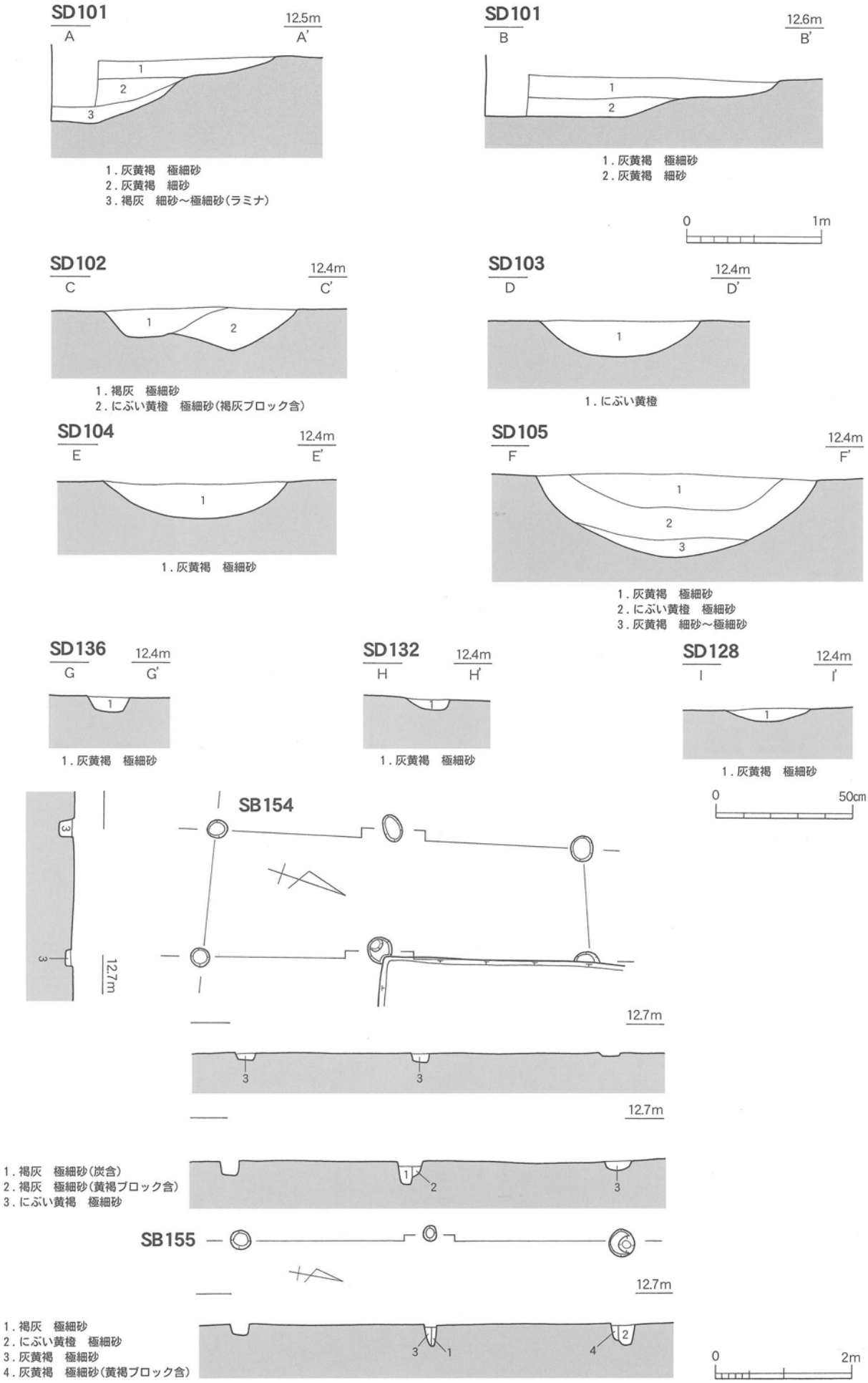


1．[盛土]
2．[水田層(新)]
3．灰黄褐　極細砂～シルト質極細砂[水田層(古)]
4．[撹乱]
5．灰黄褐　極細砂[SD101]
6．灰黄褐　極細砂[SD101]
7．褐灰　細砂～極細砂(ラミナ)[SD101]
8．黒褐　シルト質極細砂(Mn含)
9．灰黄褐　中砂混じり極細砂(Mn斑含)
10．褐灰　極細砂(炭・焼土粒少量含)
11．灰黄褐　粗砂混じり極細砂
12．暗褐　シルト質極細砂
13．灰黄褐　極細砂(焼土粒・炭多量に含)
14．暗褐　中細砂混じりシルト質極細砂(焼土粒・炭多く含)
15．灰黄褐　シルト質極細砂(炭・焼土多量に含)
16．にぶい黄褐　シルト質極細砂(炭・焼土多量に含)
17．褐　シルト質極細砂(炭多量に含・しまりが悪い)
18．褐　シルト質極細砂(炭少量含)
19．にぶい黄褐　シルト質極細砂(炭少量含)
20．褐　シルト質極細砂(しまりが悪い)
21．明黄褐　極細砂～シルト質極細砂
22．にぶい黄橙　極細砂～シルト質極細砂

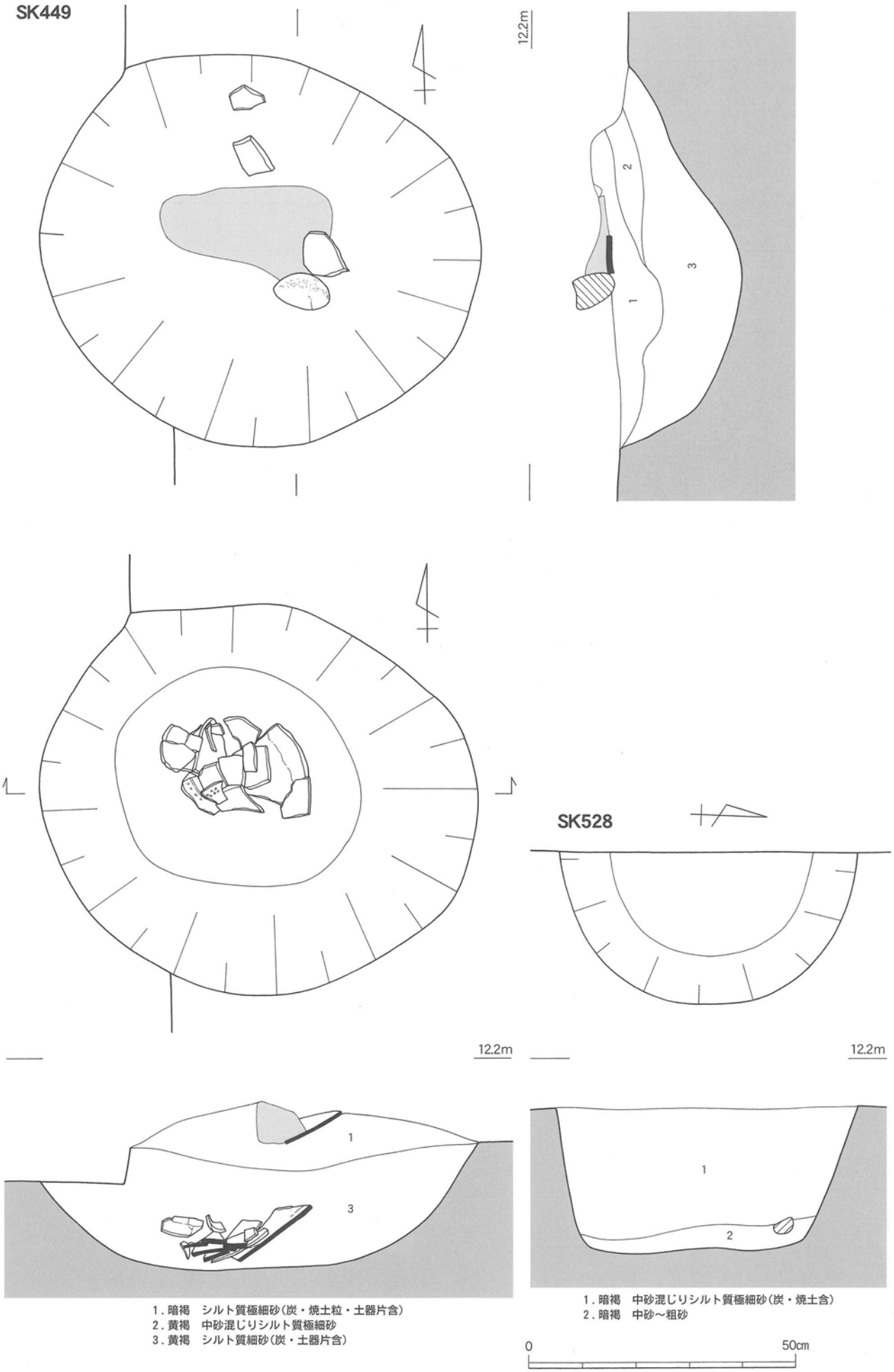


北壁・南壁断面と地区割り

図版12　遺構　1区



SD101・SD102・SD103・SD104・SD105・SD136・SD132・SD128　　SB154・SB155

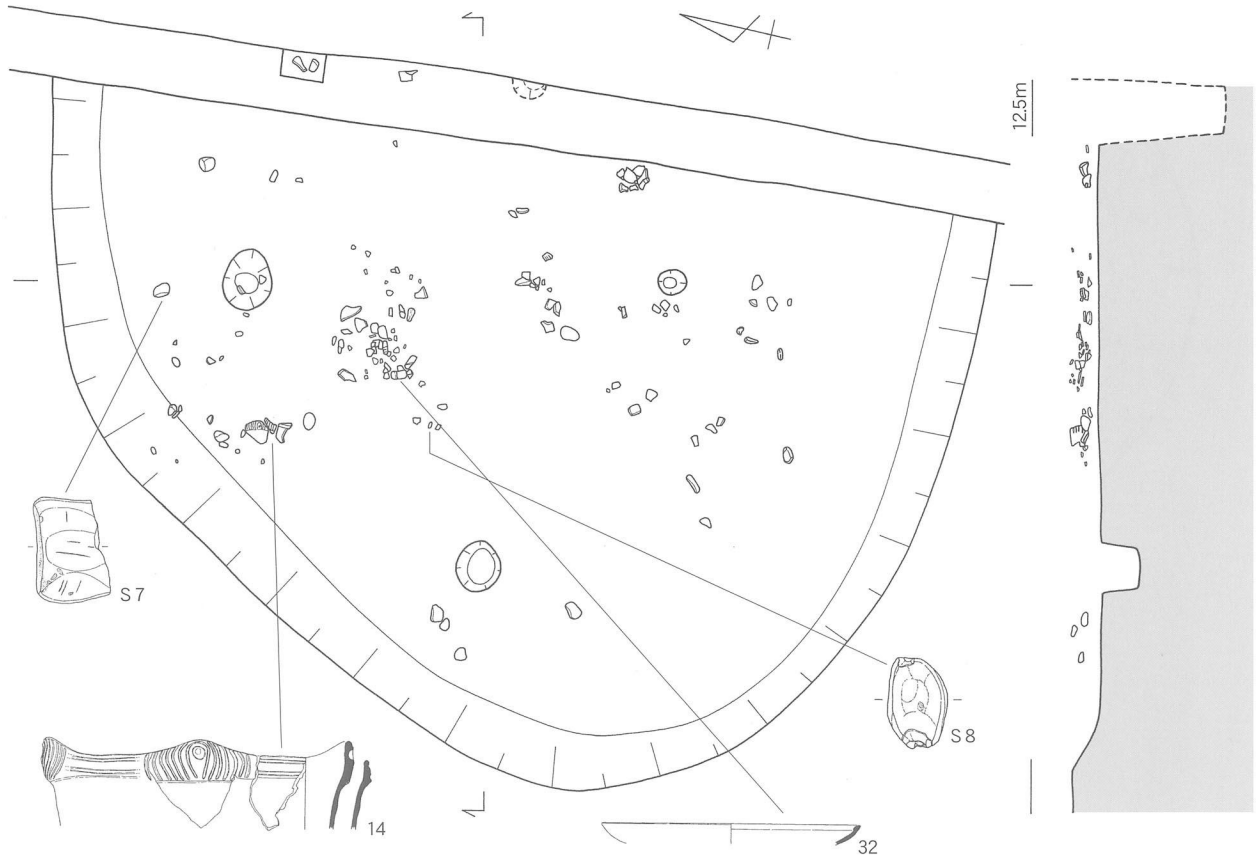


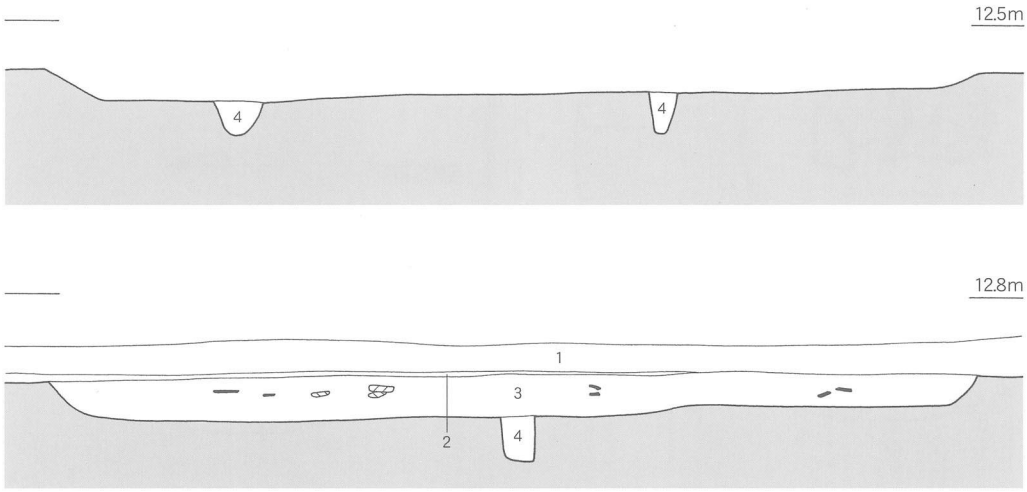
1．暗褐　シルト質極細砂（炭・焼土粒・土器片含）
2．黄褐　中砂混じりシルト質極細砂
3．黄褐　シルト質細砂（炭・土器片含）

1．暗褐　中砂混じりシルト質極細砂（炭・焼土含）
2．暗褐　中砂～粗砂

1区6W　SK449上・下層　7W　SK528

SH115

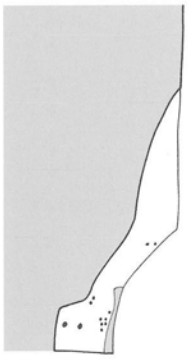


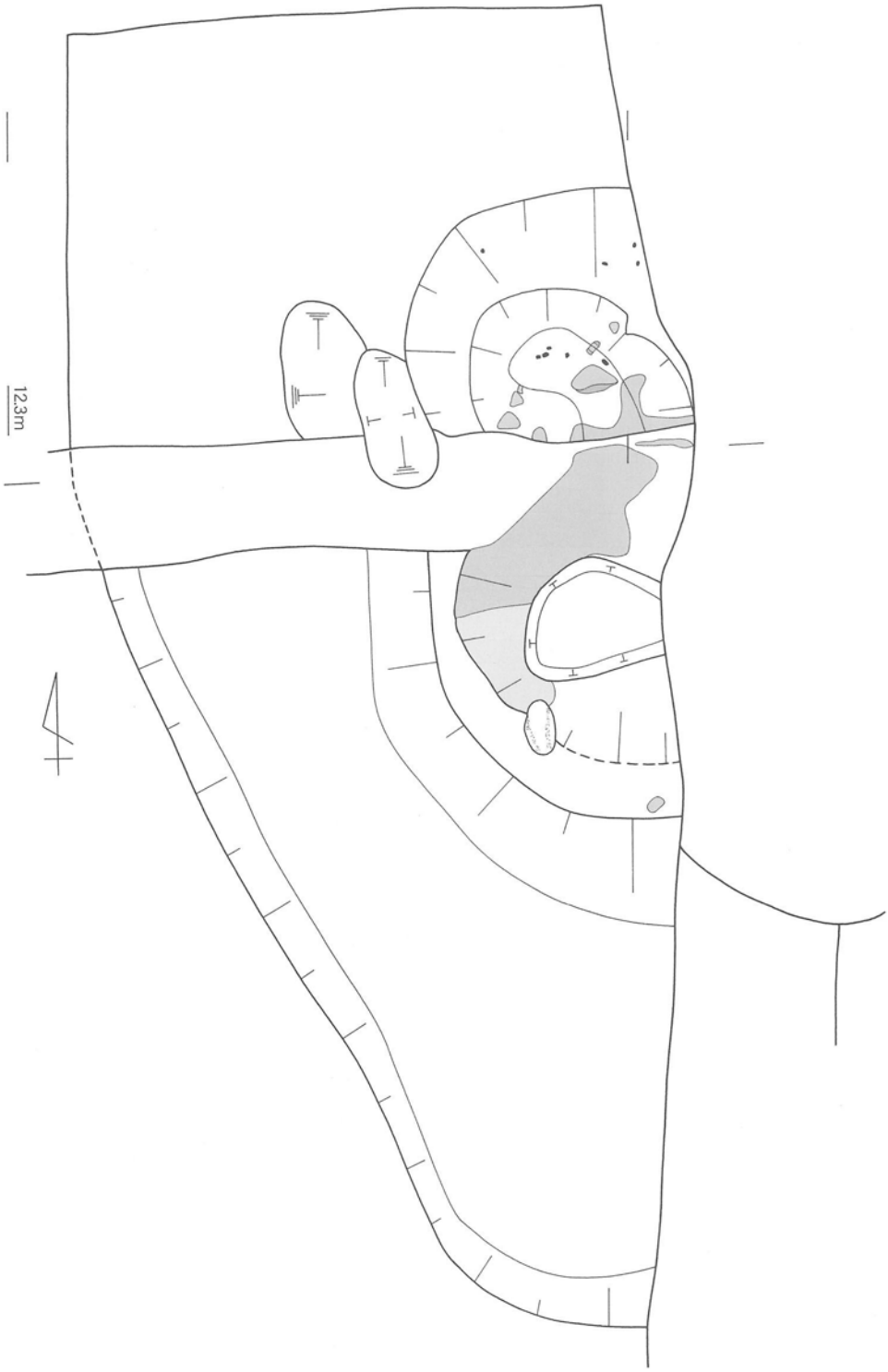


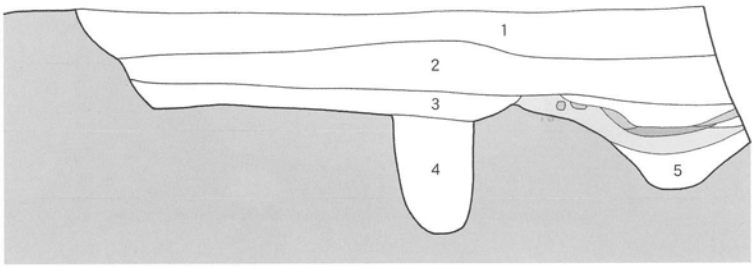
1．灰白　極細砂［旧水田（新）］
2．明黄褐　極細砂［床土］
3．褐灰　極細砂（炭含）
4．灰黄褐　極細砂

0　2m

SH401





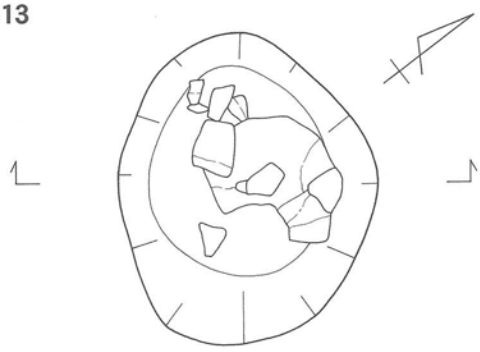


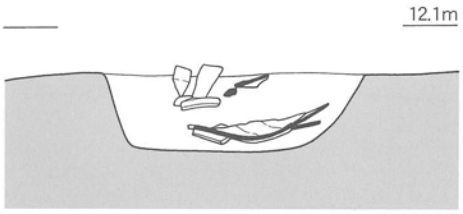
1．灰黄褐　極細砂（Mn 斑含）
2．褐灰　極細砂（焼土粒・炭少量含）
3．灰黄褐　極細砂
4．暗褐　シルト質極細砂
5．灰黄褐　極細砂（焼土粒・炭多量に含）［炉］

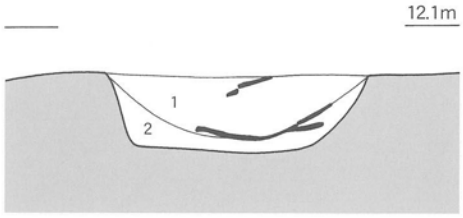
0　1m

1W SH401

SK413

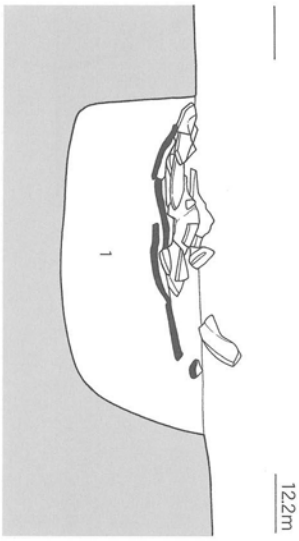


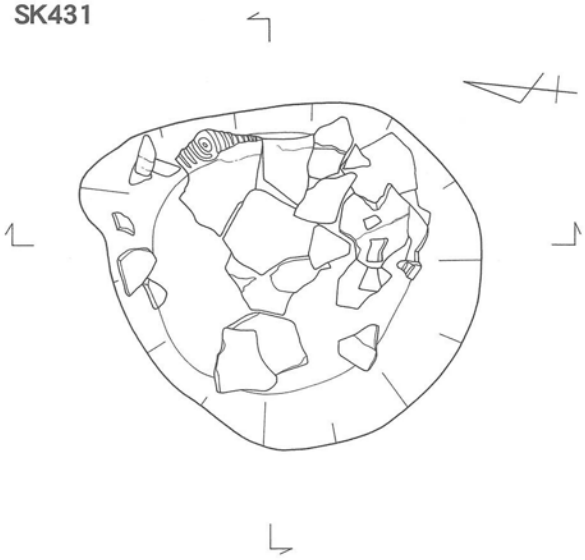


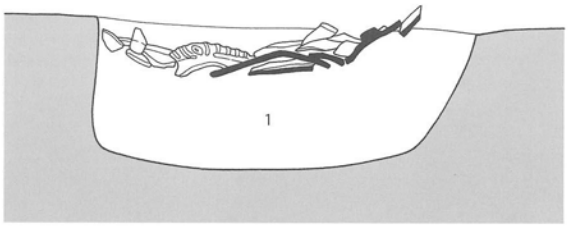


1．褐　シルト質細砂(炭含)
2．暗褐　シルト質中砂(炭少量含)

SK431

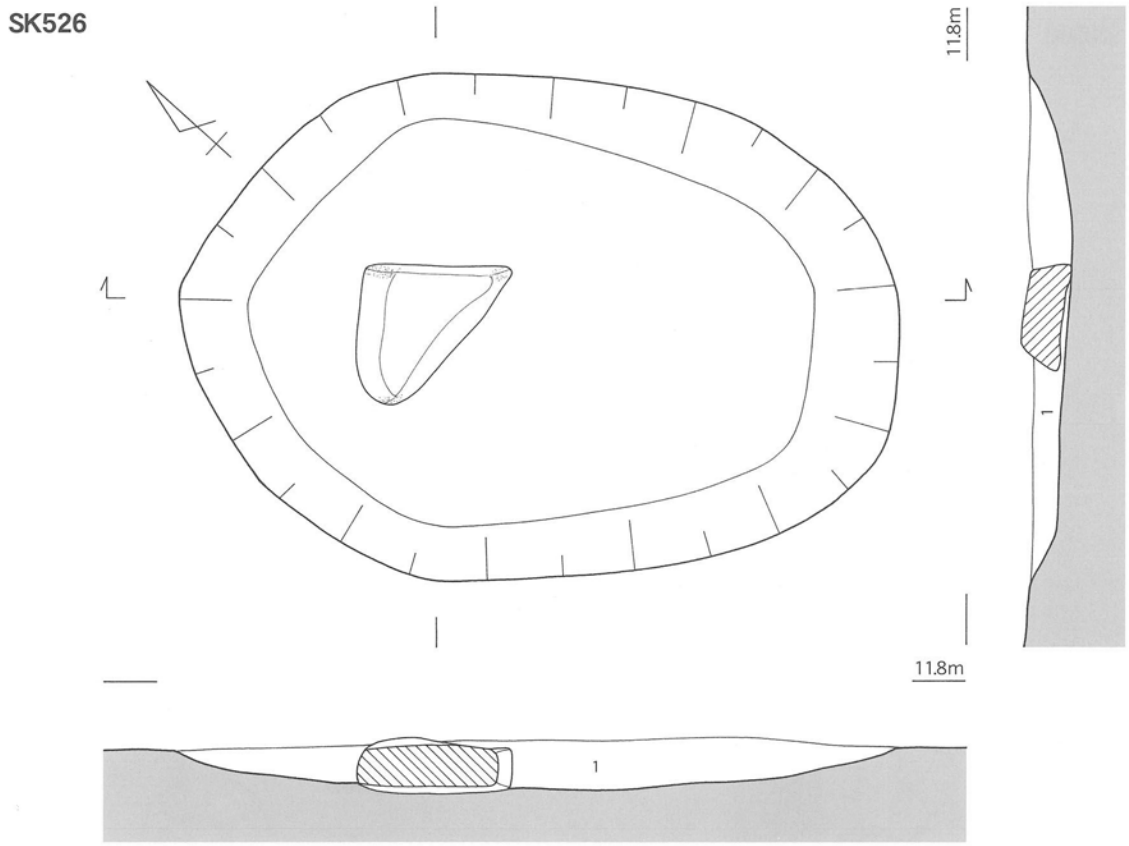




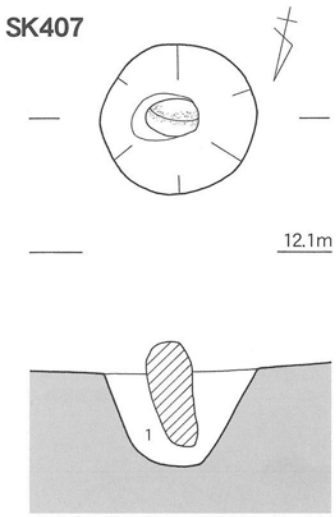


1．褐　シルト質極細砂

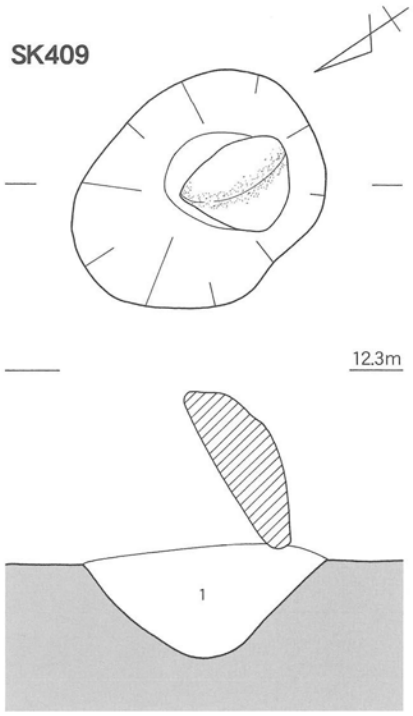
3W SK413・SK431



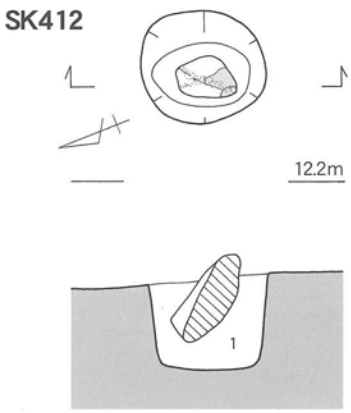
1．暗褐　シルト質極細砂



1．褐　シルト質極細砂



1．灰褐　シルト質極細砂

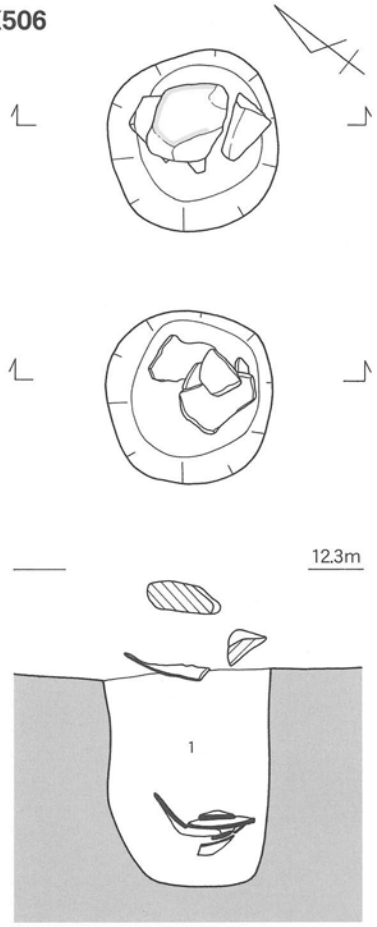


1．褐灰　シルト質極細砂（炭・焼土含）

1W　SK526　2E SK407　2W SK409・SK412

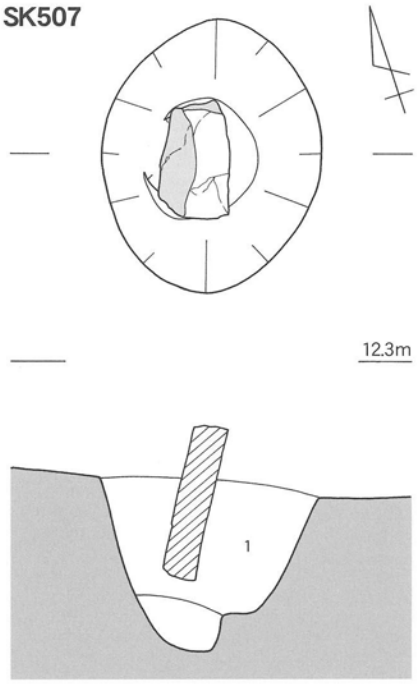
図版18　遺構　1区

SK506



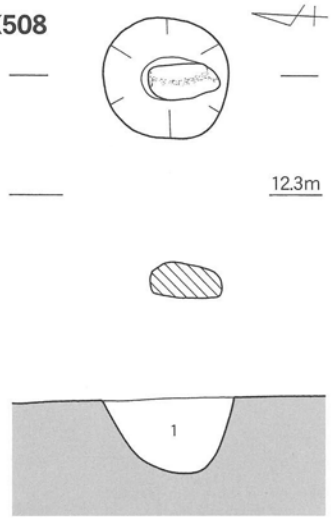
1．褐灰　シルト質極細砂（炭・焼土含）

SK507



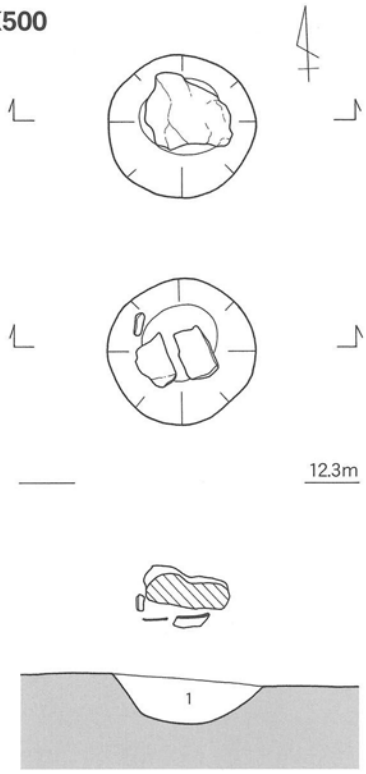
1．褐灰　シルト質極細砂（炭・焼土含）

SK508



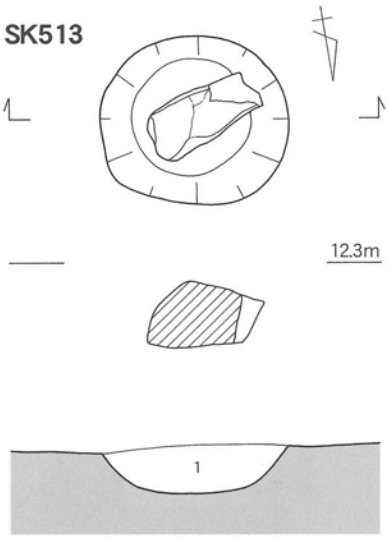
1．褐　シルト質極細砂

SK500



1．褐　シルト質極細砂

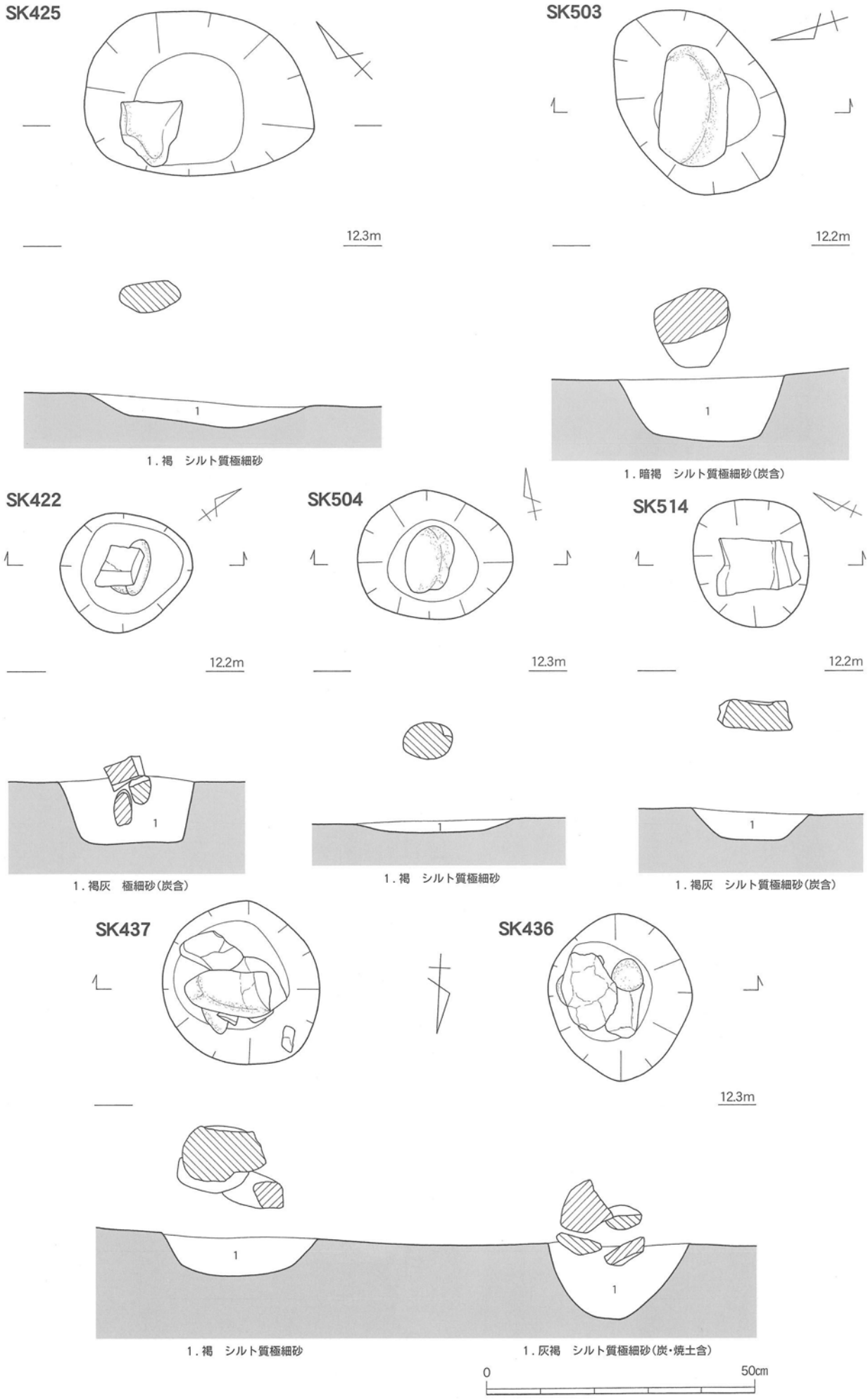
SK513



1．褐灰　シルト質極細砂（炭含）

0　50cm

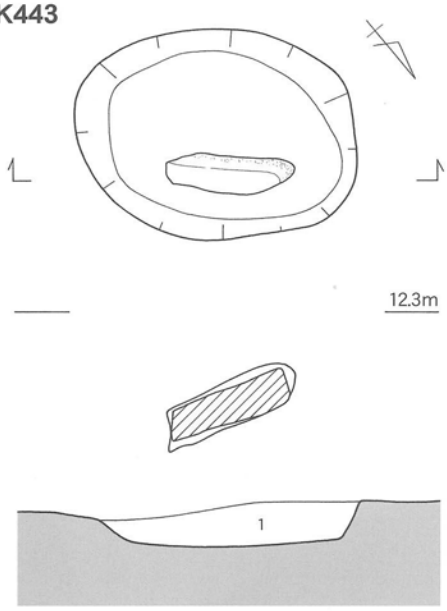
2W　SK506・SK507・SK508　3W　SK500・SK513



4E SK425　5E SK436・SK437　4W SK503・SK504・SK514・SK422

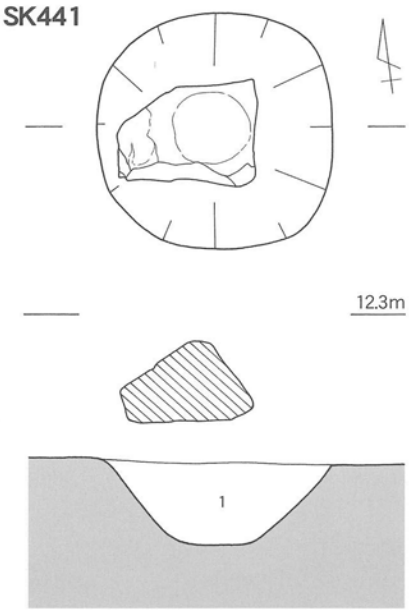
図版20　遺構　1区

SK443



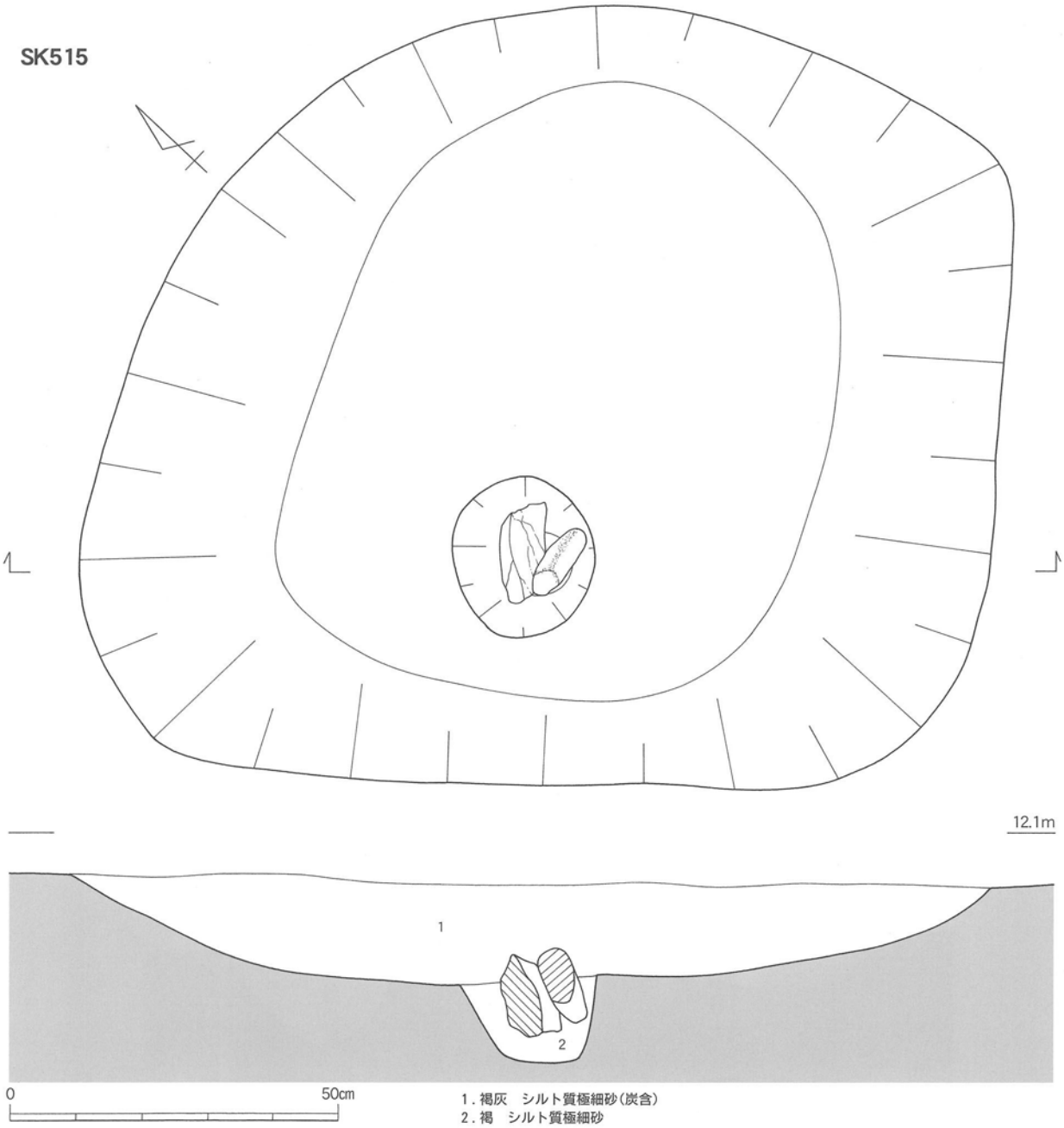
1．褐　シルト質極細砂

SK441



1．褐灰　シルト質極細砂（炭含）

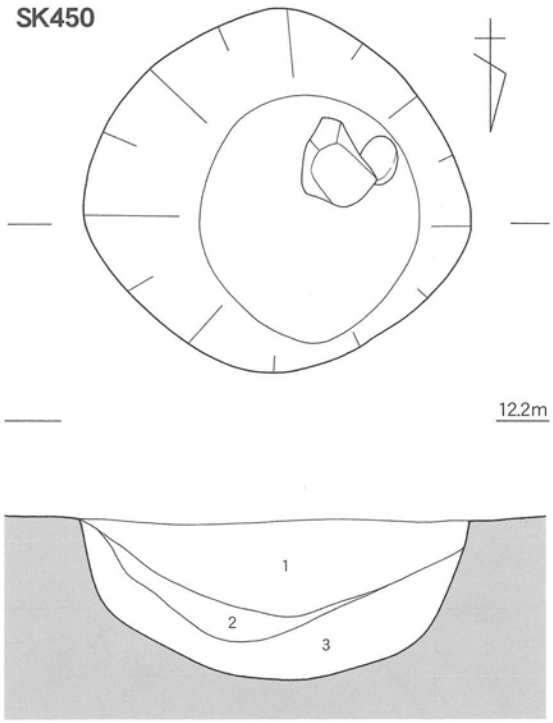
SK515



1．褐灰　シルト質極細砂（炭含）
2．褐　シルト質極細砂

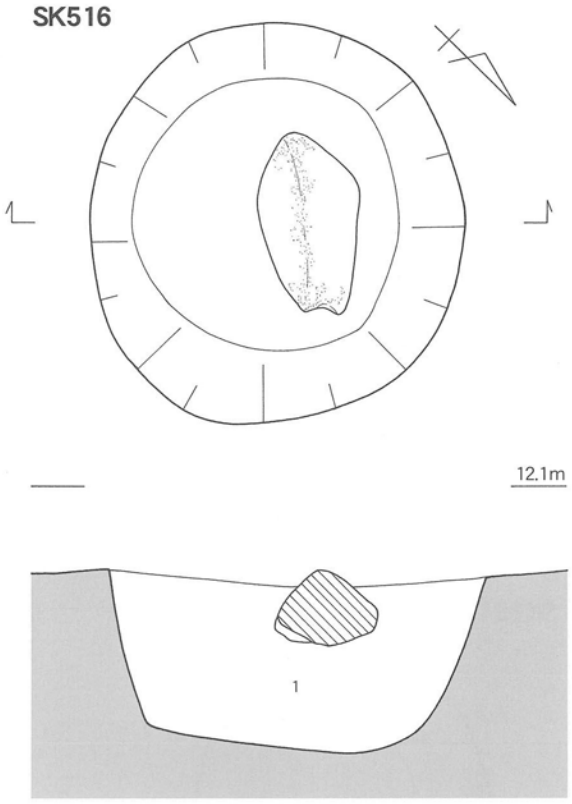
5E SK443　5W SK441・SK515

SK450



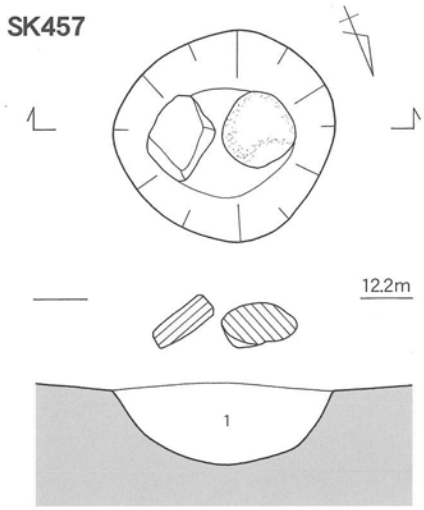
1．灰褐　細砂混じりシルト質極細砂（炭・焼土多量に含）
2．にぶい褐　シルト質細砂（炭少量含）
3．灰褐　シルト質極細砂

SK516



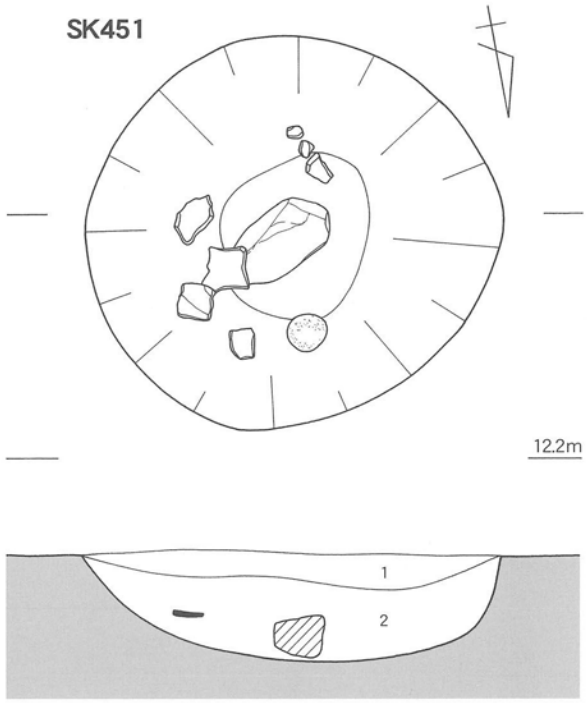
1．褐　シルト質極細砂

SK457



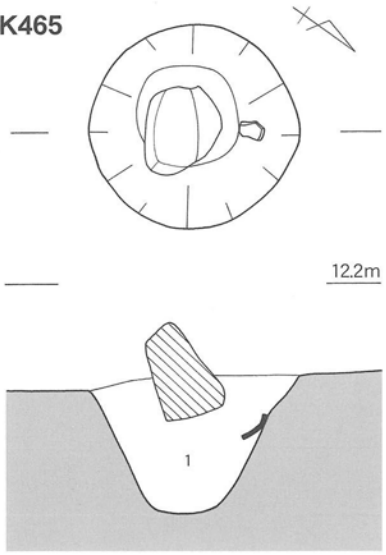
1．にぶい黄褐　シルト質極細砂

SK451



1．にぶい褐　細砂混じりシルト質極細砂（炭含）
2．にぶい褐　極細砂混じりシルト質極細砂（炭含）

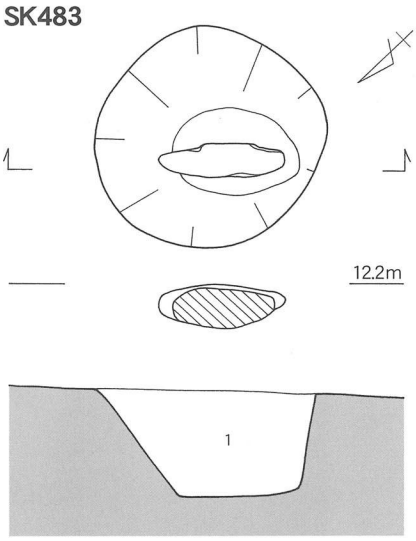
SK465



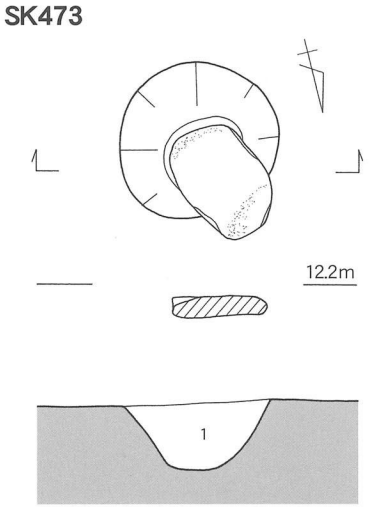
1．褐灰　シルト質極細砂

7W SK450・SK451・SK457・SK465　6W SK516

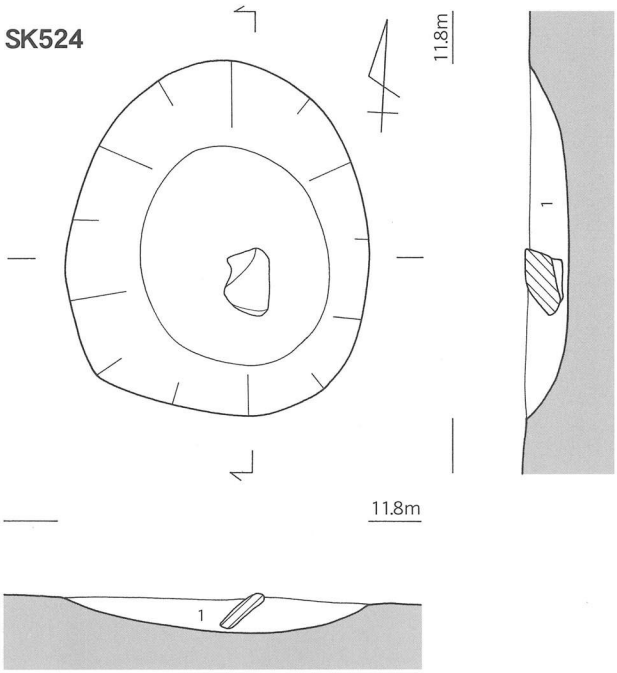
図版22　遺構　1区



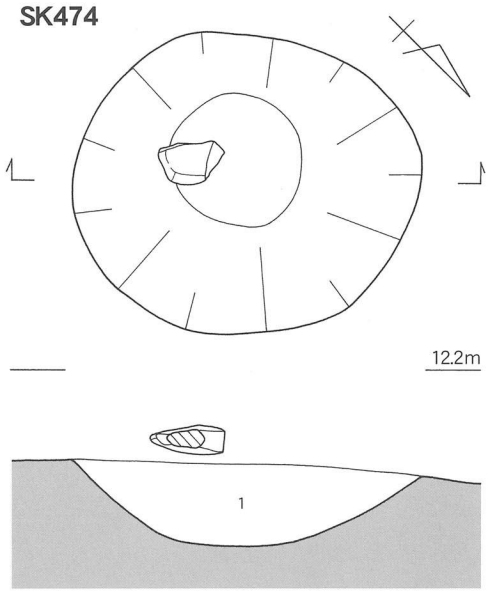
1．にぶい褐　シルト質極細砂



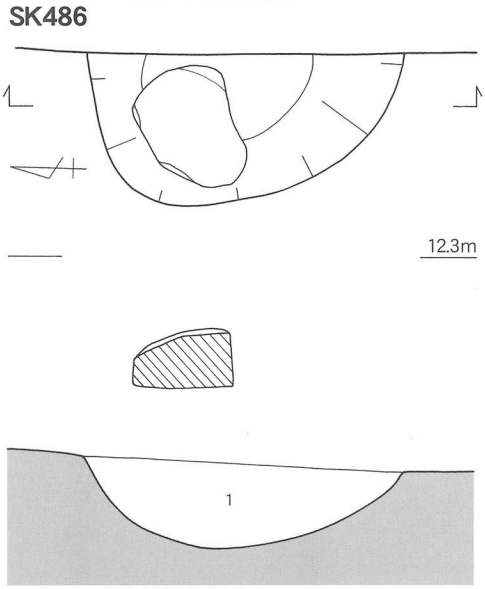
1．にぶい褐　細砂混じりシルト質極細砂（炭含）



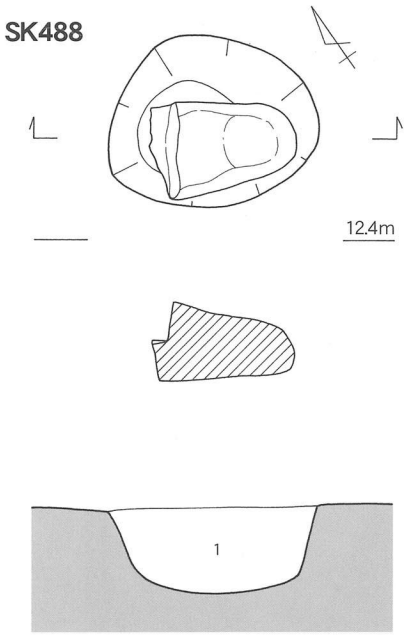
1．褐　シルト質極細砂



1．褐　シルト質極細砂



1．褐　シルト質極細砂

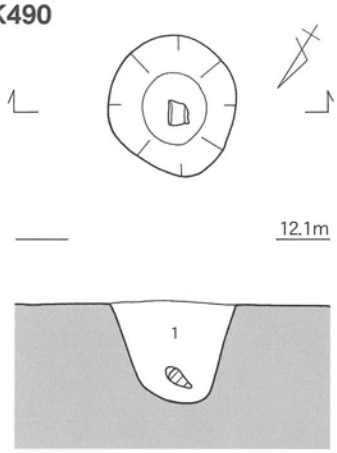


1．にぶい褐　シルト質極細砂

0　50cm

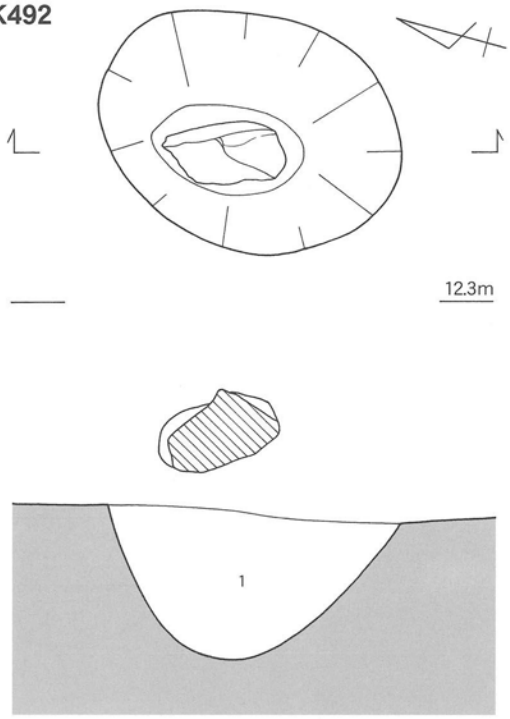
8E　SK483・SK524・SK473　8W　SK474　9E　SK486・SK488

SK490



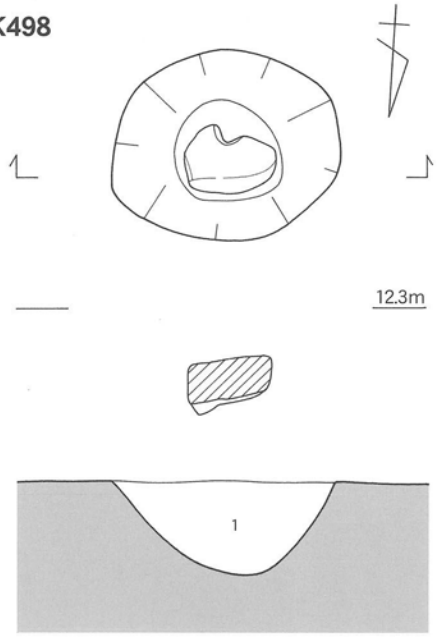
1．褐　シルト質極細砂

SK492



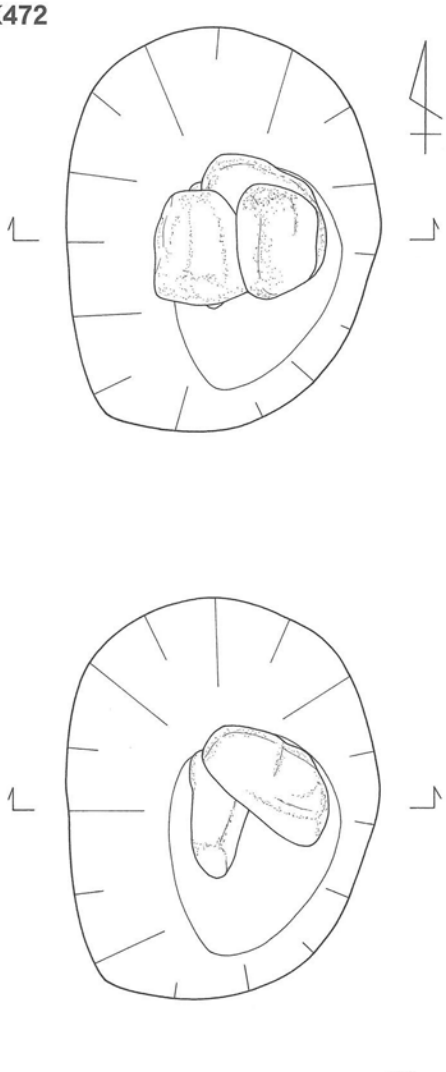
1．にぶい褐　シルト質極細砂

SK498



1．褐　シルト質極細砂

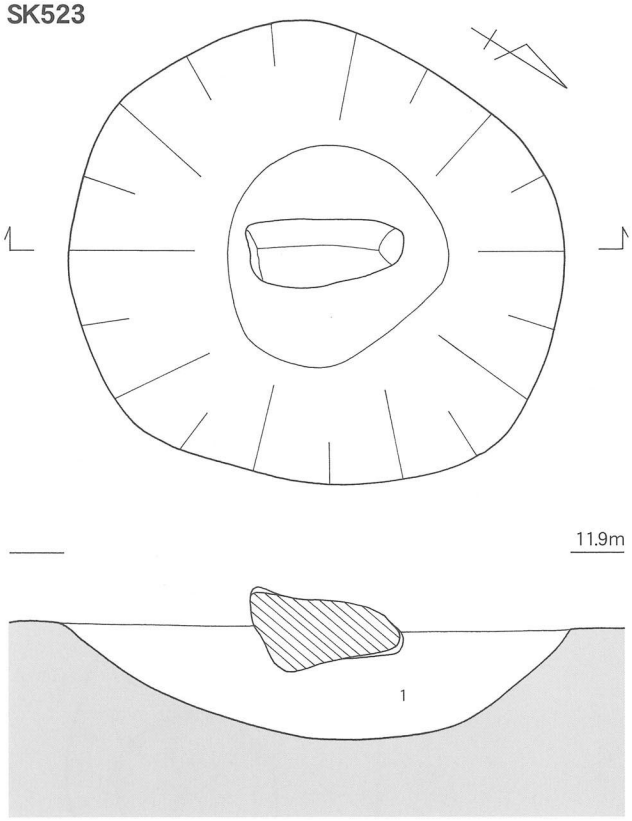
SK472



1．灰褐＋橙　細砂混じりシルト質極細砂
2．灰褐　細砂～シルト質極細砂

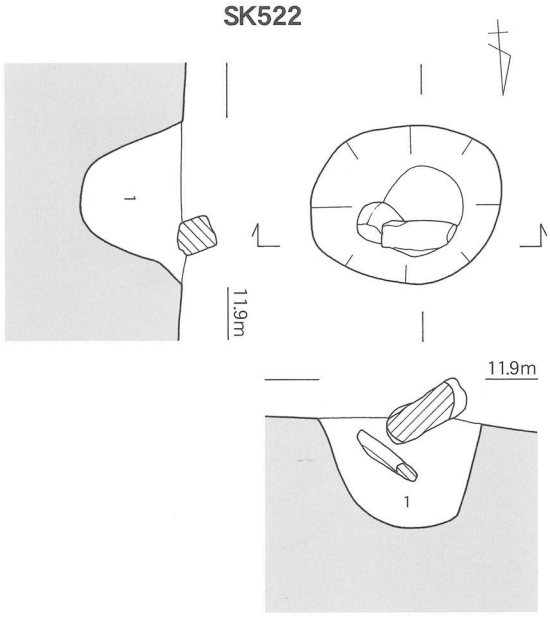
9E SK490・SK492　9W SK498・SK472

SK523



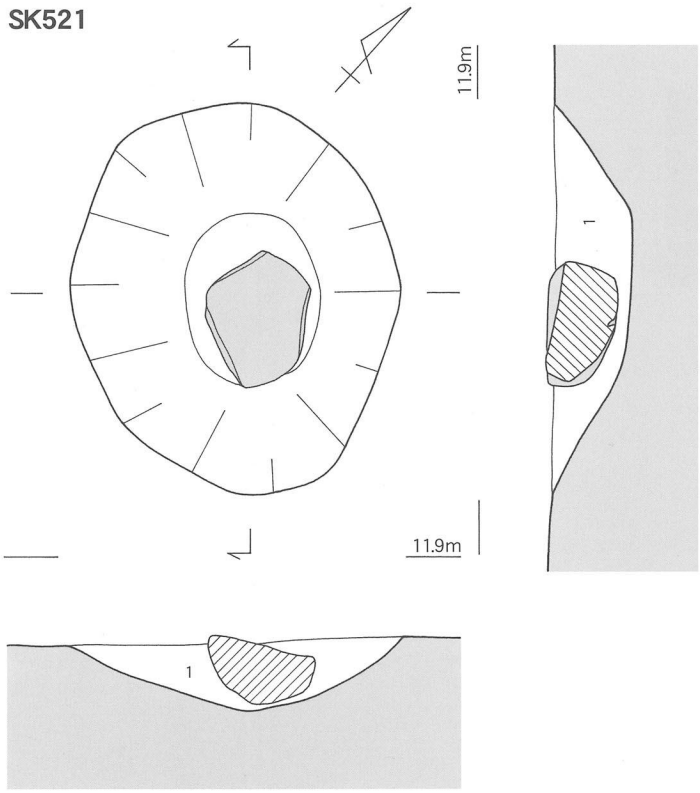
1．暗褐　シルト質極細砂

SK522



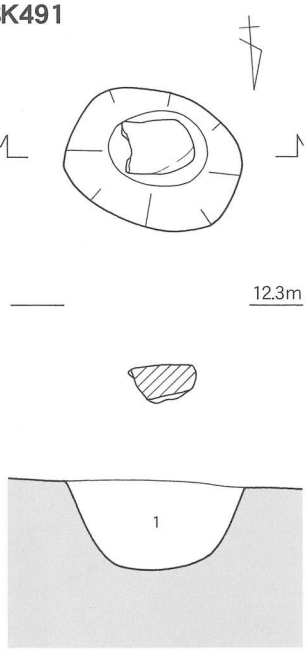
1．褐　シルト質極細砂

SK521



1．褐　シルト質極細砂

SK491

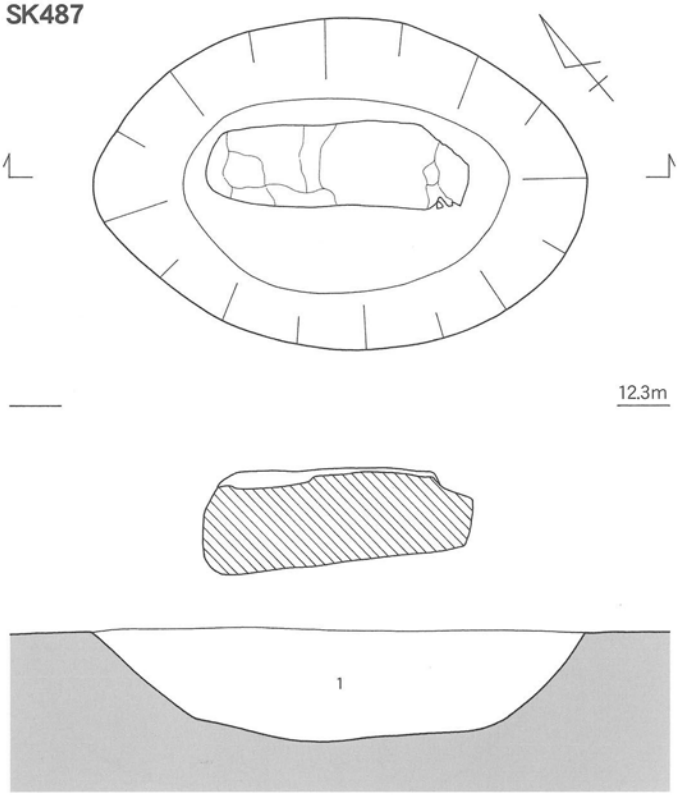


1．褐灰　シルト質極細砂

0　50cm

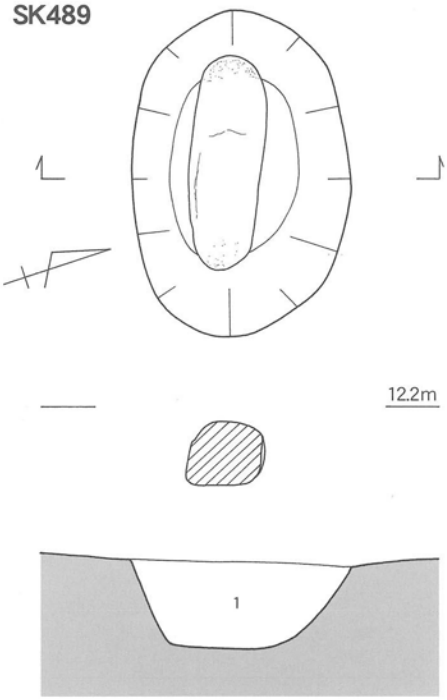
9W SK523・SK521　10W SK491　10E SK522

SK487



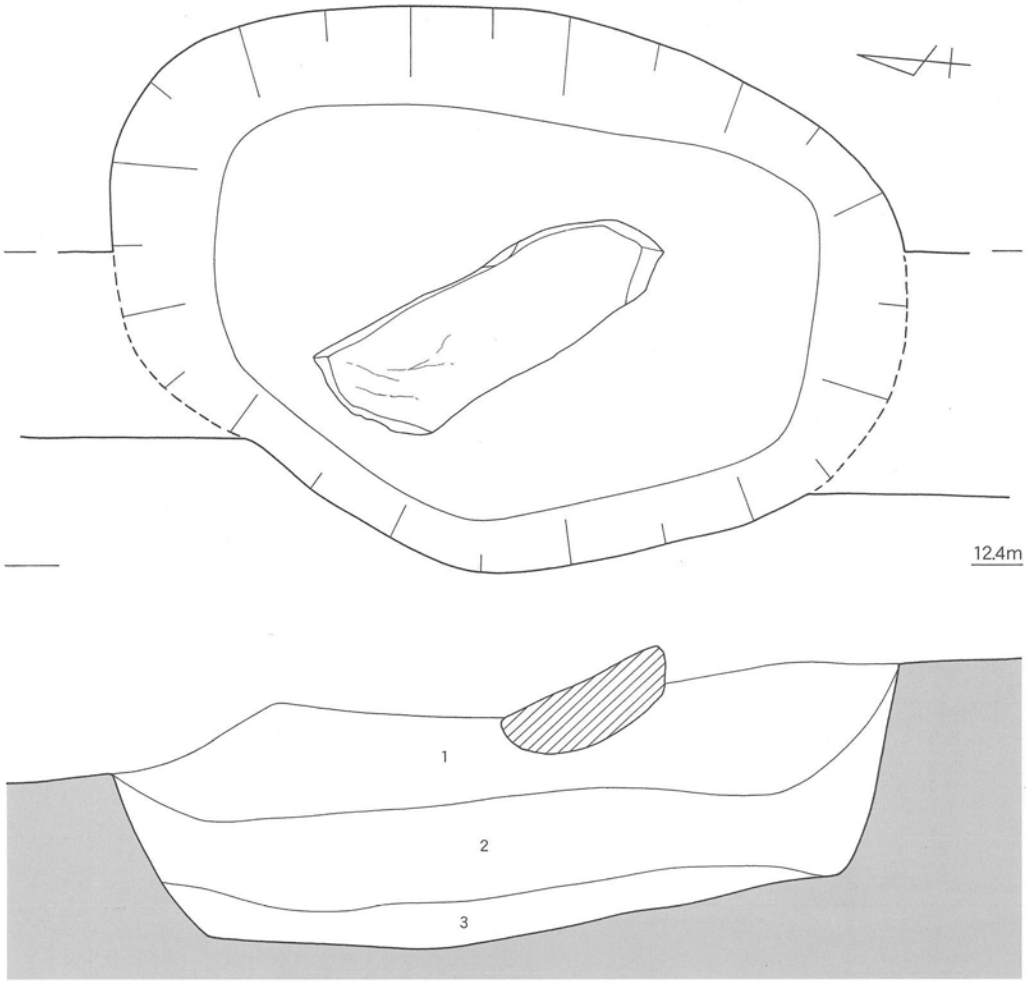
1．褐　シルト質極細砂

SK489



1．褐　シルト質極細砂

SK485



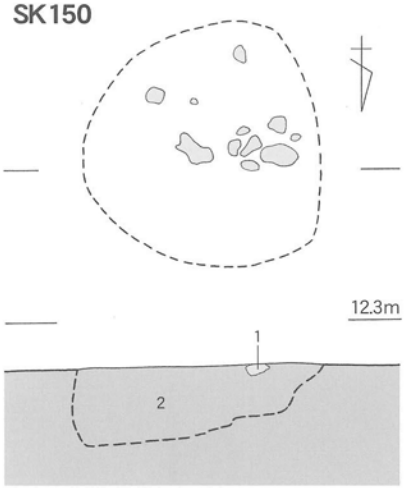
1．褐灰　中砂混じりシルト質極細砂
2．褐灰　シルト質極細砂
3．にぶい黄褐　シルト質極細砂

0　50cm

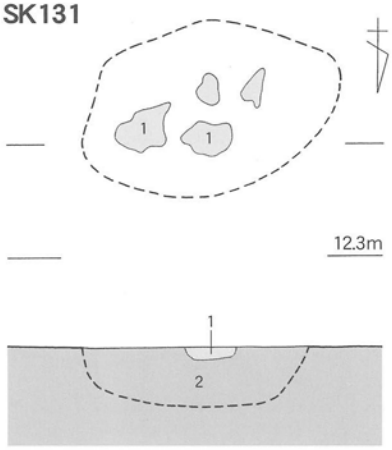
9E SK487・SK489・SK485

図版26　遺構　1区

SK150

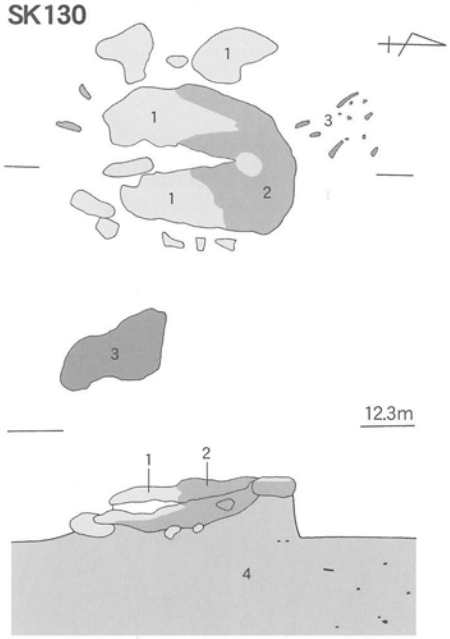


SK131



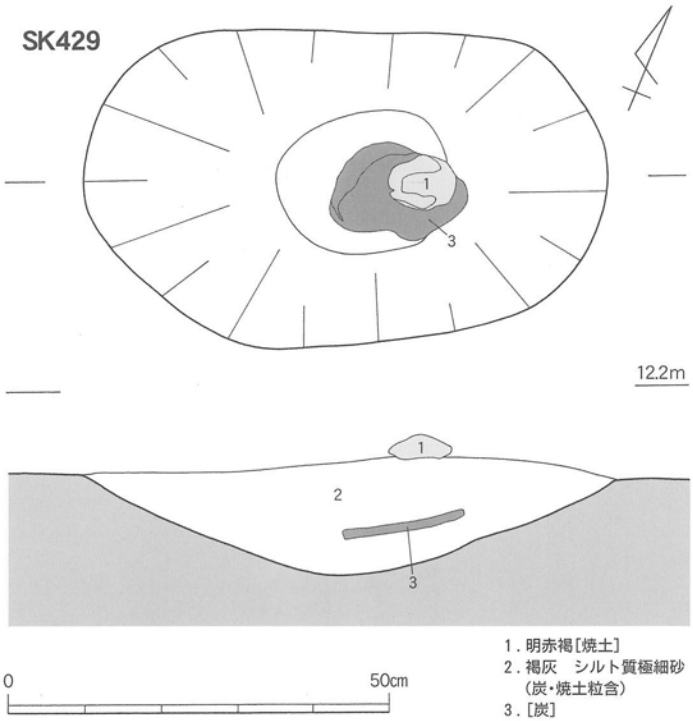
1．明赤褐［焼土］
2．灰黄褐　極細砂

SK130



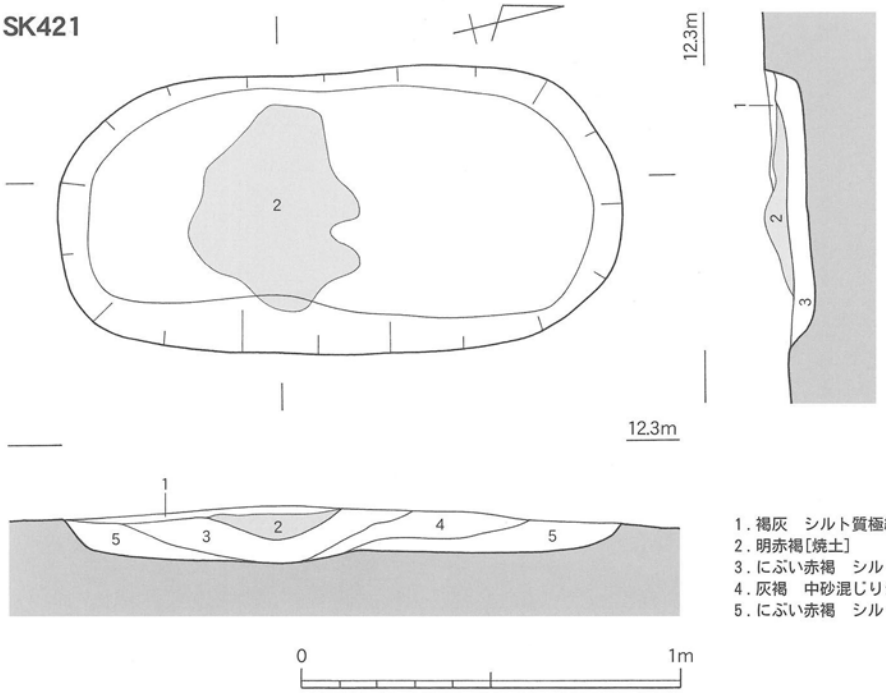
1．明赤褐［焼土］
2．赤黒［焼土］
3．［炭］
4．灰黄褐　極細砂

SK429



1．明赤褐［焼土］
2．褐灰　シルト質極細砂（炭・焼土粒含）
3．［炭］

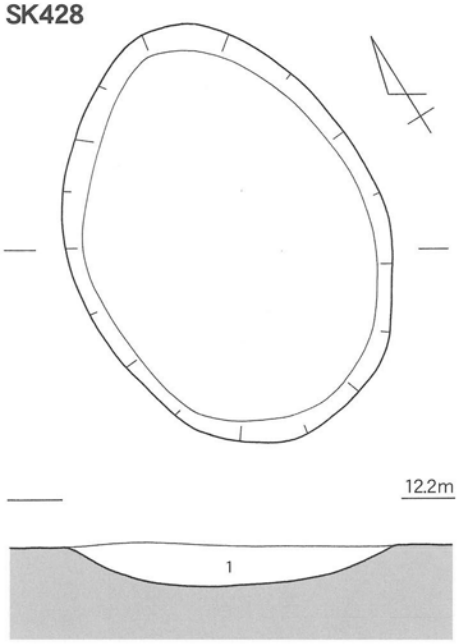
SK421



1．褐灰　シルト質極細砂（炭含）
2．明赤褐［焼土］
3．にぶい赤褐　シルト質極細砂（焼土含）
4．灰褐　中砂混じりシルト質極細砂（炭含）
5．にぶい赤褐　シルト質極細砂（焼土粒含）

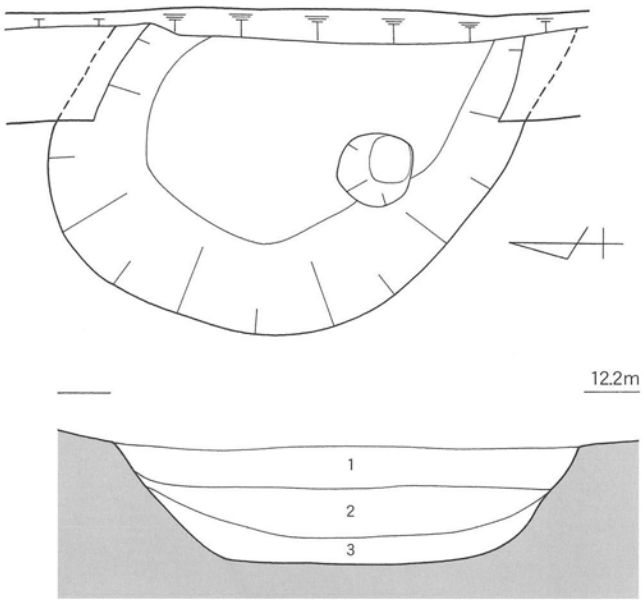
SK150・SK130・SK131　3W　SK421　4W　SK429

SK428



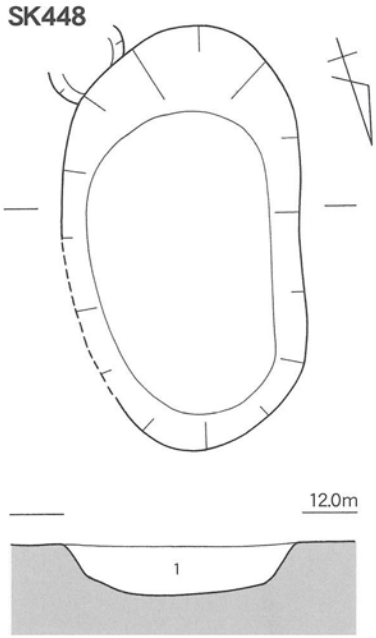
1．褐　シルト質極細砂（焼土・炭含）

SK509



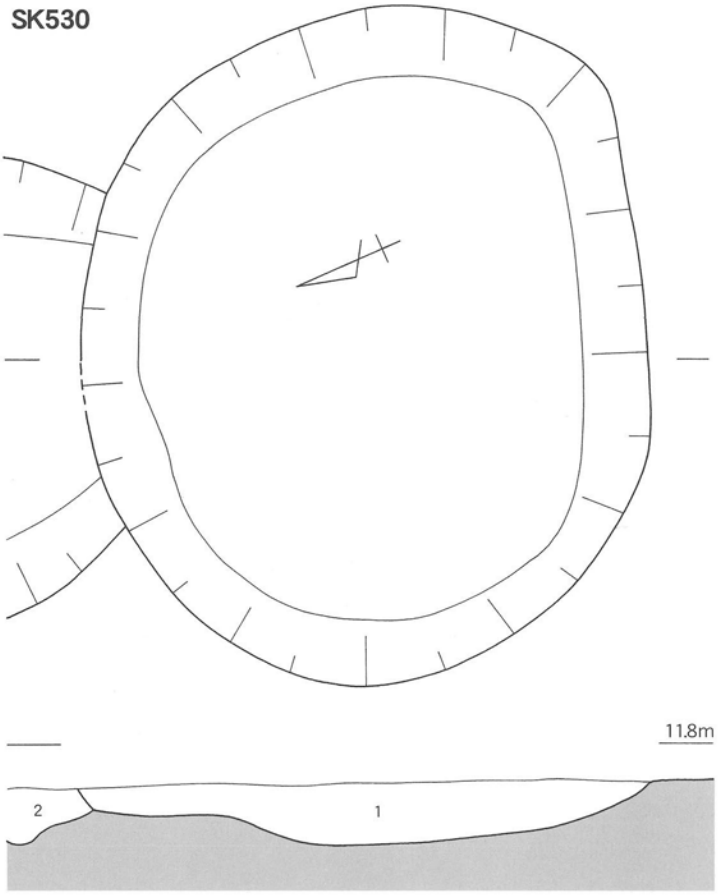
1．にぶい黄＋にぶい黄褐　細砂混じりシルト質極細砂
2．にぶい黄褐　シルト質極細砂（土器含）
3．褐　シルト質極細砂

SK448



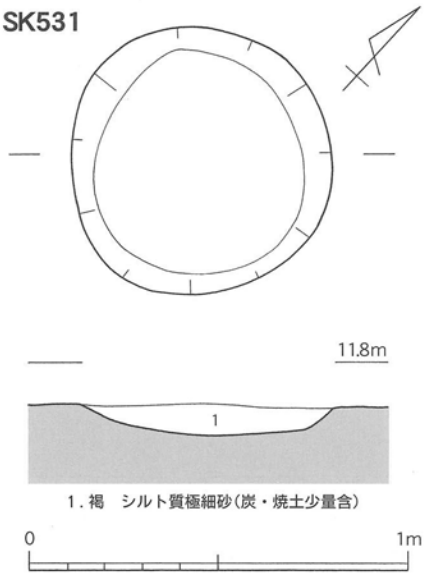
1．黄褐　シルト質極細砂（炭・土器少量含）

SK530



1．にぶい黄褐　シルト質極細砂（焼土少量含）
2．褐　シルト質極細砂

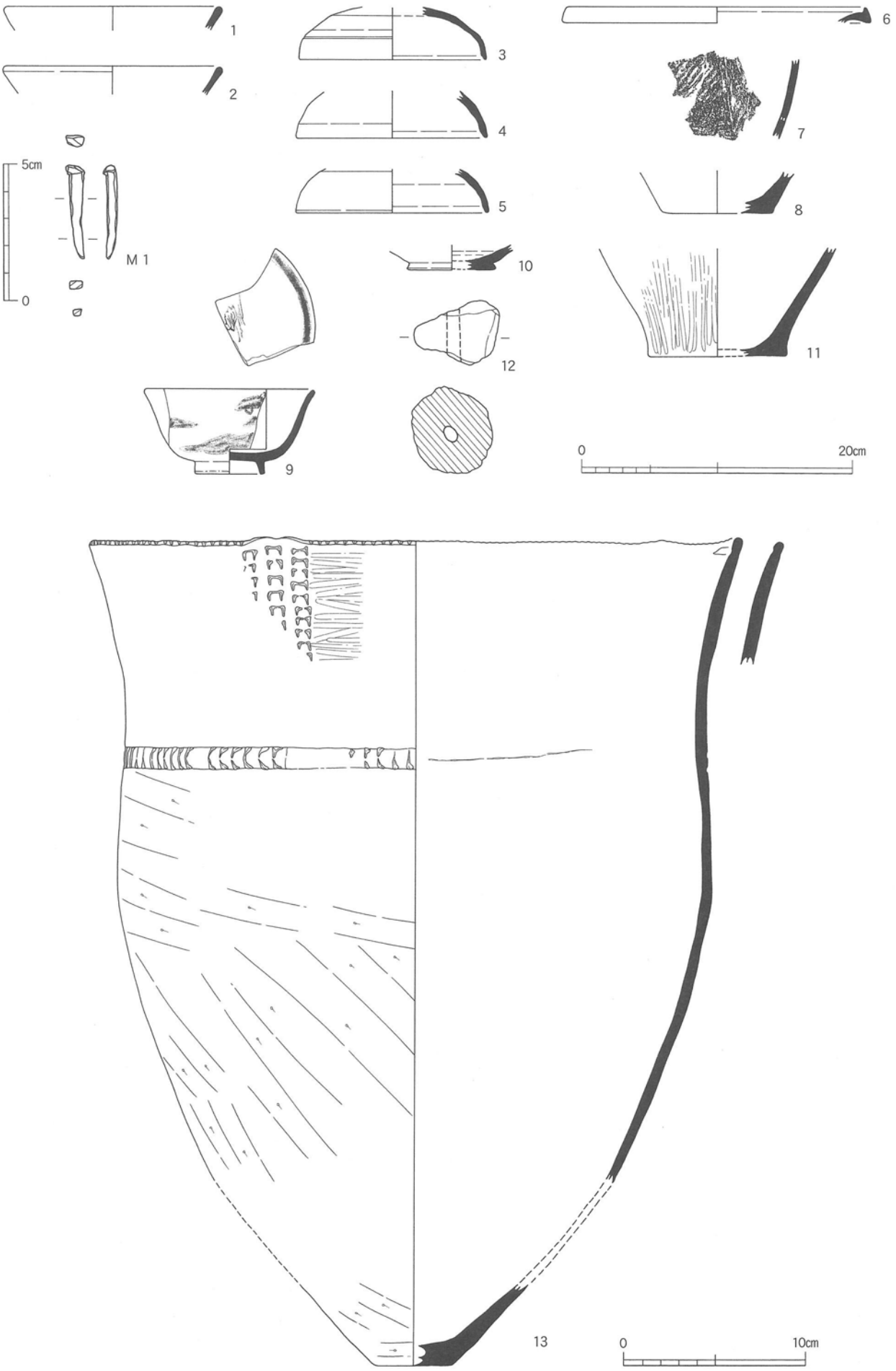
SK531



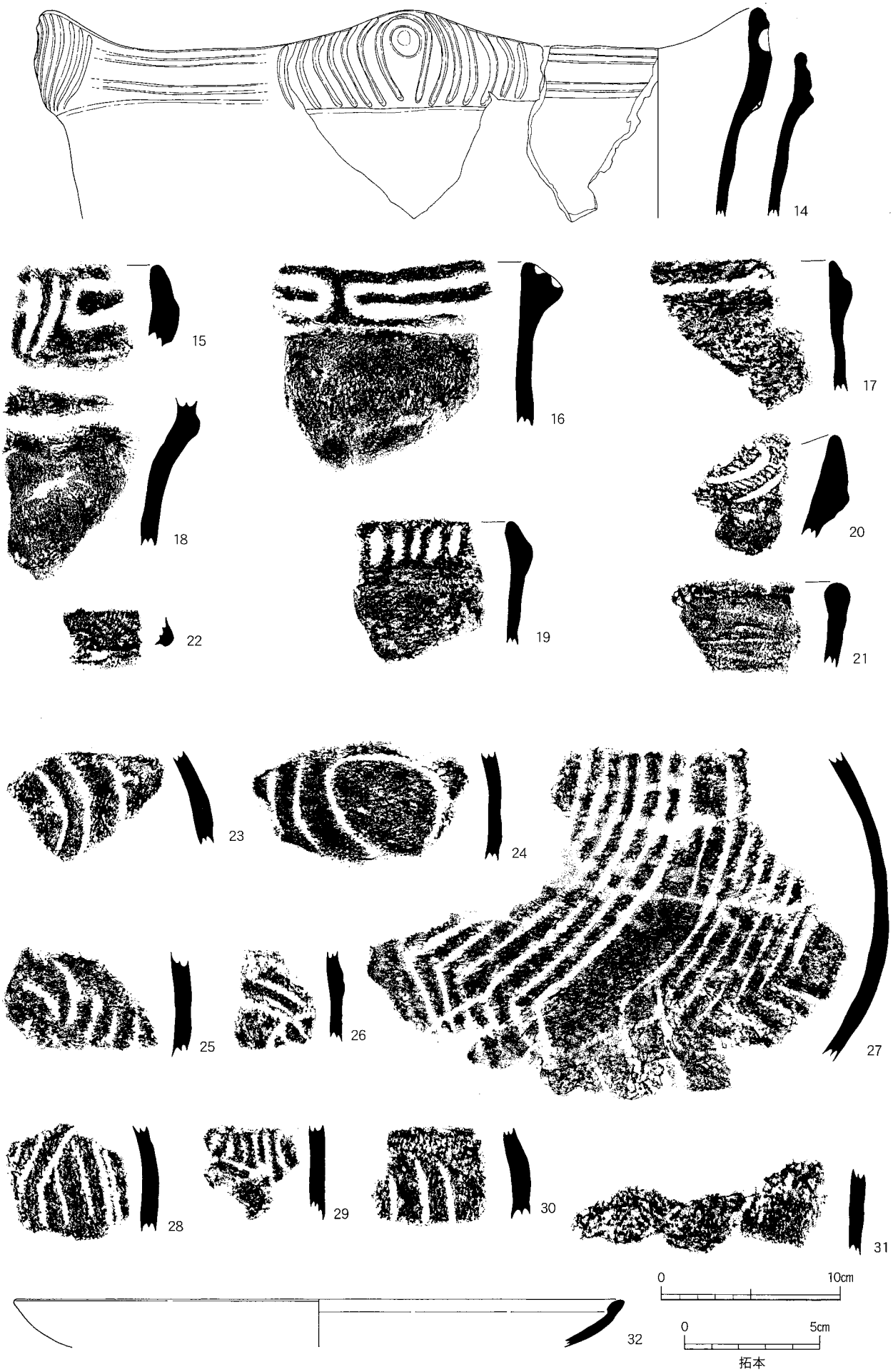
1．褐　シルト質極細砂（炭・焼土少量含）

SK428　6W　SK531　10E　SK509　6E　SK448・SK530

図版28 遺物 1区

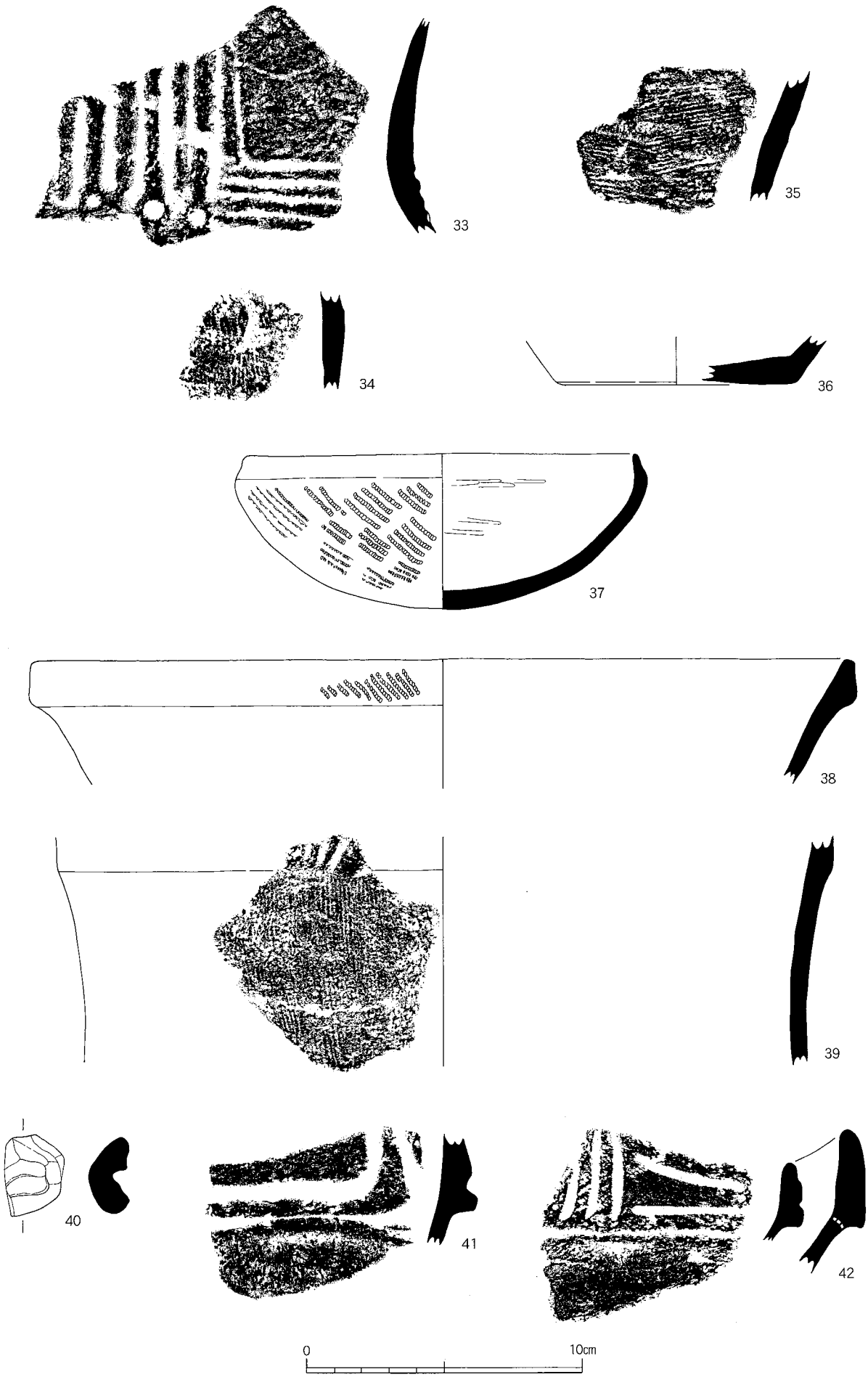


上層遺構　SD101・SD104・SD132・P114・P122・SB154　包含層　SK449　(1～13、M1)

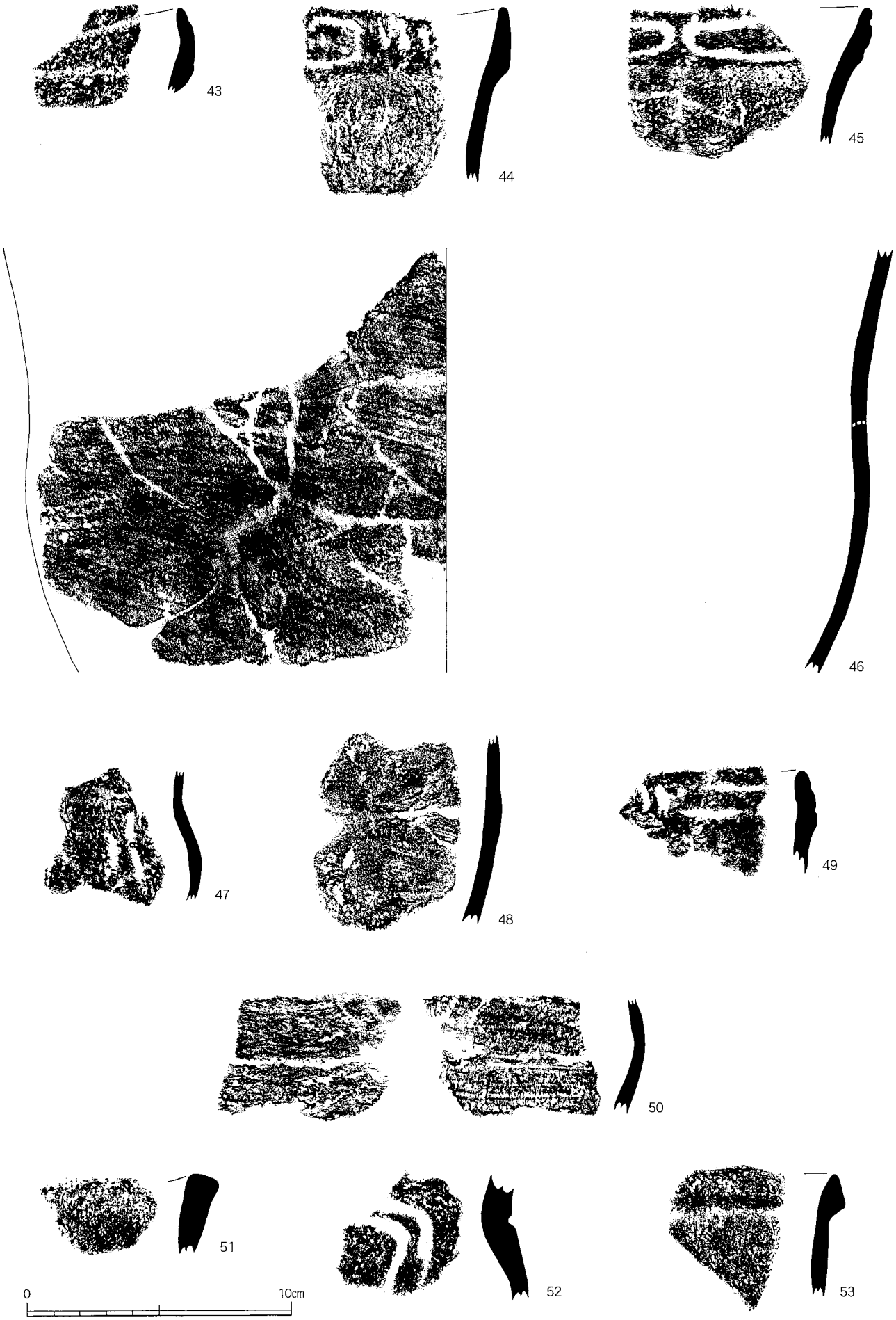


SH115 (14～32)

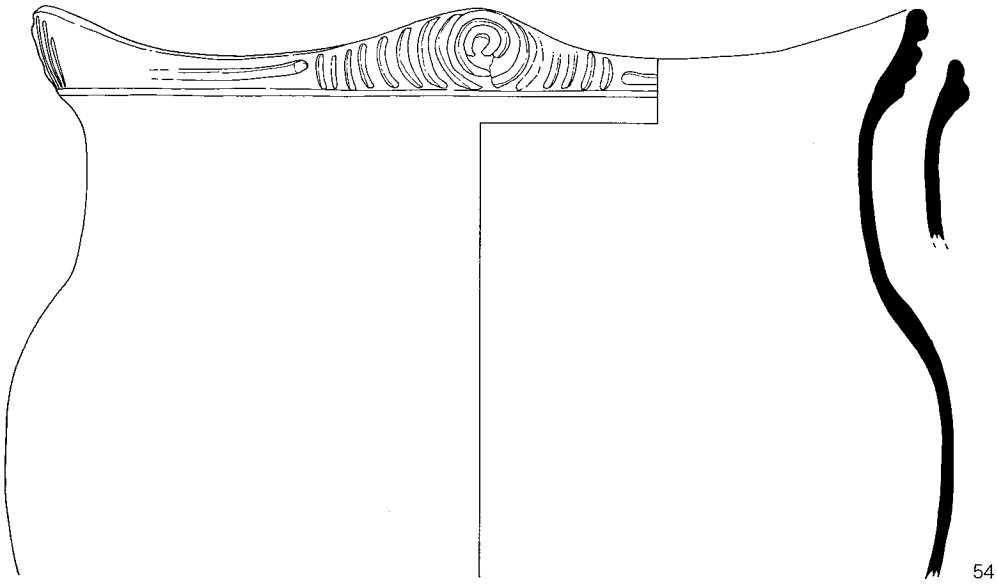
図版30　遺物　1区

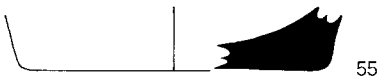


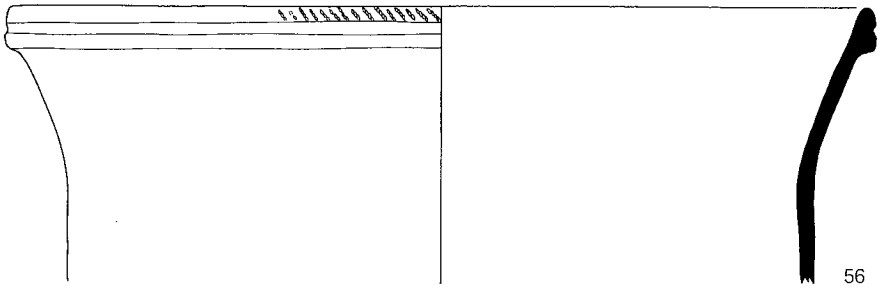
SK137・SK506・SK410・SK424・SK425・SK429・SK433　(33～42)

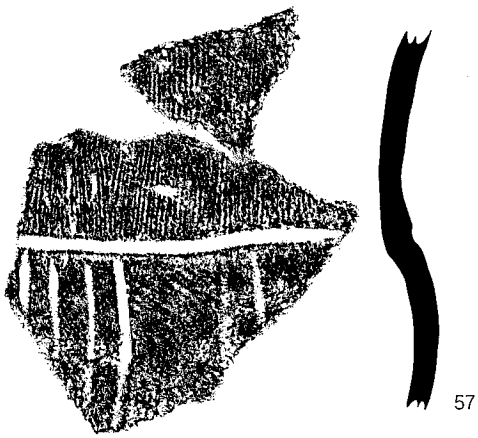


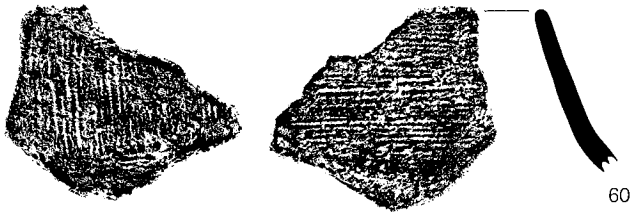
SK413・SK441・SK502・SK439・SK464　撹乱　(43～53)









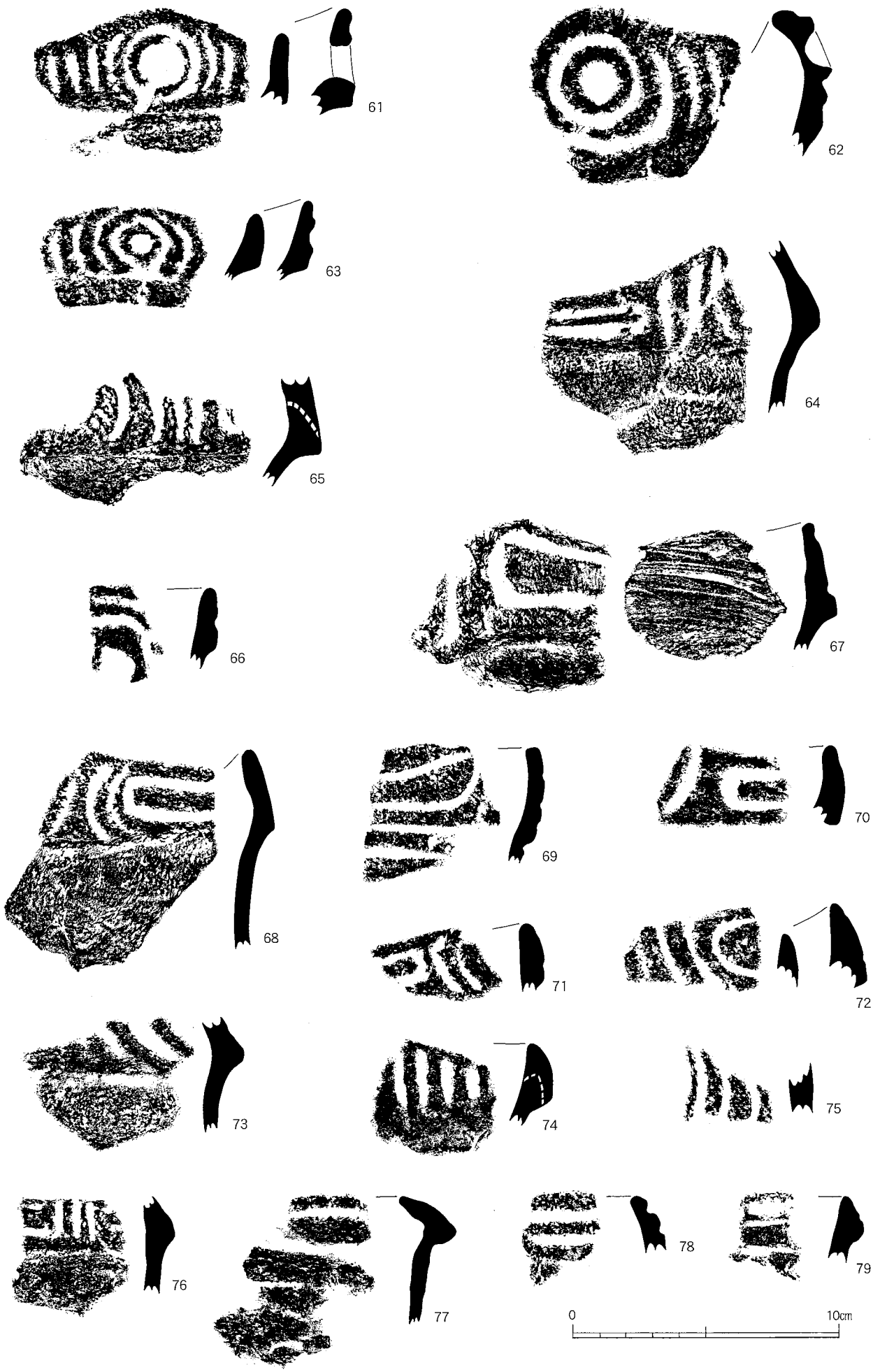


0 10cm

拓本・底部

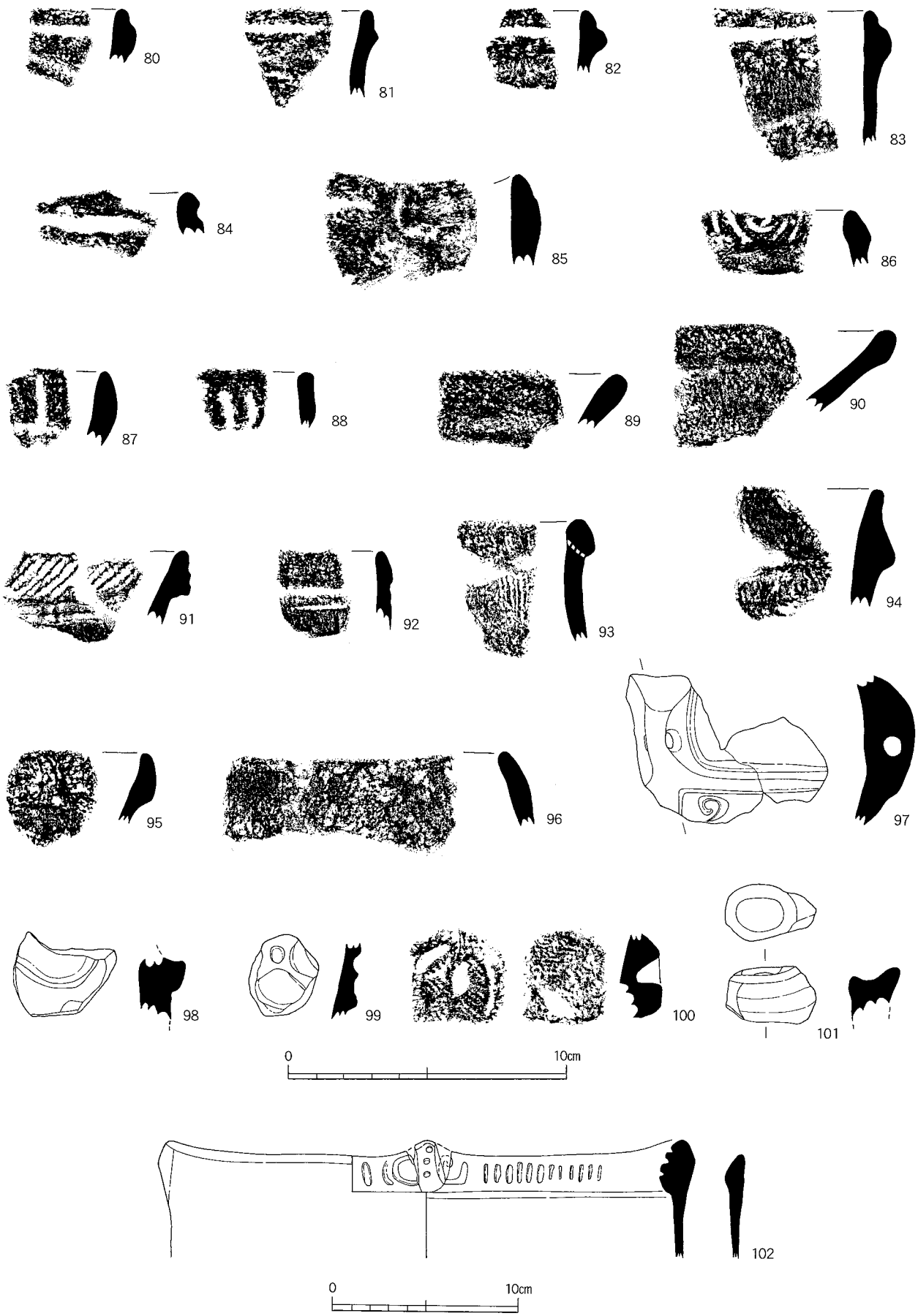
0 10cm

SK431・SK528・SK450・SK451 (54～60)

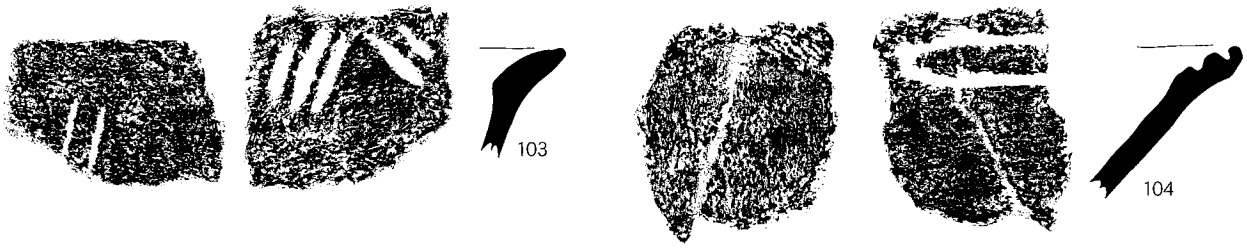


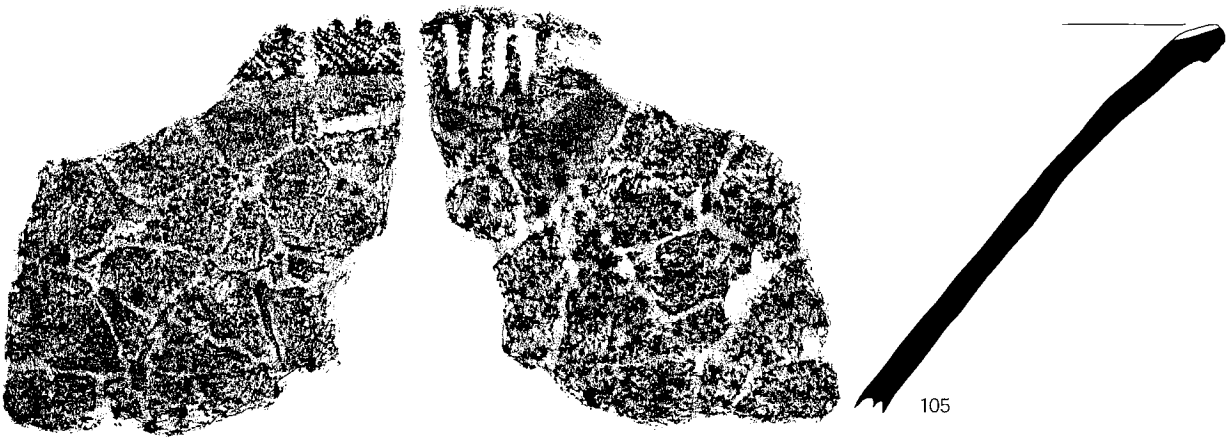
縄文包含層① (61～79)

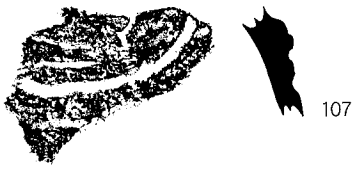
図版34　遺物　1区

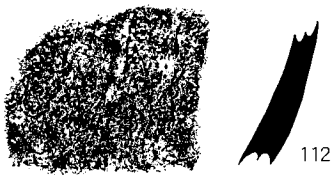


縄文包含層②　(80～102)





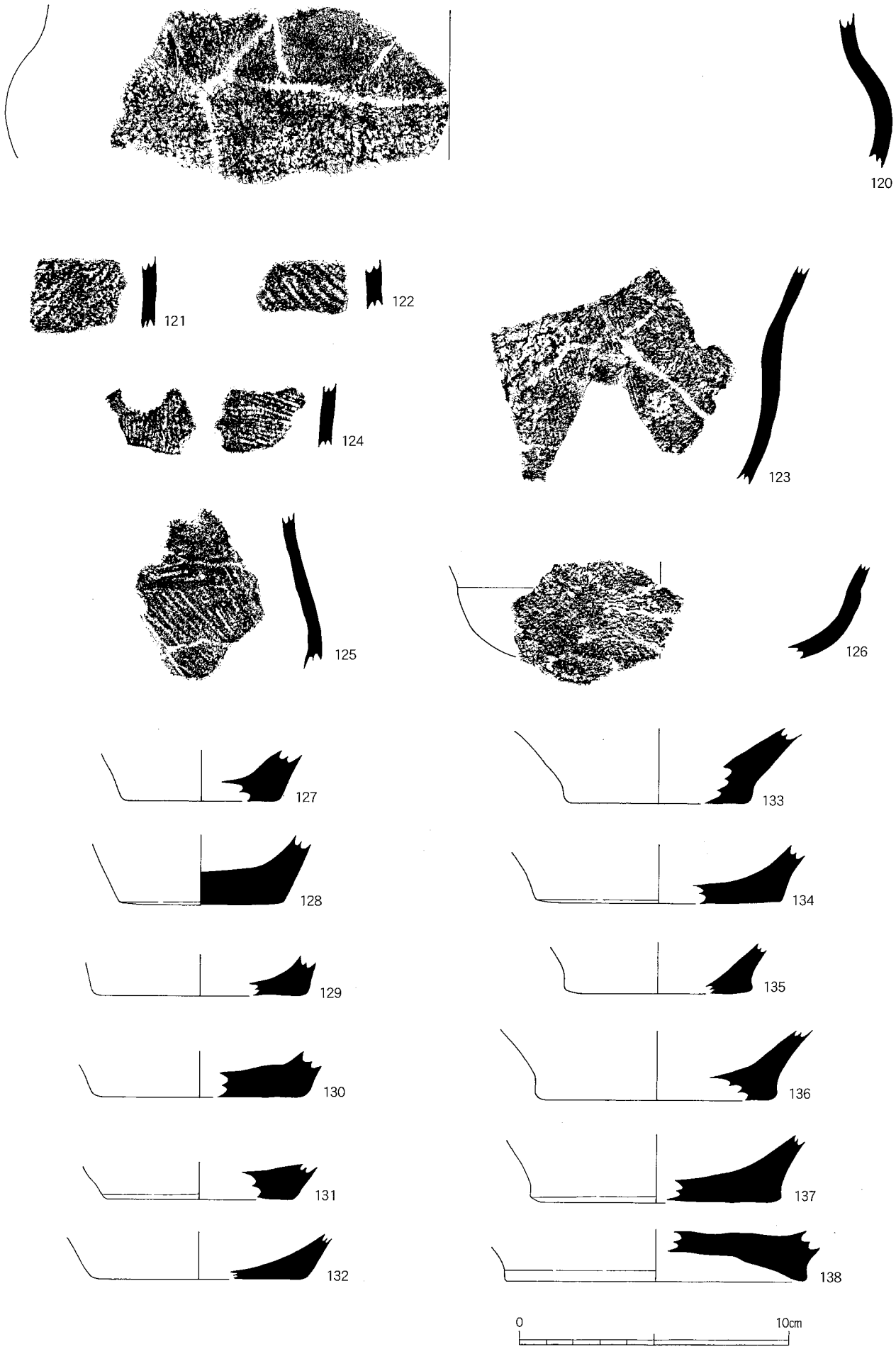




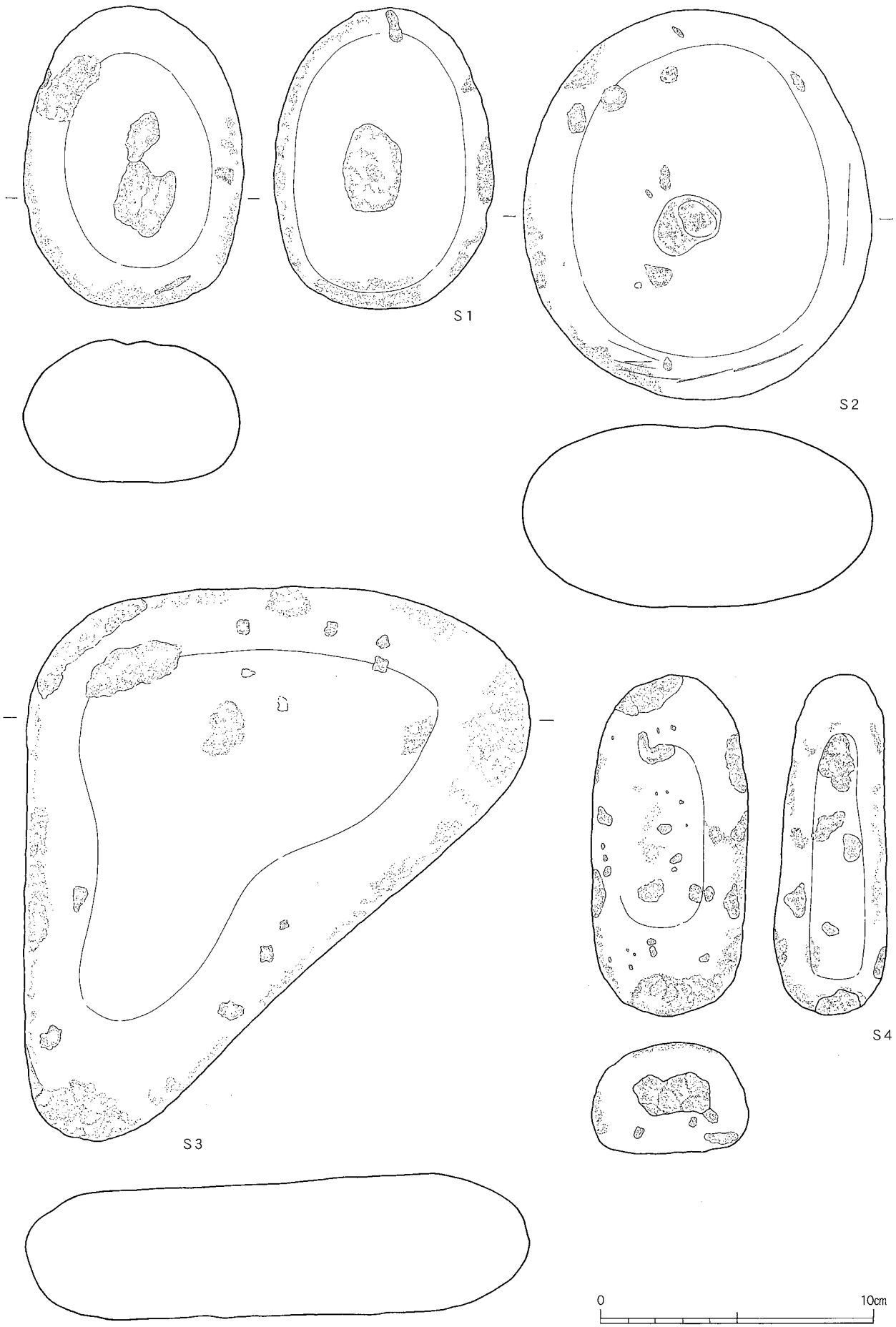
0 10cm

縄文包含層③ （103～119）

図版36　遺物　1区



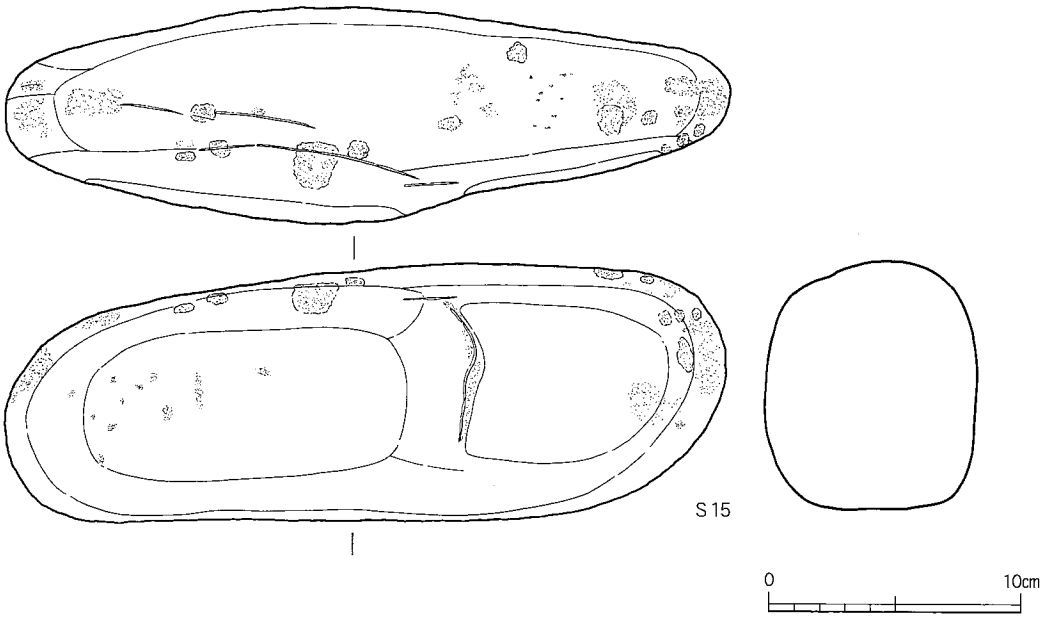
縄文包含層④　(120～138)

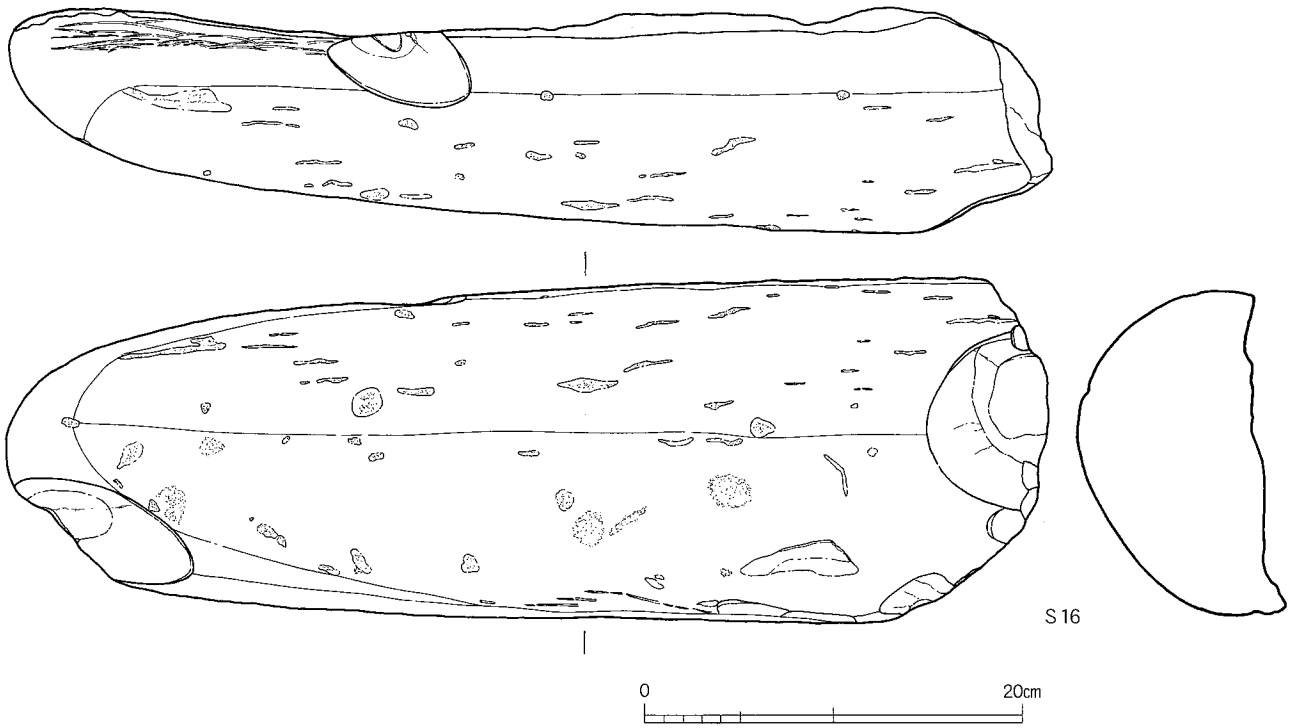


石器 (S1～S4)

図版38　遺物　1区

石器　(S5～S14)



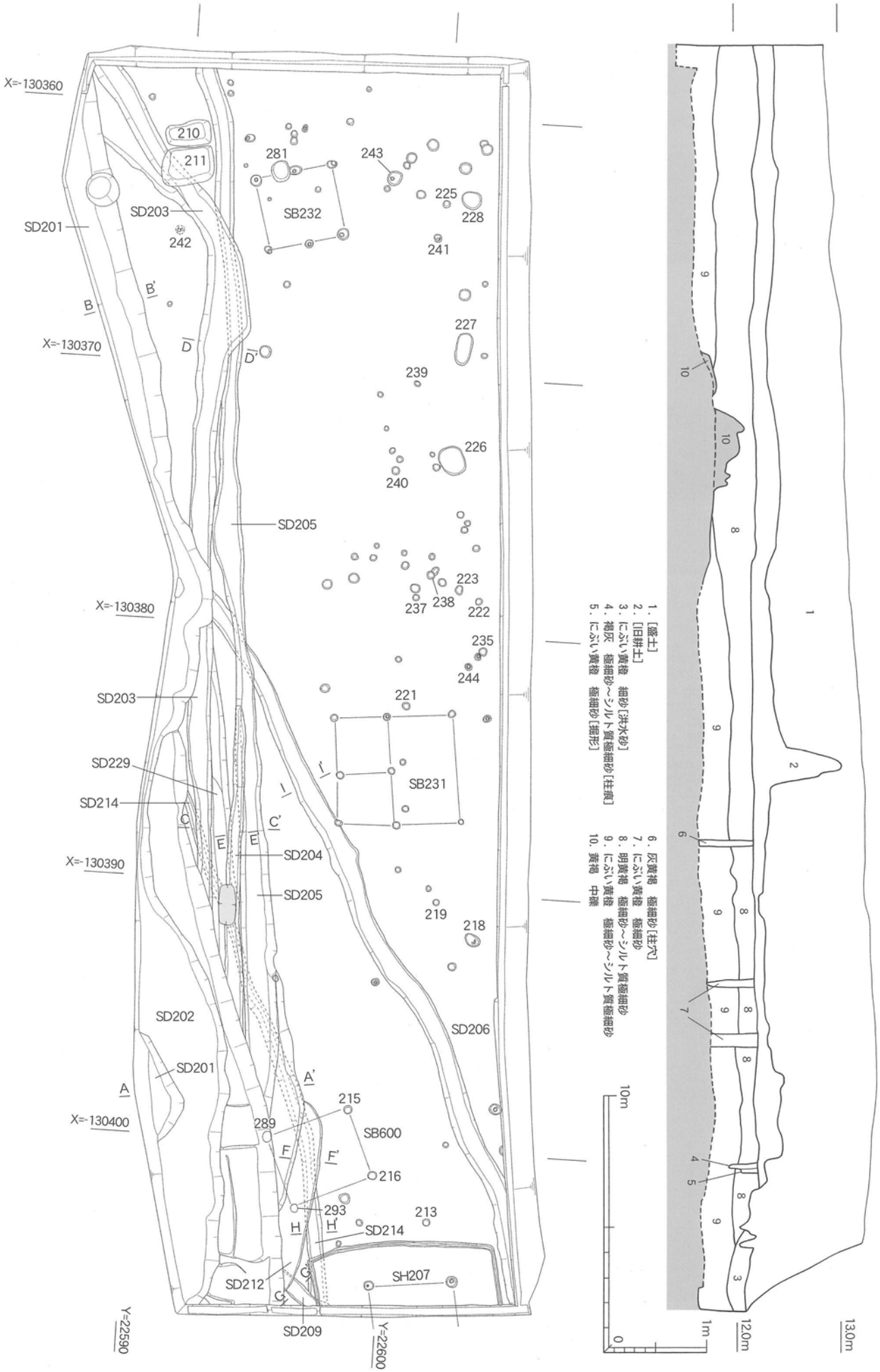


石器 (S15・S16)

図版40　遺構　2区

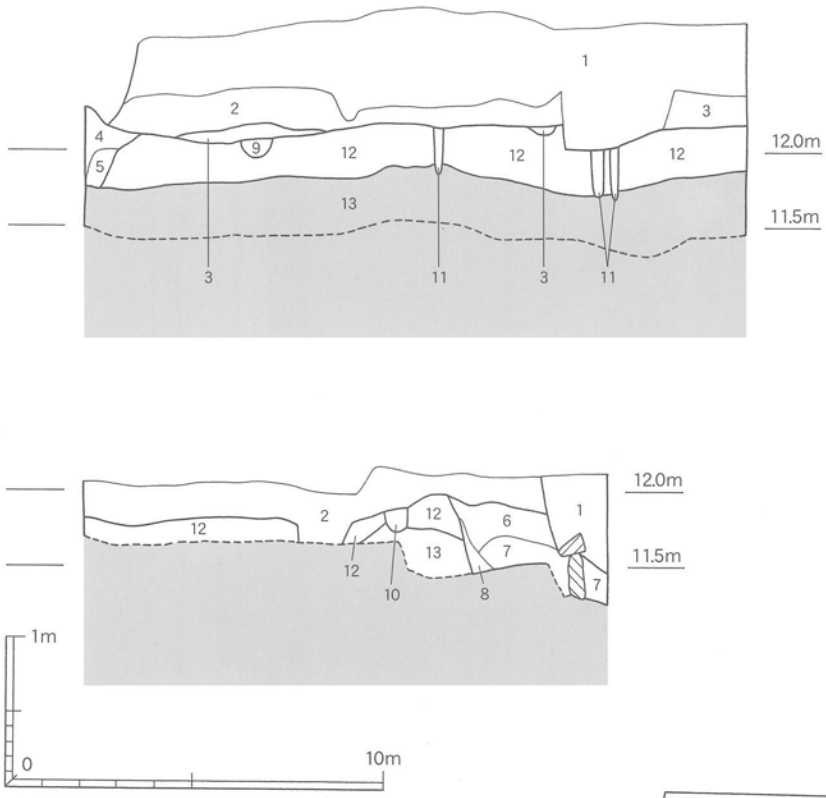
下層平面　西壁断面

図版41　遺構　2区

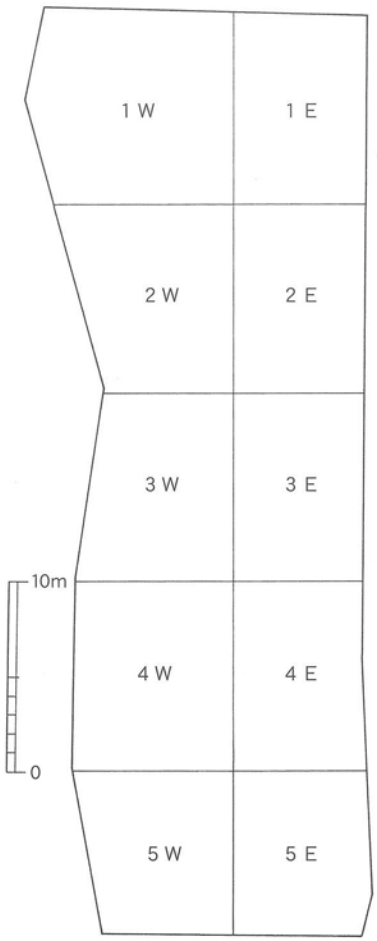


上層平面　東壁断面

図版42　遺構　2区

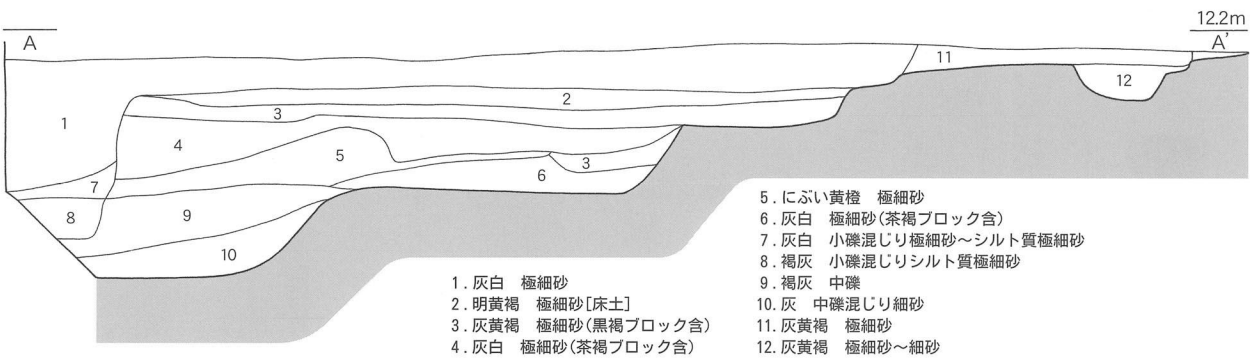


1．[盛土]
2．[旧耕土]
3．褐灰　極細砂[旧水田]
4．灰黄褐　極細砂[SD201]
5．灰黄褐　極細砂[SD203]
6．にぶい黄橙　極細砂
7．褐灰 大礫混じり極細砂～シルト質極細砂
8．灰白　シルト質極細砂
9．にぶい黄褐　極細砂[SD205]
10．にぶい黄橙　極細砂[SD209]
11．にぶい黄褐　極細砂(炭含)[柱穴]
12．明黄褐　極細砂～シルト質極細砂
13．にぶい黄橙　極細砂～シルト質極細砂



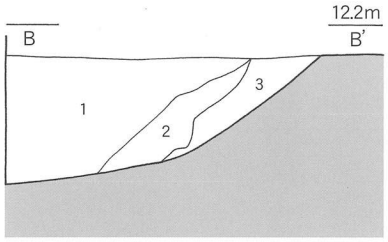
北壁・南壁断面と地区割り

SD202



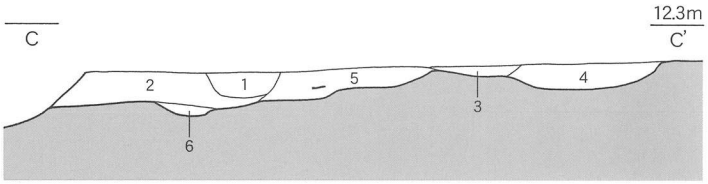
1. 灰白　極細砂
2. 明黄褐　極細砂[床土]
3. 灰黄褐　極細砂(黒褐ブロック含)
4. 灰白　極細砂(茶褐ブロック含)
5. にぶい黄橙　極細砂
6. 灰白　極細砂(茶褐ブロック含)
7. 灰白　小礫混じり極細砂～シルト質極細砂
8. 褐灰　小礫混じりシルト質極細砂
9. 褐灰　中礫
10. 灰　中礫混じり細砂
11. 灰黄褐　極細砂
12. 灰黄褐　極細砂～細砂

SD201



1. 灰黄褐　極細砂
2. 灰黄褐　極細砂
3. にぶい黄褐　極細砂

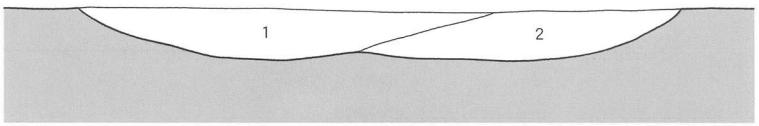
SD202・SD204・SD205



1. にぶい黄橙　細砂
2. 灰黄褐　極細砂
3. 灰黄褐　極細砂[SD204]
4. にぶい黄褐　極細砂[SD205]
5. 灰黄褐　極細砂
6. 灰黄褐　極細砂～細砂

0　2m

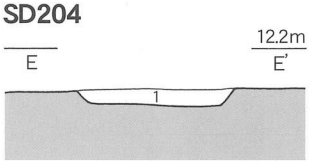
SD203



1. 灰黄褐　極細砂[SD203]
2. にぶい黄褐　極細砂

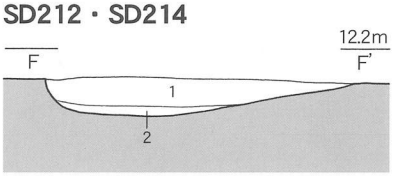
SD205

SD204



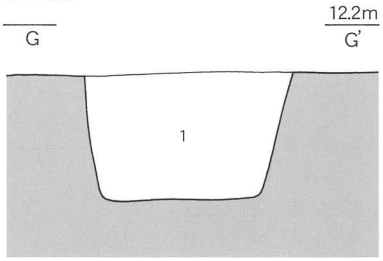
1. 灰白　極細砂

SD212・SD214



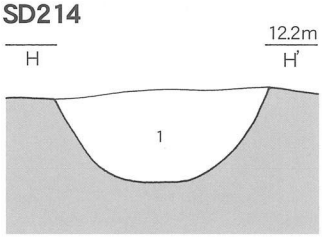
1. にぶい黄橙　極細砂
2. 灰黄褐　極細砂～細砂[SD214]

SD209



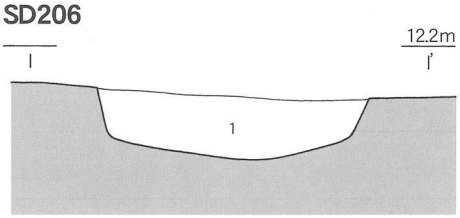
1. にぶい黄橙　極細砂

SD214



1. 灰黄褐　極細砂～細砂

SD206

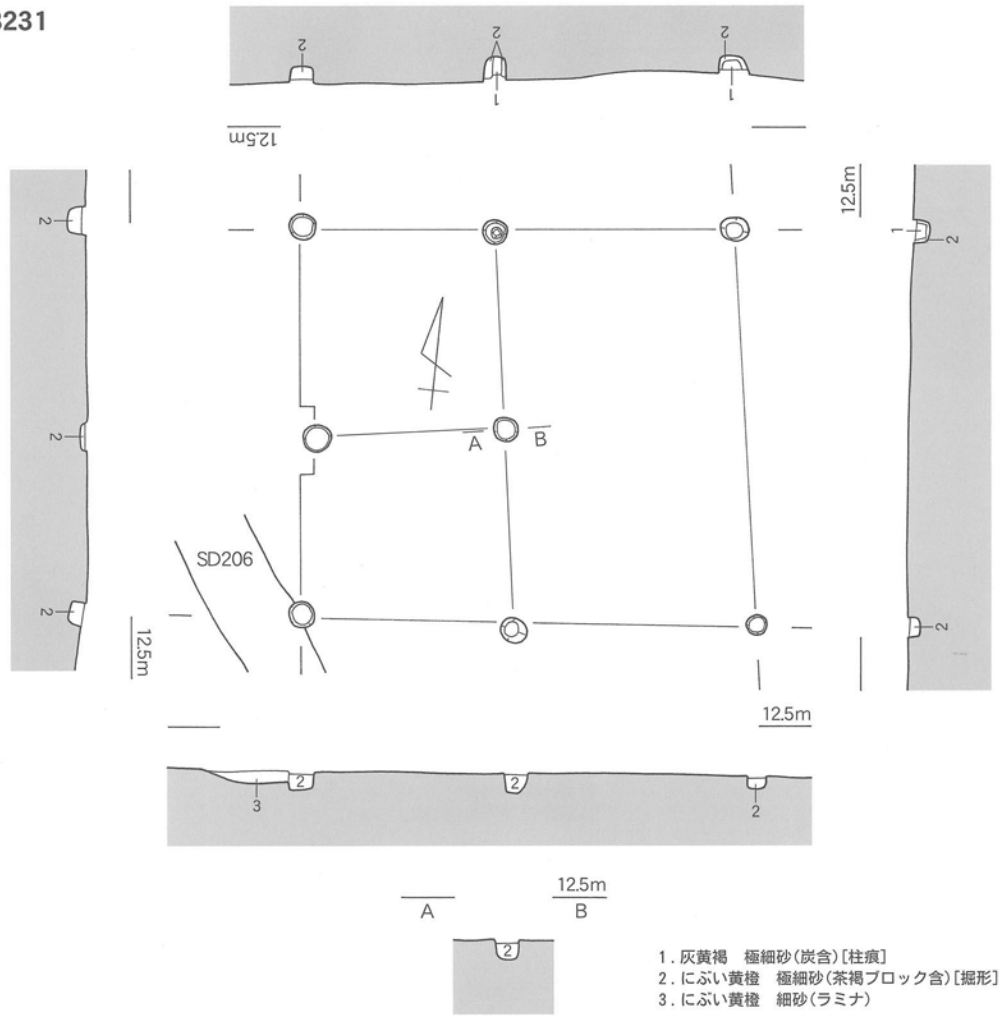


1. にぶい黄橙　細砂(ラミナ)

0　1m

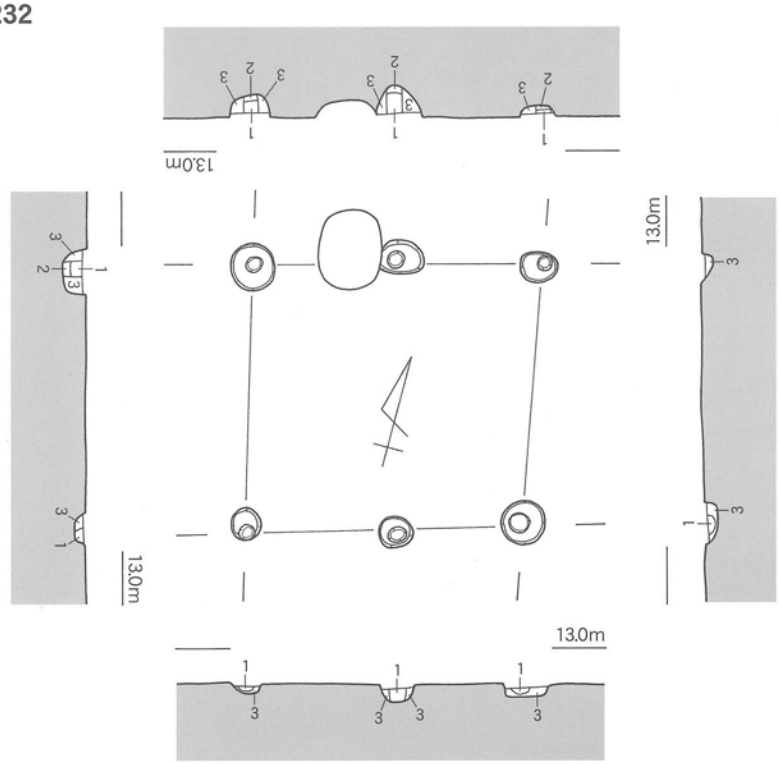
SD202・SD201・SD203・SD204・SD212・SD209・SD214・SD206

SB231



1．灰黄褐　極細砂（炭含）［柱痕］
2．にぶい黄橙　極細砂（茶褐ブロック含）［掘形］
3．にぶい黄橙　細砂（ラミナ）

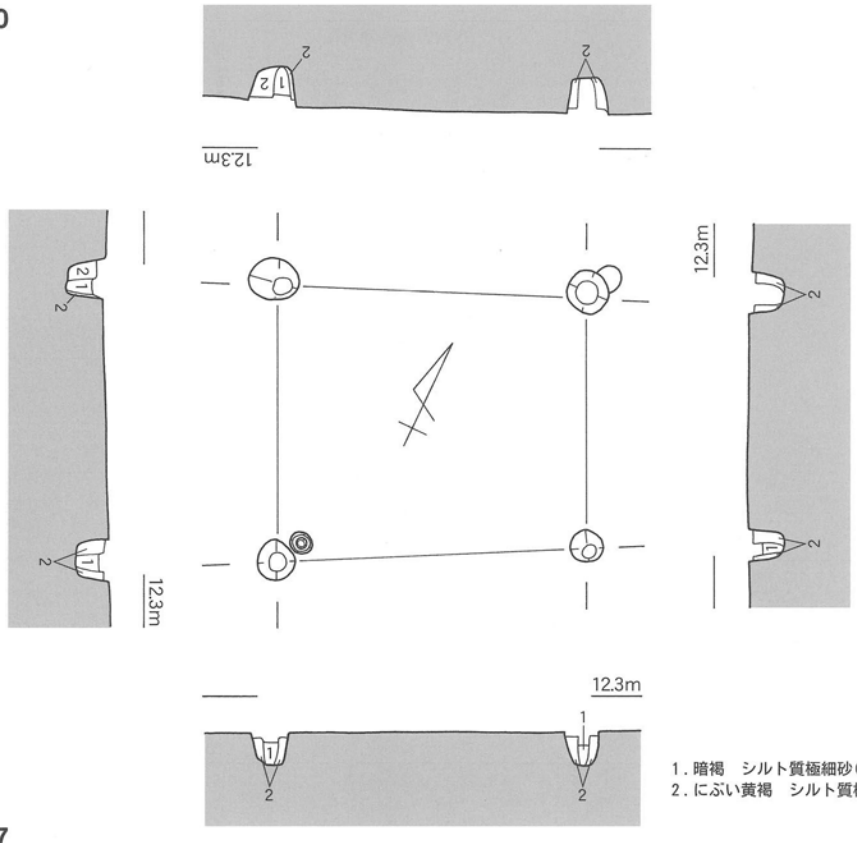
SB232



1．褐灰　極細砂～シルト質極細砂［掘形］
2．にぶい黄橙　極細砂
3．灰黄褐　極細砂［掘形］

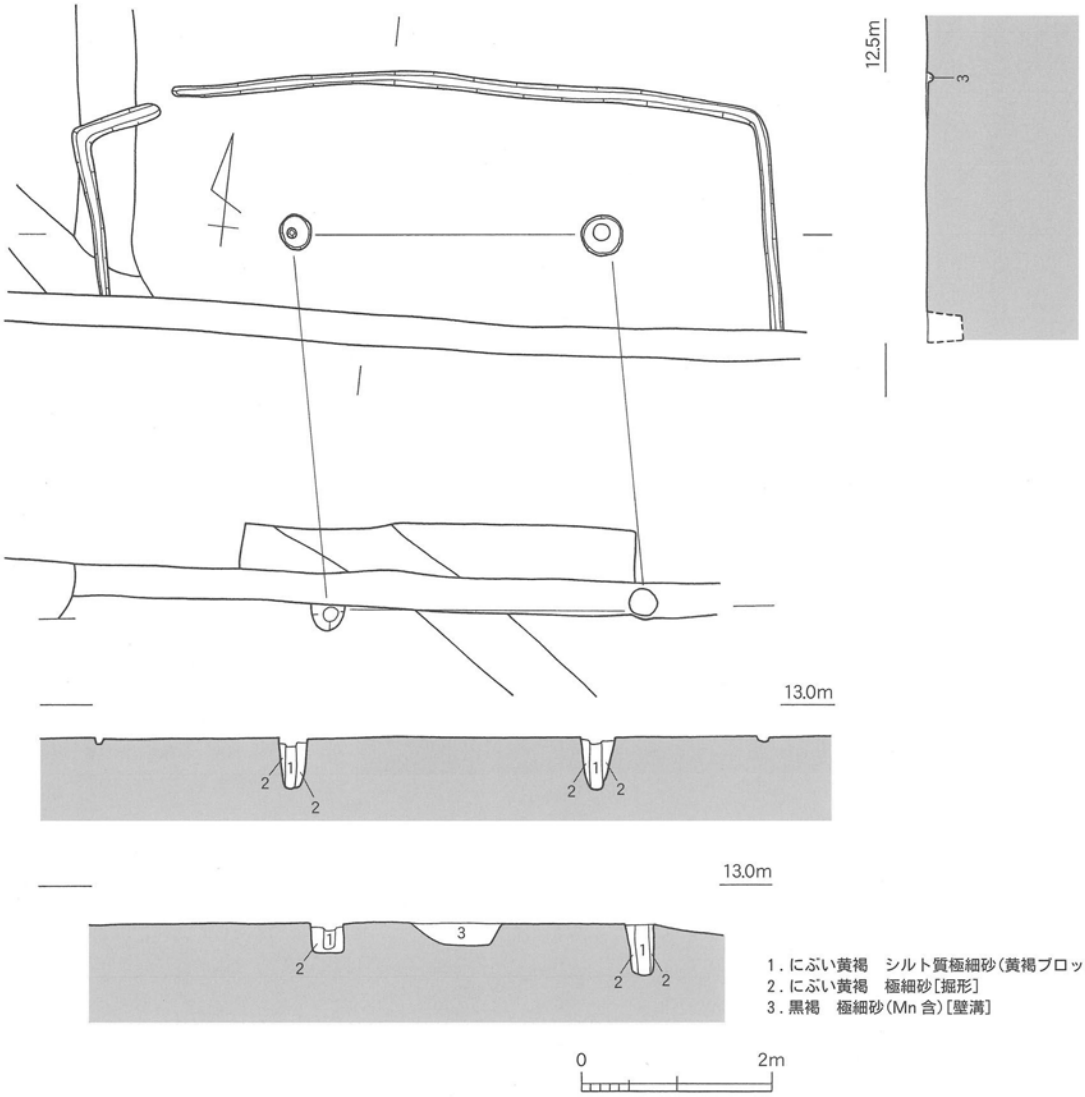
0　2m

SB600



1．暗褐　シルト質極細砂（炭少量含）
2．にぶい黄褐　シルト質極細砂

SH207

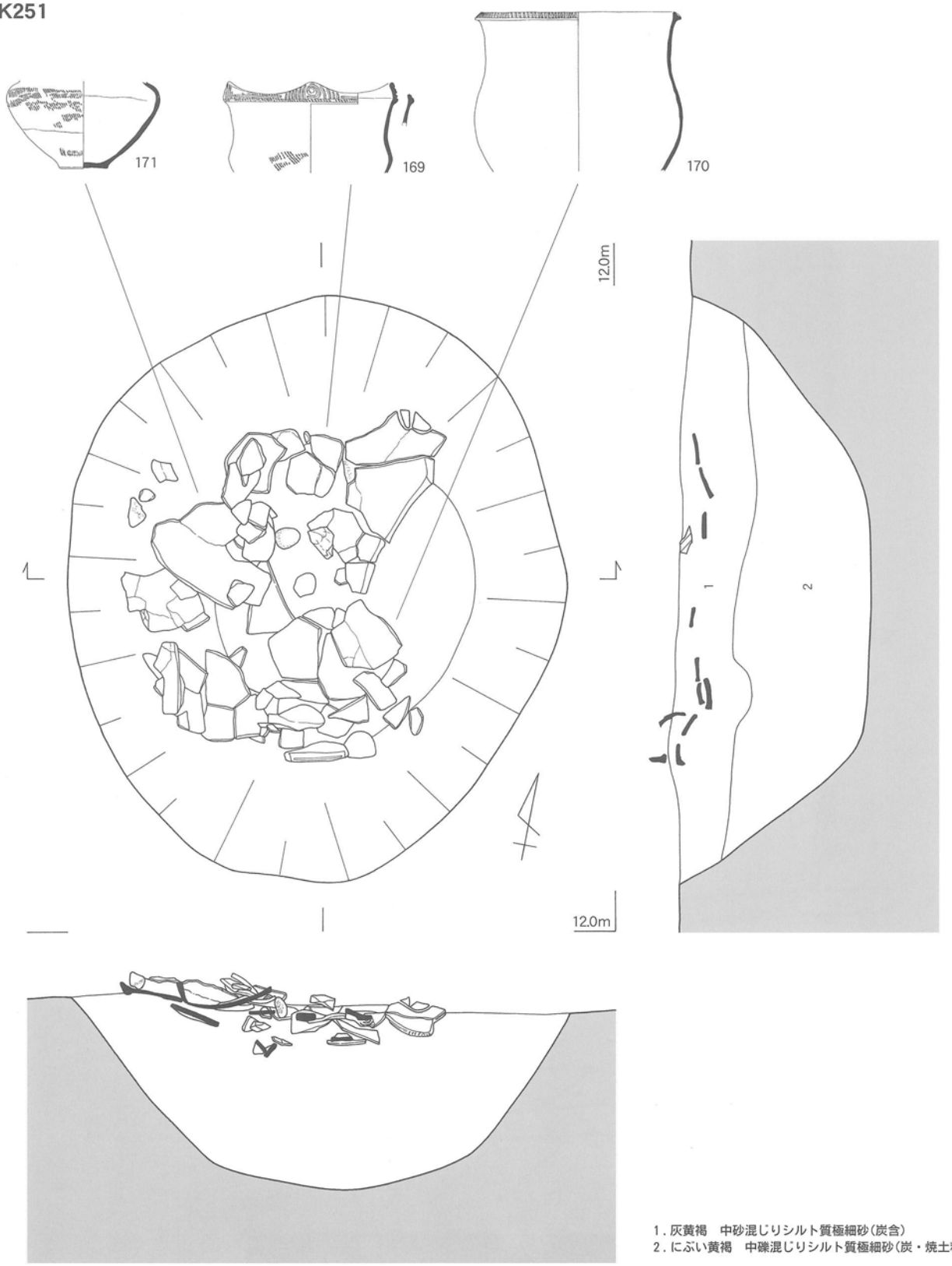


1．にぶい黄褐　シルト質極細砂（黄褐ブロック含）［柱痕］
2．にぶい黄褐　極細砂［掘形］
3．黒褐　極細砂（Mn 含）［壁溝］

0　2m

SB600・SH207

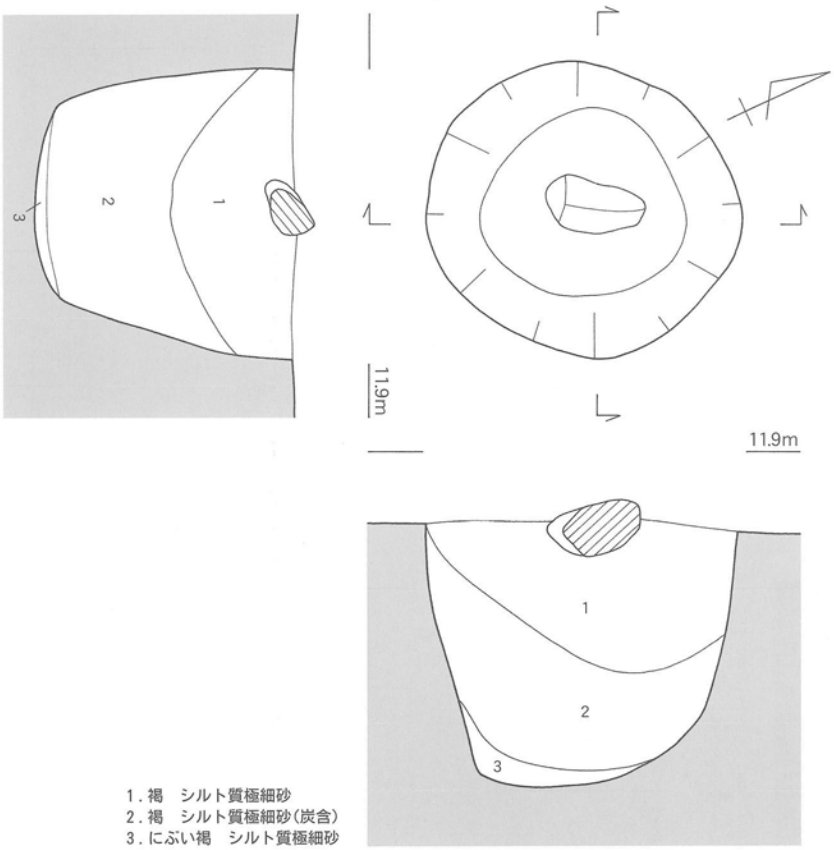
SK251



1．灰黄褐　中砂混じりシルト質極細砂（炭含）
2．にぶい黄褐　中礫混じりシルト質極細砂（炭・焼土粒含）

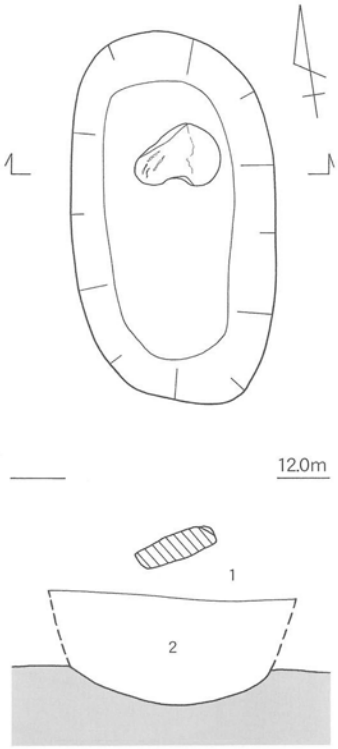
4W SK251

SK275



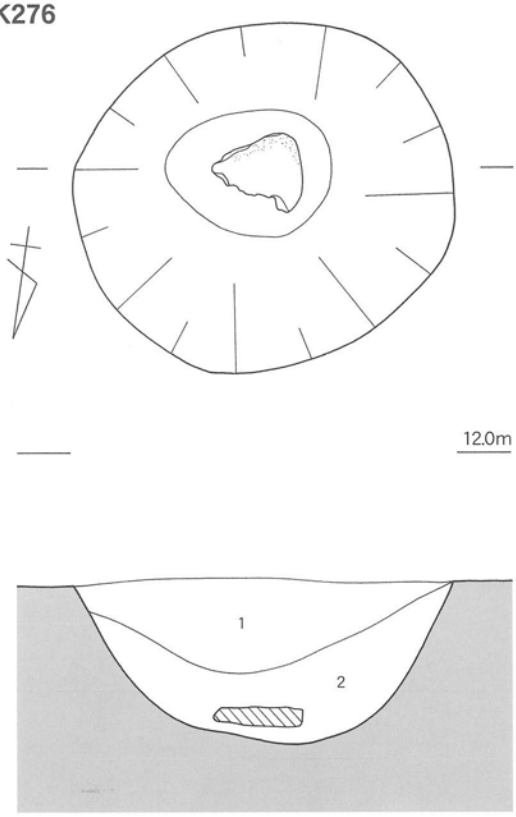
1．褐　シルト質極細砂
2．褐　シルト質極細砂（炭含）
3．にぶい褐　シルト質極細砂

SK277



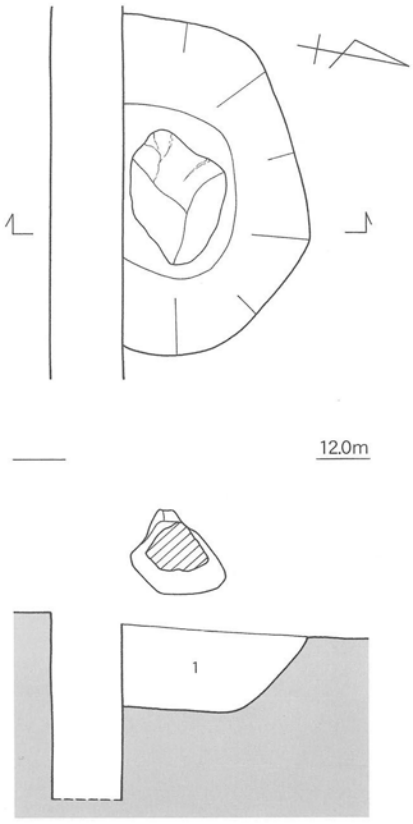
1．灰黄褐　シルト質極細砂（Mn 含）
2．にぶい黄褐　シルト質極細砂

SK276



1．にぶい黄褐　シルト質極細砂
2．褐　シルト質極細砂

SK282



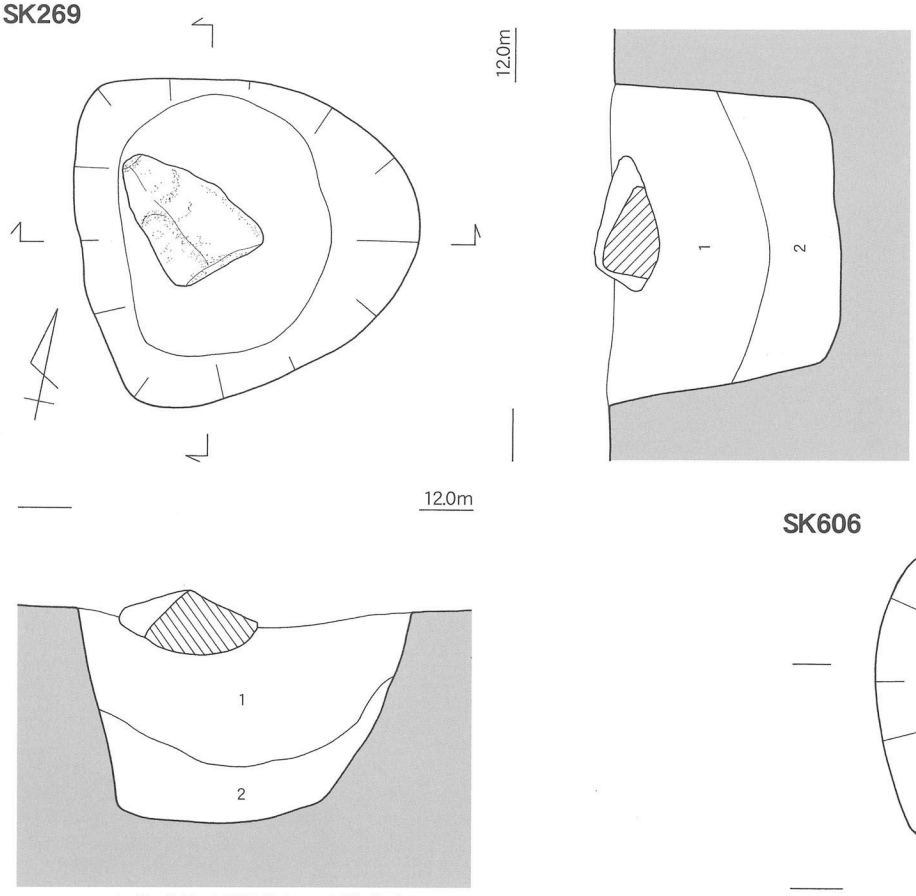
1．褐　シルト質極細砂（炭含）

0　50cm

1E SK275　1W SK277・SK276・SK282

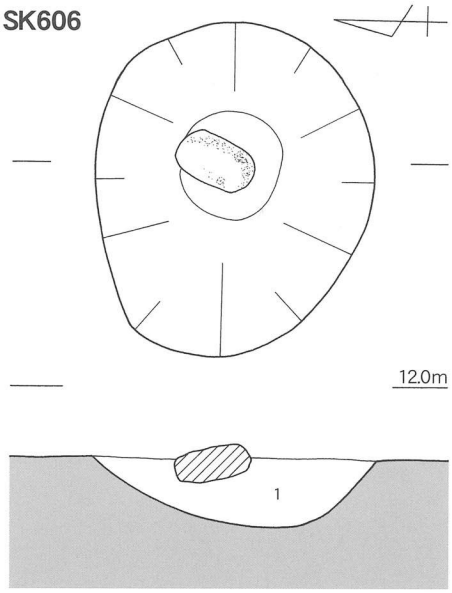
図版48　遺構　2区

SK269



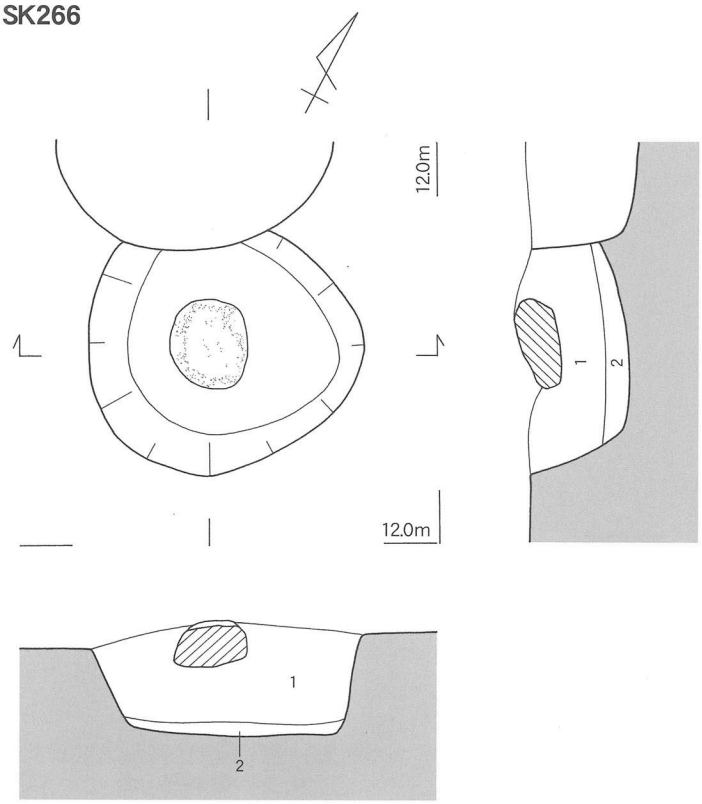
1．にぶい黄褐　細砂混じりシルト質極細砂
2．褐　シルト質細砂

SK606



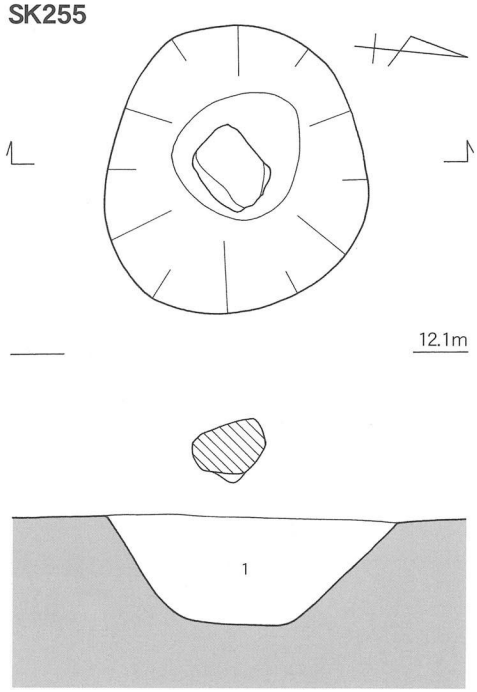
1．暗褐　粗砂混じり極細砂

SK266



1．灰褐　中砂混じりシルト質極細砂
2．にぶい黄褐　シルト質細砂

SK255

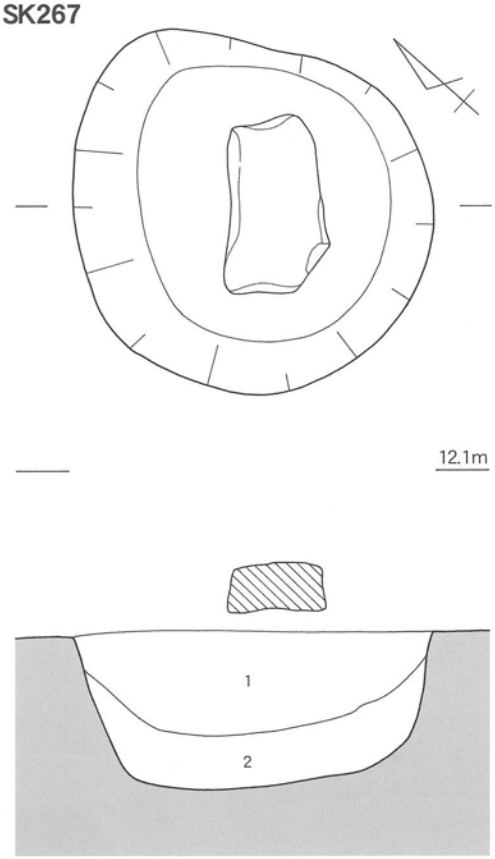


1．褐　シルト質極細砂

0　50cm

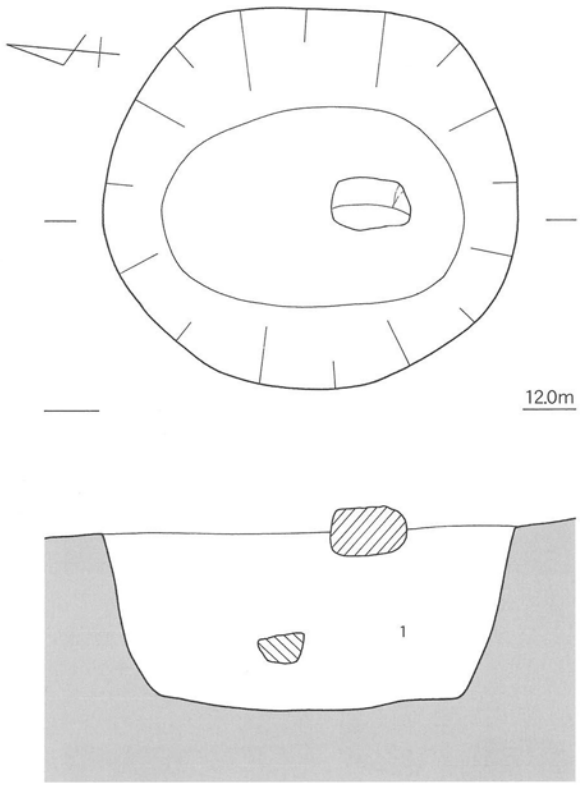
4E SK255　3W SK269・SK606・SK266

SK267



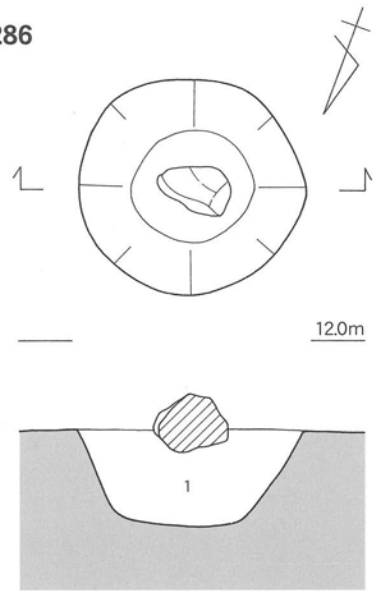
1．にぶい黄褐　中砂混じりシルト質極細砂
2．にぶい黄褐　シルト質細砂

SK264



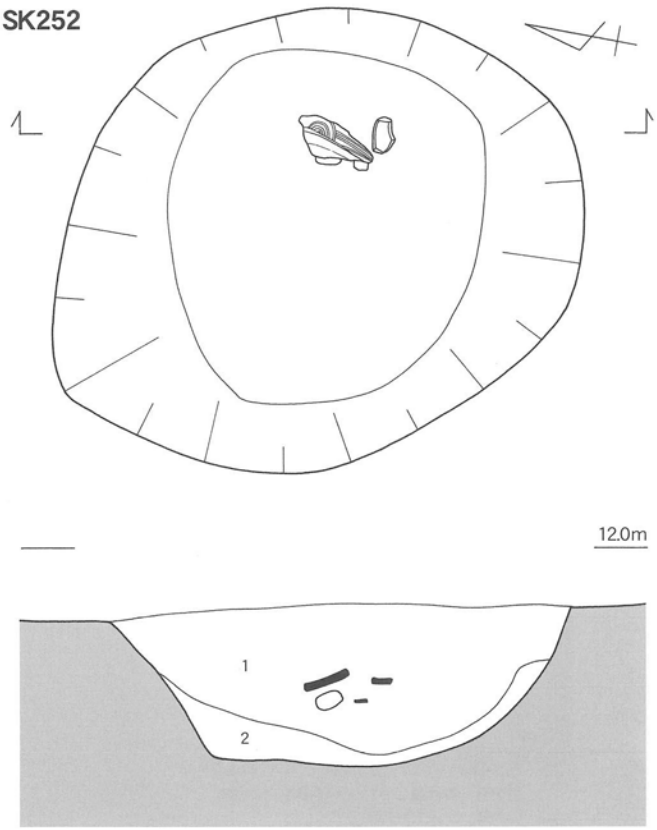
1．にぶい黄橙　中砂混じりシルト質極細砂

SK286



1．褐　シルト質極細砂

SK252



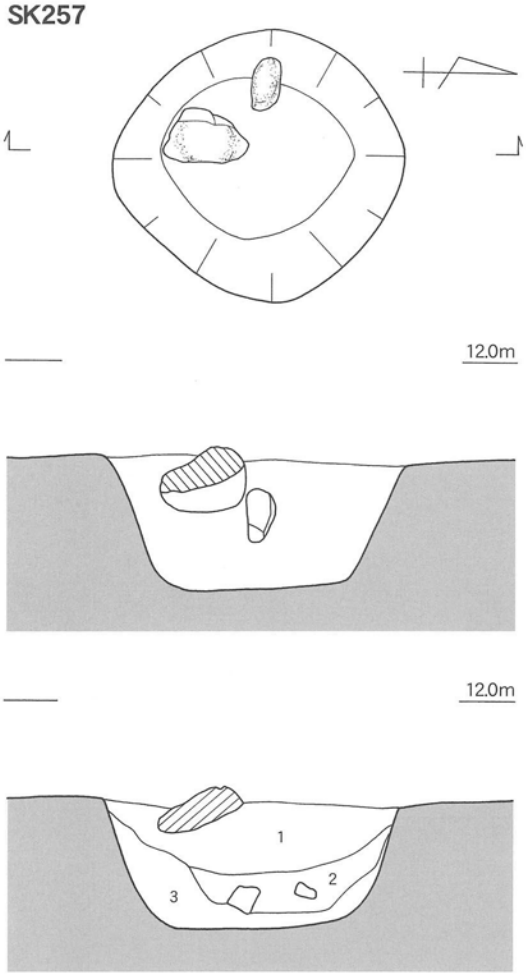
1．灰黄褐　粗砂～極粗砂混じり極細砂（炭・焼土粒・Mn 斑含）
2．褐　粗砂混じりシルト質極細砂（Mn 斑・焼土粒含、炭少量含）

0　50cm

3W SK267　4W SK286　5W SK252　4E SK264

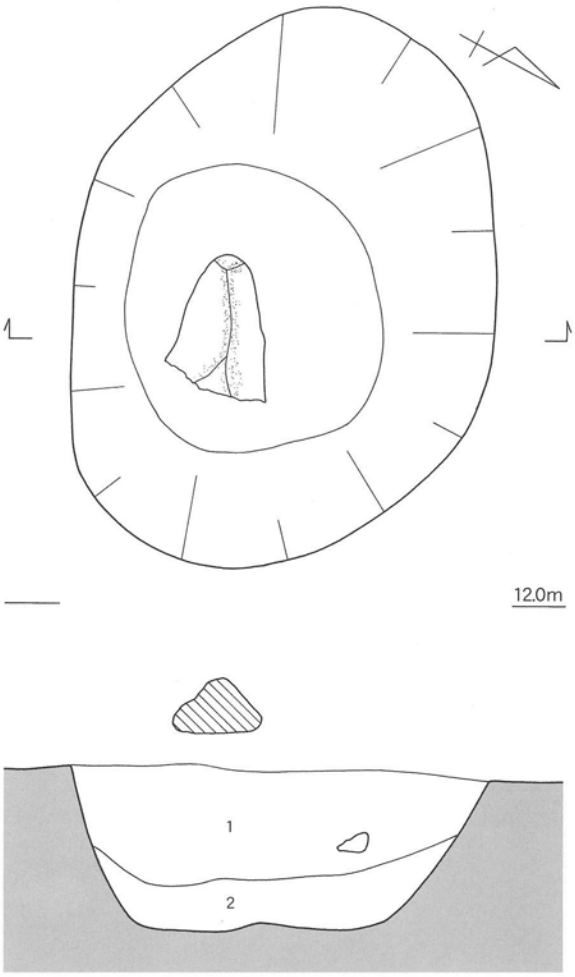
図版50 遺構 2区

SK257



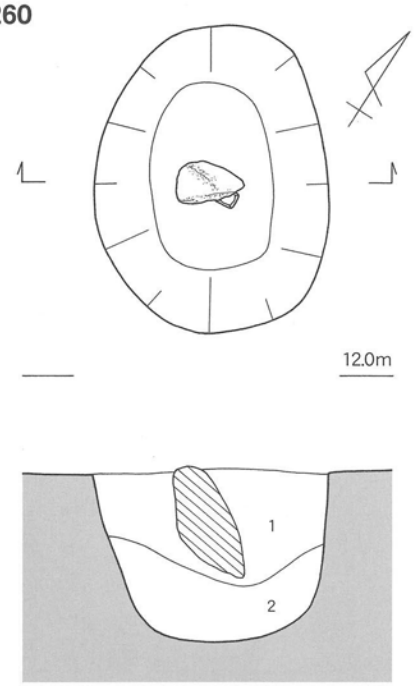
1．明黄褐　中砂混じりシルト質極細砂
2．にぶい黄橙　中砂～礫混じりシルト質極細砂（炭含）
3．明黄褐　シルト質細砂

SK258



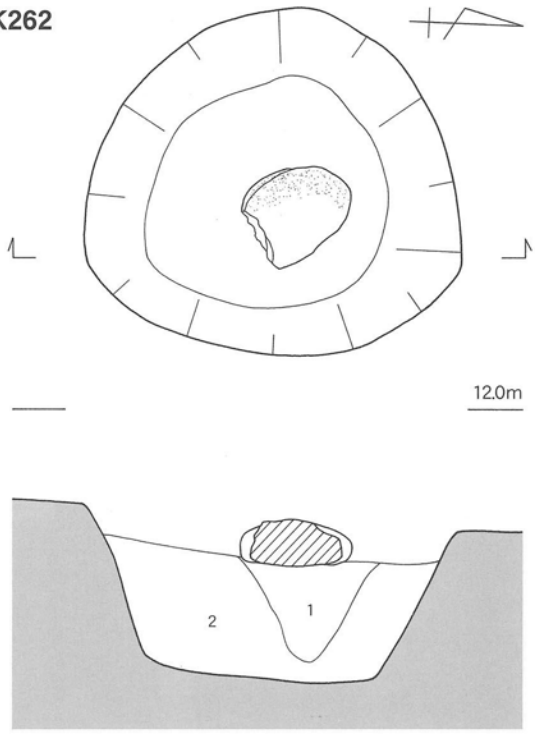
1．灰黄褐　中砂混じりシルト質極細砂（炭・焼土含）
2．にぶい黄橙　細砂～中砂

SK260



1．灰黄褐　中砂混じりシルト質極細砂（炭含）
2．灰黄褐　シルト質細砂

SK262

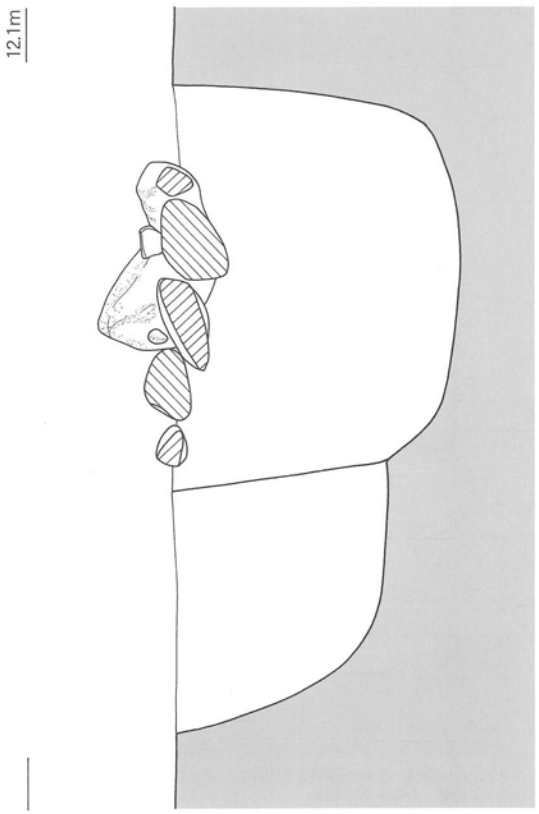


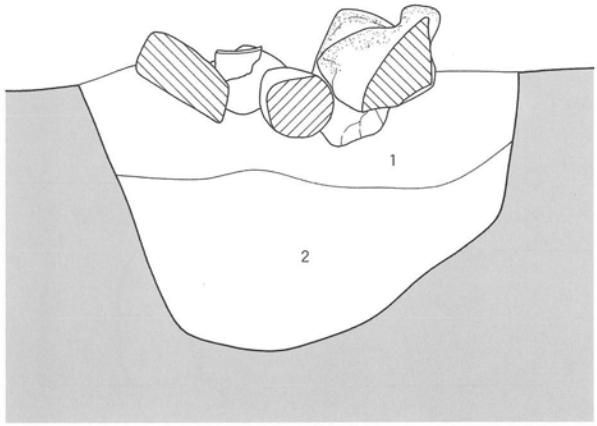
1．灰黄褐　シルト質細砂
2．明黄褐　中砂混じりシルト質極細砂（炭含）

0　50cm

4E SK257・SK258・SK260・SK262

SK253

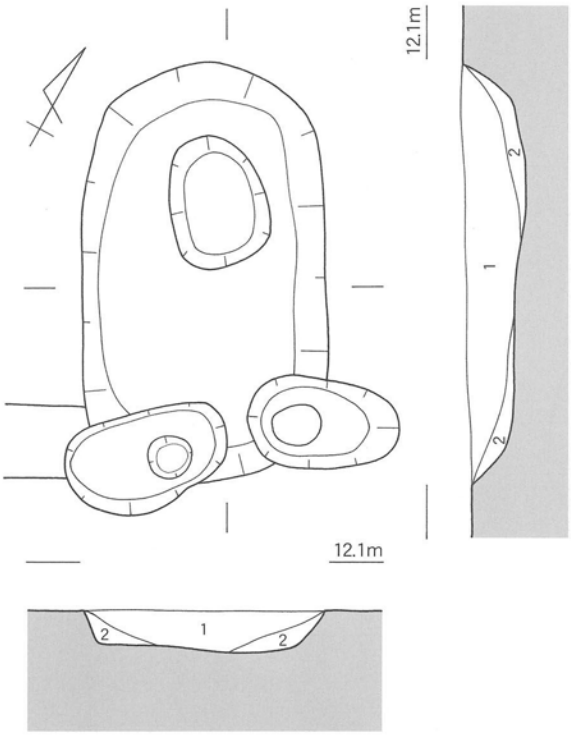




1．暗褐　中細砂混じり極細砂（焼土・炭多量に含、黒褐ブロック含）
2．にぶい黄褐　極細砂（炭・焼土少量含）

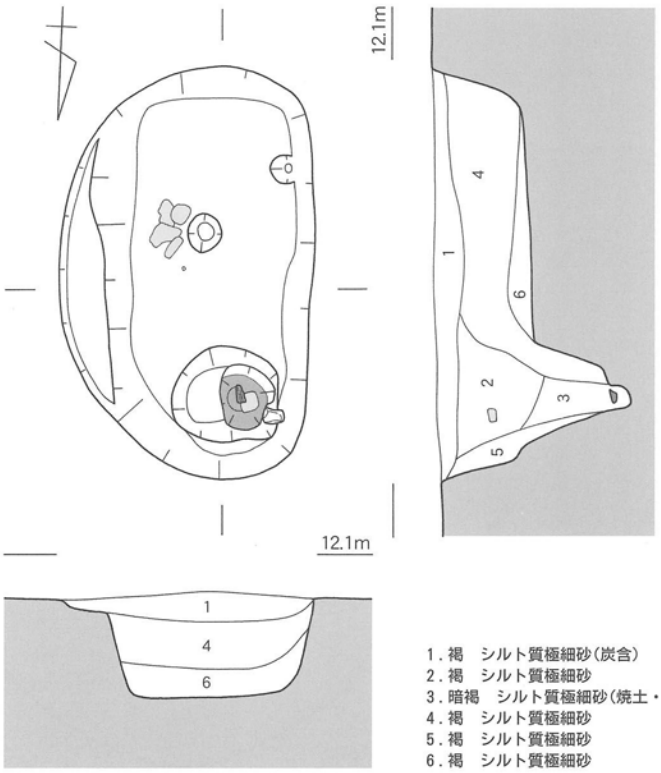
5W SK253

SK278



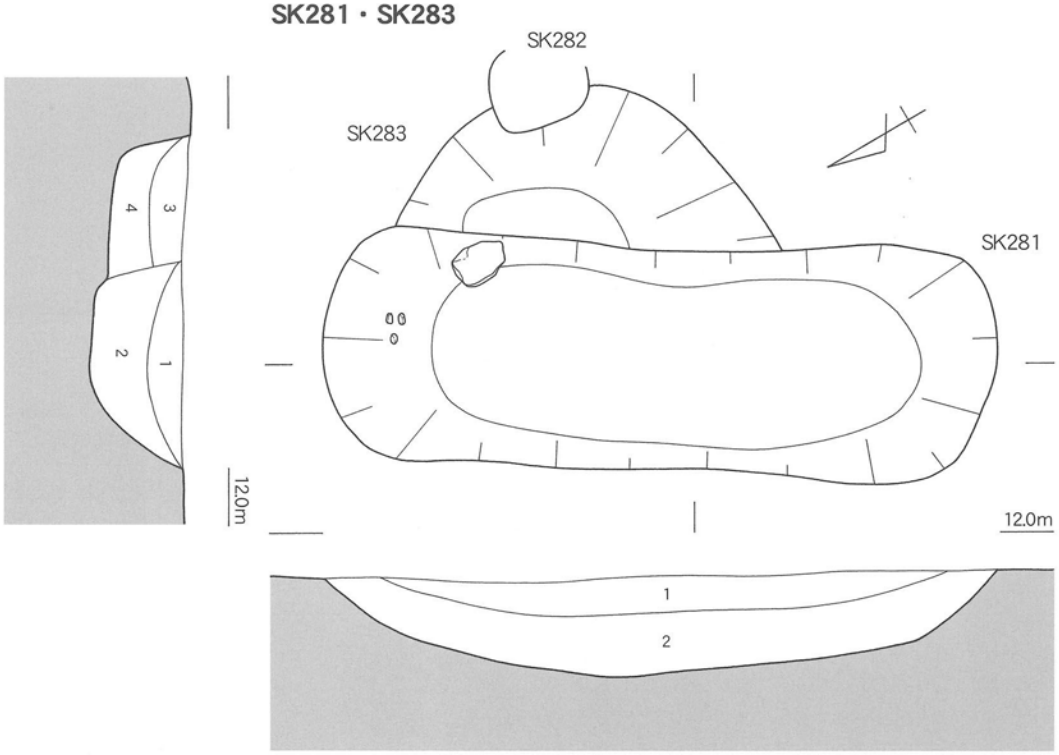
1．にぶい黄褐　シルト質極細砂(焼土ブロック・炭含)
2．灰黄褐　シルト質極細砂

SK279



1．褐　シルト質極細砂(炭含)
2．褐　シルト質極細砂
3．暗褐　シルト質極細砂(焼土・炭含)
4．褐　シルト質極細砂
5．褐　シルト質極細砂
6．褐　シルト質極細砂

SK281・SK283

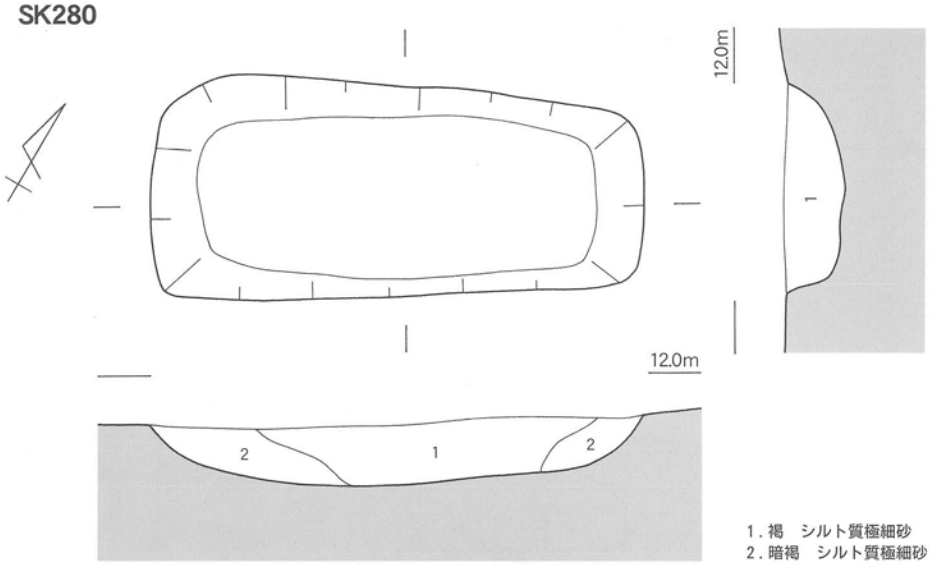


1．暗褐　シルト質極細砂(炭少量含)
2．褐　シルト質極細砂
3．明褐　シルト質極細砂
4．褐　シルト質極細砂

0　2m

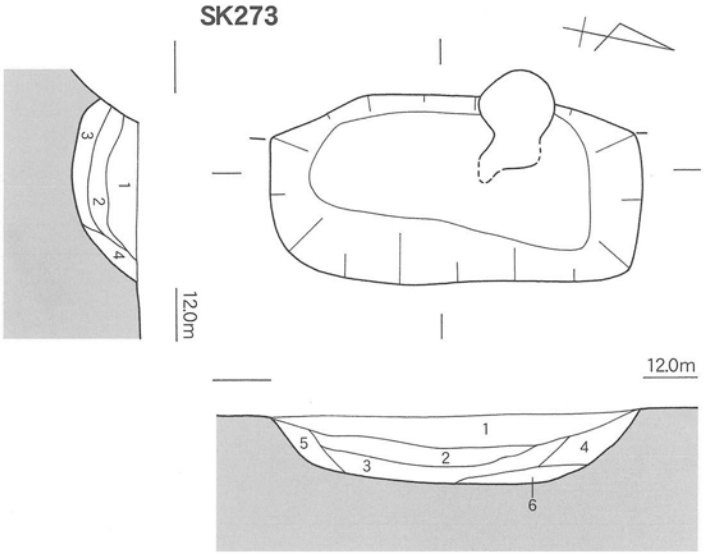
1E SK278　1W SK279　2W 1W 1E SK281・SK283

SK280



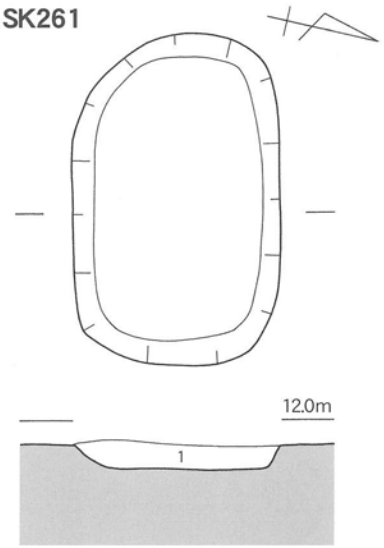
1．褐　シルト質極細砂
2．暗褐　シルト質極細砂

SK273



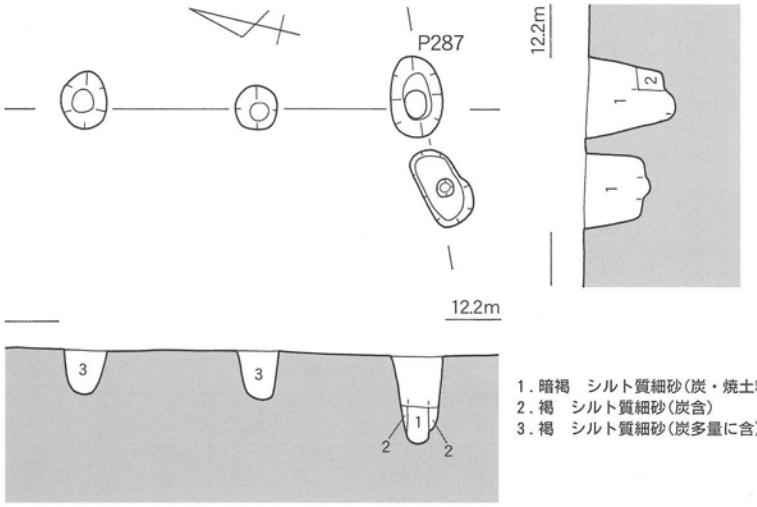
1．黄褐＋灰黄褐　中砂混じりシルト質極細砂
2．にぶい黄褐　シルト質細砂
3．灰黄褐　中砂混じりシルト質極細砂
4．明黄褐　中砂（地山に近い）
5．にぶい黄褐　中砂混じりシルト質極細砂
6．灰黄褐　シルト質細砂

SK261



1．灰黄褐　中砂混じりシルト質極細砂（炭含）

SB288

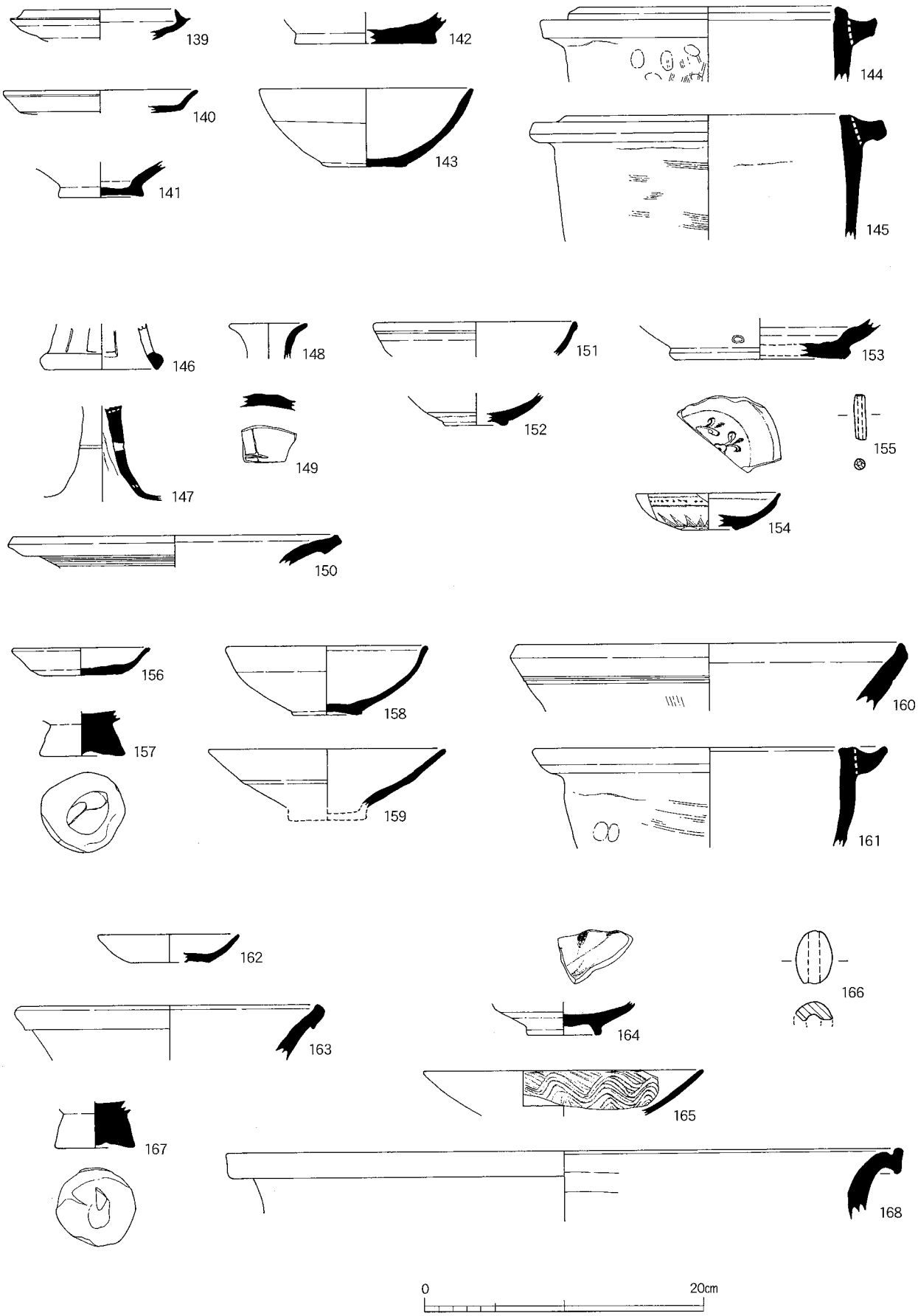


1．暗褐　シルト質細砂（炭・焼土粒含）
2．褐　シルト質細砂（炭含）
3．褐　シルト質細砂（炭多量に含）

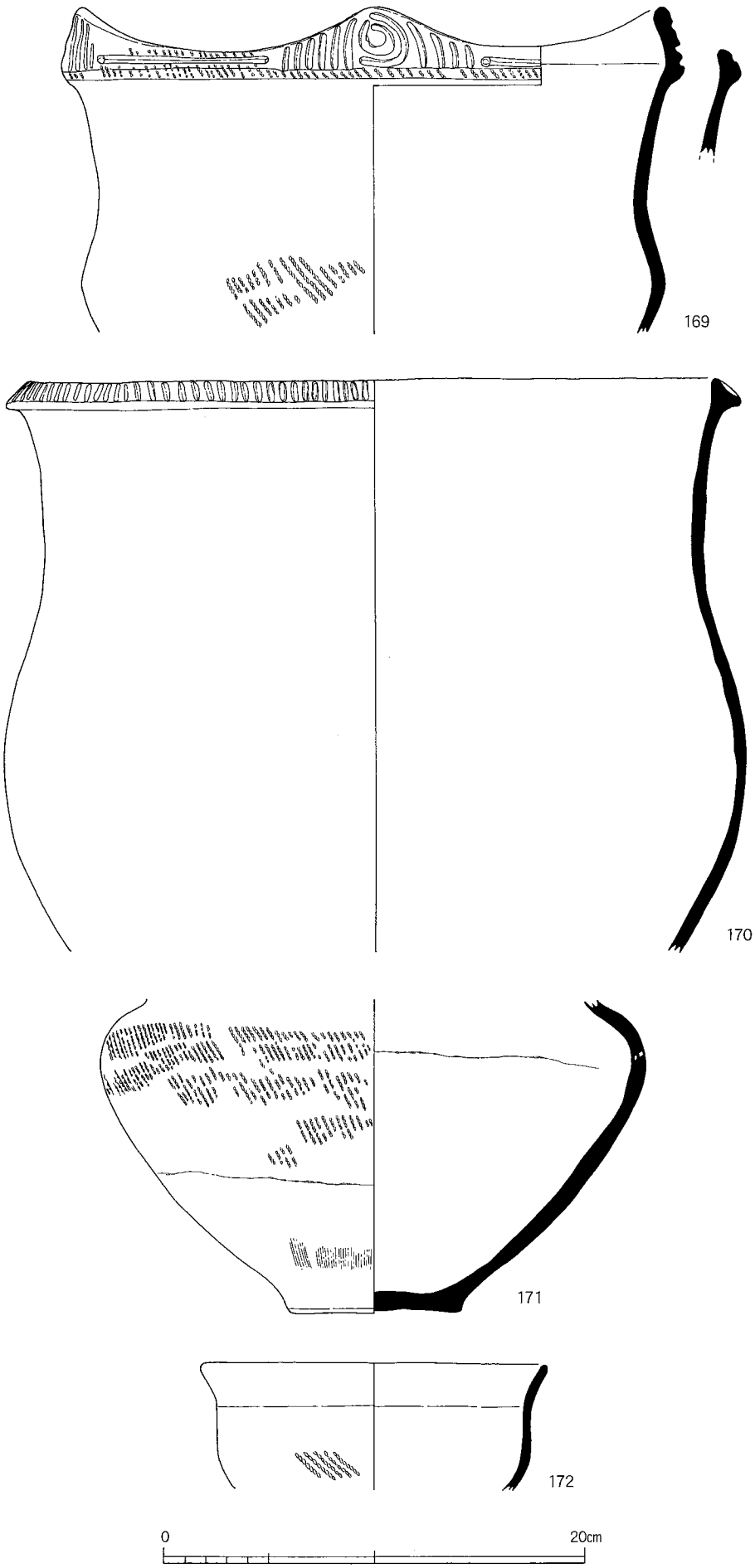
0　2m

2W SK280・SK273　4W SK261　1E SB288

図版54 遺物 2区

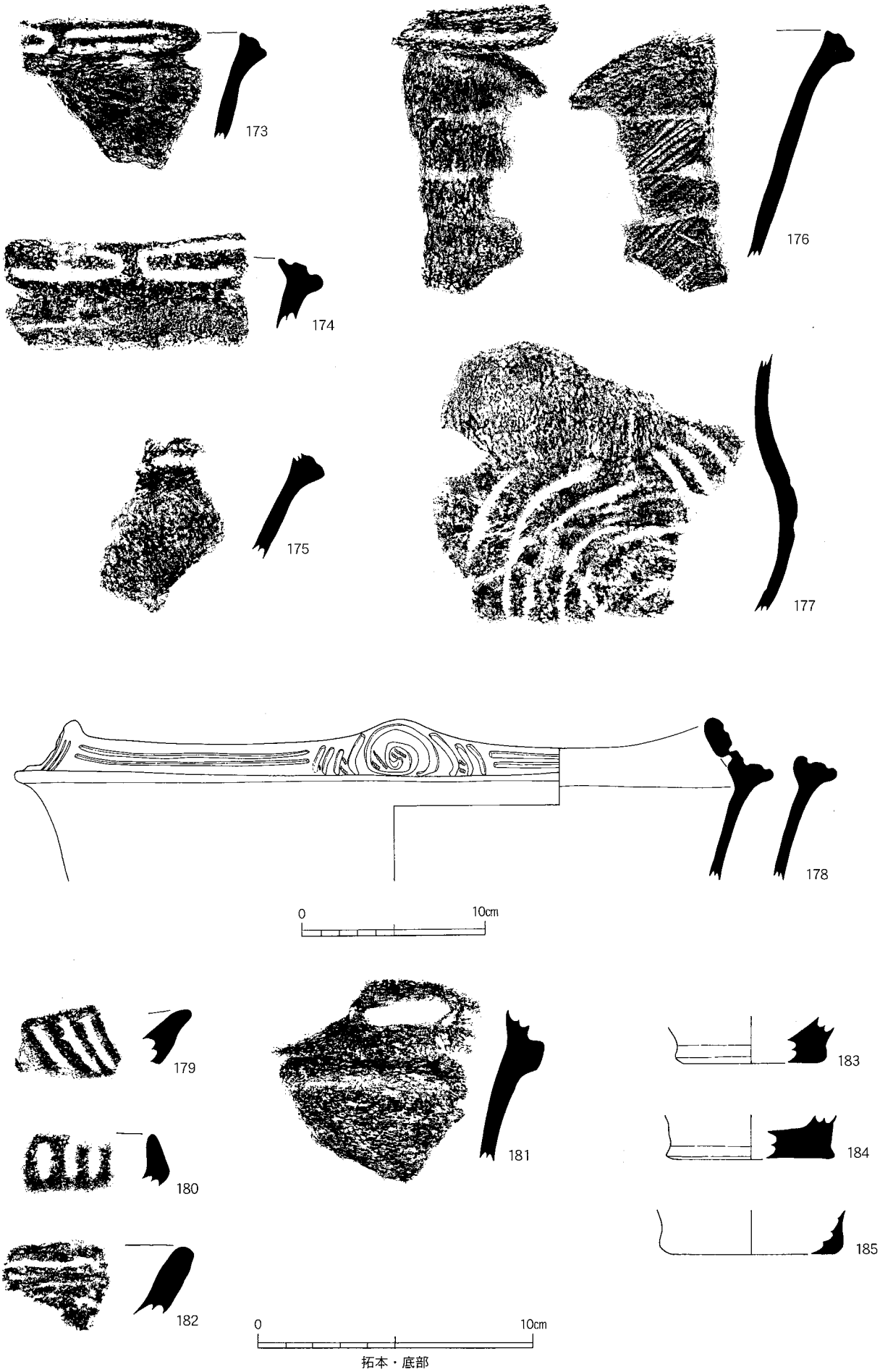


SD205・SD202・SD229・SD203・SD201・SB600・包含層 (139～168)



SK251① (169～172)

図版56 遺物 2区

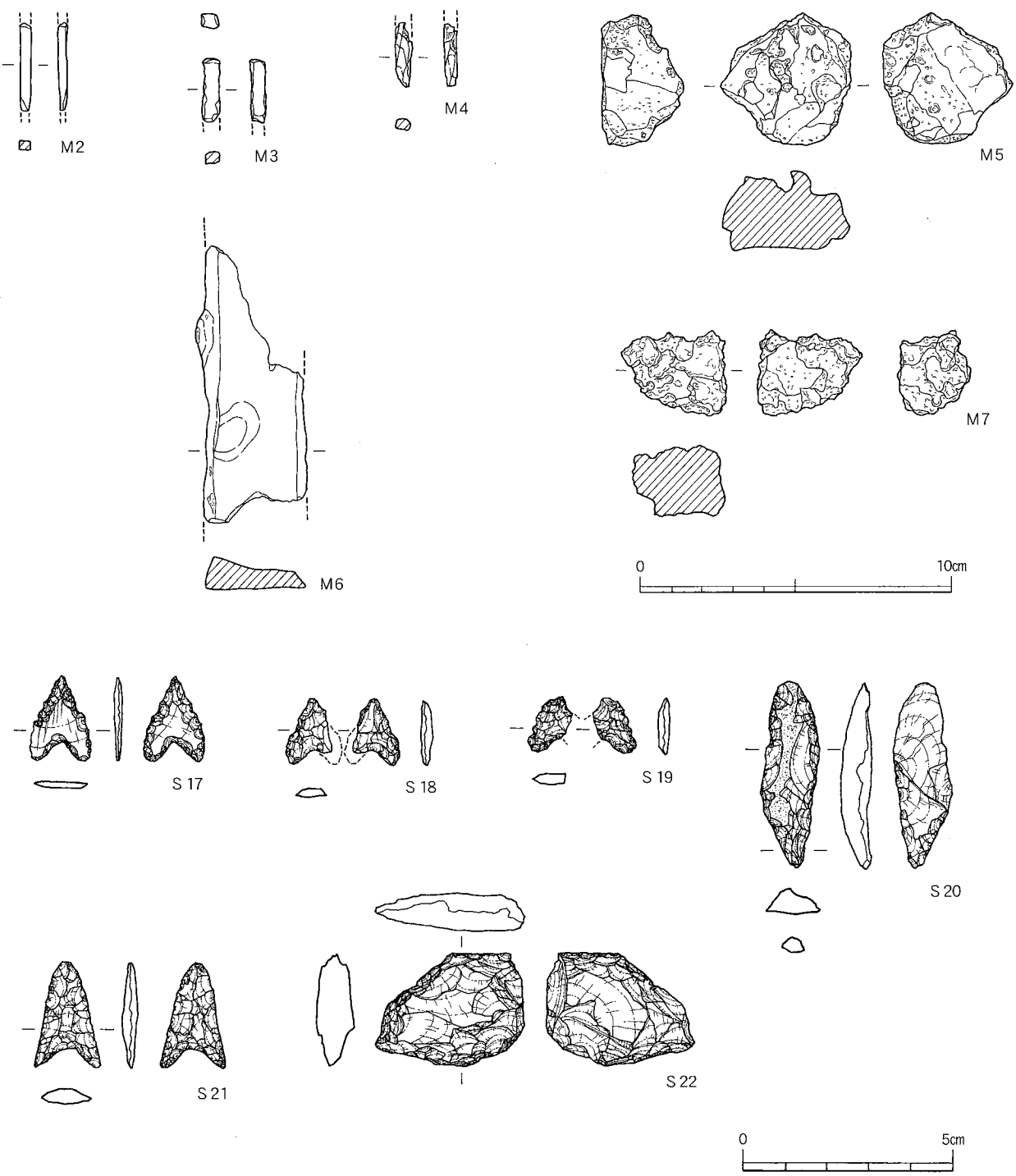


SK251②・SK238・SK218・SK298・SK253・SK223・SK213・SK252 (173～185)

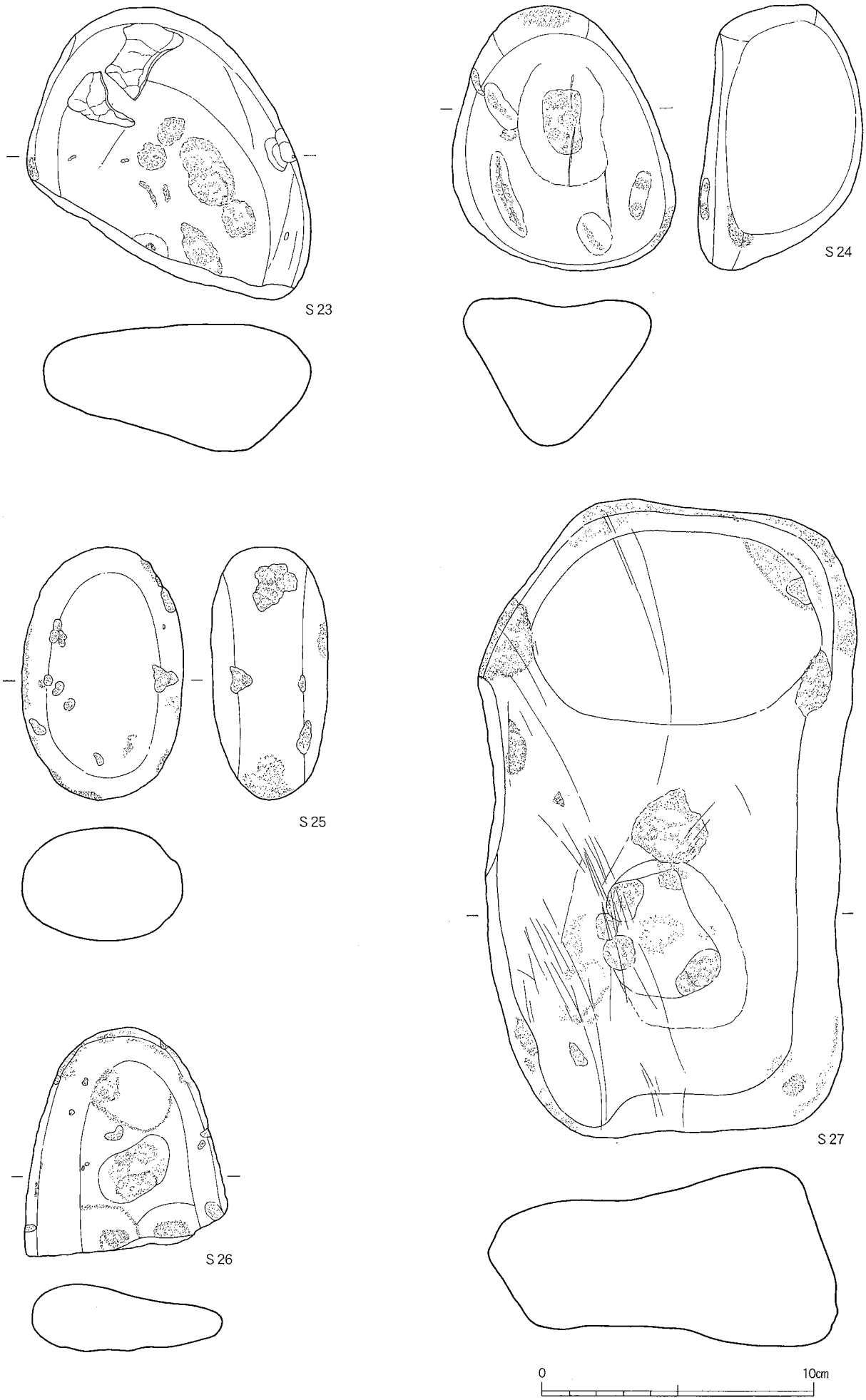
図版57　遺物　2区

縄文包含層　(186～196)

図版58 遺物 2区



鉄器・石器 （M2～M7、S17～S22）

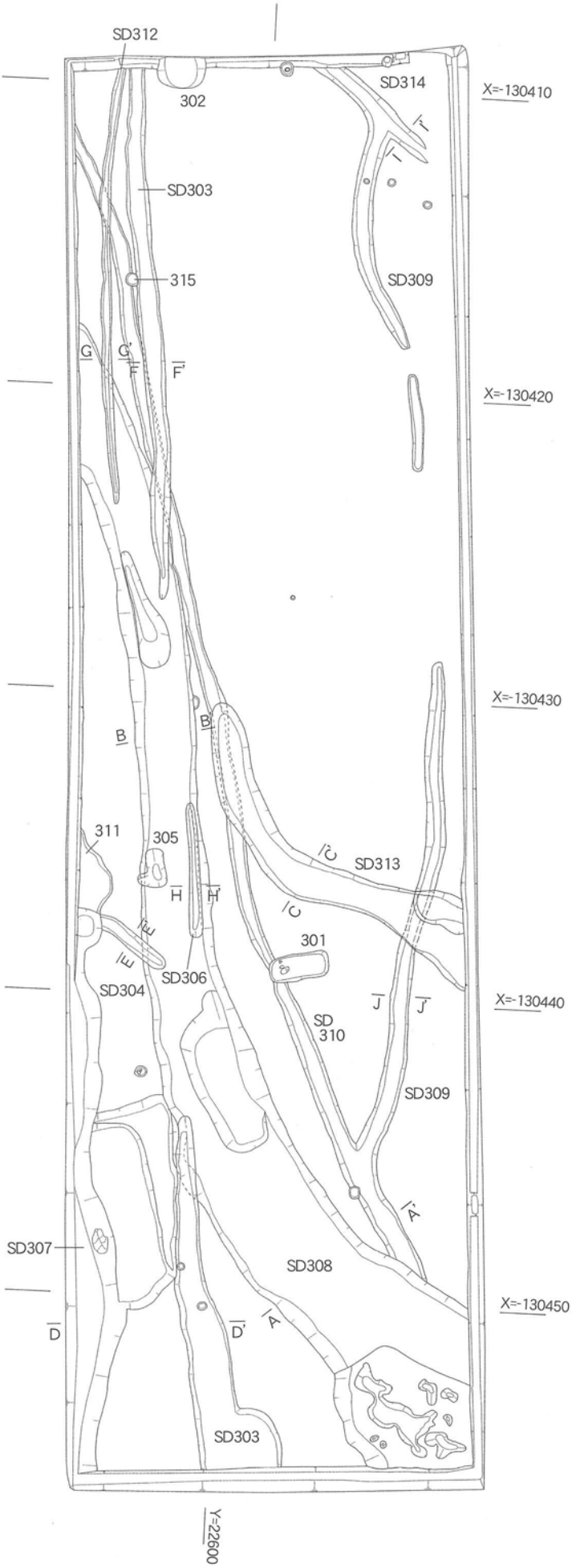


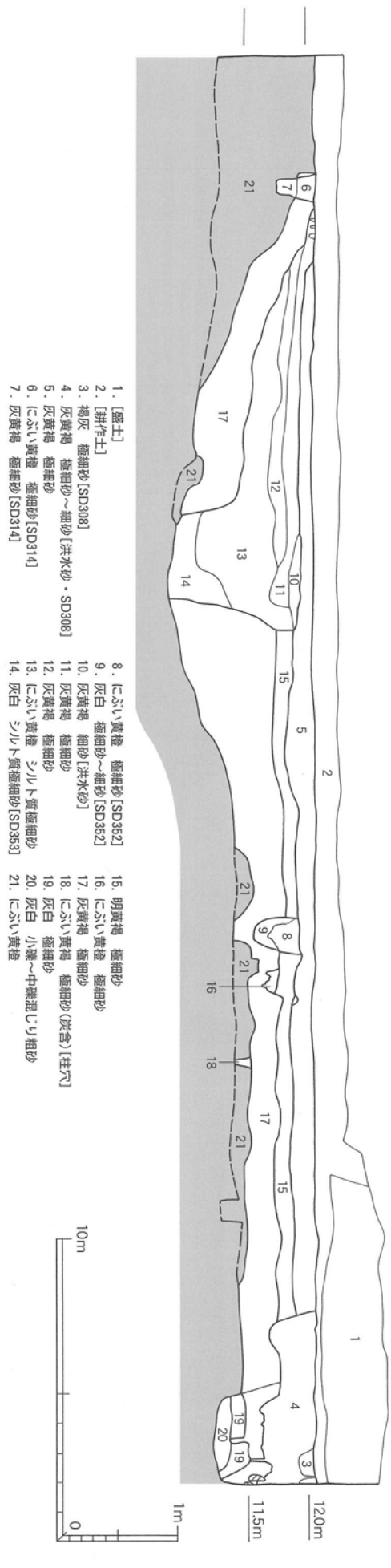
石器 (S23～S27)

図版60　遺構　3区

中層平面　西壁断面

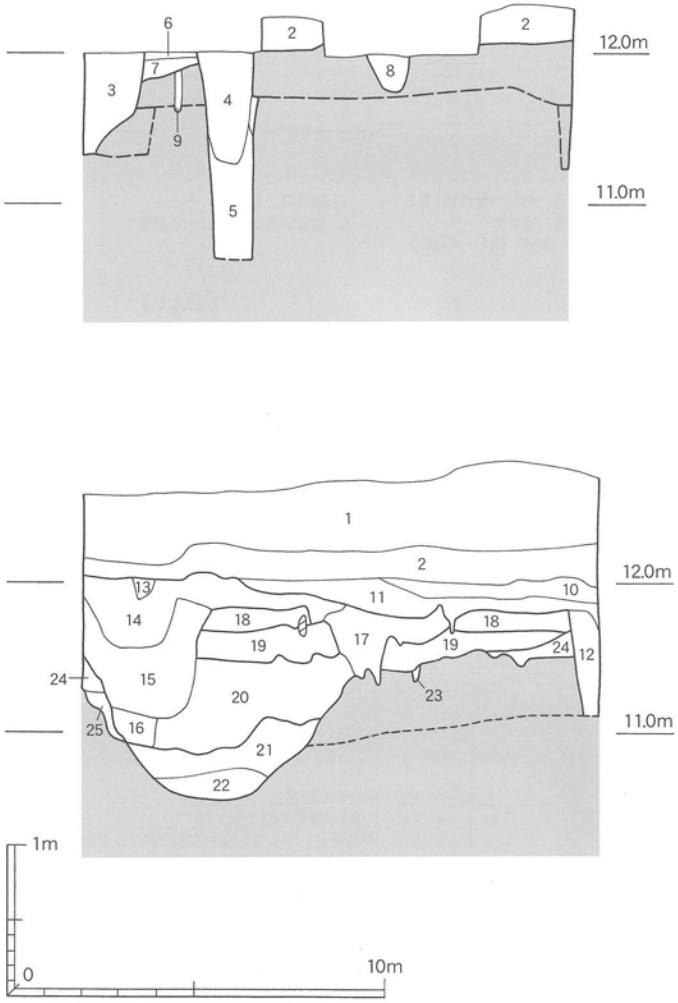
図版61　遺構　3区



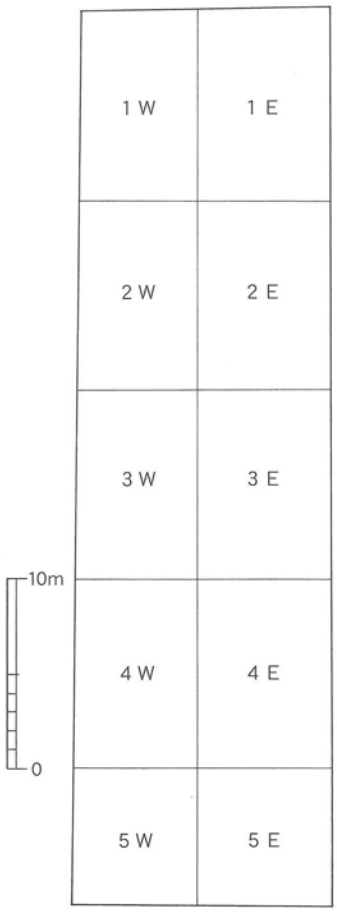


上層平面　東壁断面

下層平面　西壁断面・東壁断面

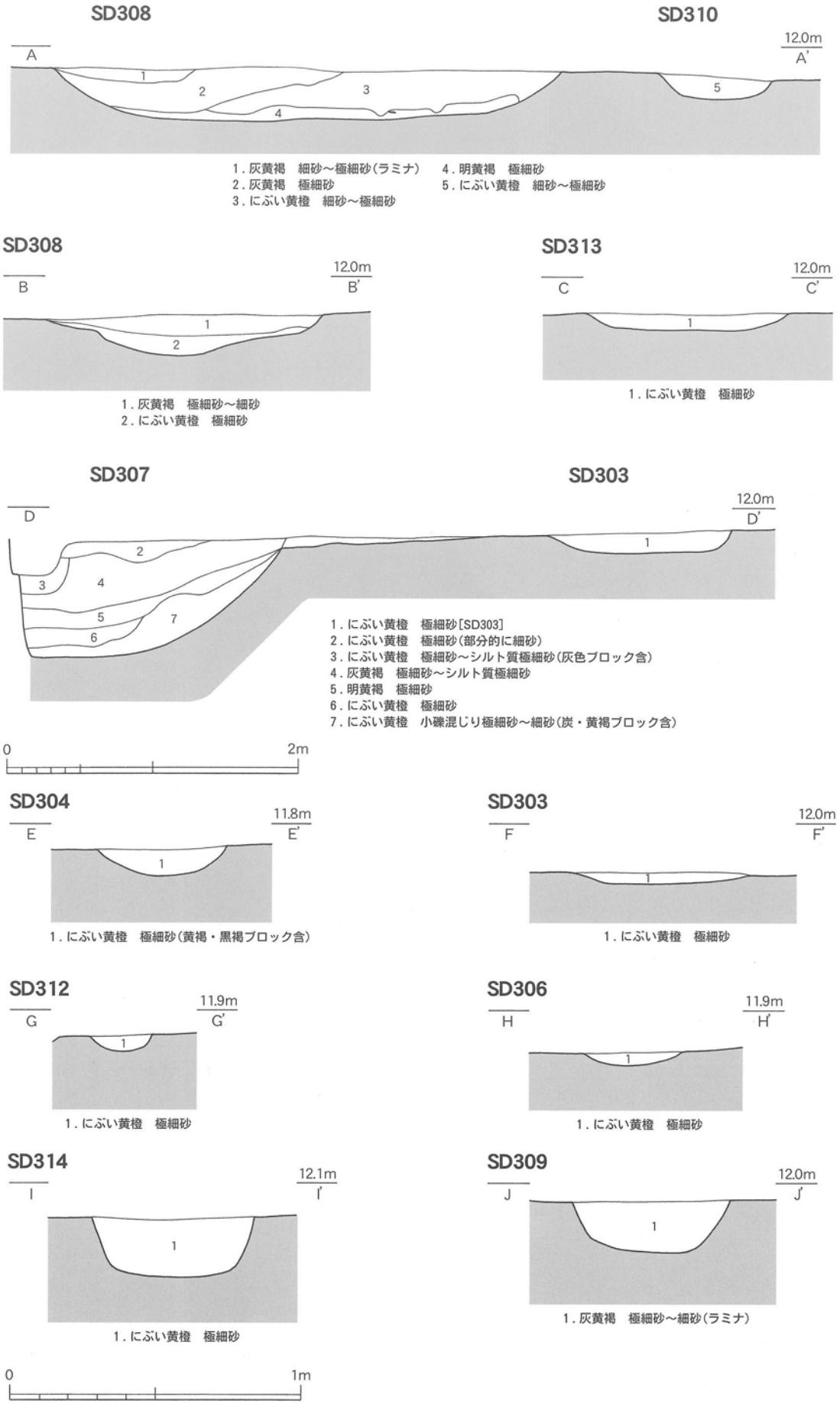


1．[盛土]
2．[耕作土]
3．(灰ブロック含)[SD301]
4．にぶい黄橙　極細砂[SK302]
5．明黄褐　極細砂
6．にぶい黄橙[床土]
7．灰白　極細砂
8．にぶい黄橙　極細砂[SD314]
9．褐　シルト質極細砂(1～10cm焼土ブロック・炭多量に含)
10．褐灰　極細砂[水田土壌層]
11．灰黄褐　極細砂
12．灰黄褐　極細砂～シルト質極細砂
13．褐灰　極細砂～細砂[洪水砂]
14．灰黄褐　細砂～極細砂[部分的に洪水砂が混入・SD308埋土]
15．にぶい黄橙　細砂～極細砂
16．褐灰　小礫混じり細砂[SD308]
17．にぶい黄橙　シルト質極細砂
18．灰黄褐　極細砂[SD351]
19．にぶい黄橙　極細砂[SD351]
20．にぶい黄橙　シルト質極細砂～極細砂[SD351]
21．にぶい黄褐　極細砂(炭含)
22．にぶい黄褐　小礫混じり極細砂(炭含)
23．褐灰　シルト質極細砂[柱穴]
24．灰黄褐　シルト質極細砂
25．にぶい黄橙　シルト質極細砂

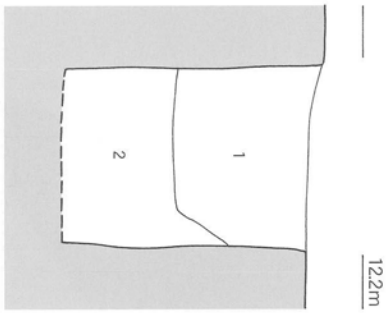


北壁・南壁断面と地区割り

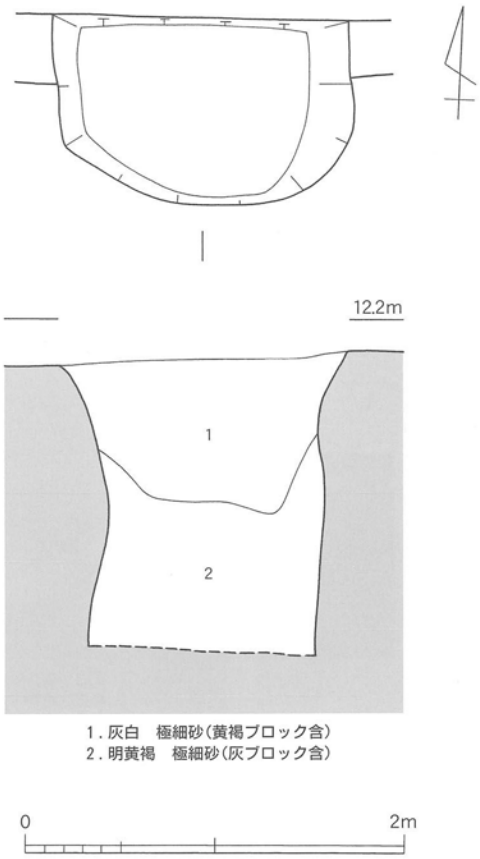
図版64 遺構 3区



SD308・SD310・SD313・SD307・SD303・SD304・SD312・SD306・SD314・SD309

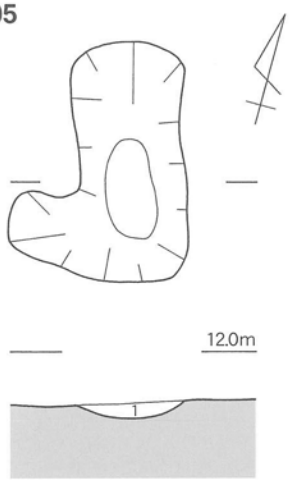


SK302



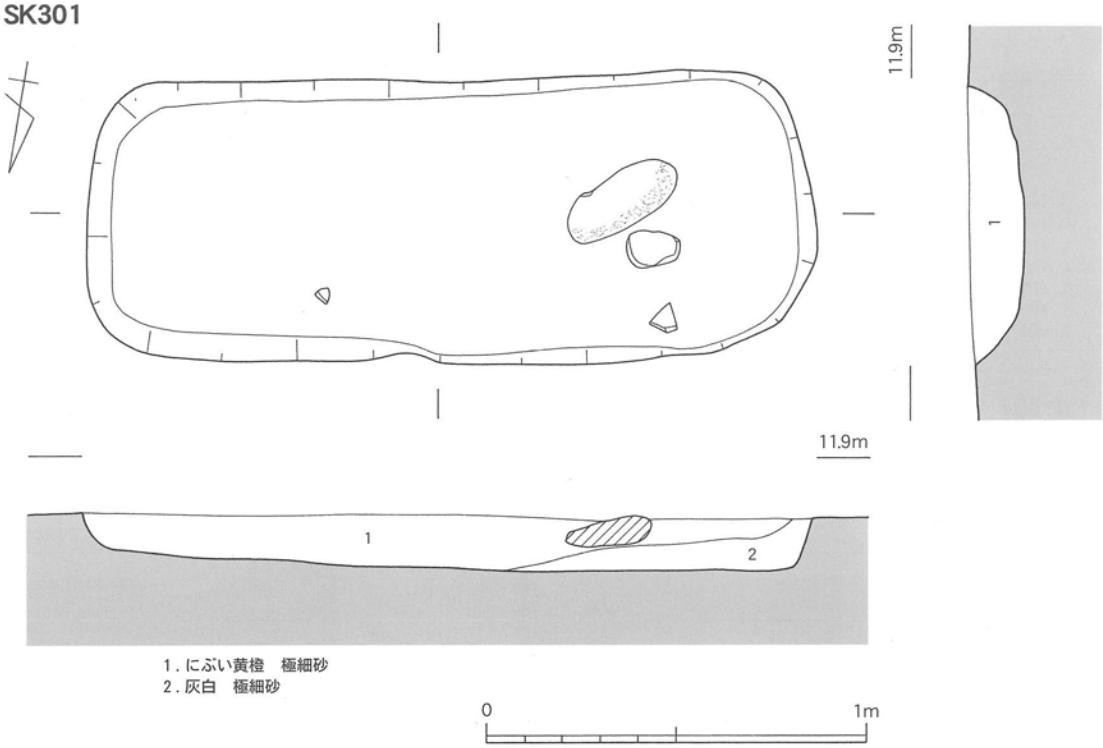
1．灰白　極細砂（黄褐ブロック含）
2．明黄褐　極細砂（灰ブロック含）

SK305



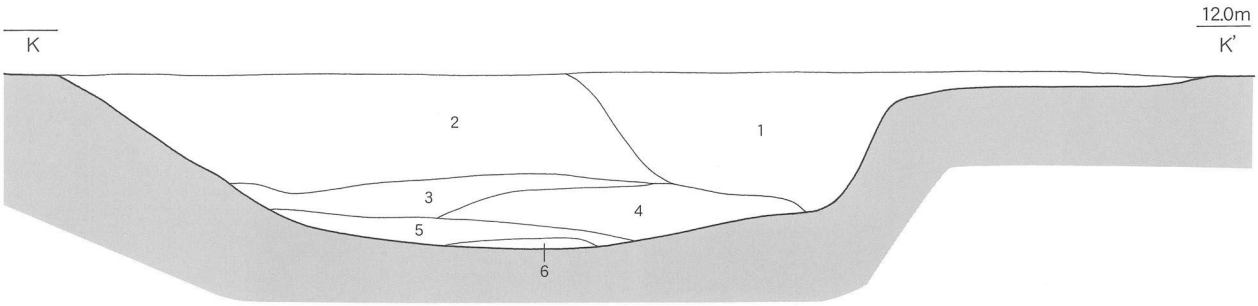
1．にぶい黄橙　極細砂（黄褐ブロック含）

SK301



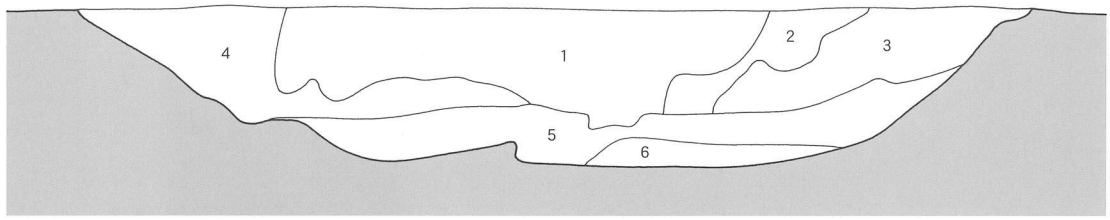
1．にぶい黄橙　極細砂
2．灰白　極細砂

SD353



1．にぶい褐　粗砂混じり極細砂（焼土・炭を少量含、Mn 多量に含）
2．にぶい黄橙　粗砂～中砂混じり極細砂～シルト質極細砂
3．灰黄褐　粗砂混じり極細砂～シルト質極細砂（炭少量含）
4．にぶい黄褐　粗砂（炭少量含）
5．にぶい黄褐　極細砂（炭含）
6．にぶい黄褐　小礫混じり極細砂（炭含）

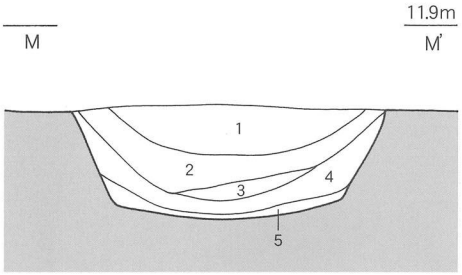
SD351



1．灰白　極細砂（Mn 斑・炭含）
2．灰白　粗砂～小礫混じり極細砂（Mn 斑含）
3．灰白　シルト質極細砂（Mn 斑・炭含）
4．灰白　シルト質極細砂
5．灰白　細砂（炭・大礫含）
6．灰白　粗砂（極粗砂～大礫含）

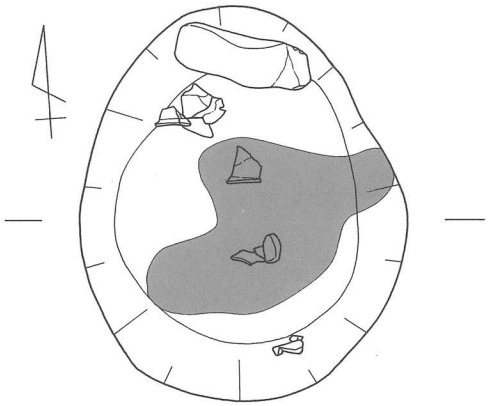
0　2m

SD352

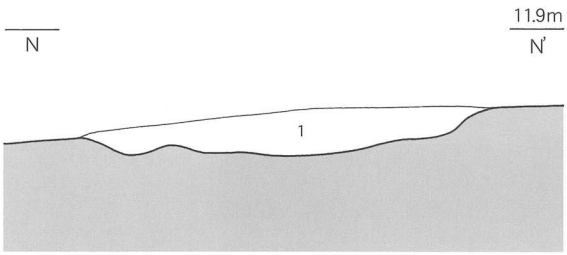


1．灰白　シルト質極細砂～細砂（Mn 斑含、焼土・炭少量含）
2．灰黄褐　シルト質極細砂（黄橙ブロック・Mn 斑含、炭・焼土少量含）
3．黒褐　シルト質極細砂（Mn 斑・炭含）
4．褐灰　シルト質極細砂（Mn 斑含、炭・焼土少量含）
5．黒褐　シルト質極細砂（Mn 斑含、炭・焼土多量に含）

SK331

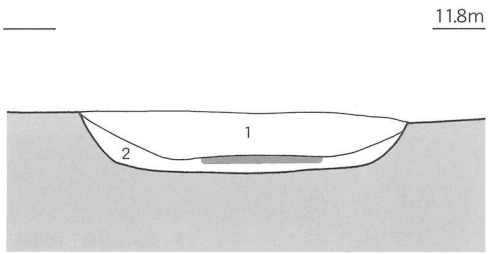


SD357



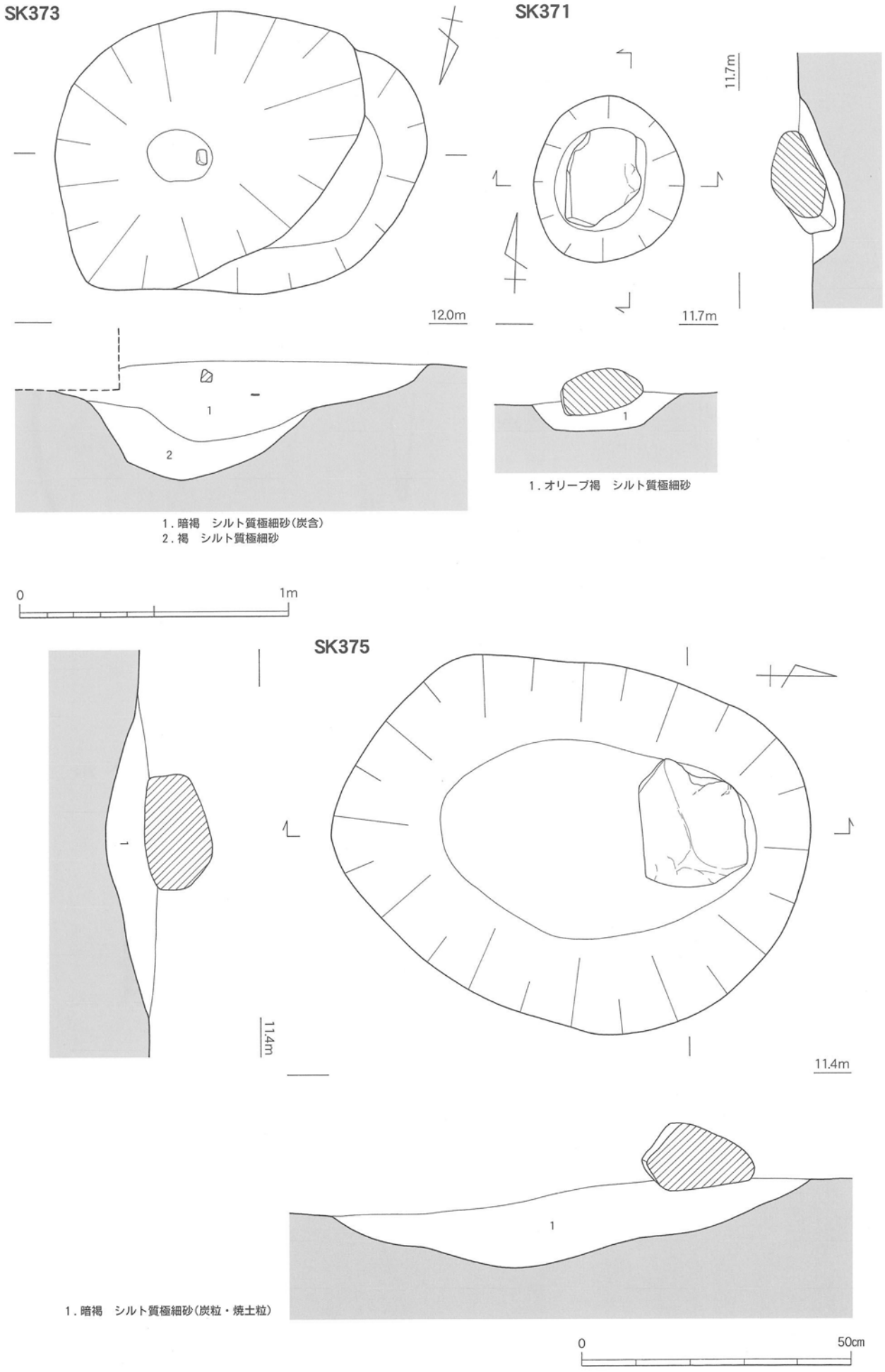
1．褐灰　細砂～シルト質極細砂（Mn 斑含）

0　1m



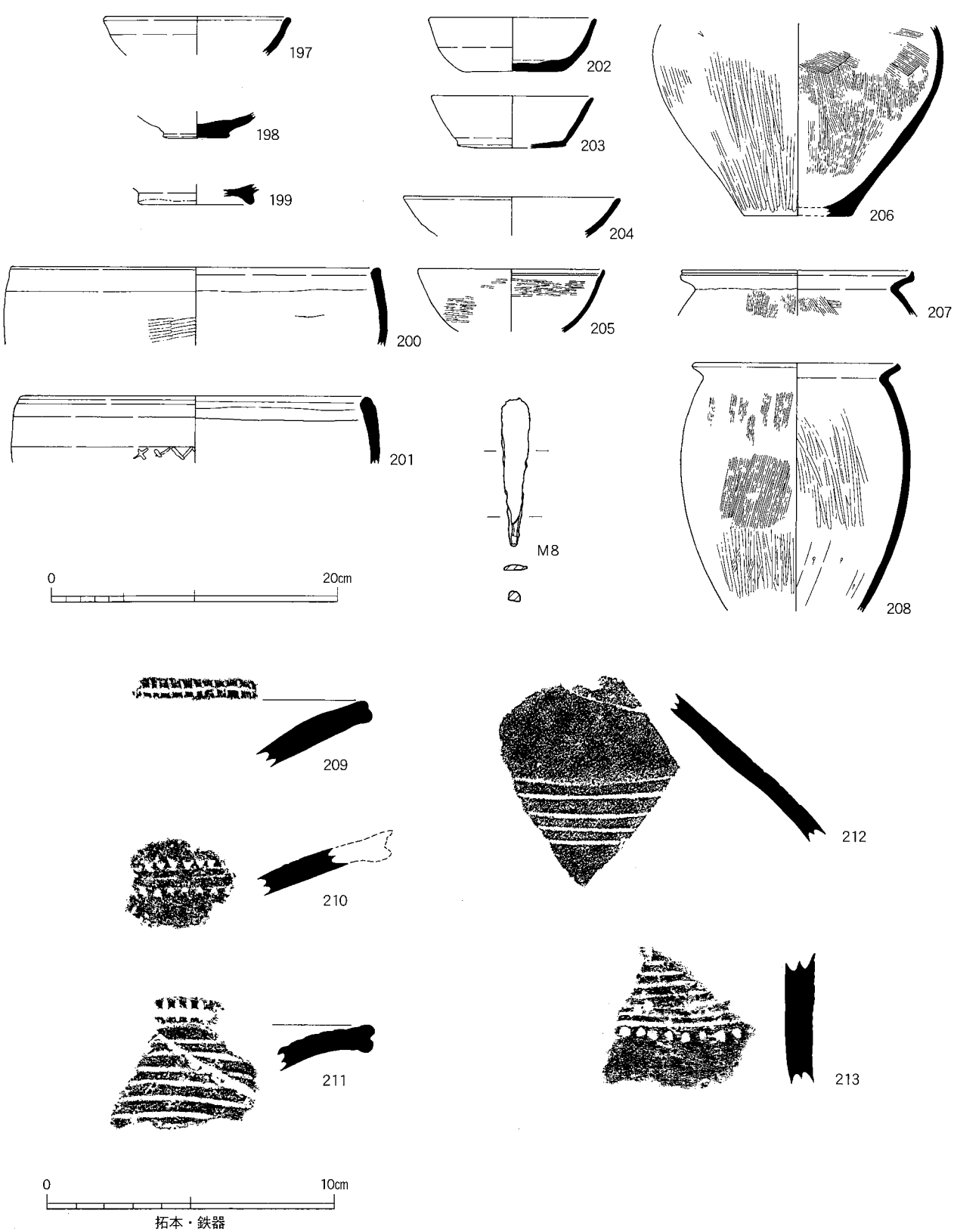
1．黄灰　細砂（Mn 斑・焼土粒・炭含）
2．灰白　細砂（Mn 斑・焼土粒・炭含）

弥生　SK331　SD351・SD353・SD352・SD357

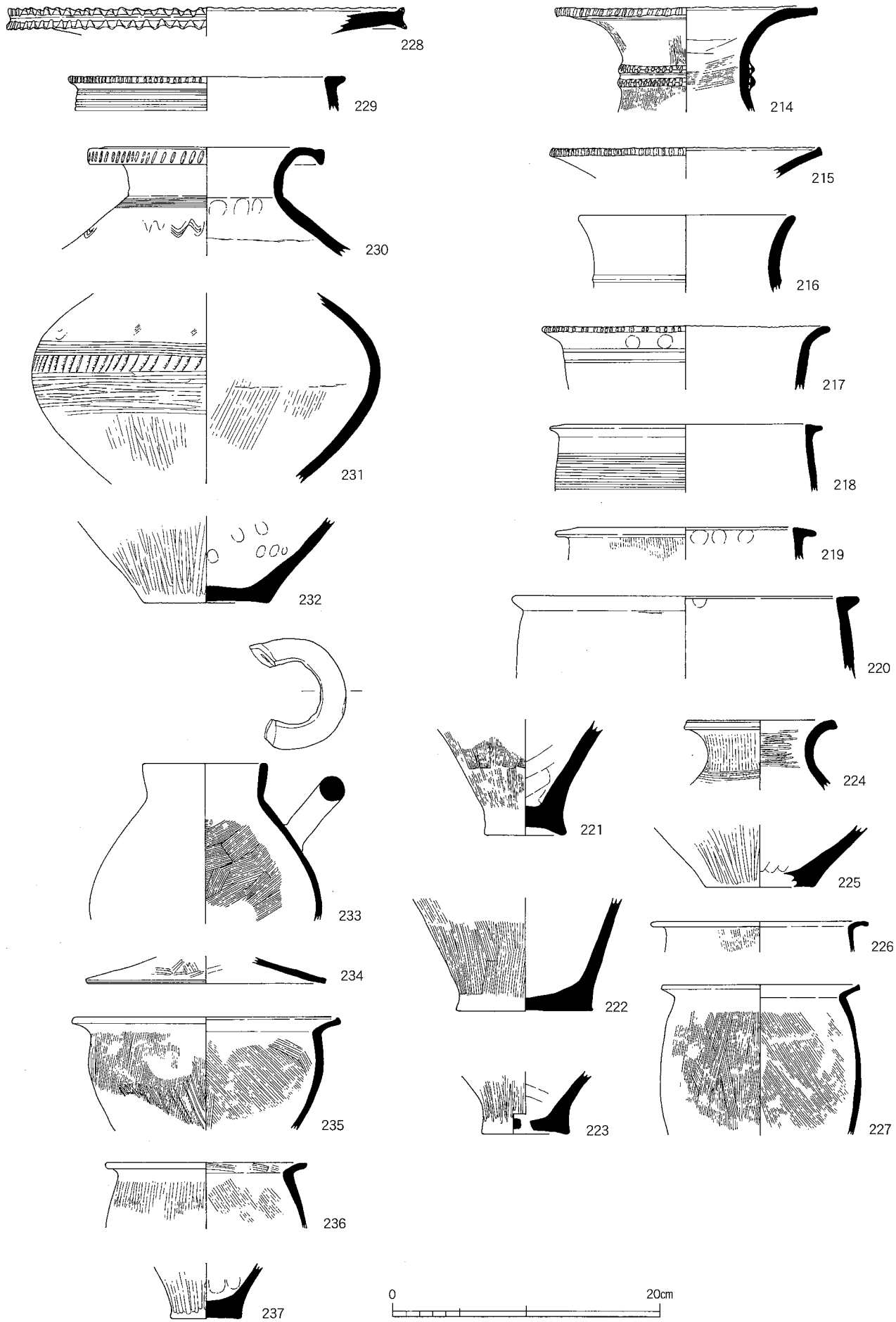


1W SK371　2W SK375　1E SK373

図版68 遺物 3区

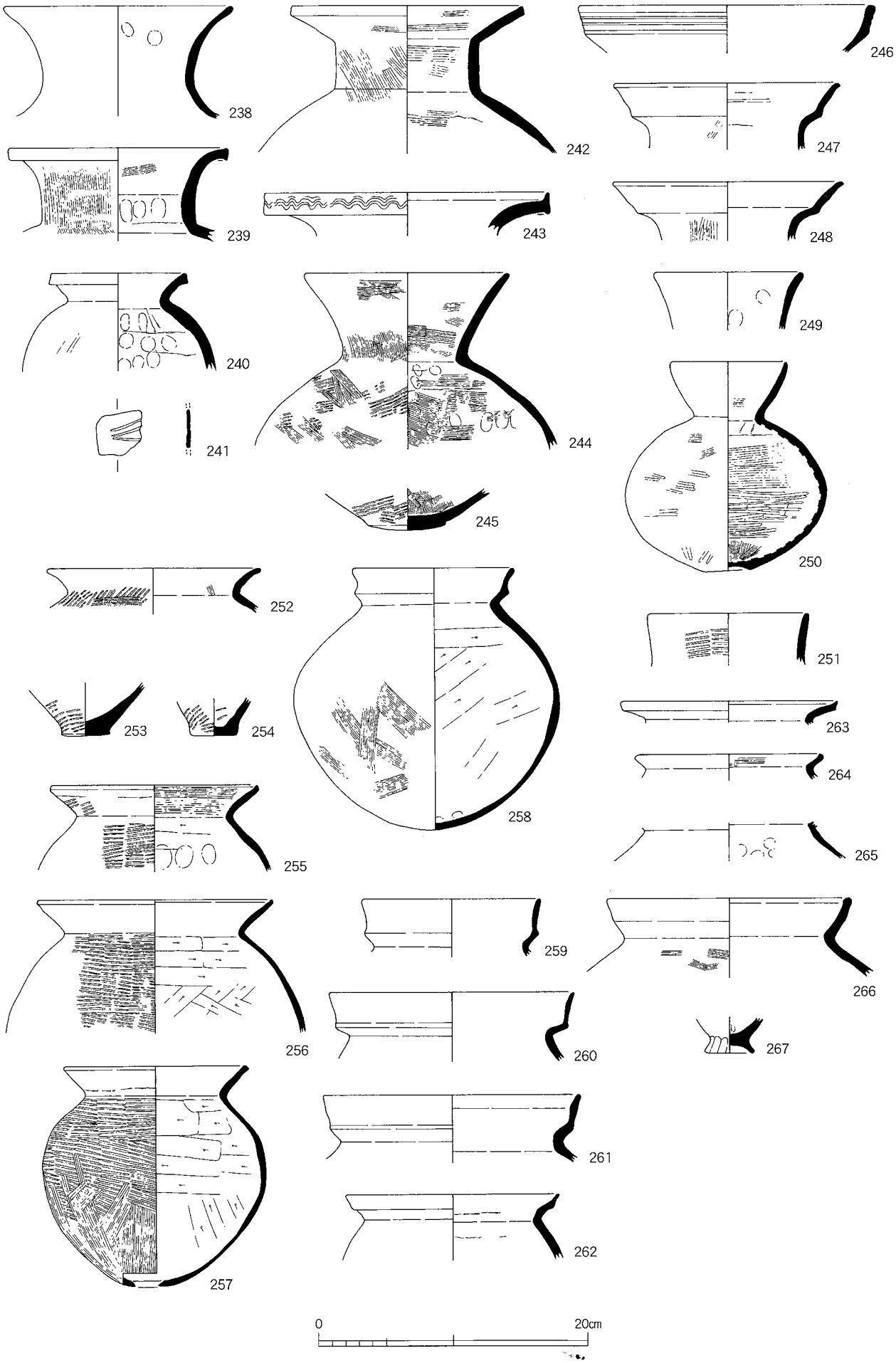


上層　SD307・SD303・SD304・SD306・SK331・SD353　(197～213、M8)

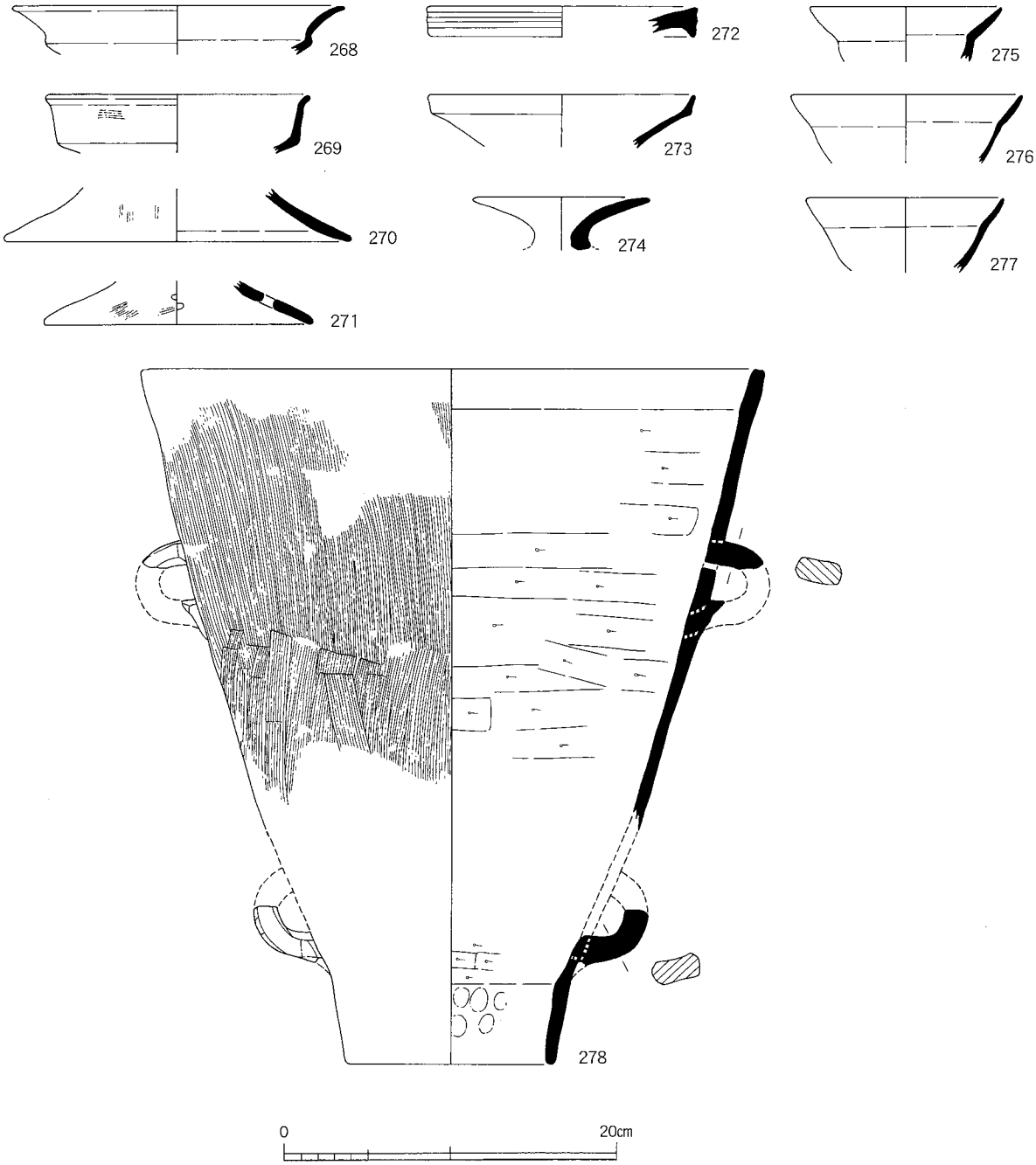


SD351・SD353 (214～237)

図版70 遺物 3区



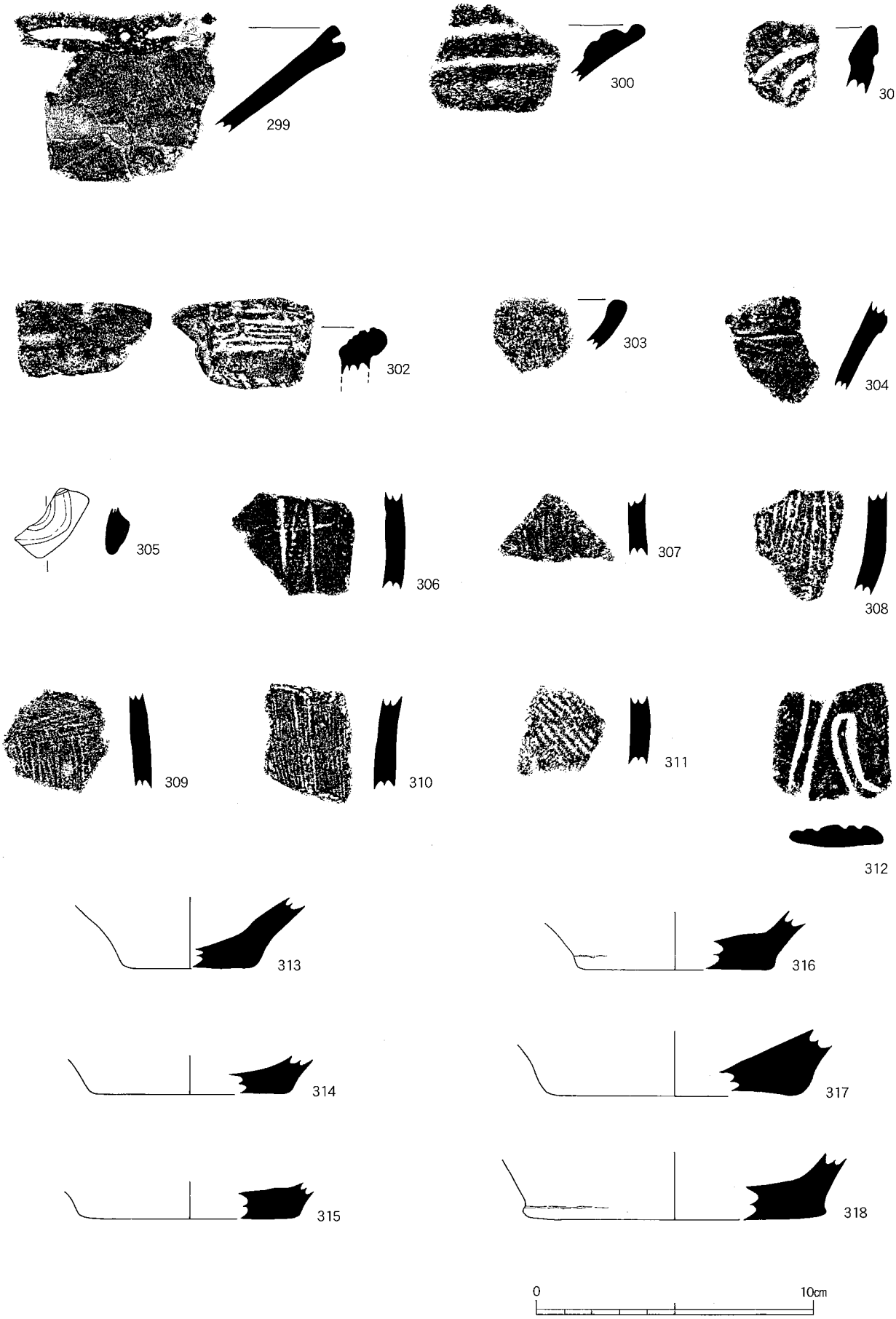
SD308① (238～267)



SD308② (268～278)

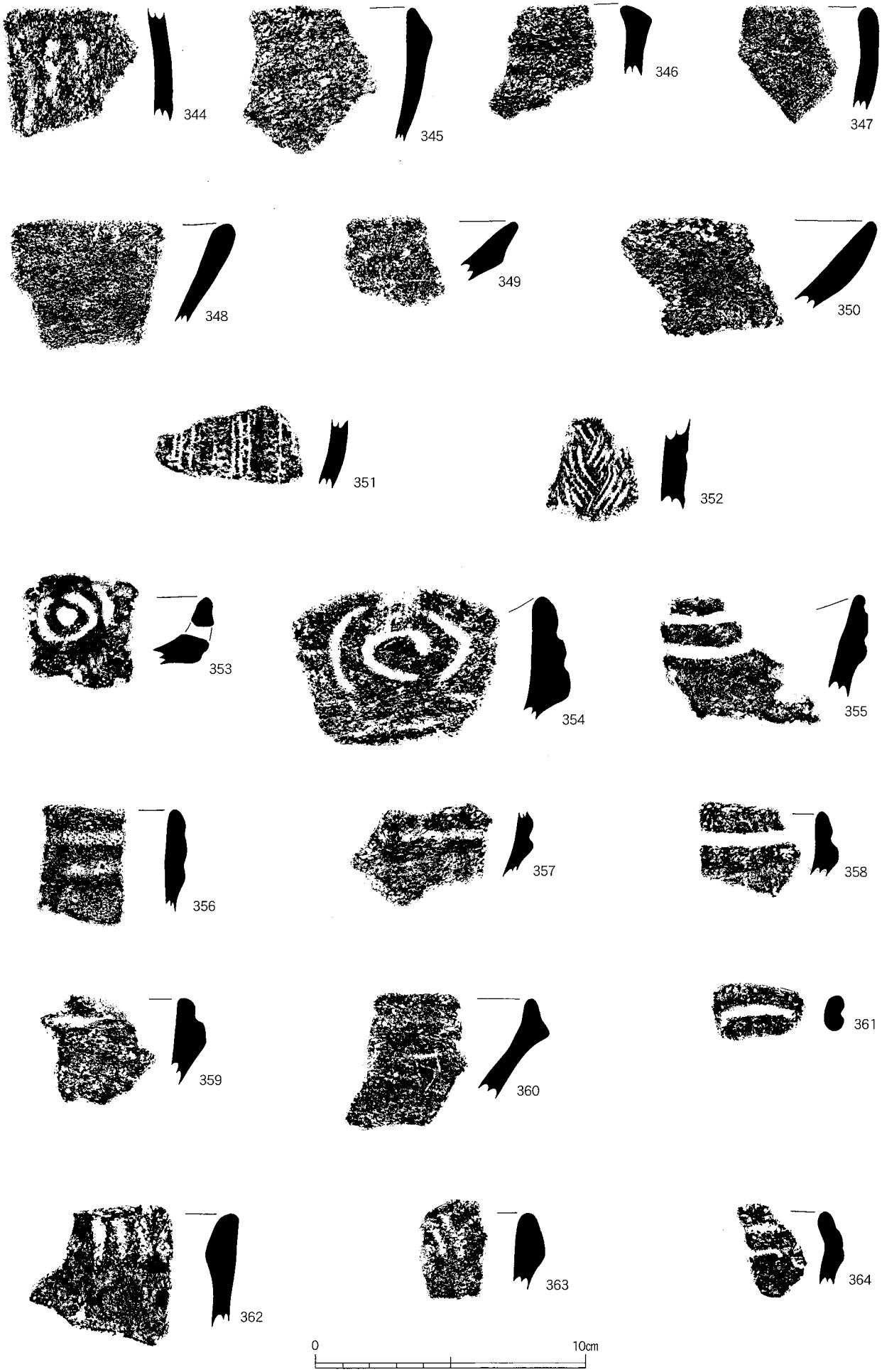
図版72 遺物 3区

SD361① (279～298)



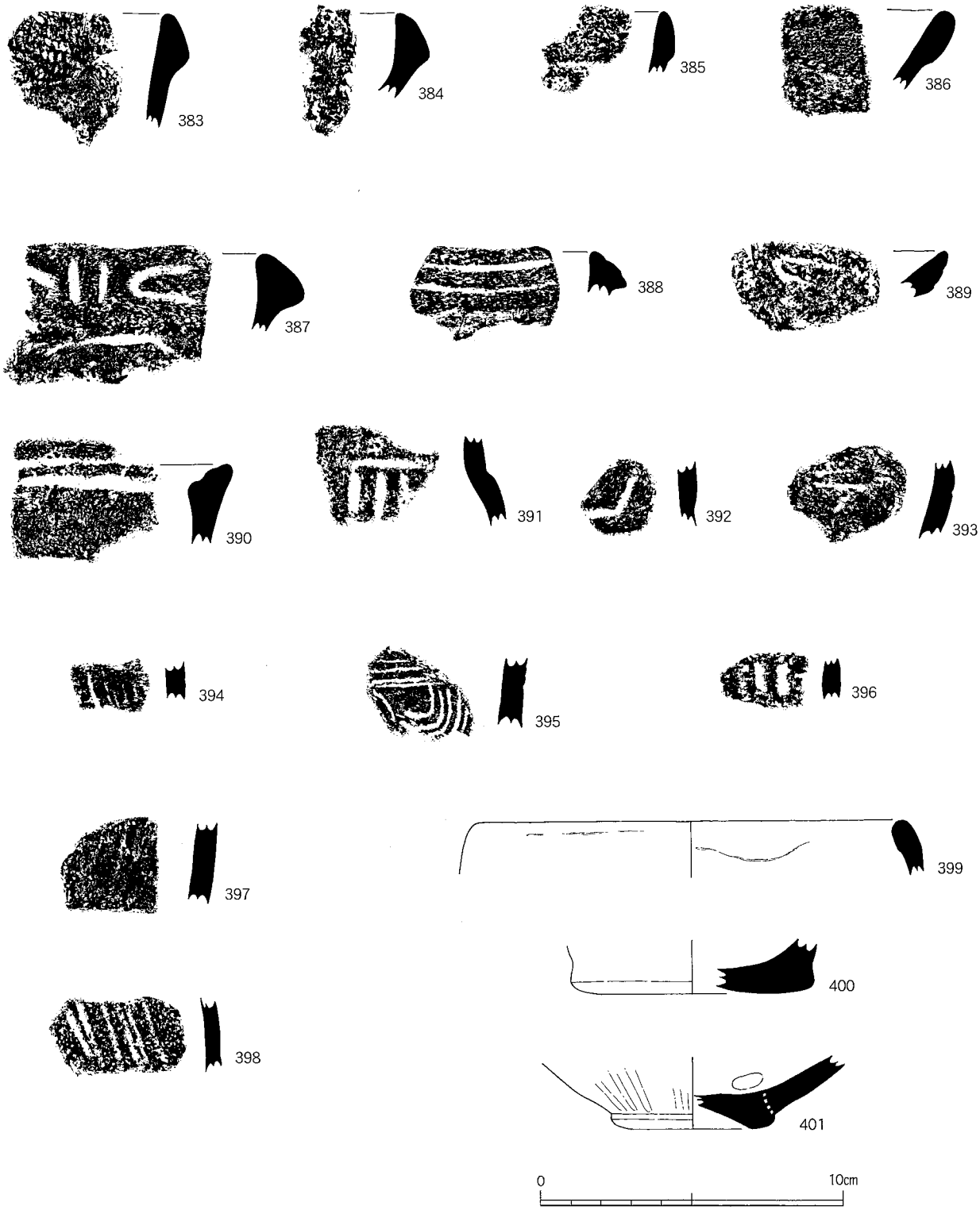
SD361② (299～318)

SD361③ 上層 SD351① (319～343)



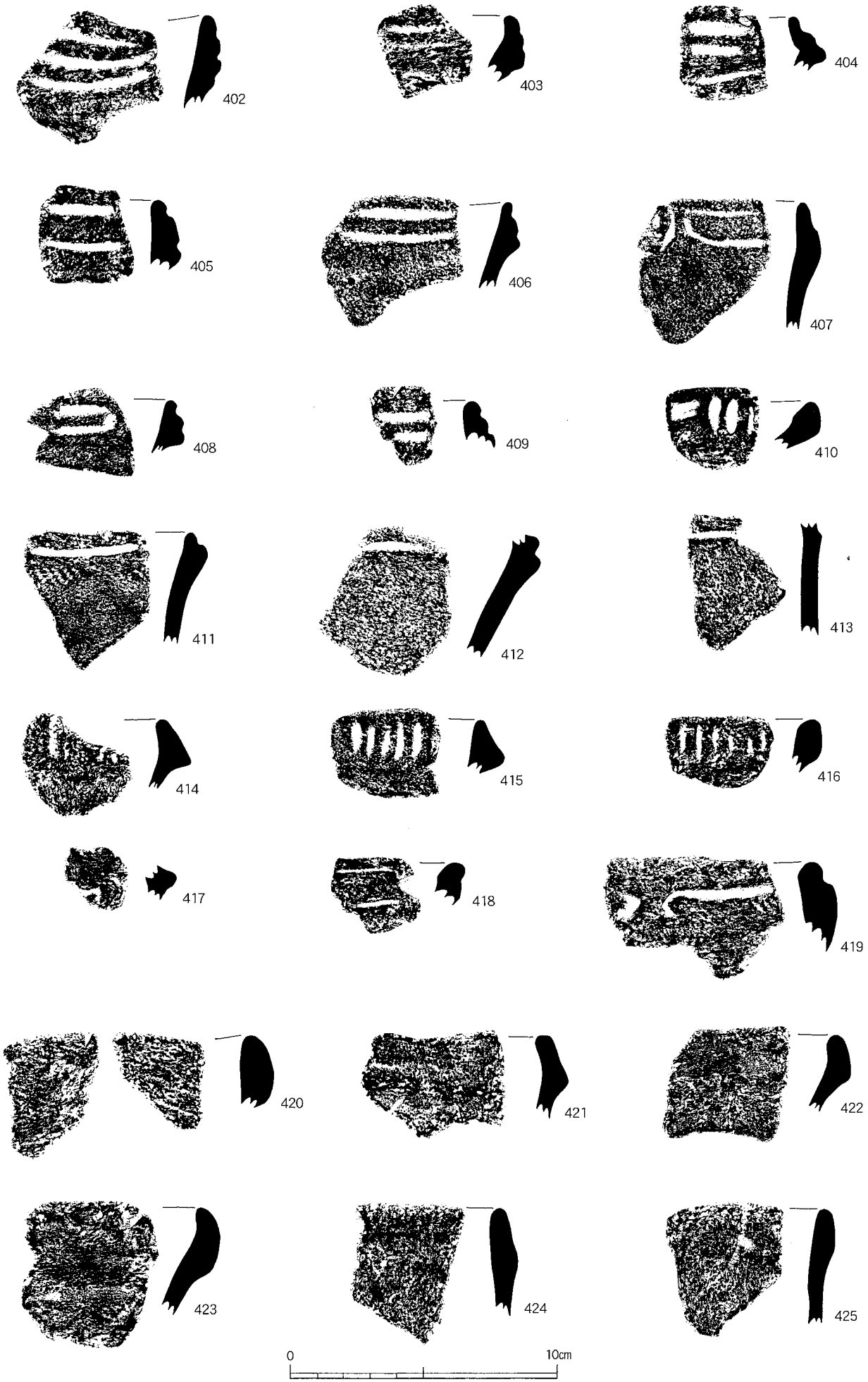
SD351②・SK373　SD308・SD310・SD357・SD361　(344～364)

縄文包含層　6層①　(365～382)

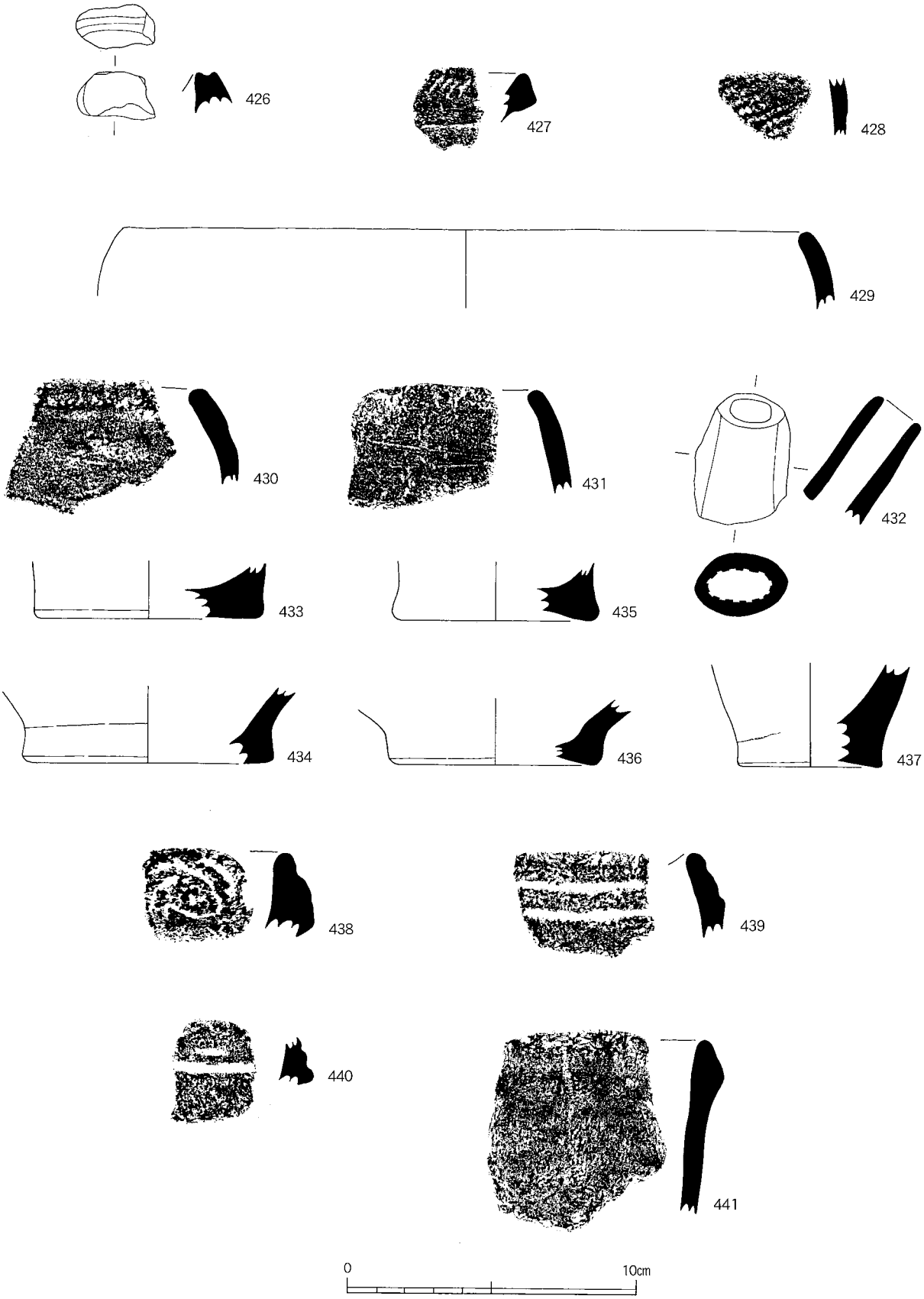


縄文包含層　6層②　(383～401)

図版78　遺物　3区

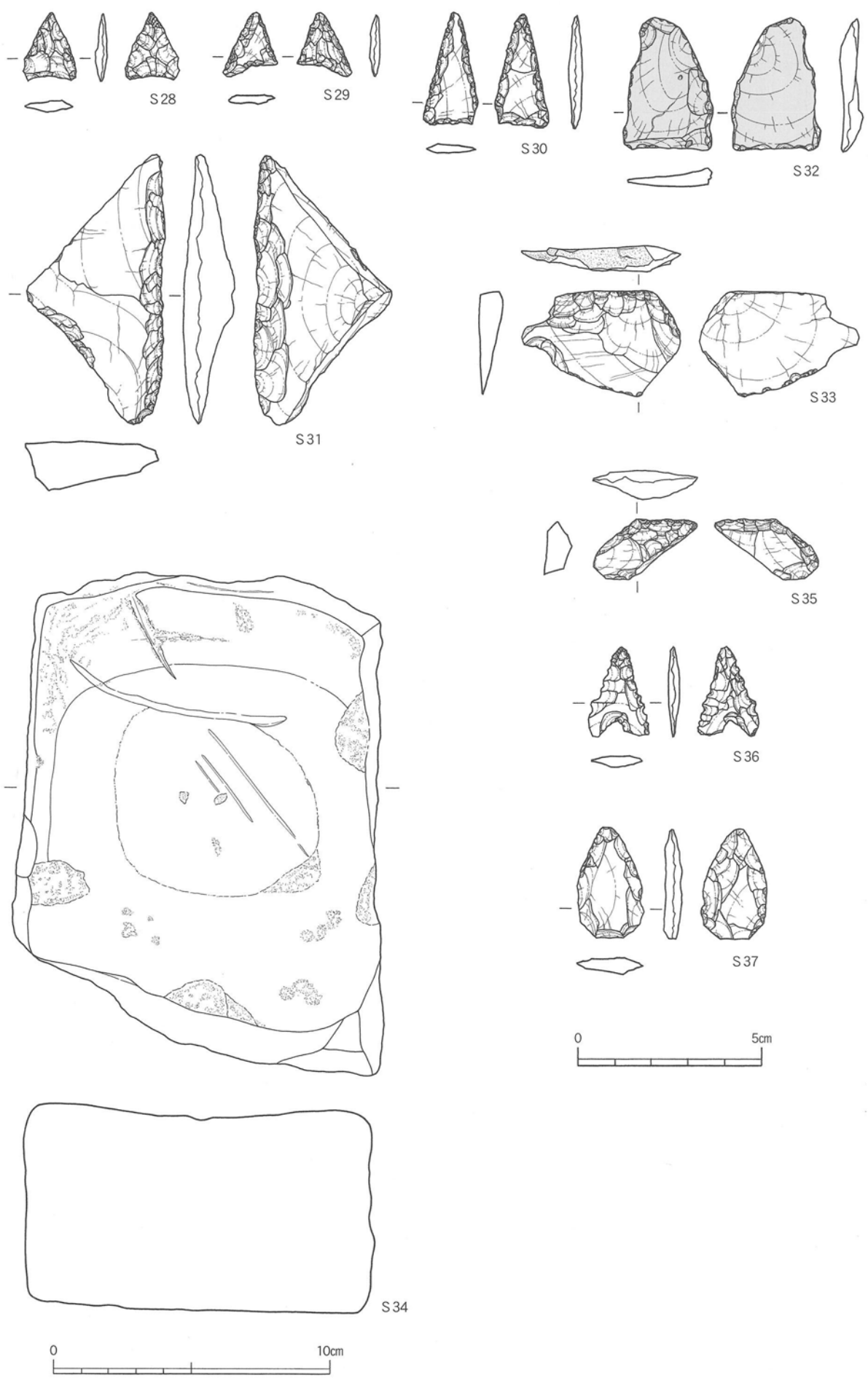


縄文包含層　7層①　(402～425)

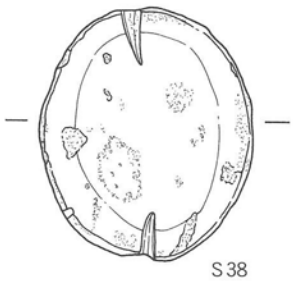


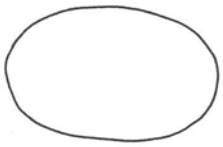
縄文包含層　7層②　縄文下層包含層　(426～441)

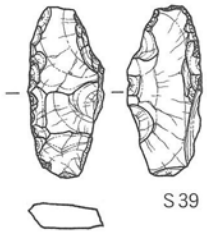
図版80 遺物 3区

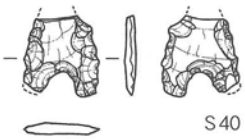


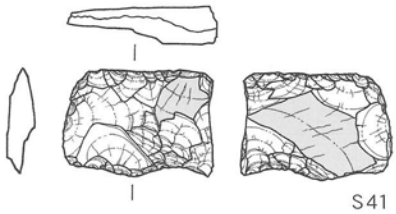
石器 (S28～S37)

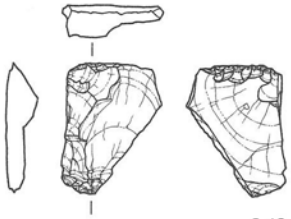


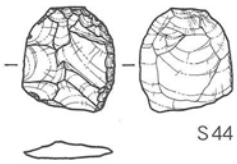


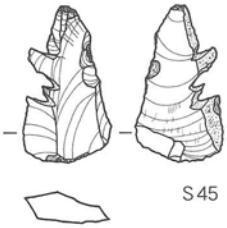


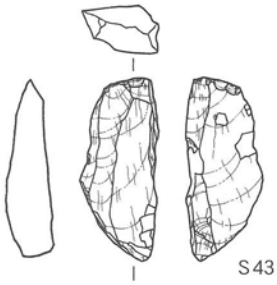


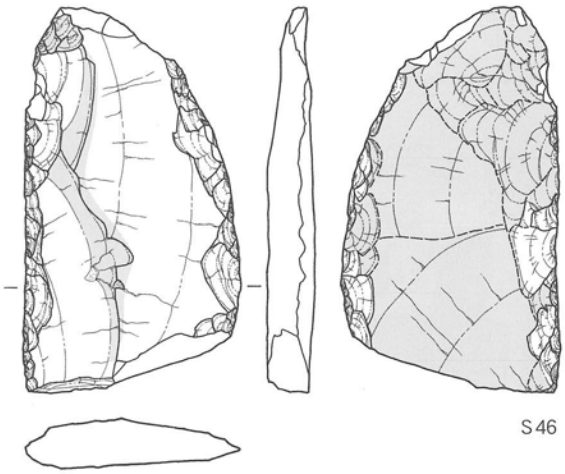










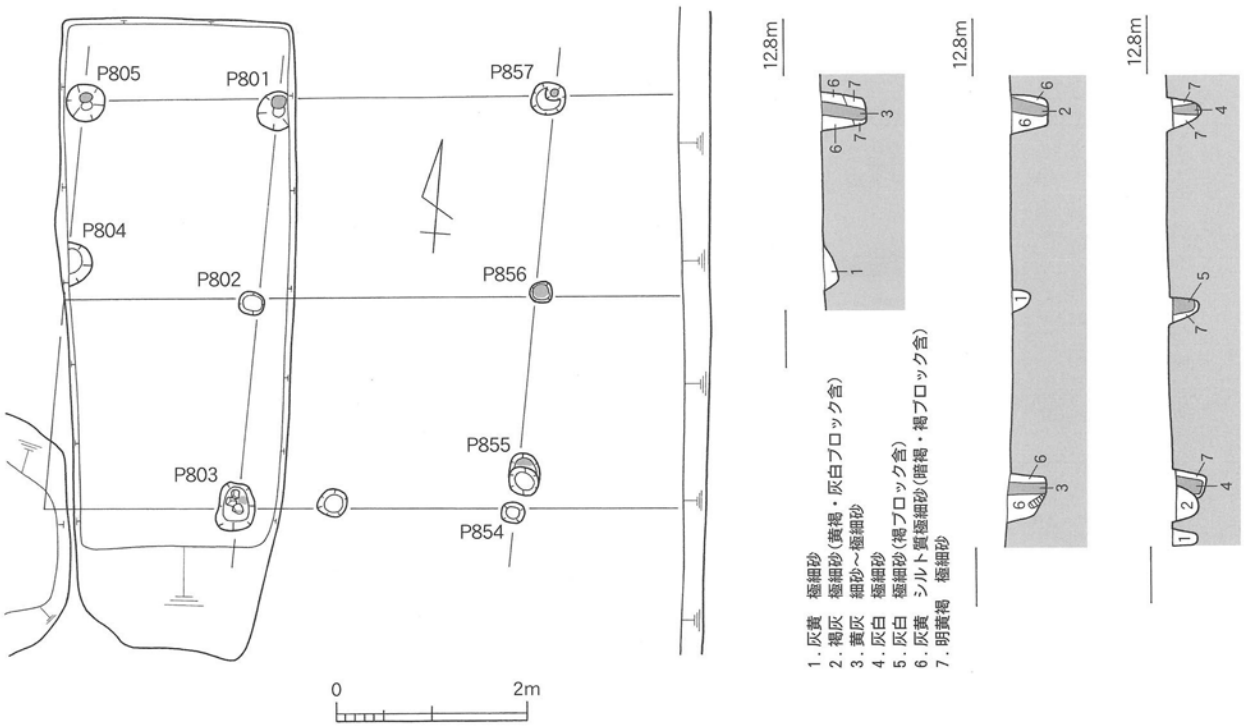


石器 (S38～S46)

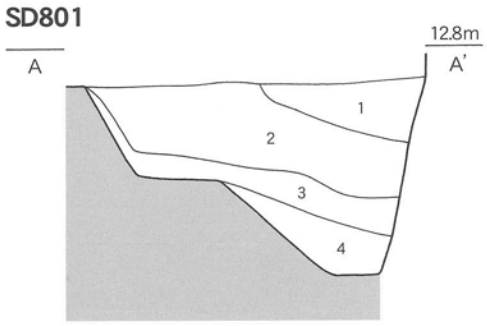
図版82　遺構　4・5区

平面　東壁断面

SB813

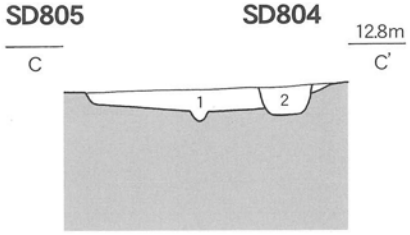


SD801



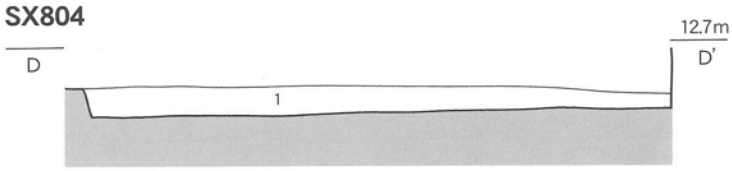
1. にぶい黄　細砂(Mn 含)
2. 灰黄　極細砂
3. 黄褐　極細砂(Mn 多量に含)
4. 暗灰黄　極細砂(Mn 含)

SD805　SD804



1. 黄褐　細砂(Mn 含)
2. 黄褐　極細砂[SD804]

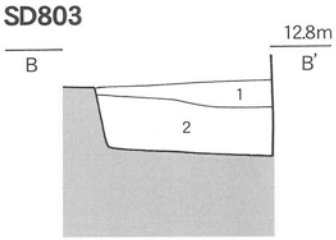
SX804



1. にぶい黄褐　極細砂(Mn 含)

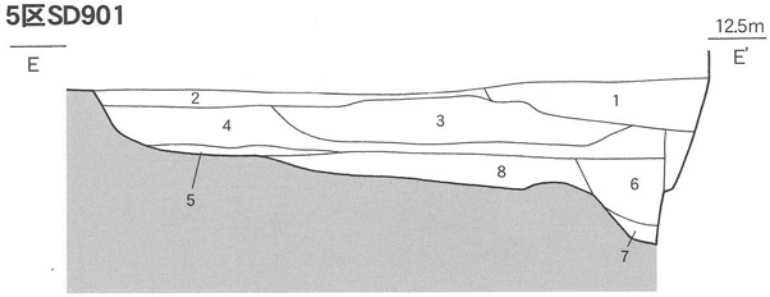
0　2m

SD803



1. オリーブ黄　シルト質極細砂
2. 黄褐　極細砂(Mn 多量に含)

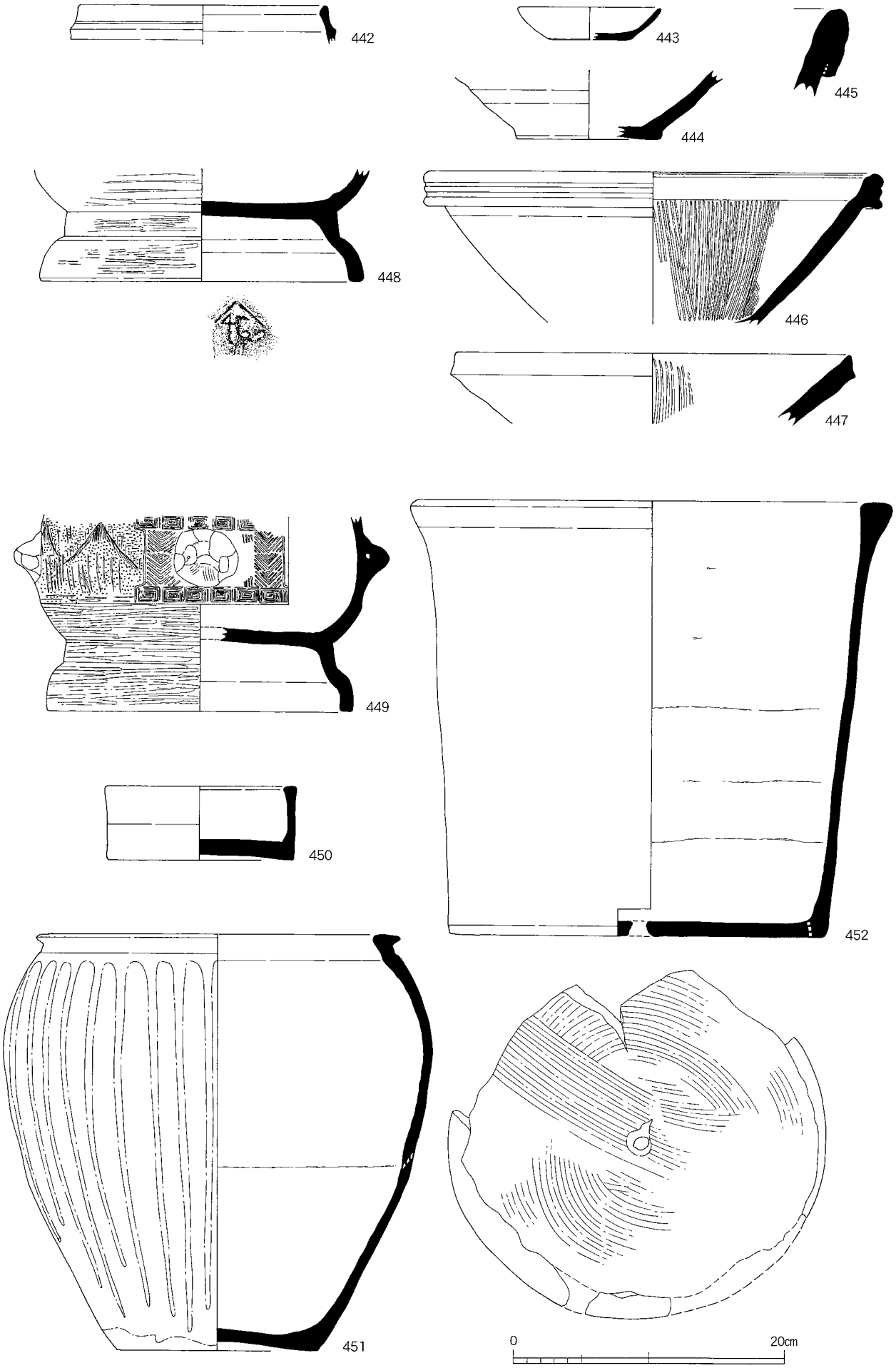
5区SD901



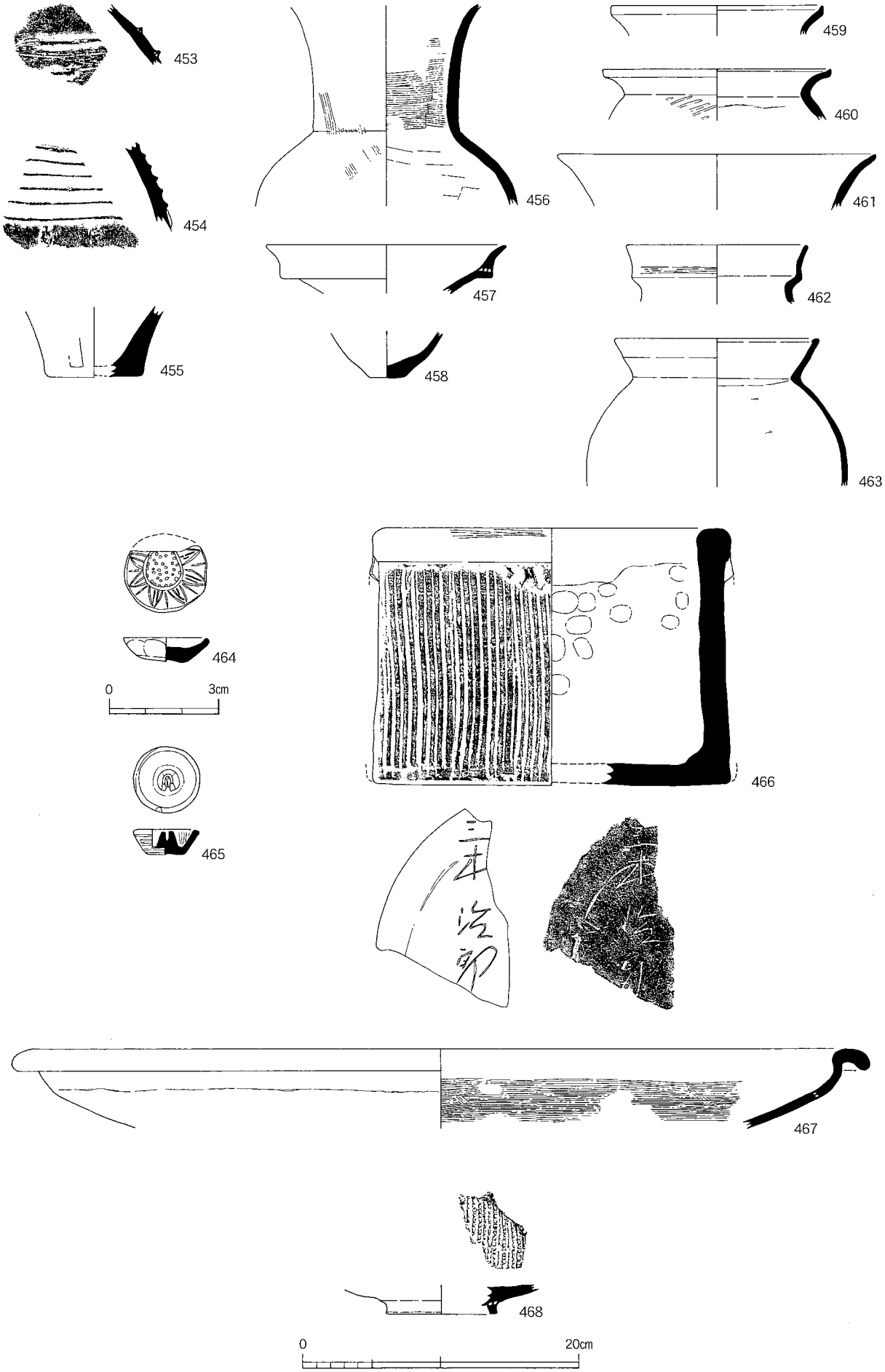
1. [盛土]
2. 灰白　極細砂
3. 明黄褐　極細砂(茶褐ブロック含)
4. にぶい黄橙　極細砂
5. 灰黄褐　極細砂
6. 明黄褐　極細砂(灰色シルト・Mn 含)
7. 褐灰　シルト質極細砂
8. にぶい黄橙　極細砂(Mn 多量に含)

0　1m

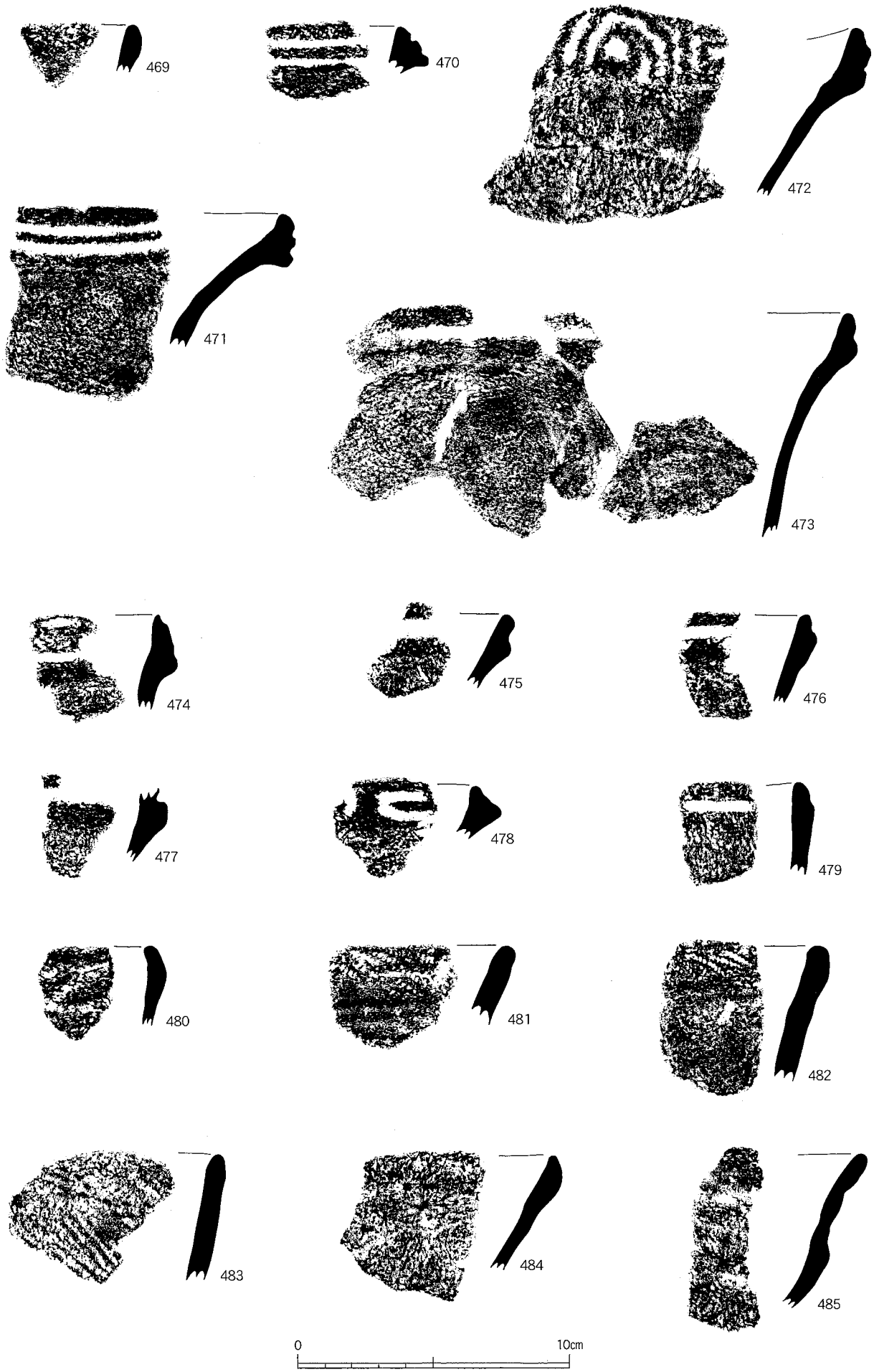
SB813・SD801・SD803・SD804・SD805・SX804・5区SD901



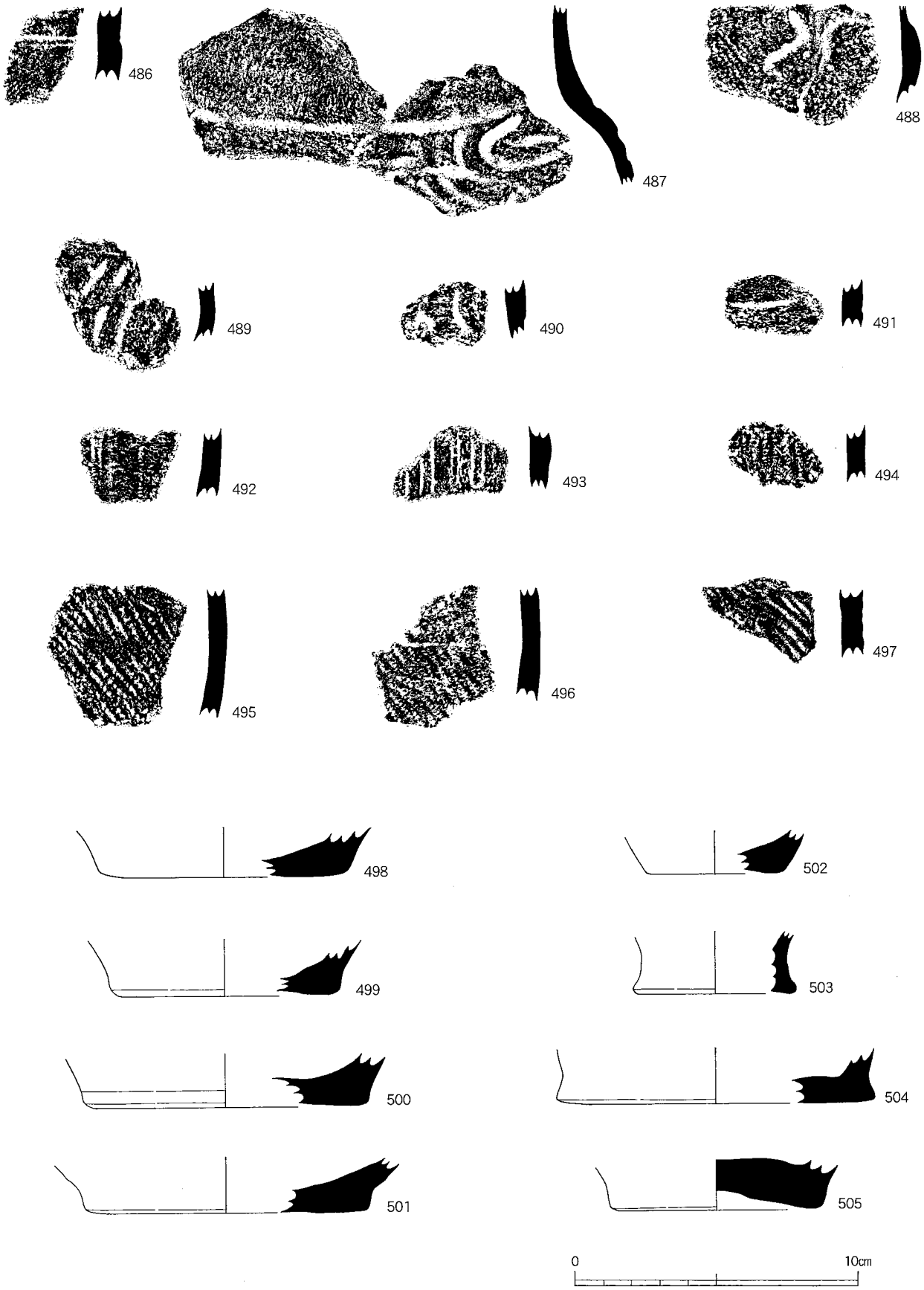
SD803・SD801・SB813・包含層　(442～452)



撹乱・粘土採掘坑 (453～468)

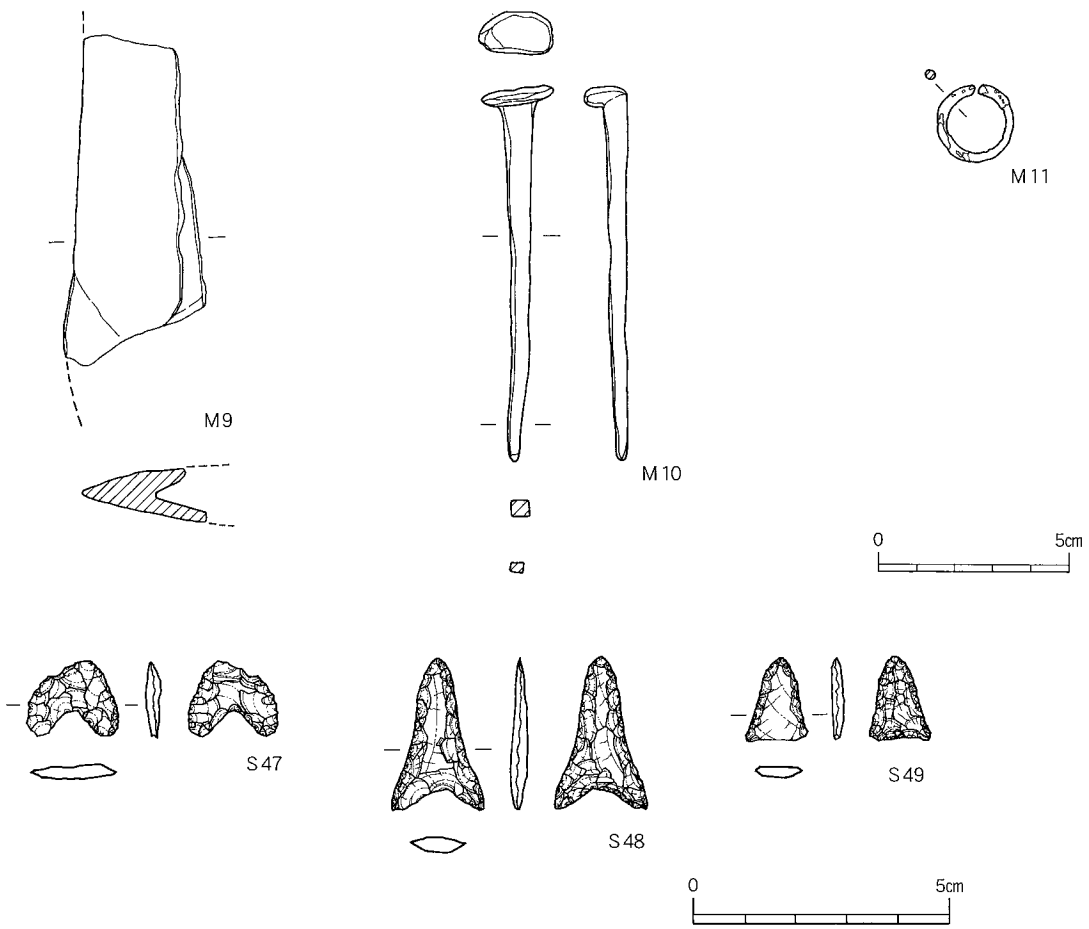


P836・SK904・縄文包含層 (469～485)



縄文包含層 (486～505)

図版88　遺物　4・5区



SD801・縄文包含層・撹乱　(M9～M11・S47～S49)